

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第12集

# 前 中 西 遺 跡 VII

－熊谷都市計画事業上之土地地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅷ－

2 0 1 2

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第12集

まえ なか にし い せき  
前 中 西 遺 跡 VII

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅷ－

2 0 1 2

埼玉県熊谷市教育委員会

# 序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めており、市内上之で進めている上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、原始・古代から中世に至るおびただしい遺跡が確認されました。熊谷市教育委員会では遺跡の重要性に鑑み、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事等に関しては、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、平成20年度に発掘調査を行った前中西遺跡について報告するものであります。前中西遺跡の調査報告は7回目となりますが、今回報告する調査では、遺跡の主体となる弥生時代の竪穴住居跡が多数確認され、遺跡の中でも集落が密集する地点であることが明らかとなりました。そして、各住居跡からは、当時の生活用具である土器や石器が大量に出土しており、これらの出土品は、市内上川上に所在する北島遺跡をはじめとする東日本の弥生時代遺跡との関係を明らかにする上で大変貴重な成果と言えます。今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護の趣旨を尊重され、御理解御協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理中央事務所、並びに地元関係者に厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

熊谷市教育委員会  
教育長 野原 晃

# 例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市上之2581番地4他に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号59-092）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第I章3のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成20年6月4日から7月31日まで（第1次調査）と平成20年11月25日から平成21年1月30日まで（第2次調査）である。  
整理・報告書作成期間は、平成23年6月6日から平成24年3月16日までである。
- 5 発掘調査の担当及び本書の執筆・編集は、熊谷市教育委員会松田 哲が行った。
- 6 発掘調査における写真撮影及び遺物の写真撮影は、松田が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。
- 8 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。

（敬称略、五十音順）

青木克尚 石川日出志 柿沼幹夫 栗島義明 小出輝雄 小林 高 齋藤弘道 菅谷浩之  
鈴木敏昭 鈴木正博 知久裕昭 轟 直行 松本 完 的野善行 村松 篤 吉田 稔  
埼玉県教育局生涯学習文化財課 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団




# 凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

調査区全測図…1 / 400      住居跡・溝跡・土坑…1 / 60      火葬跡…1 / 40  
水田跡平面図…1 / 150      水田跡断面図…1 / 60      谷状落込跡平面図…1 / 100  
谷状落込跡断面図…1 / 80

- 2 遺構挿図中のスクリーントーン等は、次のとおりである。

 = 地 山       = 焼 土       = 炭化物

- 3 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

弥生土器・須恵器・陶器…1 / 4      石器・石製品…1 / 4・1 / 2      玉類…1 / 2

- 5 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

弥生土器・陶器・石器・石製品断面：白抜き      須恵器断面：黒塗り

赤彩：

- 6 遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

- 7 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、gである。() が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

A…白色粒子    B…黒色粒子    C…赤色粒子    D…褐色粒子    E…赤褐色粒子  
F…白色針状物質    G…長石    H…石英    I…白雲母    J…黒雲母    K…角閃石  
L…片岩    M…砂粒    N…礫

- 8 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	1
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II 遺跡の立地と環境	4
III 遺跡の概要	9
1 調査の方法	9
2 検出された遺構と遺物	9
IV 遺構と遺物	13
1 住居跡	13
2 溝 跡	93
3 土 坑	104
4 火葬跡	117
5 水田跡	117
6 ビット	118
7 谷状落込跡	120
8 遺構外出土遺物	123
V 調査のまとめ	133

# 挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第17図 第5号住居跡	32
第2図 周辺遺跡分布図	6	第18図 第5号住居跡出土遺物	33
第3図 調査地点位置図	10	第19図 第6号住居跡	33
第4図 調査区全測図	11	第20図 第6号住居跡出土遺物	34
第5図 第1号住居跡	14	第21図 第7号住居跡	37
第6図 第1号住居跡出土遺物(1)	15	第22図 第7号住居跡出土遺物(1)	39
第7図 第1号住居跡出土遺物(2)	16	第23図 第7号住居跡出土遺物(2)	40
第8図 第2・3号住居跡(1)	20	第24図 第7号住居跡出土遺物(3)	41
第9図 第2・3号住居跡(2)	21	第25図 第7号住居跡出土遺物(4)	43
第10図 第2号住居跡出土遺物(1)	23	第26図 第8号住居跡	46
第11図 第2号住居跡出土遺物(2)	24	第27図 第8号住居跡出土遺物	47
第12図 第2号住居跡出土遺物(3)	25	第28図 第9号住居跡	48
第13図 第3号住居跡出土遺物	25	第29図 第9号住居跡出土遺物(1)	50
第14図 第4号住居跡	28	第30図 第9号住居跡出土遺物(2)	51
第15図 第4号住居跡出土遺物(1)	29	第31図 第9号住居跡出土遺物(3)	52
第16図 第4号住居跡出土遺物(2)	30	第32図 第9号住居跡出土遺物(4)	54

第33図	第9号住居跡出土遺物(5) ……	56	第53図	第7・8・13～15号溝跡 ……	97
第34図	第9号住居跡出土遺物(6) ……	58	第54図	第9～12号溝跡 ……	99
第35図	第9号住居跡出土遺物(7) ……	60	第55図	溝跡出土遺物(1) ……	101
第36図	第10号住居跡 ……	65	第56図	溝跡出土遺物(2) ……	102
第37図	第10号住居跡出土遺物(1) ……	66	第57図	第1～6号土坑 ……	105
第38図	第10号住居跡出土遺物(2) ……	67	第58図	第7～11号土坑 ……	108
第39図	第11号住居跡 ……	70	第59図	第12～18号土坑 ……	110
第40図	第11号住居跡出土遺物 ……	71	第60図	第19～21号土坑 ……	111
第41図	第12号住居跡(1) ……	74	第61図	土坑出土遺物 ……	112
第42図	第12号住居跡(2) ……	75	第62図	第1号火葬跡 ……	115
第43図	第12号住居跡出土遺物(1) ……	76	第63図	水田跡平面図 ……	116
第44図	第12号住居跡出土遺物(2) ……	77	第64図	水田跡断面図 ……	117
第45図	第12号住居跡出土遺物(3) ……	78	第65図	ピット出土遺物 ……	119
第46図	第12号住居跡出土遺物(4) ……	80	第66図	谷状落込跡 ……	121
第47図	第13号住居跡 ……	84	第67図	谷状落込跡出土遺物 ……	122
第48図	第13号住居跡出土遺物(1) ……	85	第68図	遺構外出土遺物(1) ……	124
第49図	第13号住居跡出土遺物(2) ……	87	第69図	遺構外出土遺物(2) ……	126
第50図	第14号住居跡 ……	90	第70図	遺構外出土遺物(3) ……	128
第51図	第14号住居跡出土遺物 ……	91	第71図	遺構外出土遺物(4) ……	130
第52図	第1～6号溝跡 ……	95	第72図	弥生時代遺構分布図 ……	134

## 挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表 ……	7	第11表	第10号住居跡出土遺物観察表 ……	68
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表 ……	17	第12表	第11号住居跡出土遺物観察表 ……	72
第3表	第2号住居跡出土遺物観察表 ……	26	第13表	第12号住居跡出土遺物観察表 ……	81
第4表	第3号住居跡出土遺物観察表 ……	27	第14表	第13号住居跡出土遺物観察表 ……	88
第5表	第4号住居跡出土遺物観察表 ……	31	第15表	第14号住居跡出土遺物観察表 ……	92
第6表	第5号住居跡出土遺物観察表 ……	33	第16表	溝跡出土遺物観察表 ……	103
第7表	第6号住居跡出土遺物観察表 ……	35	第17表	土坑出土遺物観察表 ……	113
第8表	第7号住居跡出土遺物観察表 ……	44	第18表	ピット出土遺物観察表 ……	119
第9表	第8号住居跡出土遺物観察表 ……	47	第19表	谷状落込跡出土遺物観察表 ……	123
第10表	第9号住居跡出土遺物観察表 ……	60	第20表	遺構外出土遺物観察表 ……	130

# 図版目次

- 図版 1 調査区(第1次)全景(南から)  
調査区(第2次)全景(東から)
- 図版 2 調査区(第2次)全景(北から)  
調査区(第2次)全景(南から)
- 遺構**
- 図版 3 第1号住居跡  
第1号住居跡炉跡検出状況  
第1号住居跡炉跡完掘状況  
第2・3号住居跡(第1次調査)  
第2号住居跡(第2次調査)  
第2号住居跡遺物出土状況  
第2号住居跡炉跡1・2  
第2号住居跡土器出土状況(1)
- 図版 4 第2号住居跡土器出土状況(2)  
第2号住居跡土器出土状況(3)  
第2号住居跡土器出土状況(4)  
第2号住居跡土器出土状況(5)  
第4号住居跡  
第5号住居跡  
第6号住居跡  
第7号住居跡(南から)
- 図版 5 第7号住居跡(東から)  
第7号住居跡炉跡  
第7号住居跡貯蔵穴2  
第7号住居跡遺物出土状況(1)  
第7号住居跡遺物出土状況(2)  
第7号住居跡土器出土状況  
第7号住居跡石器出土状況  
第7号住居跡覆土堆積状況
- 図版 6 第8号住居跡  
第8号住居跡土器出土状況  
第9号住居跡  
第9号住居跡炉跡  
第9号住居跡遺物出土状況(1)
- 第9号住居跡遺物出土状況(2)  
第10号住居跡
- 図版 7 第11号住居跡  
第11号住居跡炉跡  
第11号住居跡遺物出土状況  
第12号住居跡  
第12号住居跡炉跡  
第12号住居跡土器出土状況(1)  
第12号住居跡土器出土状況(2)  
第13号住居跡
- 図版 8 第13号住居跡土器出土状況  
第14号住居跡  
第14号住居跡炉跡  
第1号溝跡  
第2号溝跡  
第3～5号溝跡
- 図版 9 第6号溝跡  
第8号溝跡  
第9・10号溝跡  
第11・12号溝跡
- 図版10 第14号溝跡  
第14号溝跡土器出土状況  
第1号土坑  
第2号土坑  
第3号土坑  
第4号土坑  
第5号土坑
- 図版11 第6号土坑  
第7号土坑  
第7号土坑土器出土状況  
第8号土坑  
第9号土坑  
第10号土坑  
第11号土坑

第12号土坑  
 图版12 第13号土坑  
 第14号土坑  
 第15号土坑  
 第16号土坑  
 第17号土坑  
 第18号土坑  
 第19号土坑  
 第20号土坑  
 图版13 第21号土坑  
 第1号火葬跡  
 水田跡(北側)  
 水田跡(南側)  
 59-139G石器出土狀況  
 59-139G勾玉出土狀況  
 作業風景(1)  
 作業風景(2)

**遺物**

**弥生土器**

图版14 第2号住居跡 第10图1~8  
 第11图9~12  
 第4号住居跡 第15图1·2  
 图版15 第4号住居跡 第15图3·4·6·7  
 第6号住居跡 第20图1~3  
 第7号住居跡 第22图1~6  
 图版16 第7号住居跡 第22图15  
 第8号住居跡 第27图2  
 第9号住居跡 第29图1~8·10·11·13·16  
 图版17 第9号住居跡 第29图17  
 第30图18~20·22~30  
 第31图52·70  
 图版18 第9号住居跡 第31图73·74  
 第10号住居跡 第37图1~6·8  
 第11号住居跡 第40图6  
 第12号住居跡 第43图1·3·5·7·8  
 图版19 第12号住居跡 第44图27  
 第13号住居跡 第48图1~4·7

第14号住居跡 第51图7  
 第14号溝跡 第56图14-1·2  
 第7号土坑 第61图7-1  
 第11号土坑 第61图11-1  
 谷状落込跡 第67图1  
 遺構外 第68图2·3·35

图版20 第1号住居跡 第6图8~48  
 第7图49~70  
 第2号住居跡 第11图31~54  
 第12图55~63  
 第3号住居跡 第13图2~5  
 第4号住居跡 第15图8~22  
 第5号住居跡 第18图2~5  
 图版21 第4号住居跡 第15图23~36  
 第6号住居跡 第20图5~18  
 第7号住居跡 第22图16~24  
 第23图25~62  
 第24图63~95

第8号住居跡 第27图3~14  
 第9号住居跡 第32图75~93

图版22 第9号住居跡 第32图94~120  
 第33图121~153  
 第34图154~201

第10号住居跡 第37图14~41  
 第38图42~50

图版23 第11号住居跡 第40图7~32  
 第12号住居跡 第44图28~58  
 第45图59~108  
 第46图109~117

第13号住居跡 第48图8~27

图版24 第13号住居跡 第48图28~30  
 第49图31~65

第14号住居跡 第51图8~36

第2~6·9·10~14号溝跡出土遺物  
 第1·2·4·6·7·11·12·14·16·18·19·21号土坑出土遺物

図版25 ピット出土遺物 第65図1・3～8・10～  
12・17  
谷状落込跡 第67図10～31  
遺構外 第68図36～53  
第69図54～104  
第70図105～147

### 石器・石製品

図版26 第1号住居跡 第7図71～76  
第2号住居跡 第12図64～66  
第4号住居跡 第16図37～42  
第6号住居跡 第20図19  
第7号住居跡 第24図96・97  
第25図98～102  
第9号住居跡 第35図202～204  
第10号住居跡 第38図51  
第11号住居跡 第40図33

図版27 第1号住居跡 第7図77  
第9号住居跡 第35図205  
第12号住居跡 第46図118～123  
第13号住居跡 第49図66・67  
第14号住居跡 第51図37～39  
第11号溝跡 第55図11-6  
第13号溝跡 第56図13-3  
第21号土坑 第61図21-4  
ピット出土遺物 第65図15・16  
谷状落込跡 第69図32  
遺構外 第72図149・150  
第73図151・152

### 玉類

図版27 遺構外 第72図148

# I 発掘調査の概要

## 1 調査に至る経過

昭和61年6月6日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会は、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成7年11月13日から平成8年1月19日にかけて遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、平成8年2月9日付け熊教社発第865号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡及び諏訪木遺跡）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については、教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、代表者熊谷市長より平成20年5月12日付けで提出された。発掘調査は、平成20年6月から7月まで（第1次調査）と平成20年11月から平成21年1月まで（第2次調査）の2回に分けて熊谷市教育委員会が実施した。

発掘調査に関わる熊谷市教育委員会及び埼玉県教育委員会からの通知は、以下のとおりである。

平成20年5月30日付け熊教社発第107号（第1次調査）

平成20年11月21日付け熊教社発第345号（第2次調査）

平成20年6月12日付け教生文第5-174号

## 2 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

発掘調査は、調査区に隣接する水田の影響から北側と南側に分けて2回行われた。第1次調査として実施した北側調査区の面積は184㎡、第2次調査として実施した南側調査区の面積は415.4㎡であり、総面積は599.4㎡である。

北側の第1次調査は、平成20年6月初旬から7月末まで行った。調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、6月上旬から7月中旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。7月下旬からは遺構平面図を作成し、7月末には調査区の全景写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

南側の第2次調査は、平成20年11月末から翌年1月末まで行った。調査は、第1次調査同様、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、12月初旬から翌年1月上旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。



1月中旬からは遺構平面図を作成し、1月末に調査区的全景写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

#### (2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、平成23年6月から平成24年3月まで実施した。6月から8月中旬までは、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業等を行い、併行して遺構の図面整理を行った。8月下旬から11月下旬までは、遺物の実測・トレース及び遺構のトレースを行い、12月上旬に遺構・遺物の版組を作成した。12月中旬から翌年1月中旬までは、遺物の写真撮影、写真図版の割付け、編集作業、原稿執筆を行った。そして、印刷業者選定の後、報告書の印刷に入り、数回の校正を行い、3月中旬に報告書を刊行した。

### 3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

#### (1) 発掘調査

平成20年度

教育長	野原 晃
教育次長	大山 整治
社会教育課長	関口 和佳
社会教育課担当副参事	吉田 高一
社会教育課副課長	新井 端
社会教育課副課長	出縄 康行
社会教育課文化財保護係主幹兼係長	金子 正之
主査	寺社下 博
主査	吉野 健
主任	鯨井 敬浩
主任	松田 哲
主任	蔵持 俊輔
主事	山下 祐樹
発掘調査員	長谷川一郎
発掘調査員	原野 真祐

#### (2) 整理・報告書作成

平成23年度

教育長	野原 晃
教育次長	藤原 清
社会教育課長	斉木 千春
社会教育課担当副参事	根岸 敏彦
社会教育課副課長	新井 端
社会教育課副課長	石井 茂



社会教育課副課長	出縄 康行
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田 安彦
社会教育課文化財保護係主幹	吉野 健
主査	鯨井 敬浩（～平成 23 年 6 月）
主査	杉浦 朗子
主査	松田 哲
主任	蔵持 俊輔
主事	山下 祐樹

## Ⅱ 遺跡の立地と環境

熊谷市は、平成17年に妻沼町及び大里町、平成19年に江南町との合併を経て、県北初の20万都市となり、平成21年4月から「特例市」として発足したところである。

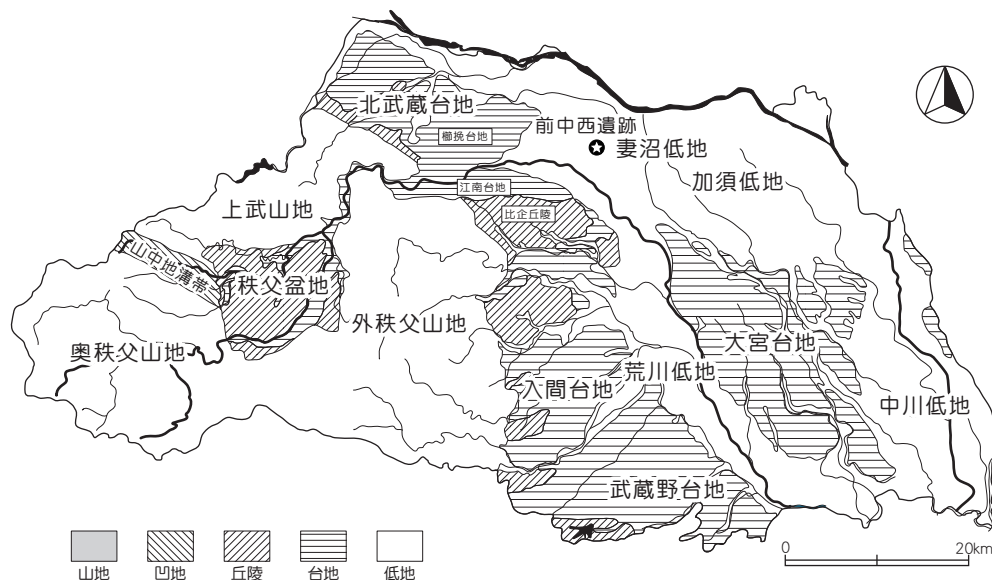
熊谷市は北側で群馬県との境を利根川が、南側では旧大里町及び旧江南町との境を荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛引台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第1図）。

櫛引台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称であり、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はJR高崎線籠原駅から北へ約2kmの西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mを測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。櫛引台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がる。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する深谷市（旧川本町）菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する前中西遺跡は、その新荒川扇状地の縁辺部、標高24m前後の自然堤防上に立地している。遺跡は熊谷市東部の上之に所在し、JR高崎線熊谷駅からは北東へ約1.2km、荒川からは北へ約2.0～2.5km、利根川からは南へ約7.0～9.0kmの距離にある。現地表面から遺構確認面までの深さは1m前後であった。

次に前中西遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第2図）。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は、熊谷市東部では確認例が極めて少ない。この段階の遺跡は主に熊谷市西部から深谷市域にかけて多くみられ、地形的には櫛引台地及び台地直下の妻沼低地自然堤防上に集中する。旧石器時代については、櫛引台地東端に立地する熊谷市籠原裏遺跡（地図未掲載）から出土した黒耀石の尖頭器が唯一の事例である。縄文時代は、早期段階は櫛引台地北端に位置する深谷市東方城跡（地図未掲載）において尖頭器が検出されているのみである。前期になると台地のみならず低地上にも出現しはじめ、中期も特に後半段階の加曾利E式期の遺跡が爆発的に出現するが、依然として櫛引



第1図 埼玉県の地形図

台地及び台地直下の低地上に集中している。後期になると徐々に低地へ進出しはじめ、西城切通遺跡(36)、場違ヶ谷戸遺跡(41)など櫛引台地から離れた低地上にも遺跡が認められるようになる。前中西遺跡周辺では隣接する諏訪木遺跡(2)でのみ確認例がある。晩期は遺跡数が減少する。諏訪木遺跡では後期に続いて集落が営まれているが、唯一の事例と言える。熊谷市遺跡調査会による調査(熊谷市遺跡調査会2001)や埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002・2007)では、後期末から晩期の遺物が検出されている。特に後者では遺構に伴って大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。この他では櫛引台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡(地図未掲載)で晩期最終末の浮線文土器が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代は、まず初期段階である前期末から中期前半は隣接する藤之宮遺跡(3)で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が認められた遺跡は櫛引台地直下の低地上に集中するが、集落ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡(地図未掲載)では、前期末から中期前半頃の再葬墓が13基確認されており、再葬墓一括資料は1999年3月に埼玉県指定になっている。この他にも熊谷市(旧妻沼町)飯塚遺跡、飯塚南遺跡(ともに地図未掲載)や先の深谷市上敷免遺跡などでも再葬墓が検出されており、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。また、上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片も出土している。

中期中頃になるとこれまでの状況と一変して集落跡が増す。当期は今回報告する前中西遺跡の他に東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡(9)、その墓域とされ、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡(86)などがあり、本格的に展開される。中期後半は前中西遺跡や諏訪木遺跡、北島遺跡(23)などで集落が営まれており、前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡では方形周溝墓も検出されている。特に前中西遺跡では遺跡範囲南側で方形周溝墓が多数検出されており、集落・墓ともに後期初頭まで続くことが明らかとなっている(熊谷市教育委員会2002・2003)。諏訪木遺跡では県埋蔵文化財調査事業団による調査(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008)で初めて住居跡と方形周溝墓が確認された。両者はほぼ同一箇所を確認されたことから時間差を持つ。確認された住居跡は1軒のみであり、出土土器も甕1点のみであるため断言はできないが、出土土器の比較では方形周溝墓が住居跡よりも新しい様相を呈する。北島遺跡では大規模な集落が営まれるとともに墓域も形成されている。そして、特筆すべきことは水田に引き込む水路や堰が造営されていたことが挙げられる。これは当時、本格的な水田経営が行われていたことを物語っており、北島遺跡はその規模や内容から東日本屈指の遺跡として注目されている。後期初頭以降については、前中西遺跡、藤之宮遺跡で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。

古墳時代になると低地上への進出がより活発化し、前期の遺跡は近年確認例が増加している。前代に引き続いて前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡では集落跡が確認され、北島遺跡では弥生時代に続いて大規模集落が営まれており、墓域も形成されている。諏訪木遺跡では、県埋蔵文化財調査事業団により行われた調査で河川跡から大量の木製品が出土しており、注目すべきは板倉造り建物の「樋部倉矧」と呼ばれる特殊な加工が施された壁板材が検出されたことが挙げられる(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008)。中条遺跡(28)では木製の農具が検出されており、行田市小敷田遺跡では畿内や東海





第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			49	別府条里遺跡	奈良・平安
1	前中西遺跡	弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	50	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世
2	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	51	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
3	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世	52	奈良氏館跡	平安末～中世
4	箱田氏館跡	平安末、中世	53	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
5	平戸遺跡	弥生中、古墳後、平安、中・近世	54	寺東遺跡	縄文中・後
6	久下氏館跡	中世	55	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
7	市田氏館跡	中世	56	玉井陣屋跡	平安末～中世
8	成田氏館跡	中世	57	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
9	池上遺跡	弥生中、古墳、平安	58	水押下遺跡	古墳後
10	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世	59	稲荷木上遺跡	古墳後
11	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世	60	下河原中遺跡	奈良・平安
12	宮の裏遺跡	古墳後	61	本代遺跡	古墳後、近世
13	成田遺跡	古墳後	62	下河原上遺跡	近世
14	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安	63	天神前遺跡	古墳中・後、中世
15	河上氏館跡	中世	64	兵部裏屋敷跡	中世
16	八幡上遺跡	古墳	65	御蔵場跡	近世
17	出口下遺跡	古墳後	66	田角遺跡	平安
18	熊谷氏館跡	中世	67	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
19	宮町遺跡	奈良・平安、中世	68	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
20	肥塚館跡	中世	69	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
21	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	70	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
22	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	71	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
23	北島遺跡	弥生中・後、古墳、奈良・平安、中世	72	村岡館跡	平安末
24	中島遺跡	古墳後、奈良・平安	73	村岡北西原遺跡	平安
25	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	74	北西原遺跡	奈良・平安
26	赤城遺跡	古墳、奈良・平安	75	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
27	東浦遺跡	古墳前、平安	76	西浦遺跡	奈良・平安
28	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世	77	腰廻遺跡	奈良・平安
29	中条氏館跡	中世	78	北方遺跡	奈良・平安
30	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	79	宮前遺跡	奈良・平安
31	先載場遺跡	古墳後、奈良	80	西浦町遺跡	奈良・平安
32	八幡間遺跡	古墳後、奈良	81	宮前町遺跡	奈良・平安
33	東城館跡	平安	82	宮町遺跡	奈良・平安
34	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	83	仲町遺跡	奈良・平安
35	西城館跡	平安	84	旭町遺跡	奈良・平安
36	西城切通遺跡	縄文後	85	北町遺跡	奈良・平安
37	鶴森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	行田市		
38	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	86	小敷田遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安
39	鷲ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安	古墳群		
40	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	熊谷市		
41	場達ヶ谷戸遺跡	縄文後	A	上之古墳群	古墳後～末
42	宮前遺跡	奈良・平安	B	肥塚古墳群	古墳後～末
43	実盛館	平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
44	道ヶ谷戸条里遺跡	奈良	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
45	横塚遺跡	古墳前、平安	E	玉井古墳群	古墳後
46	東通遺跡	古墳後	F	原島古墳群	古墳後
47	西通遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
48	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	H	村岡古墳群	古墳後

地方の外來系土器が多数出土している。この他にも古墳時代前期はたくさん確認例があるが、遺跡は主に利根川流域沿いの自然堤防上に分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、前段階に続いて前中西遺跡や藤之宮遺跡、中条遺跡などで集落跡が営まれている。また、5世紀末頃の鎧塚古墳や女塚1号墳（C：中条古墳群）、市の指定史跡である横塚山古墳（D：奈良古墳群）などといった古墳も築造されている。鎧塚古墳は、全長43.8mの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡2箇所から須恵器高坏型器台（県指定文化財）が出土している。女塚1号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長46mを測る。二重周溝を持ち、盾持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳はB種横刷毛の埴輪を持つ



帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。

後期になると遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は規模が大小あるが、多数営まれる。そして、これらは奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造され始める。低地上では前中西遺跡北側に分布する上之古墳群（A）の他に、肥塚古墳群（B）、中条古墳群（C）、奈良古墳群（D）、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、石原古墳群（G）などがある。これらは概ね6世紀から7世紀末ないし8世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群（中条古墳群など）では埋葬施設に角閃石安山岩、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げられる。

奈良・平安時代は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる集落が多い。規模は大小あるが、概ね大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。第19地点の調査では二重の堀が巡る台形区画内から建物跡が検出されており、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また、遺物では「篁」の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめ、多くの施釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。北島遺跡以外では、池上遺跡で整然と配置された9世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、諏訪木遺跡では区画溝内に四面庇の付いた大型掘立柱建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたこと、旧河川で土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡の集中する地域といえる。

集落以外では北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡（14）、行田市南河原条里遺跡（地図未掲載）などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡を明確に残す。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる段階であり、市内でも館跡が多数みられる。成田氏館跡（8）、久下氏館跡（6）、市田氏館跡（7）、河上氏館跡（15）、熊谷氏館跡（19）、肥塚館跡（20）、中条氏館跡（29）などがある。このうち、前中西遺跡に近い成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされており、隣接する諏訪木遺跡では近年の調査で成田氏関連と思われる遺構や遺物が確認されている。まず県事業団による平成13年度調査では、館跡から南に約300mの所で中世の居館と思われる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002）。同じく県事業団による平成14年度調査では、井戸枠に器高70cmを超える常滑大甕を使用した井戸跡が確認されており、常滑大甕は13世紀中頃のものとして推定されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）。そして、熊谷市教育委員会による平成20年度調査では、古墳時代後期の古墳周溝が埋没した後、掘削された土坑から大量の埋蔵銭が検出されている。埋蔵銭は現在整理調査中であるが、おそらく15世紀前半を上限とし、枚数が5,000枚以上と膨大な数であることから成田氏に関連するものであることは間違いない。

中世段階については館跡を中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。そして、近世段階についても同様に隣接する諏訪木遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

### Ⅲ 遺跡の概要

#### 1 調査の方法

今回報告するのは、平成20年度調査についてである。第I章2でも述べたとおり、調査は隣接する水田の都合から南北2回に分けて行われた。調査区はL字状を呈するが、北側58・59-138～144グリッドまでが第1次調査、南側53～59-144～154グリッドまでが第2次調査として行われた（第4図）。調査面積は北側の第1次調査が184㎡、南側の第2次調査が415.4㎡であり、総面積は599.4㎡である。

調査は、第1・2次調査ともにまず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行った。手掘り作業終了後は、遺構ごとに実測、遺物の取り上げ、写真撮影等の作業を順次行った。実測作業を行うにあたっては、あらかじめ区画整理地内全体を網羅するように設定された一辺5mのグリッド方式に従い、交点を基準に水糸で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。なお、住居跡出土遺物については、時間的な制約があったため、床面直上出土遺物のみ位置の記録を行った。

今回報告する調査地点のグリッドは、東西53から59まで、南北138から154までが該当する。なお、区画整理地内全体のグリッド図については、過去の前中西遺跡の報告（熊谷市教育委員会2002・2003）に記載されていることから、本報告では省略した。

#### 2 検出された遺構と遺物

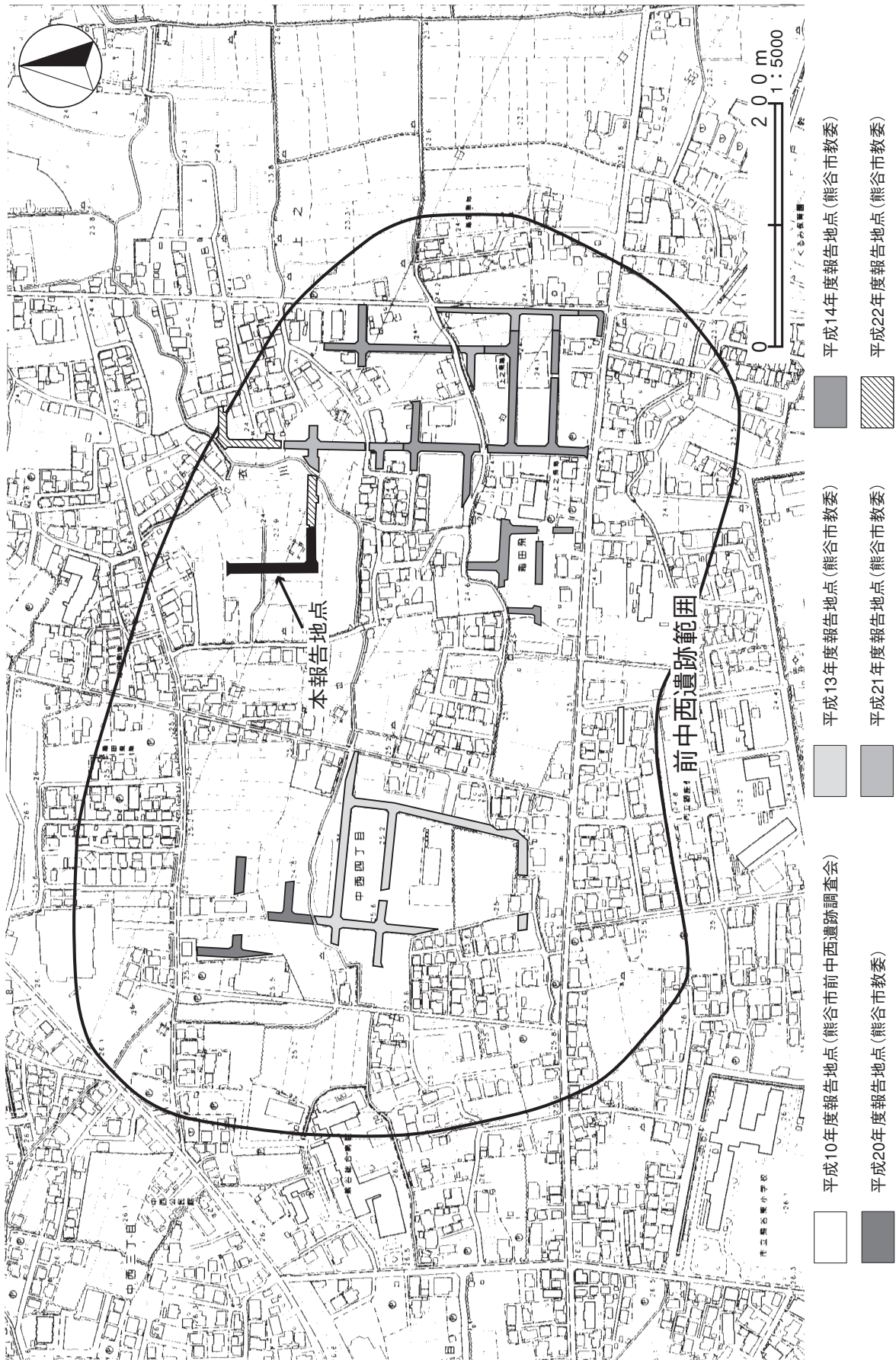
今回報告する地点は、遺跡範囲中央からやや北東寄りに位置する（第3図）。検出された遺構は、第1・2次調査合わせて住居跡14軒、溝跡15条、土坑21基、火葬跡1基、水田跡1箇所、ピット多数、谷状落込跡1箇所である（第4図）。

住居跡は14軒検出された。時期はすべて弥生時代中期後半から末までの段階に収まる。58・59-141～144グリッド及び58・59-152～154グリッドを除いた調査区ほぼ全面から検出されており、2・3号以外は近接しているものの、重複していない。また中期後半に相当するものでも軸が一定していない。規模及び平面プランは、全形を検出できなかったものがないが、長軸5m、短軸4m前後の隅丸長方形を呈するものが多い。また、拡張が認められた7・9号は、長軸が7m前後を測り、大型の部類に入る。出土遺物は土器、石器・石製品があり、特に2号では残存状態の良好な土器がまとまって出土し、7・9・12号は破片も含め、大量の土器が出土した。

溝跡は15条検出された。調査区内に点在するが、58・59-140～143グリッド及び58・59-152～154グリッドに集中する。58・59-140～143グリッドに位置する2～6号は不規則に走るが、その他は様々な方向にほぼ直線的に走る。出土遺物は弥生土器や石器に限られるが、重複する遺構との新旧関係から流れ込みの可能性が高い。そのほとんどが時期不明である。

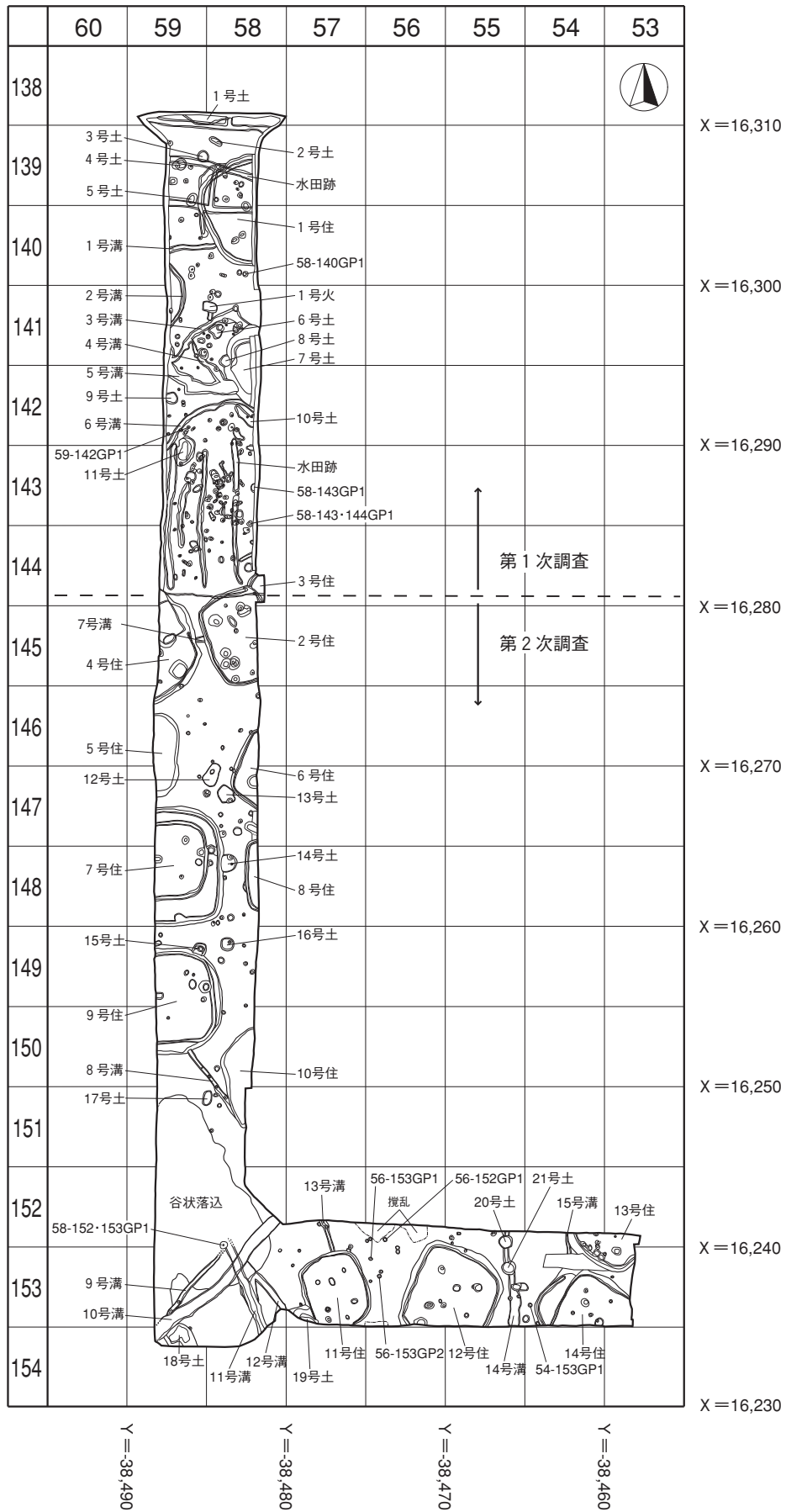
土坑は21基検出された。調査区ほぼ全面に分布するが、特に58・59-138～143グリッドに集中する。不整形ないし楕円形を呈するものが多い。出土遺物は少なく、弥生土器と石器に限られる。時期は、弥生時代中期後半から末までの段階のものが18基、その他は時期不明である。

火葬跡は58・59-141グリッドから1基のみ検出された。覆土から焼土や炭化物が確認されたが、骨片や棺座となる自然石は検出されていない。



第3図 調査地点位置図





第4図 調査区全測図

水田跡は58・59-138～140・142～144グリッドに位置し、第1次調査でのみ検出された。畦畔は南北2箇所を確認されたが、面的に検出できなかったため、平面プラン等詳細については不明である。また、第2次調査では確認されなかったが、本来は広がっていたと思われる。出土遺物は無いが、弥生時代及び中世の遺構上から確認されたため、近世段階のものと思われる。

ピットは調査区内に点在するが、特に58・59-141～144グリッドに集中する。所々で他の遺構と重複するが、新旧関係が不明なものが多く、そのほとんどが規則的に並ばないため、詳細については不明である。出土遺物は弥生土器や石器に限られるが、流れ込みの可能性もあり、時期の特定は困難である。

谷状落込跡は、58・59-151～154グリッドで検出された。平面プランに規則性がなく、人為的な掘り込みでないことから谷状落込跡として扱った。出土遺物は弥生土器や石器があり、土器は弥生時代中期中頃から後半までのものが出土している。

遺構外出土遺物は、弥生土器、勾玉、石器、古墳時代後期以降の須恵器、近世の陶器がある。弥生土器が大半を占め、第1次調査出土が目立つ。弥生土器は中期中頃、中期後半、後期初頭に分けられるが、そのほとんどは中期後半に相当する。土器以外では、翡翠製の勾玉と太形蛤刃の磨製石斧が完形で出土している。

## IV 遺構と遺物

### 1 住居跡

#### 第1号住居跡（第5図）

第1次調査での検出であり、58・59-139・140グリッドに位置する。西壁中央付近で東西に走る1号溝跡と重複し、本住居跡の覆土断面では痕跡が認められなかったことから本住居跡が新しいとも思われたが、新旧関係については不明と言わざるを得ない。なお、直接的な切り合い関係にないが、本住居跡上には近世段階と思われる水田跡が位置する。東壁及び南東隅付近は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、長軸6.7m、短軸5.4m程を測り、平面プランは隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向はN-24°-Wを指す。確認面からの深さは0.35m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は13層（1～13層）確認された。いずれの層もレンズ状に薄く堆積しており、中層及び床面直上では炭化物層が確認された。特に床面直上では、灰白色土による床面の張替えに伴い、サンドイッチ状に炭化物層が確認された。床面の張替え以外は自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央よりやや北寄りに位置する。長軸0.62m、短軸0.35mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.07mと浅い。覆土は5層（14～18層）確認された。焼土、灰、炭化物を多量含んでいた。

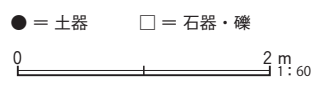
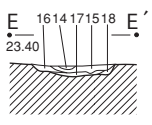
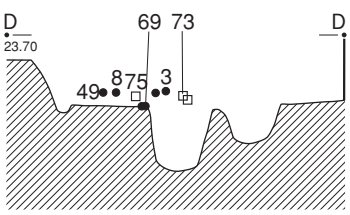
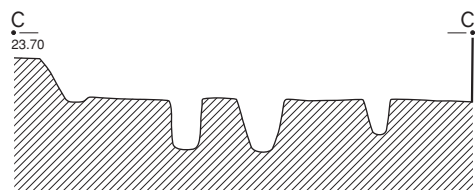
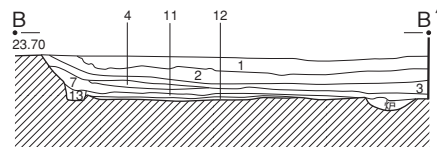
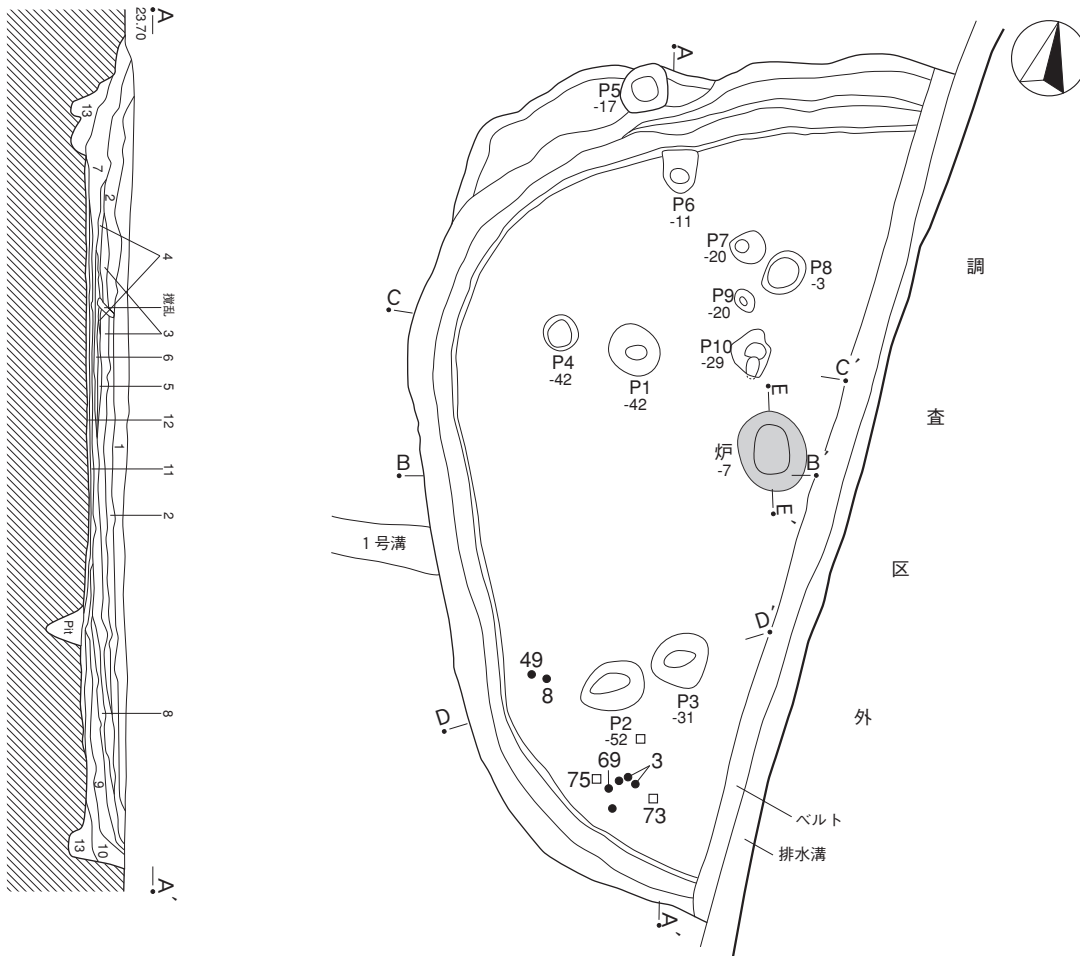
ピットは10基検出された。このうちP1～4が支柱穴に相当するが、床面の張替えに伴い、内側から外側に掘り替えられている。内側に位置するP1・3が旧段階、外側のP2・4が新段階に相当する。覆土は図示しなかったが、柱痕跡は認められなかった。

壁溝は全周するが、北壁は壁からやや離れて巡る。幅は0.3m、床面からの深さは0.05m前後を測る。

出土遺物（第6・7図）は、弥生土器壺（1・2・8～31）、甕（3～7・32～70）、打製石斧（71・72）、磨石（73）、敲打器（74）、砥石（75）、凹石（76）、剥片（77）がある。覆土からの出土が多く、床面直上の遺物は少なく、南西隅付近に限られる。破片が多く、残存状態の良いものはほとんどみられない。

1・2・8～31は壺。1・2は底部。1は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。壺としたが、甕の可能性もある。2は内外面ともにヘラミガキ調整であり、外面は赤彩が施されている。8～11は口縁部から頸部までの破片。8は輪積痕下に鋸歯文が描かれ、上にLR単節縄文が充填されている。外面無文部と内面は横位のヘラミガキ調整である。9は口縁部が受け口状を呈し、LR単節縄文とボタン状貼付文が施文されている。頸部は無文で横位のヘラミガキ調整である。内面は横位のヘラナデ後、一部ヘラミガキ調整である。10・11は無文で10の外面は斜位のハケメ後、横位のヘラミガキ、内面は横位のヘラミガキと赤彩が施されている。11は外面に縦位のヘラミガキと赤彩、内面は横位のヘラナデが施されている。

12～14は肩部片。12は小円形刺突列間にRL単節縄文が充填され、以下は無文で縦位のヘラミガキと赤彩が施されている。13はLR単節縄文下に半円形の刺突列が巡る。以下は無文で横位のヘラミガキ調整である。14は鋸歯文下にLR単節縄文が施文され、半円形の刺突列が巡る。12～14の内面調整は12が斜位、13は上位が縦位、下位が横位、14は横位のヘラナデである。15～20は平行沈線や波状沈線が描かれた破片。15・18は沈線上、17は地文にLR単節縄文が施文され、20は波状沈線上下に無節Lが施文されている。19は平行沈線下が無文で横位のヘラミガキ調整である。15～20の内面調整は、15・17・19・20が横位、16・18は斜位のヘラナデである。21～25は胴上部片。21は重三角文、22・23



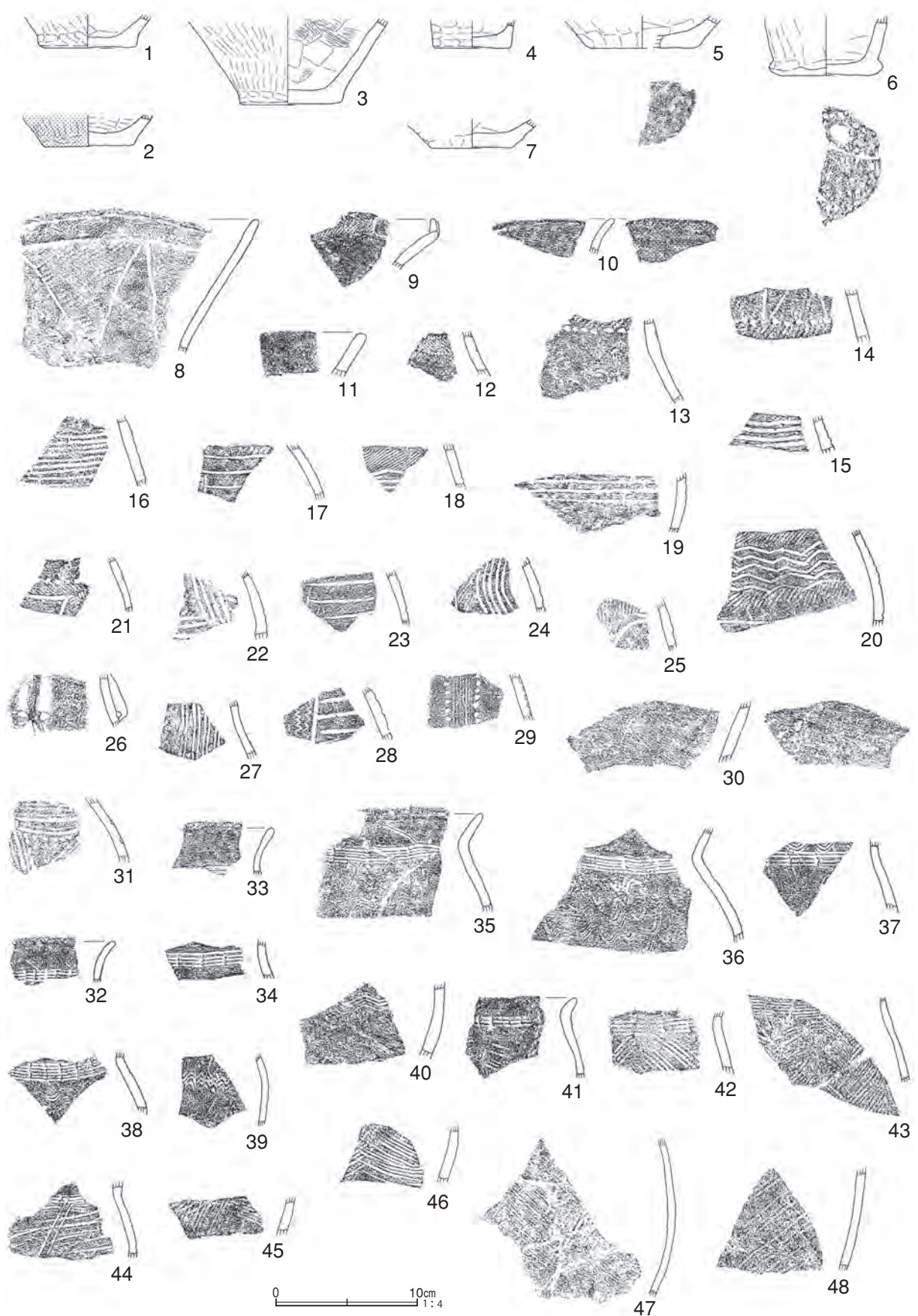
第1号住居跡

土層説明 (AA' BB' EE')

- 1 青黒色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 青灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 3 青灰色土：シルト質。酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒、マンガン粒少量含む。2層より暗い。
- 4 炭化物層：灰白色粒多量、酸化鉄少量含む。
- 5 灰色土：シルト質。酸化鉄、灰白色粒少量含む。
- 6 炭化物層
- 7 暗青灰色土：シルト質。灰白色粘土ブロック多量、酸化鉄、炭化物少量含む。

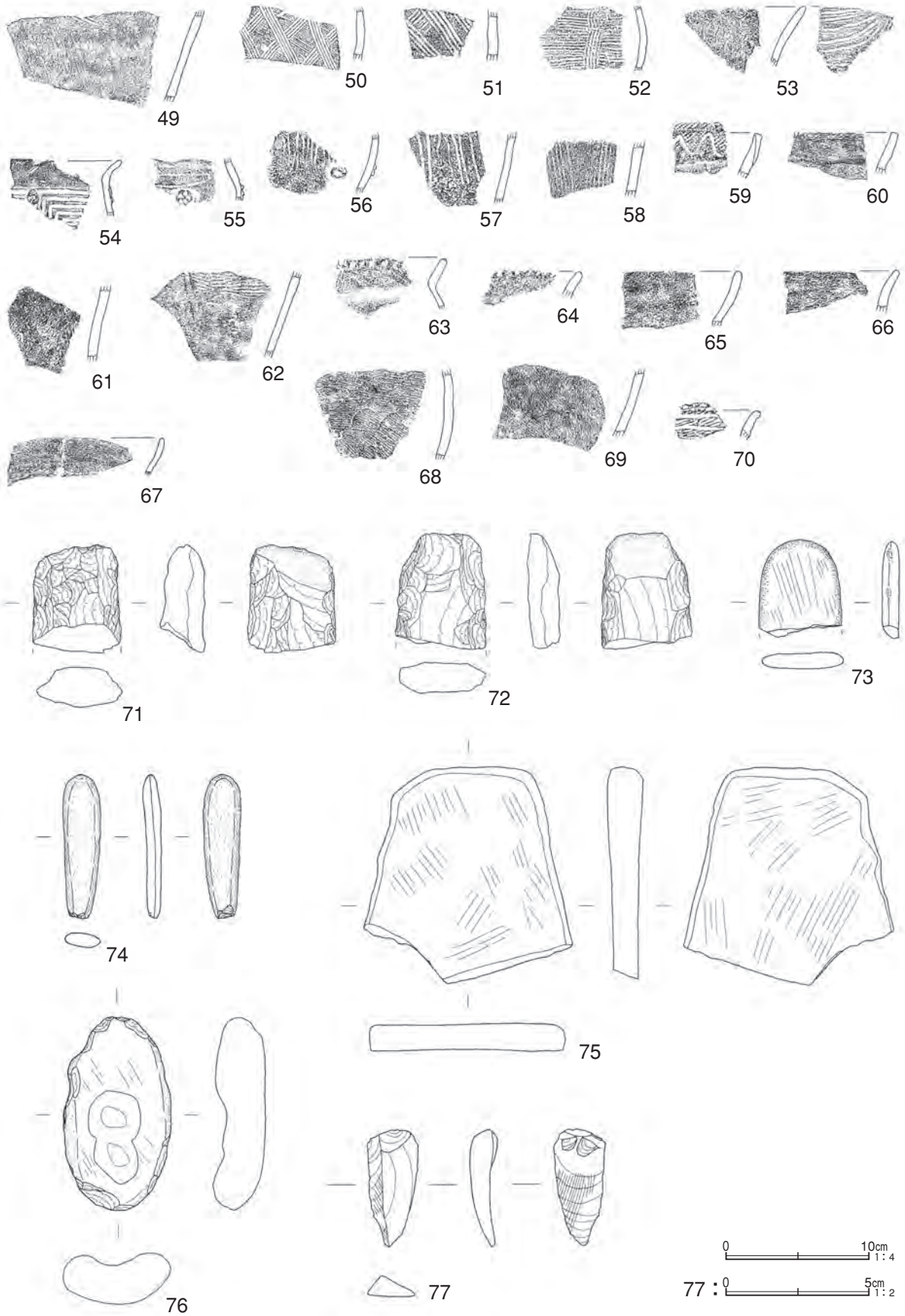
- 8 青灰色土：シルト質。酸化鉄、灰白色粒・シルトブロック、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 9 暗灰色土：シルト質。炭化物極多量、酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 10 青灰色土：シルト質。酸化鉄、灰白色シルト多量含む。
- 11 灰白色土：シルト質。灰色シルト多量、酸化鉄少量含む。上層に炭化物層が带状に薄く堆積。
- 12 灰白色土：シルト質。酸化鉄、灰色シルト多量含む。上層に炭化物層が带状に薄く堆積。
- 13 灰白色土：シルト質。酸化鉄、灰色シルト多量、炭化物少量含む。上層に炭化物層が带状に薄く堆積。
- 14 炭化物層
- 15 灰層：焼土、炭化物、灰白色粒多量含む。
- 16 炭化物層
- 17 焼土層
- 18 灰白色土：シルト質。焼土、灰多量含む。

第5図 第1号住居跡



第6图 第1号住居跡出土遺物(1)





第7図 第1号住居跡出土遺物(2)

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(2.35)	6.7	ABEHIN	橙色	B	底部50%	内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	—	(2.15)	(6.4)	ABEIN	橙色	B	底部45%	外面赤彩、大半剥落。磨耗顕著。
3	弥生土器 甕	—	(6.1)	7.25	ABDHIKN	浅黄橙色	B	胴~底35%	内外面磨耗顕著。
4	弥生土器 甕	—	(1.9)	5.5	ABCHKN	灰白色	B	底部60%	
5	弥生土器 甕	—	(2.25)	(7.6)	ABEHIKN	褐灰色	B	底部20%	底面木葉痕有。
6	弥生土器 甕	—	(4.1)	(8.0)	ABHIN	橙色	B	胴~底40%	底面木葉痕有。外面磨耗顕著。
7	弥生土器 甕	—	(2.05)	6.0	ABDHIKN	にぶい橙色	B	底部60%	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	口~頸部片	外面輪積痕有。内面磨耗顕著。
9	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIK	黒褐色	B	口~頸部片	
10	弥生土器 壺	—	—	—	ADGIKN	暗赤褐色	B	口縁部片	内面赤彩。
11	弥生土器 壺	—	—	—	ABDKN	にぶい橙色	B	口縁部片	外面赤彩、大半剥落。
12	弥生土器 壺	—	—	—	AGHN	褐灰色	B	肩部片	外面無文部赤彩。
13	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
14	弥生土器 壺	—	—	—	ABEGHJKMN	橙色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
15	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	肩部片	
16	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDHIK	浅黄橙色	B	胴上部片	
17	弥生土器 壺	—	—	—	ADHKN	黒褐色	B	胴上部片	
18	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHI	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
19	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEIJN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	
20	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIN	オリーブ褐色	B	胴上~中片	
21	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
22	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
23	弥生土器 壺	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴上部片	
24	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
25	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	暗灰黄色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
26	弥生土器 壺	—	—	—	ABN	にぶい黄褐色	B	肩部片	突起有。内外面磨耗顕著。
27	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGHK	灰黄褐色	B	肩部片	外面やや磨耗。
28	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIM	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
29	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIJKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
30	弥生土器 壺	—	—	—	ABEGHIK	灰黄褐色	B	胴下部片	内面磨耗顕著。
31	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	明赤褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
32	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	口~頸部片	
33	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	褐灰色	B	口~頸部片	
34	弥生土器 甕	—	—	—	ABGIK	黒褐色	B	頸部片	
35	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIJKN	暗褐色	B	口~胴上片	内面輪積痕有。
36	弥生土器 甕	—	—	—	ABCEHIKN	橙色	B	口~胴中片	内面磨耗顕著。
37	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHK	黒色	B	頸~胴上片	
38	弥生土器 甕	—	—	—	AEHIKN	黒褐色	B	頸~胴上片	
39	弥生土器 甕	—	—	—	AEHIN	黒褐色	B	胴上部片	
40	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中~下片	
41	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰褐色	B	口~胴上片	
42	弥生土器 甕	—	—	—	ADGHKN	暗オリーブ褐色	B	頸~胴上片	内外面磨耗顕著。
43	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	頸~胴上片	内面磨耗顕著。
44	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHI	黒褐色	A	頸~胴上片	
45	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	黒褐色	B	胴中段片	
46	弥生土器 甕	—	—	—	ADGHK	黒褐色	B	胴中段片	
47	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEGIKN	黒褐色	B	胴上~中片	内面磨耗顕著。
48	弥生土器 甕	—	—	—	ABCGIJN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
49	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	暗灰黄色	B	胴下部片	
50	弥生土器 甕	—	—	—	ADGHK	黒褐色	B	胴中段片	
51	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGIJN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	
52	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKMN	黒褐色	B	胴中段片	
53	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	にぶい赤褐色	B	口縁部片	外面磨耗顕著。
54	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	黒褐色	B	口~胴上片	
55	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIJ	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
56	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	褐色	B	胴中~下片	
57	弥生土器 甕	—	—	—	AHJN	褐色	B	胴中~下片	
58	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKN	黒褐色	B	胴中~下片	
59	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	灰色	B	口~頸部片	
60	弥生土器 甕	—	—	—	ABGIK	黒褐色	B	口~頸部片	
61	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	灰黄色	B	頸部片	
62	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄色	B	胴下部片	内外面やや磨耗。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
63	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIK	黒褐色	B	口～胴上片	内面磨耗顕著。
64	弥生土器 甕	—	—	—	ABEGIKN	にぶい橙色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
65	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	灰褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
66	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	橙色	B	口縁部片	
67	弥生土器 甕	—	—	—	ACHM	橙色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
68	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
69	弥生土器 甕	—	—	—	ABGIKN	灰褐色	B	胴下部片	
70	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIKN	黒褐色	B	口縁部片	
71	打製石斧	最大長(7.8)cm、最大幅(6.35)cm、最大厚(3.05)cm。重量(186.0)g。基部のみ残。閃緑岩製。							
72	打製石斧	最大長(8.35)cm、最大幅(6.5)cm、最大厚(2.25)cm。重量(185.5)g。基部のみ残。粘板岩製。							
73	磨石	最大長(7.05)cm、最大幅(5.95)cm、最大厚(1.2)cm。重量(64.0)g。半分欠。砂岩製。一面使用。敲打器兼。							
74	敲打器	最大長10.35cm、最大幅2.7cm、最大厚1.15cm。重量(48.5)g。完形。蛇紋岩製。片端使用。							
75	砥石	最大長(15.6)cm、最大幅(14.7)cm、最大厚(2.5)cm。重量(742.5)g。片端欠？砂岩製。二面使用。							
76	凹石	最大長14.85cm、最大幅7.7cm、最大厚3.6cm。重量503.5g。完形。砂岩製。							
77	剥片	最大長4.25cm、最大幅1.35cm、最大厚0.95cm。重量4.5g。完形。黒耀石製。							

は重四角文、24はフラスコ文、25は渦巻文が描かれている。21・25は沈線間にR L単節縄文が充填され、21は上に半円形の刺突列が巡る。23は分かりづらいが地文に、24はフラスコ文外にL R単節縄文が施文されている。21～25の内面調整は、21・23が横位、22・24・25が斜位のヘラナデである。26は縦長の突起が付けられた肩部片。下位に孔が設けられている。外面は縦位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデ調整である。27～29は櫛歯状工具による直線文や波状沈線が垂下する破片。27・29は櫛歯状工具による直線文が垂下し、29は両脇に半円形の刺突列が伴う。櫛歯の単位は27が2本、29は7本である。28は垂下する沈線脇に波状沈線と平行沈線が描かれている。27～29の内面調整はすべて横位のヘラナデである。30は無文の胴下部片。内外面ともにハケメ調整である。31は重三角文が描かれた胴上部片。区画内に円形の刺突列が巡る。内面調整は斜位のヘラナデである。弥生時代中期中頃の池上式に相当する。流れ込み。

3～7・33～70は甕。3～7は胴下部から底部までの部位。3・4は外面調整がヘラミガキ、内面は3がハケメ、4がヘラナデである。甕としたが、壺の可能性もある。5～7は内外面ともにヘラナデ調整である。5・6は底面に木葉痕がみられた。32～53は櫛歯状工具で文様が施文された破片。櫛歯の単位は4本前後が多い。32～34は口縁部から頸部までの破片。頸部に簾状文が巡る。32・33は口縁端部にR L単節縄文が施文されている。ともに口縁部が無文であり、内外面の調整は32が横位のヘラナデ、33は横位のヘラミガキ調整である。34の内面は横位のヘラナデである。35～40は波状文が描かれた破片。37のみ口縁部、その他は胴部に描かれている。35～38は頸部に同一工具による簾状文が巡る。35は分かりづらいが、口縁端部にL R単節縄文が施文されている。35・36は口縁部、37は胴上部、39・40は波状文下が無文で35・36は横位、37・39・40は斜位のヘラナデ調整である。35～40の内面調整は、35～37が横位、38・40が横・斜位、39が斜位のヘラナデである。35は内面に輪積痕が残る。41～49は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。44は粗雑であることからやや新しい様相を呈すると思われる。41～44は頸部に同一工具による簾状文が巡る。41は口縁部が無文で横位のヘラナデ調整である。49は羽状文下が無文で縦・斜位のヘラミガキ調整である。41～49の内面調整は、41～43・45・49が横位、44・47が横・斜位、46・48は斜位のヘラナデである。50・51は斜格子文が描かれた胴部中段の破片。内面調整は50が横位、51が斜位のヘラナデである。52は垂下する波状文脇に同一工具で直線文が複数描かれた胴部中段の破片。内面調整は横位のヘラナデである。53は内面に斜位及び弧状の文様が粗雑に描かれた



口縁部片。外面は無文で斜位のヘラナデ調整である。54～58は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。54～56はボタン状貼付文が付く。54は口縁部が無文で横位のヘラナデ調整である。内面調整はすべてヘラナデであるが、54は口縁部が横位、以下は横・斜位、55・56は横位、57・58は斜位に施されている。59～62は縄文及び擬縄文が施文された破片。59・60は口縁部から頸部までの破片。59は端部も含め口縁部にLR単節縄文が施文され、波状沈線が巡る。頸部は無文で縦・斜位のヘラナデ調整である。60は口縁端部にのみLR単節縄文が施文され、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。61は頸部片。分かりづらいが、カナムグラによる擬縄文が施文されている。62は胴部中段から下部までの破片。LR単節縄文下は無文で横・斜位のヘラナデ調整である。59～62の内面調整はすべて横位のヘラナデである。63・64は端部に刻みを持つ口縁部から頸部までの破片。口縁端部以外は無文で63は口縁部が横位、頸部以下が縦・斜位、64は横位のヘラナデ調整である。内面調整はともに横位のヘラナデである。65～69は無文である。65～67は口縁部から頸部まで、68・69は胴部中段と下部の破片である。外面調整は65～67がヘラナデ、68・69はハケメである。外面は65の口縁部が横・斜位、頸部が縦位、66は横位、67～69は横・斜位に施されている。内面はすべてヘラナデであり、65・67が横位、66・68・69は横・斜位に施されている。70は口縁端部に刻みを持ち、以下は無節L地に平行沈線が巡る。内面調整は横位のヘラミガキである。弥生時代中期中頃の池上式に相当する。流れ込み。

71・72は打製石斧。基部のみの検出である。73は磨石。一面のみ使用しており、敲打器を兼ねる。半分を欠く。74は敲打器。片端のみ使用している。75は砥石。両面平滑であり、やや光沢を帯びている。76は凹石。孔が2つ並んで設けられている。77は剥片。黒耀石製である。流れ込みか。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階と思われる。

## 第2号住居跡（第8・9図）

58・59-144・145グリッドに位置する。第1次調査で北壁付近、第2次調査で残りの部分を検出したため、全形は図面上で復元した。北東隅で3号住居跡を切っている。西壁中央付近では7号溝跡と重複し、本住居跡の覆土断面に痕跡が認められなかったことから本住居跡が新しいとも思われたが、新旧関係については不明と言わざるを得ない。東壁及び南東隅付近は調査区外にある。

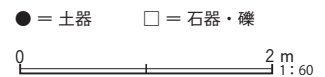
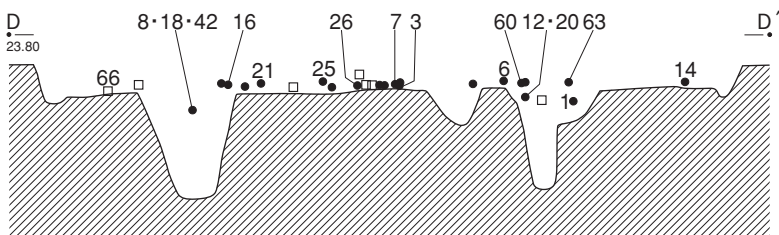
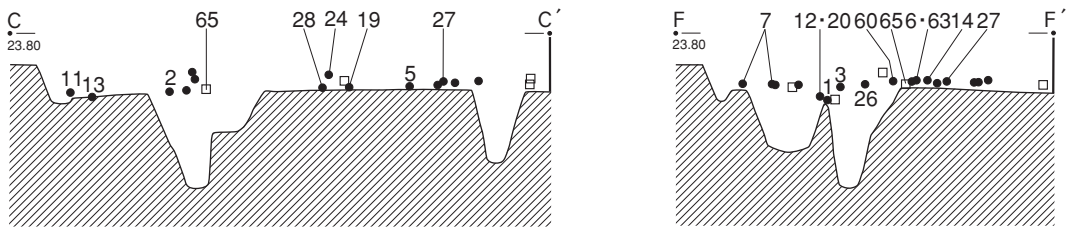
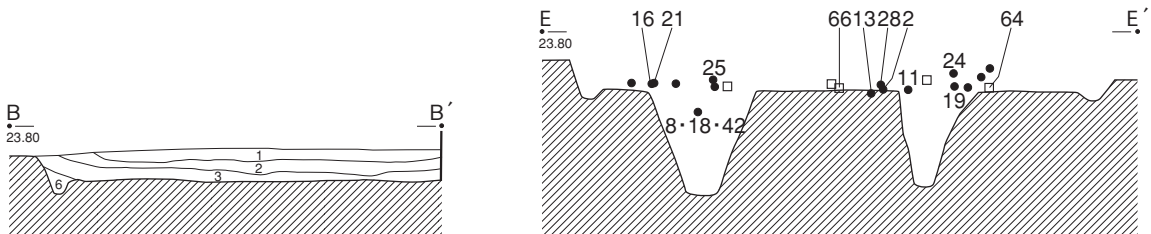
規模は長軸5.9m、短軸はおよそ4.6mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-24°-Wを指す。確認面からの深さは0.25m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は6層（1～6層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は2つ確認された。ともに床面中央からやや北寄りに位置する。炉1は長軸0.8m、短軸0.38mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.09mを測る。覆土は3層（7～9層）確認された。炉2は径0.3m前後の円形を呈し、床面からの深さは0.05mと浅い。いずれも焼土、炭化物を多量含んでいた。

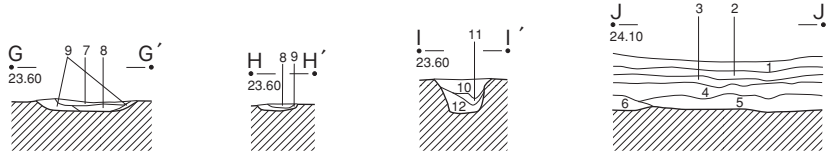
ピットは8基検出された。このうちP1～3は支柱穴であるが、南西部ではP3の他にも支柱穴に相当するものが2つ（P5・6）確認された。覆土は図示しなかったが、柱痕跡は認められなかった。P7は出入口に関連するものと思われる。

壁溝は北東隅で切れるが、その他は全周する。幅は0.3m前後、床面からの深さは0.05～0.1mを測る。

貯蔵穴は南西隅に位置する。径0.45m前後の円形を呈し、床面からの深さは0.26mを測る。覆土は3層（10～12層）確認された。



第8図 第2・3号住居跡 (1)



第2号住居跡

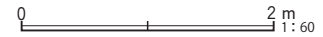
土層説明 (AA' BB' GG' HH' II')

- 1 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 青灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 3 暗青灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。
- 4 灰白色土：粘土質。暗青灰色土、酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 炭化物層
- 6 暗灰色土：粘土質。灰白色粒多量、酸化鉄、炭化物少量含む。
- 7 炭化物層
- 8 焼 土 層
- 9 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、炭化物多量含む。
- 10 暗青灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 11 灰白色土：粘土質。暗青灰色土、酸化鉄多量含む。
- 12 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒多量、炭化物少量含む。

第3号住居跡

土層説明 (JJ')

- 1 青灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 2 暗青灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 3 青灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 4 青灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 5 青黒色土：シルト質。炭化物、灰白色粒多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。
- 6 青黒色土：シルト質。灰白色粒・ブロック多量、酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。



第9図 第2・3号住居跡(2)

出土遺物(第10～12図)は、弥生土器壺(1～6・13～17・31～48)、甕(7～10・18～27・49～63)、台付甕(11・12)、甑(28・29)、高坏(30)、磨石(64)、砥石(65・66)がある。床面直上の遺物はほぼ全面から出土しており、残存状態の比較的良好なものが多い。またピット上から出土したものもみられた。壺の破片で文様が描かれたものの大半は、流れ込みの可能性が高い。

1～6・13～17・31～48は壺。1～6は残存状態が良好である。1は口縁部が大きく開くが、やや受け口状を呈する。頸部はすぼまり、胴部は算盤玉状を呈する。最大径を胴部中段に持つ。2は口縁部がやや外反し、太い頸部から胴部中段にかけて緩やかに下り、無花果状を呈する。最大径を胴部中段より下に持つ。1は口縁部に2個一対の突起が3つ配置される点が2と異なるが、頸部の文様はほぼ同じ構成である。ともに3条の平行沈線間にLR単節縄文を充填し、2は最下沈線下にも施文されている。文様以外の外面と口縁部から肩部までの内面はヘラミガキ調整であり、胴上部以下の内面は2が計測不可能であったが、いずれもヘラナデ調整である。3は小型の壺。無文であるが、器形及び調整が2に似ている。4も小型の壺。口縁部と底部を欠く。頸部から胴部中段まで大きく膨らみ、無花果状を呈する。磨耗が著しいため、ほとんど図示不可能であったが、胴上部に櫛歯状工具による波状文が巡る。頸部及び胴下部はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。5は口縁部を欠く。頸部が太く、胴部は算盤玉状を呈する。文様は頸部下位に平行沈線、肩部から胴上部は波状沈線が2条巡り、各沈線間にLR単節縄文が充填されている。波状沈線の頂点にはボタン状貼付文が付き、平行沈線と波状沈線間のみ赤彩が施されている。無文部外面及び口縁部から頸部までの内面はヘラミガキ、胴上部以下の内面はヘラナデ調整である。6は肩部から胴部中段までの部位。ほぼ直線的に下る。無文で外面がハケメ後ヘラミガキ、内面はハケメ調整が施されている。13～17は胴下部から底部までの部位。外面調整はすべてヘラミガキであるが、内面は17のみヘラミガキ、その他はヘラナデ調整である。壺としたが、甕の可能性もある。

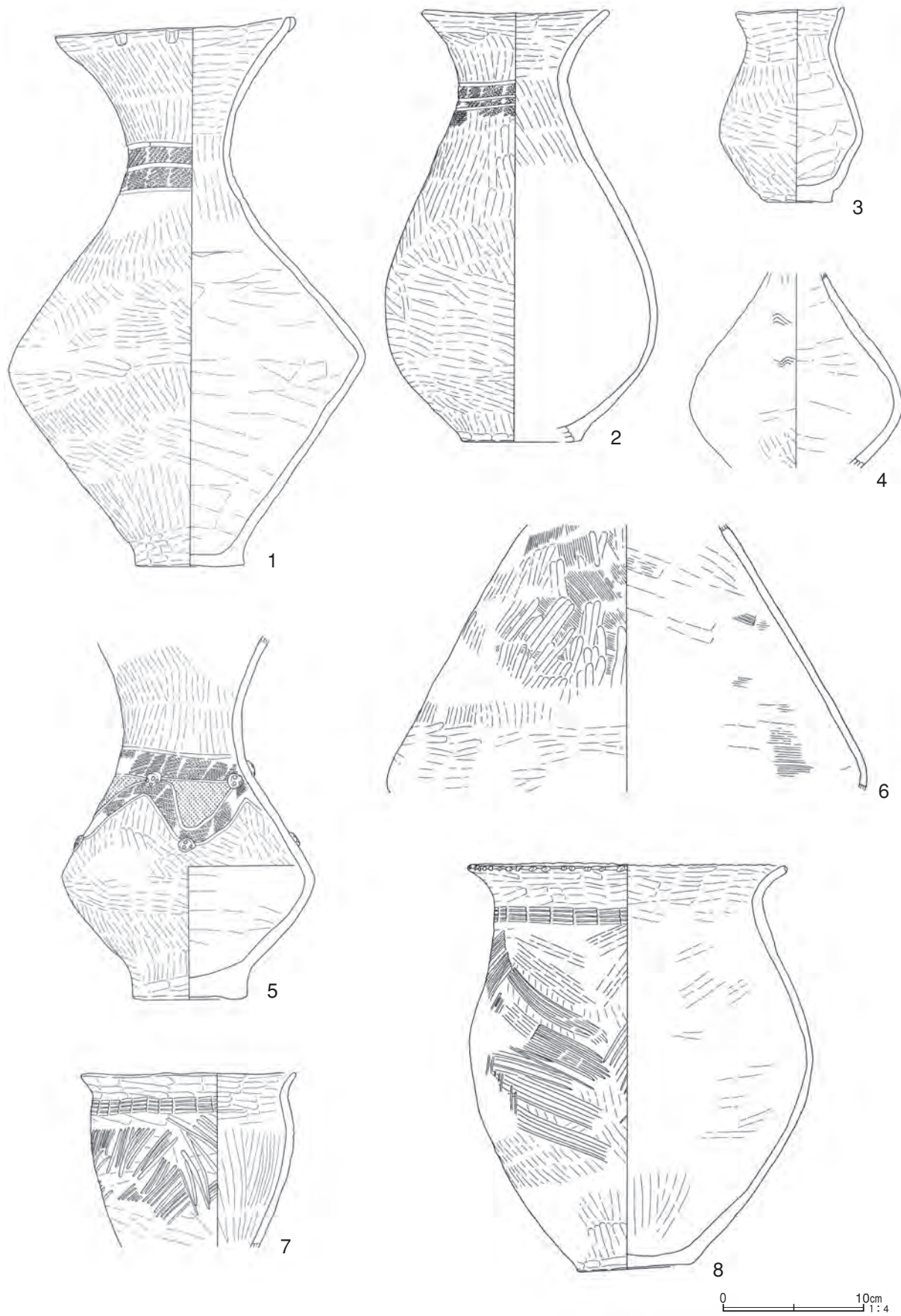
31～33は口縁部片。31は2個一対の突起が付く。外面は縦位、内面は横位のヘラミガキで赤彩が施されている。高坏の可能性もある。32は端部も含め口縁部、33は口縁端部にのみLR単節縄文が施文され、

ともに波状及び平行沈線が巡り、平行沈線間に32が円形、33は半円形の刺突列が刻まれている。33は孔が1つ設けられている。内面調整は32が横位、33が斜位のヘラミガキである。34～37は頸部から肩部までの破片。34は細かいLR単節縄文地に波状沈線が巡り、以下の無文部は縦位のヘラミガキが施されている。35・36は頸部が無文で縦・斜位のヘラミガキが施され、肩部は35が複数の平行沈線、36は平行沈線下にLR単節縄文が施文されている。37は半円形の刺突列間にLR単節縄文が充填されている。34～37の内面調整は、34・36が横・斜位のヘラミガキ、35は頸部が横位のヘラミガキ、肩部が横位のヘラナデ、37は横位のヘラナデである。38～40は刺突列が刻まれた胴上部片。38はLR単節縄文地に半円形の刺突列が巡る。39は無節L下に半円形の刺突列と2本一単位の櫛歯状工具による波状文が複数巡る。40は平行沈線間にLR単節縄文が充填され、上下に半円形の刺突列が上に3列、下に2列巡る。38～40の内面調整は38・39が横位、40が斜位のヘラナデである。41～43は重三角文が描かれた胴上部片。41・43は分かりづらいが沈線間に、42は所々に地文としてLR単節縄文が施文されている。42は重三角文上に半円形の刺突列が巡る。41～43の内面調整は41が斜位、42が横位、43が横・斜位のヘラナデである。44は弧線状の沈線が描かれた胴中段の破片。弧線は頂点が連結していない。内面調整は斜位のヘラナデである。45はボタン状貼付文脇に沈線が巡る胴上部片。内面調整は横位のヘラナデである。46は波状沈線と平行沈線、47・48は重四角文が描かれた胴上部片。46は地文にLR単節縄文が施文されている。48は2本一単位の櫛歯状工具で描かれており、区画内に斜位の沈線と円形の刺突列が充填されている。内面調整は46・48が横・斜位、47が横位のヘラナデである。弥生時代中期中頃池上式に相当する。流れ込み。

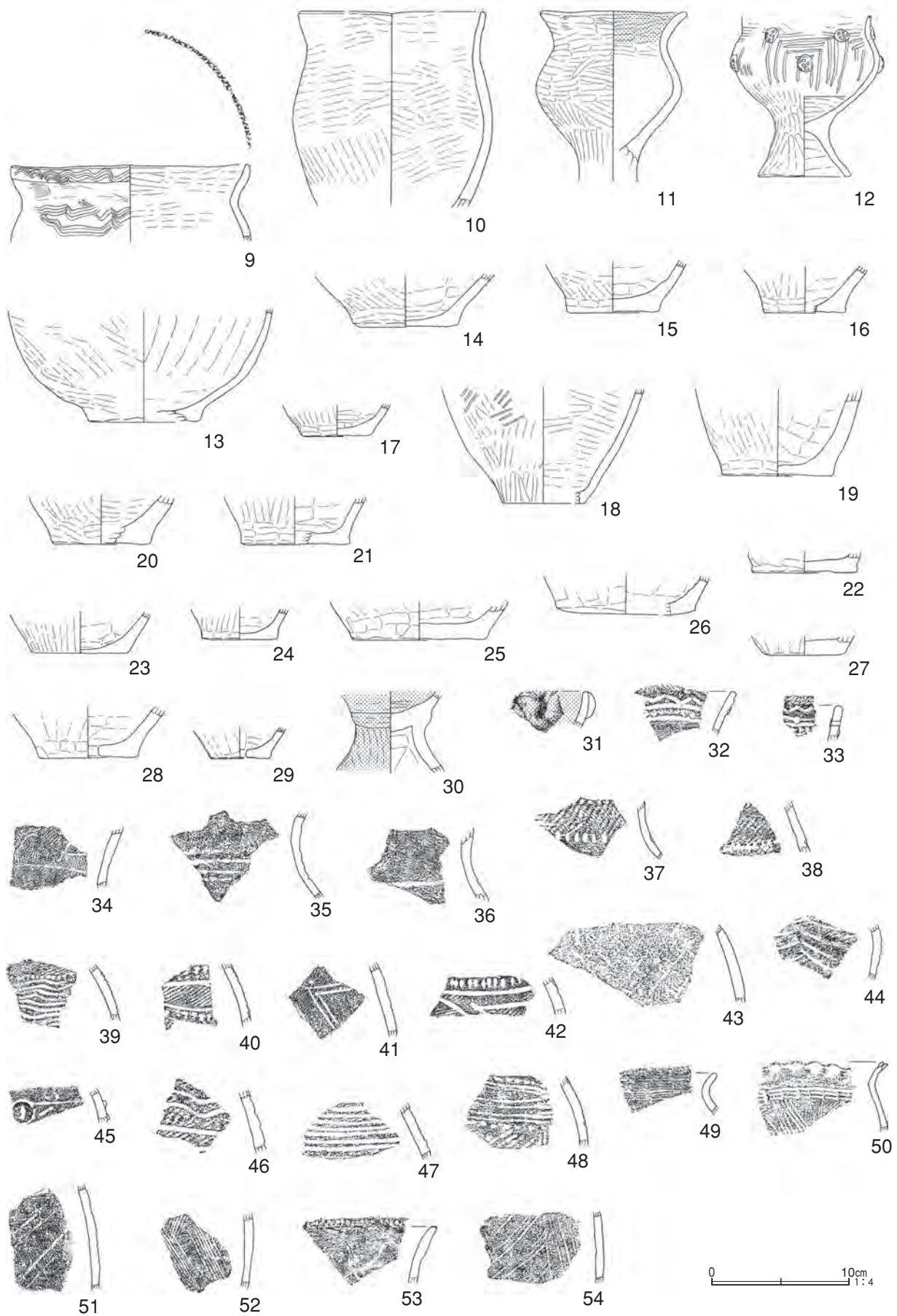
7～10・18～27・49～63は甕。7～10は残存状態が比較的良好であり、7～9は櫛歯状工具で文様が描かれている。7は小型の甕。底部を欠く。口縁部の開きが小さい。頸部はほぼ直立し、胴部は膨らまない。口径に最大径を持つ。文様は頸部に4本一単位の簾状文、胴部に同一工具で横位の羽状文が描かれるが、極めて粗雑である。口縁部外面及び内面の調整はヘラミガキ、胴部外面はヘラナデである。頸部内面の一部に輪積痕が残る。8は口縁部が大きく外反する。頸部はほぼ直立し、最大径を持つ胴部中段が膨らむ。文様は口縁端部に刻みを持ち、頸部は4本一単位の簾状文、胴部は5～7本一単位で縦位の羽状文がやや粗雑に描かれている。調整は内外面ともにヘラミガキである。9は口縁部から胴上部までの部位。口縁部がやや受け口状を呈する。文様は口縁端部にオオバコによる擬縄文が施文され、口縁部と胴上部には2～3本一単位の波状文が描かれている。調整は頸部外面がハケメ、内面はヘラミガキである。10は無文で内外面ともにヘラミガキ調整である。18～27は胴下部から底部までの部位。外面調整は18～24がヘラミガキ、25～27がヘラナデである。内面は20のみヘラミガキであるが、その他はヘラナデ調整である。甕としたが、胴下部に横位の羽状文が施文された18以外は壺の可能性もある。

49～58は櫛歯状工具で文様が施文された破片。櫛歯の単位は3本前後が多い。49は口縁部から頸部にかけての破片で頸部に簾状文が巡り、口縁端部はLR単節縄文が施文されている。口縁部外面及び内面は横位のヘラナデ調整である。50～53は胴上部に羽状文が描かれた破片。50～52は横位、53は縦位に描かれている。50は口縁部に指頭圧痕、頸部に簾状文が巡る。53は口縁端部に刻みを持ち、以下は無文で上位が横位、下位が斜位のヘラナデ調整である。内面調整は50が横位、51・53が横・斜位、52が斜位のヘラナデである。54～56は胴部に斜格子文が描かれた破片。54・55は粗雑であり、沈線が細い。57・58は波状文が描かれた破片。57は口縁部、58は胴部中段に描かれている。57は口縁端部に刻みを持ち、

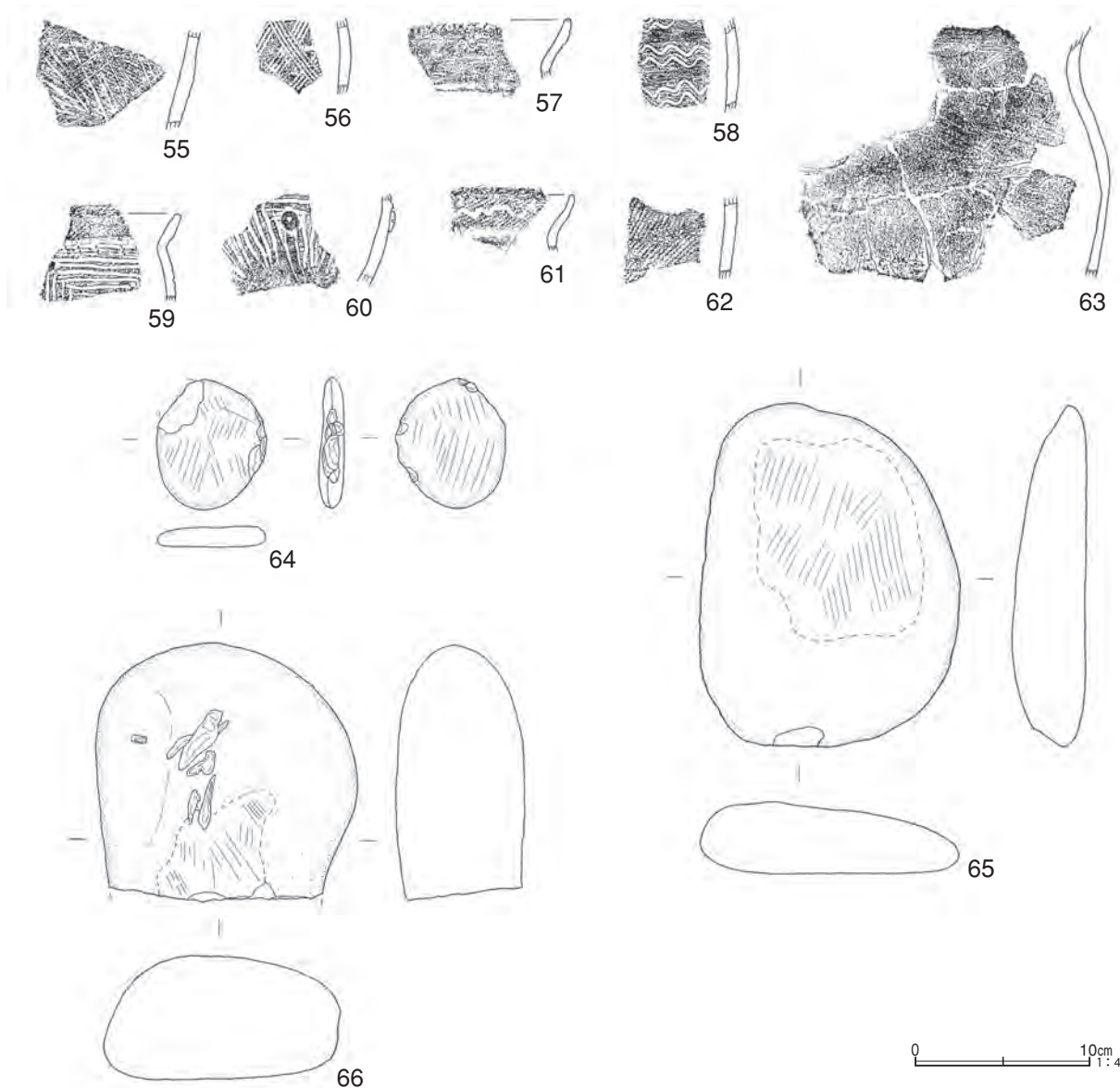




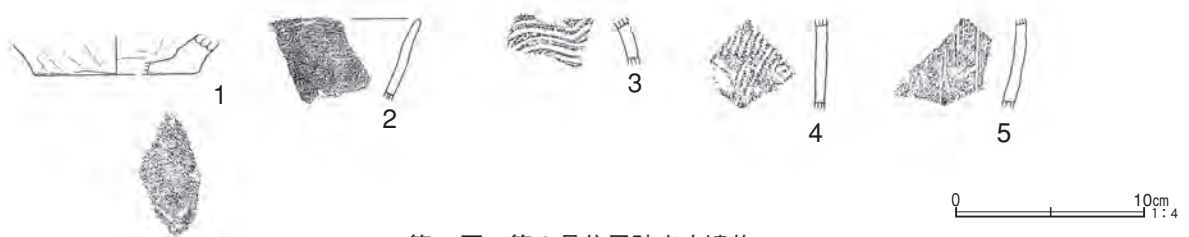
第10図 第2号住居跡出土遺物(1)



第11图 第2号住居跡出土遺物(2)



第12図 第2号住居跡出土遺物



第13図 第3号住居跡出土遺物

頸部は無文で横位のヘラナデ調整である。内面調整は57が横位、58が横・斜位のヘラナデである。59・60は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。59は端部も含め口縁部にLR単節縄文が施文されており、頸部は3本一単位の簾状文が巡る。60は胴上部にボタン状貼付文が付く。内面調整は59が横位、60が斜位のヘラナデである。61・62はLR単節縄文が施文された破片。61は端部も含め口縁部に縄文が施文され、波状沈線が巡る。頸部は無文で内面とともに横位のヘラナデ調整である。62の内面は斜位のヘラナデ調整である。63は無文の頸部から胴下部までの破片。調整は頸部が横位、胴上部から中段まで



第3表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	16.7	39.15	7.7	ABDEHIKN	にぶい橙色	B	80%	2個一対突起3つ有。内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	13.2	30.7	(8.5)	ABDEHN	淡赤褐色	B	90%	内外面磨耗顕著。
3	弥生土器 壺	7.7	13.8	5.1	ADEHKMN	明褐色	B	ほぼ完形	内外面磨耗顕著。
4	弥生土器 壺	—	(13.85)	—	ABCHKN	にぶい黄橙色	B	頸~胴 45%	内外面磨耗顕著。
5	弥生土器 壺	—	(25.8)	8.1	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	頸~底 80%	外面赤彩、所々磨耗。
6	弥生土器 壺	—	(19.0)	—	ABEHN	にぶい黄橙色	B	肩~胴 80%	内面磨耗顕著、外面一部以外磨耗。
7	弥生土器 甕	15.2	(12.35)	—	ABDHIKN	にぶい赤褐色	B	口~胴 80%	頸部内面一部輪積痕有。
8	弥生土器 甕	22.9	29.1	8.3	ABDEHIK	灰褐色	B	85%	内外面磨耗顕著。
9	弥生土器 甕	(17.4)	(5.6)	—	ABGHKN	明赤褐色	B	口~胴 40%	内外面磨耗顕著。
10	弥生土器 甕	(13.6)	(14.2)	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	口~胴 60%	内外面磨耗顕著。P3出土。
11	弥生土器台付甕	(10.6)	(12.3)	—	ABHIKN	灰褐色	B	口~接 70%	口縁部内面赤彩。
12	弥生土器台付甕	—	(11.7)	6.8	ABEHIN	明赤褐色	B	頸~台 90%	外面磨耗顕著。
13	弥生土器 壺	—	(8.15)	(8.2)	ABDHN	橙色	B	胴~底 40%	内外面磨耗顕著。
14	弥生土器 壺	—	(3.7)	7.6	ABHIKMN	灰黄褐色	B	底部 75%	内外面磨耗顕著。
15	弥生土器 壺	—	(3.7)	(6.65)	ABEIKMN	にぶい橙色	B	底部 50%	内外面磨耗顕著。
16	弥生土器 壺	—	(3.4)	5.9	ADEIN	にぶい橙色	B	底部 60%	内外面磨耗顕著。
17	弥生土器 壺	—	(2.3)	5.0	ABHIKN	黒褐色	B	底部 100%	
18	弥生土器 甕	—	(8.4)	(6.1)	ABHKN	にぶい黄褐色	B	胴~底 40%	内外面所々磨耗。
19	弥生土器 甕	—	(6.3)	(8.0)	ABHIN	橙色	B	胴~底 30%	内外面磨耗顕著。
20	弥生土器 甕	—	(3.5)	7.1	ABEHN	にぶい黄橙色	B	底部 50%	外面やや磨耗。
21	弥生土器 甕	—	(3.5)	(7.9)	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	底部 40%	
22	弥生土器 甕	—	(1.5)	(7.6)	ABEHIKN	灰黄褐色	B	底部 45%	内外面やや磨耗。P2出土。
23	弥生土器 甕	—	(3.05)	(7.0)	AHIK	淡黄褐色	B	底部 40%	内面磨耗顕著。
24	弥生土器 甕	—	(2.25)	(5.5)	ABDHIKN	淡黄褐色	B	底部 45%	内面磨耗顕著。
25	弥生土器 甕	—	(2.8)	(9.7)	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	底部 45%	内外面磨耗顕著。
26	弥生土器 甕	—	(2.9)	(10.0)	ABHKN	にぶい黄橙色	B	底部 45%	内外面磨耗顕著。
27	弥生土器 甕	—	(1.45)	5.9	AEHKN	にぶい黄橙色	B	底部 95%	
28	弥生土器 甕	—	(3.7)	(7.0)	ABEIK	にぶい黄橙色	B	底部 35%	内外面磨耗顕著。
29	弥生土器 甕	—	(2.3)	(4.4)	ABKN	浅黄橙色	B	底部 45%	外面磨耗顕著。
30	弥生土器高坏	—	(5.85)	—	ABHK	灰黄色	B	接~脚 40%	内外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。
31	弥生土器 壺	—	—	—	BDIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	2個一対突起有。内外面赤彩、大半剥落。磨耗顕著。
32	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIKN	にぶい褐色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
33	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口縁部片	孔有。
34	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄褐色	B	頸部片	
35	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	頸~肩部片	外面磨耗顕著。
36	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHJN	にぶい黄橙色	B	頸~肩部片	内外面磨耗顕著。
37	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	浅黄橙色	B	頸~肩部片	内面磨耗顕著。
38	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIJN	黒褐色	A	胴上部片	
39	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIJK	黒褐色	B	胴上部片	
40	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGHIN	灰色	B	胴上部片	
41	弥生土器 壺	—	—	—	ABHKN	灰褐色	B	胴上部片	
42	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIJKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
43	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIJKN	灰色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
44	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEKN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	
45	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKMN	灰黄褐色	B	胴上部片	
46	弥生土器 壺	—	—	—	ABHKN	黄灰色	B	胴上部片	
47	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	明赤褐色	B	胴上部片	
48	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKMN	灰黄色	B	胴上部片	
49	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	口~頸部片	
50	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	暗褐色	B	口~胴上片	
51	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	頸~胴上片	
52	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	黒色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
53	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	にぶい黄褐色	A	口~頸部片	
54	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHIN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	
55	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIJN	にぶい黄褐色	A	胴中段片	
56	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	
57	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIKN	明赤褐色	B	口~頸部片	外面磨耗顕著。
58	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒色	B	胴上部片	
59	弥生土器 甕	—	—	—	ABHI	暗オリーブ褐色	B	口~胴上片	
60	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	灰黄褐色	B	胴上~下片	
61	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGIKN	黒褐色	A	口~頸部片	
62	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
63	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHN	黒褐色	B	頸~胴下片	胴部内面一部輪積痕有。内面磨耗顕著。
64	磨石	最大長7.4cm、最大幅6.2cm、最大厚1.4cm。重量(73.6)g。一部欠。砂岩製。二面使用。敲打器兼。							
65	砥石	最大長19.5cm、最大幅14.8cm、最大厚4.2cm。重量(1,551)g。ほぼ完形。砂岩製。一面使用。							
66	砥石	最大長(14.75)cm、最大幅(14.7)cm、最大厚7.3cm。重量(2,600)g。半分欠?砂岩製。一面使用。							

が斜位、以下は縦位、内面は全面横位のヘラナデである。胴部内面に一部輪積痕が残る。

11・12は小型の台付甕。ともに欠損箇所があるが、残存状態は比較的良好である。11は口縁部がやや外反し、頸部がすぼまる。胴部は中段が膨らみ、やや算盤玉状を呈する。口径と胴部中段の径はほぼ同じである。台部を欠くが、長い接合部がほぼ直立する。調整は胴部内面以下が計測不可能であったが、内外面ともにヘラミガキであり、口縁部内面は赤彩が施されている。器形から台付甕としたが、広口壺等の範疇で捉えても良いかもしれない。12は胴部にコの字重ね文とボタン状貼付文が施文されている。調整はヘラナデが施された台部内面以外すべてヘラミガキである。

28・29は甑の底部。調整は28が内外面ヘラナデ、29は外面がヘラナデ、内面はヘラミガキである。

30は高坏の接合部。突帯が巡る。外面及び坏部内面はヘラミガキと赤彩が施されている。脚部内面はヘラナデ調整である。

64は磨石。二面使用しており、敲打器を兼ねる。一部欠損する。65・66は砥石。ともに一面のみ使用しており、やや光沢を帯びている。66は約半分を欠く。

本住居跡の時期は、弥生時代中期末と思われる。

### 第3号住居跡(第8・9図)

第1次調査での検出であり、58-144グリッドに位置する。西壁付近一部のみの検出であり、大半は調査区外にある。南西部で2号住居跡に切られている。

規模及び平面プラン等は不明である。確認面からの深さは0.4m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は6層(1~6層)確認された。ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

壁際には壁溝が巡っており、幅0.3m、床面からの深さは0.07m前後を測る。

炉跡やピット、貯蔵穴は確認されなかった。

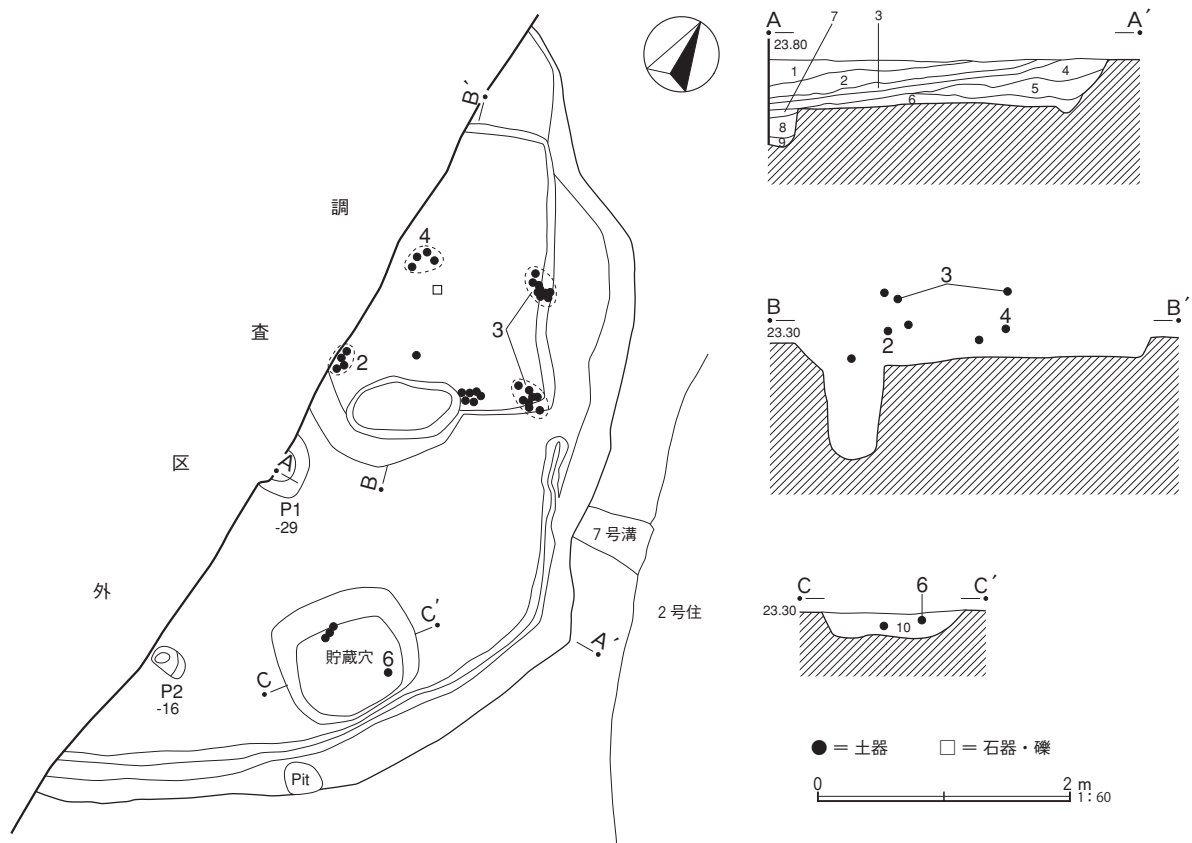
出土遺物(第13図)は、弥生土器壺(2・3)、甕(1・4・5)のみである。すべて覆土から検出された。

2・3は壺。2は口縁部片。無文で内外面ともにヘラミガキ調整であるが、外面上位は横位、下位は縦位、内面は横位に施されている。3は胴上部片。LR単節縄文地に2本一単位の櫛歯状工具で波状文が複数巡る。内面調整は横位のヘラナデである。1・4・5は甕。1は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。底面に木葉痕がみられた。4はLR単節縄文が施文された胴部中段の破片。内面調整は横位のヘラナデである。5は胴下部片。単位不明の櫛歯状工具による直線文が垂下する。内面調整は斜位のヘラナデである。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 甕	—	(2.1)	(8.6)	ABDIKN	灰黄褐色	B	底部20%	底面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIJN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	
3	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
4	弥生土器 甕	—	—	—	AGHIN	暗褐色	B	胴中段片	
5	弥生土器 甕	—	—	—	AGIK	黒褐色	B	胴下部片	



第4号住居跡

土層説明 (AA' C C')

- 1 青黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色土、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。3層より暗い。

- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。4層より暗い。
- 6 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰色土少量含む。
- 7 灰白色土：粘土質。酸化鉄、灰色土多量含む。
- 8 灰色粘土：酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒少量含む。
- 9 灰色粘土：酸化鉄、灰白色粒少量含む。8層より明るい。
- 10 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック多量、焼土、炭化物少量含む。

第14図 第4号住居跡

第4号住居跡 (第14図)

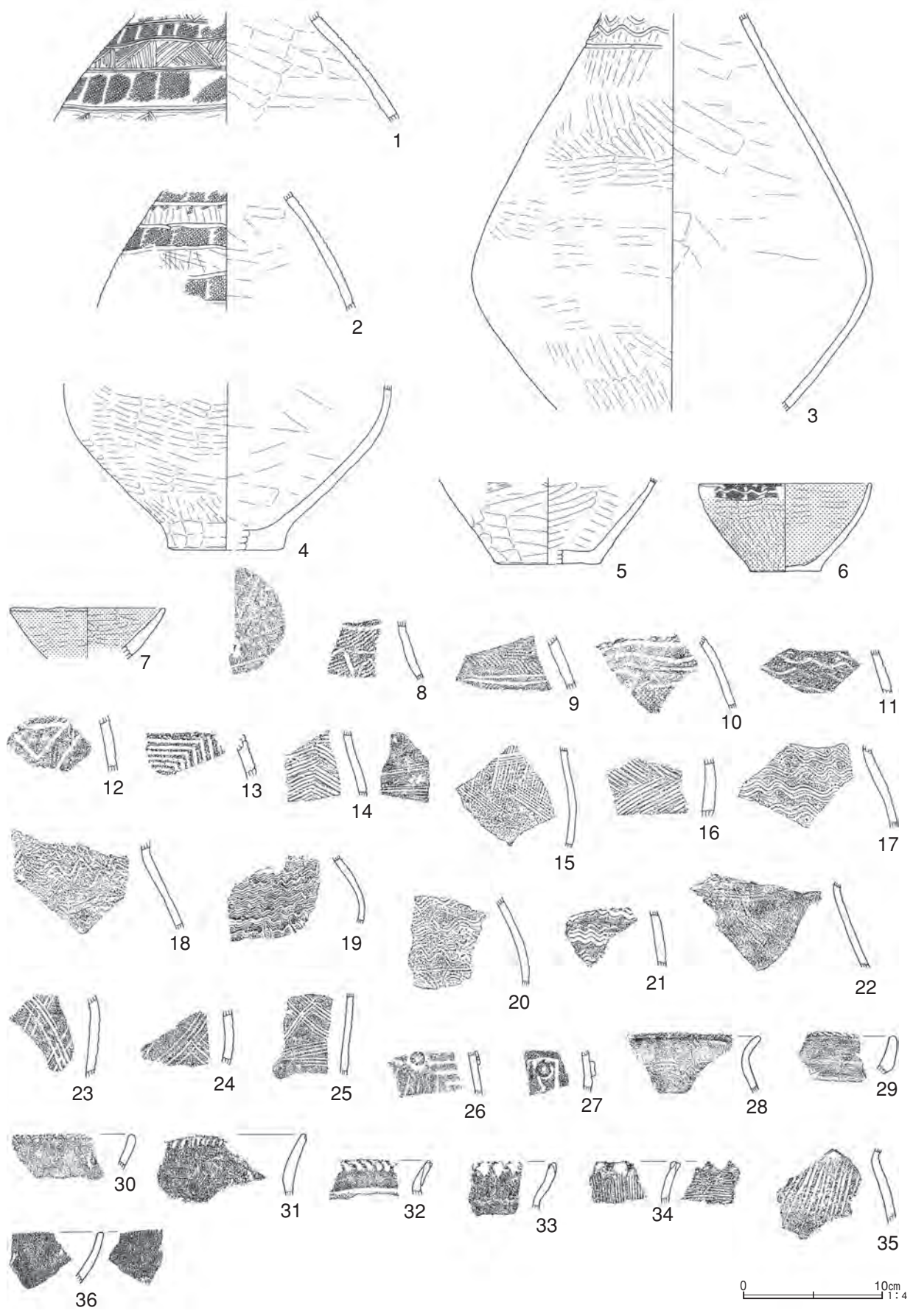
第2次調査での検出であり、59-144~146グリッドに位置する。東壁南東で7号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。西側大半は調査区外にある。

正確な規模及び主軸方向は不明であるが、平面プランは隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.45m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は6層(1~6層)確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

北東隅付近では床下土坑が確認された。長軸2.32m、短軸は不明であるが、長方形を呈すると思われる。南側ではピット状の掘り込みもみられた。床下土坑の深さは0.18mを測る。ピット状の掘り込みは長軸0.89m、短軸0.5mの楕円形状を呈し、床面からの深さは0.93mを測る。

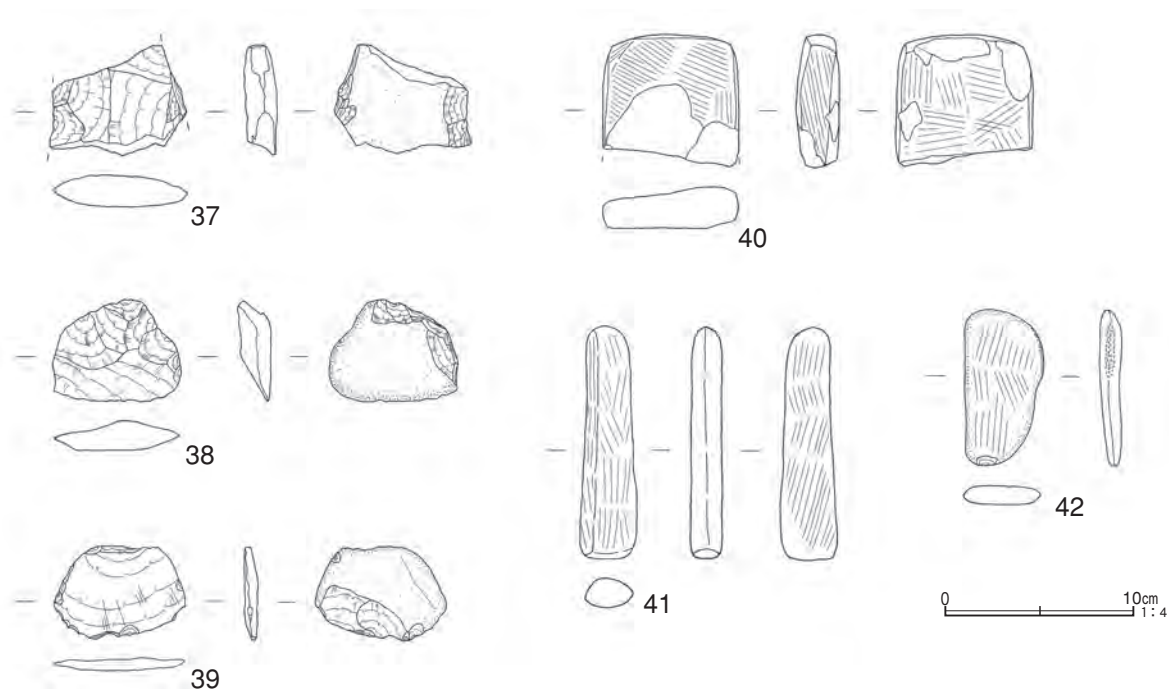
ピットは2基検出された。いずれも主柱穴とは考えにくく、P2は出入口に関連するものと思われる。

貯蔵穴は南東隅から検出された。長軸1.1m、短軸0.97mの隅丸長方形を呈する。床面からの深さは0.19mを測る。



第15図 第4号住居跡出土遺物(1)





第16図 第4号住居跡出土遺物(2)

壁溝は東壁中央付近から南壁沿いにかけて検出された。幅は東壁から南東隅付近は0.15m前後と狭いが、南壁沿い中央以西は0.4m前後と幅広になる。床面からの深さは0.05m前後である。

炉跡は確認されなかった。

出土遺物(第15・16図)は、弥生土器壺(1~4・8~13)、甕(5・14~35)、鉢(6・7・36)、打製石斧(37)、搔器(38・39)、磨製石斧(40)、磨石(41・42)がある。破片は覆土からの出土が多く、残存状態の比較的良いものは床下土坑や貯蔵穴から出土した。

1~4・8~13は壺。1・2は胴上部。ともに中段に向かって膨らむ。1は2本一単位の櫛歯状工具による直線文が等間隔に巡り、短沈線による複合鋸歯文とLR単節縄文が交互に施文されている。最下に描かれた鋸歯文は間隔が空く。2は平行沈線が等間隔に巡るが、LR単節縄文が無文部を挟んで交互に施文されている。無文部はヘラミガキ調整である。1・2の内面調整はともにヘラナデである。3は頸部から胴下部までの部位。無花果状を呈し、最大径を中段より下に持つ。文様は頸部にのみみられ、波状沈線と平行沈線が巡る。調整は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。4は胴部中段から底部にかけての部位。球形を呈する。調整は外面がヘラミガキ、内面がヘラナデである。底面に木葉痕がみられた。

8~13は肩部から胴上部までの破片。8はLR単節縄文地に平行沈線と山形状の沈線が巡る。9はRL単節縄文下に平行沈線が2条巡る。10・11は波状沈線が巡る。10は分かりづらいが、最下の波状沈線間に半円形の刺突列が巡る。以下は無文で斜位のヘラミガキと赤彩が施されている。11はRL単節縄文地に波状沈線と平行沈線が巡る。12は重三角文、13は重四角文が描かれ、12は沈線間にLR単節縄文が充填されている。8~13の内面調整は8・9・11~13が横位、10のみ斜位のヘラナデである。

5・14~35は甕。5は胴下部から底部までの部位。調整は外面がヘラナデ主体となるが、一部ハケメもみられた。内面はヘラミガキ調整である。14~25は櫛歯状工具で文様が施文された破片。櫛歯の単位は4本前後が多い。14~16は胴部に羽状文が描かれており、14は縦位、15・16は横位に描かれている。

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(7.45)	—	ABEHIN	にぶい橙色	B	胴上部 30%	内外面やや磨耗。
2	弥生土器 壺	—	(8.55)	—	ABEHN	淡黄色	B	胴上部 25%	内面磨耗顕著。床下土坑出土。
3	弥生土器 壺	—	(28.5)	—	ABDEN	にぶい黄橙色	B	頸～胴 40%	内外面磨耗顕著。床下土坑上面出土。
4	弥生土器 壺	—	(11.95)	(8.2)	ABDIN	灰白色	B	胴～底 30%	底面木葉痕有。内外面磨耗顕著。床下土坑出土。
5	弥生土器 甕	—	(6.3)	(7.6)	AHIK	黒褐色	B	胴～底 30%	床下土坑出土。
6	弥生土器 鉢	(12.4)	6.3	(5.3)	ABHJ	灰黄色	B	40%	内外面赤彩、大半剥落。磨耗顕著。貯蔵穴出土。
7	弥生土器 鉢	11.0	(3.65)	—	ABHK	灰白色	B	口～体 70%	内外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。床下土坑出土。
8	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDEHIN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
9	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄色	B	肩～胴上片	内面やや磨耗。
10	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	外面無文部赤彩。内外面磨耗顕著。
11	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
12	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIMN	暗灰黄色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
13	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
14	弥生土器 甕	—	—	—	AEHK	黒褐色	B	頸～胴上片	内面上位磨耗顕著。
15	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIK	黒褐色	B	頸～胴上片	
16	弥生土器 甕	—	—	—	ABHN	にぶい黄色	B	胴中段片	
17	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒色	B	胴上部片	床下土坑出土。
18	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内面輪積痕有。
19	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	黒褐色	B	胴上部片	
20	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒色	B	胴上部片	
21	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	褐灰色	B	胴中段片	
22	弥生土器 甕	—	—	—	BDEH	灰白色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
23	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIKN	にぶい褐色	B	胴中段片	
24	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄色	B	胴中段片	
25	弥生土器 甕	—	—	—	ABHJK	灰色	B	胴中段片	床下土坑出土。
26	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
27	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIN	灰黄褐色	B	胴上部片	
28	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKMN	橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
29	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒色	B	口縁部片	
30	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	
31	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIKMN	褐灰色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
32	弥生土器 甕	—	—	—	ACDIKN	灰白色	B	口～頸部片	
33	弥生土器 甕	—	—	—	AIN	黒褐色	B	口～頸部片	
34	弥生土器 甕	—	—	—	AHIN	黒色	B	口～頸部片	
35	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	
36	弥生土器 鉢	—	—	—	ABHIK	赤褐色	B	口～体部片	内外面赤彩。
37	打製石斧	最大長(5.8)cm、最大幅(7.0)cm、最大厚(1.7)cm。重量(86.0)g。中段付近のみ残。粘板岩製。							
38	搔器	最大長5.35cm、最大幅6.25cm、最大厚1.65cm。重量59.2g。完形。ホルンフェルス製。							
39	搔器	最大長4.45cm、最大幅6.9cm、最大厚0.75cm。重量30.1g。完形。粘板岩製。							
40	磨製石斧	最大長(7.0)cm、最大幅(7.25)cm、最大厚(2.25)cm。重量(202.0)g。基部のみ残。緑色岩製。							
41	磨石	最大長12.25cm、最大幅3.1cm、最大厚1.7cm。重量89.9g。完形。砂岩製。二面使用。							
42	磨石	最大長8.2cm、最大幅4.15cm、最大厚1.2cm。重量50.7g。完形。砂岩製。一面使用。敲打器兼。							

14は頸部に同一工具による簾状文が巡る。内面調整は14が斜位のハケメ、15・16はヘラナデであるが、15は斜位、16は横位に施されている。17～21は胴部に波状文が複数描かれた破片。18は粗雑に施文されている。17～21の内面調整は21のみ斜位、その他は横位のヘラナデである。18は内面に輪積痕が残る。22～25は胴部に斜格子文が描かれた破片。22は頸部に同一工具による簾状文が巡る。25は斜格子文下に同一工具による横・斜位の文様が描かれている。22～25の内面調整はすべて横位のヘラナデである。26・27は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。いずれもボタン状貼付文が付く。内面調整はともに横位のヘラナデである。28～30は端部に縄文が施文された口縁部片。28・30はLR、29はRL単節縄文である。28は頸部に3本一単位の櫛歯状工具による直線文が巡る。口縁部と胴上部の無文部及び内面は横位のヘラナデ調整である。29は口縁部外面が無文で上位が横位のヘラミガキ、下位及び内面は横位のヘラナデ調整である。30は内外面ともに横位のヘラナデ調整である。31～33は端部に刻み、34は指頭圧

痕が施された口縁部片。口縁部は無文で31は内外面ともに横・斜位、32・33は横位のヘラナデ調整である。34は内外面ともにハケメ調整である。35は斜位の沈線が複数描かれた破片。内面調整は斜位のヘラナデである。弥生時代中期中頃の池上式に相当する。流れ込みである。

6・7・36は鉢。6の口縁部外面以外、内外面ともにヘラミガキと赤彩が施されている。6は口縁部がほぼ直立し、体部が内湾する。端部も含め口縁部にLR単節縄文が施文され、波状沈線が巡る。7は底部を欠く。口縁部から体部がやや内湾する。36は口縁部から体部までの破片。ヘラミガキは内外面ともに横位に施されている。

37は打製石斧。中段付近のみの検出である。38・39は搔器と思われる石器。完形。40は磨製石斧の基部。緑色岩製。41・42は磨石。41は二面、42は一面のみ使用しており、42は敲打器を兼ねる。完形。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階と思われる。

### 第5号住居跡（第17図）

第2次調査での検出であり、59-146・147グリッドに位置する。東壁付近のみの検出であり、大半は調査区外にある。他の遺構との重複関係はみられない。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は5.18mを測る。平面プランは隅丸方形ないし長方形を呈し、主軸方向はN-3°-Eを指すと思われる。床面はほぼ平坦であり、確認面からの深さは0.52mを測る。覆土は8層（5～12層）確認された。最下層に粘土質の灰オリーブ色土が厚く堆積していた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡やピット、壁溝等は確認されなかった。

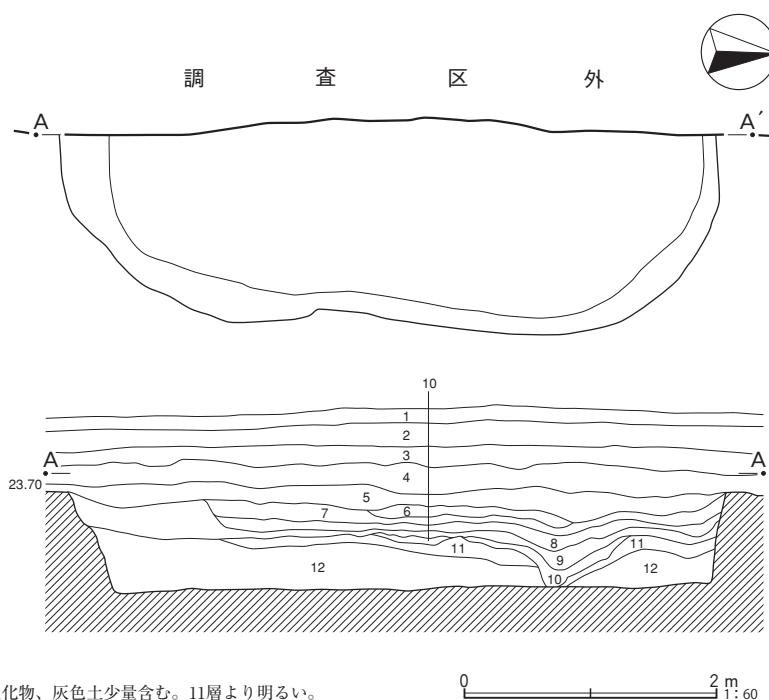
出土遺物（第18図）は、弥生土器壺（1～3）、甕（4・5）がある。すべて覆土上～中層の検出である。

1～3は壺。1は底部。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。甕の可能性もある。2は頸部

#### 第5号住居跡

##### 土層説明（AA'）

- 1 耕作土
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、白色粒少量含む。
- 3 青黒色土：粘土質。酸化鉄、灰色土、マンガン粒多量、白色粒少量含む。
- 4 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 6 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 7 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 8 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。
- 9 灰白色土：シルト質。酸化鉄、灰色土、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 10 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色土、マンガン粒多量含む。下層に炭化物が帯状に薄く堆積。
- 11 灰オリーブ色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰色土少量含む。
- 12 灰オリーブ色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰色土少量含む。11層より明るい。



第17図 第5号住居跡



第 18 図 第 5 号住居跡出土遺物

0 10cm 1:4

第6表 第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(1.9)	10.9	ABCIKMN	暗灰黄色	B	底部 70%	内外面磨耗顯著。
2	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIK	浅黄橙色	B	頸~肩部片	内外面磨耗顯著。
3	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	外面磨耗顯著。
4	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	黒褐色	B	頸~胴中片	
5	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIN	黄灰色	B	胴中段片	内外面磨耗顯著。

から肩部までの破片。頸部は無文で横位のヘラミガキ調整、肩部は平行沈線が2条巡る。内面調整は頸部が横位、肩部が斜位のヘラナデである。3は胴上部片。分かりづらいが、L R単節縄文下に平行沈線が2条巡る。内面調整は横位のヘラナデである。4・5は甕。4は頸部から胴部中段までの破片。頸部は5本一単位の櫛歯状工具による簾状文が巡り、胴部は同一工具による縦位の羽状文が描かれている。内面調整は頸部が横位のヘラナデ、胴部は斜位のハケメである。5はR L単節縄文が施文された胴部中段の破片。内面調整は横位のヘラナデである。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第6号住居跡

土層説明 (A A')

1 耕作土

2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、白色粒少量含む。

3 青黒色土：粘土質。酸化鉄、灰色土、マンガン粒多量、白色粒少量含む。

4 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。

5 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。

6 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

7 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、黄色粒、炭化物少量含む。

8 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

9 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。8層より暗い。

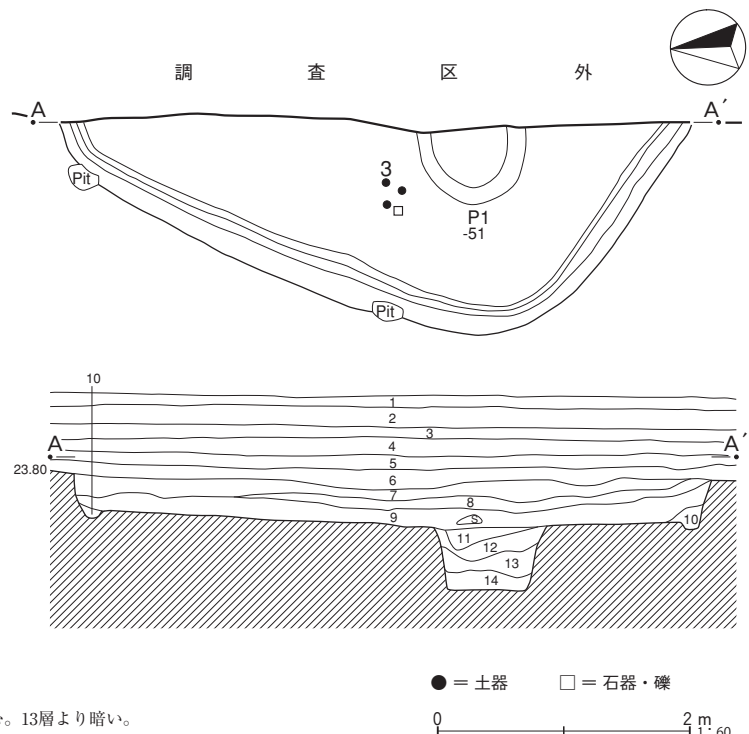
10 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。

11 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

12 灰白色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。

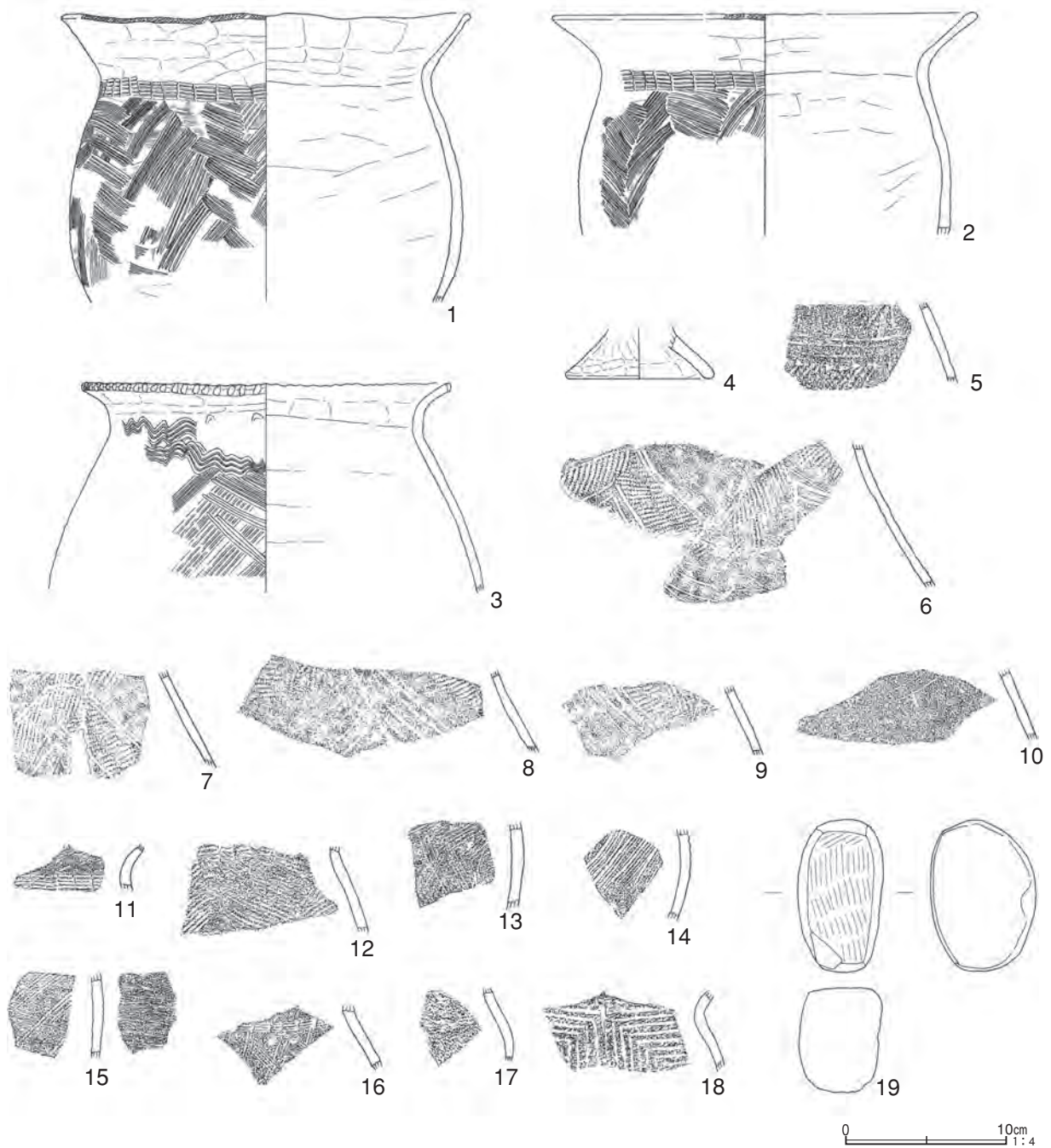
13 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。

14 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。13層より暗い。



第 19 図 第 6 号住居跡





第20図 第6号住居跡出土遺物

第6号住居跡（第19図）

第2次調査での検出であり、58-146・147グリッドに位置する。西壁付近のみの検出であり、大半は調査区外にある。他の遺構との重複関係はみられない。

正確な規模や主軸方向は不明であるが、西壁は4.2m程を測り、平面プランは隅丸方形ないし長方形を呈すると思われる。床面はほぼ平坦であり、確認面からの深さは0.3m前後を測る。覆土は4層（7～10層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピットは調査区との境から1基検出された。半分のみの検出であるため正確な数値は不明であるが、南北は0.87mを測り、円形ないし楕円形を呈すると思われる。床面からの深さは0.49mを測る。その位



第7表 第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 甕	(25.3)	(17.85)	—	ABDHIKN	黒褐色	B	口～胴 40%	内外面所々磨耗。P1 出土。
2	弥生土器 甕	(26.4)	(13.2)	—	ABKN	暗灰色	B	口～胴 20%	内面やや磨耗。P1 出土。
3	弥生土器 甕	(22.8)	(13.0)	—	ABDIKN	淡黄色	B	口～胴 20%	内外面所々磨耗顕著。
4	弥生土器高坏	—	(3.2)	9.2	ABDIN	にぶい橙色	B	脚部 75%	内外面磨耗顕著。P1 出土。
5	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEHIKM	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
6	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDEHIKN	にぶい黄橙色	B	肩～胴上片	No7～10 と同一個体。
7	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	黒色	B	肩～胴上片	No6・8～10 と同一個体。P1 出土。
8	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDEHIKN	にぶい橙色	B	肩～胴上片	No6・7・9・10 と同一個体。外面磨耗顕著。
9	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	黒色	B	肩～胴上片	No6～8・10 と同一個体。
10	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDEHIKN	灰白色	B	胴上部片	No6～9 と同一個体。外面磨耗顕著。
11	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
12	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIMN	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
13	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	P1 出土。
14	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴中段片	P1 出土。
15	弥生土器 甕	—	—	—	AHIM	黒色	B	胴中段片	
16	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKMN	黒褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
17	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIJKN	にぶい褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKMN	黒褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
19	磨石	最大長 9.4 cm、最大幅 5.25 cm、最大厚 6.5 cm。重量 484.0g。完形。砂岩製。一面使用。P1 出土。							

置から支柱穴とは考えにくく、貯蔵穴の可能性はある。

壁溝は検出できた範囲内を全周する。幅は0.25m前後が主体となり、床面からの深さは0.05m前後を測る。炉跡は確認されなかった。

出土遺物（第20図）は、弥生土器壺（5～10）、甕（1～3・11～18）、高坏（4）、磨石（19）がある。床面直上の遺物は少なく、覆土やピット1からの出土が多い。

5～10は壺の肩部から胴上部までの破片。5は横位のヘラミガキが施された無文部下に細い平行沈線3条とLR単節縄文が施文されている。内面調整は横位のヘラナデである。6～10は同一個体。鋸歯文と弧線文が合体した文様が描かれており、間にカナムグラによる擬縄文が充填されている。無文部は縦・斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデ調整である。

1～3・11～18は甕。18以外は櫛歯状工具により文様が描かれている。櫛歯の単位は4～5本が多い。1～3は口縁部から胴部中段付近までの部位。1・2は口縁部形態がやや異なるが、ほぼ同様の器形と文様構成である。ともに最大径を持つ口縁部が逆ハの字に開き、頸部はすぼまり、胴部中段が膨らむ。文様は口縁端部にLR単節縄文が施文され、頸部は簾状文、胴部は同一工具による縦位の羽状文が描かれている。無文部の調整は口縁部がヘラナデ、胴部はハケメ、内面はヘラナデである。3は短い口縁部が大きく開き、頸部はほぼ直立し、胴部は中段に向かって大きく膨らむ。文様は口縁端部に刻みを持ち、頸部から胴上部にかけてやや粗雑な波状文が2条巡り、以下は同一工具による縦位の羽状文が描かれている。無文部の調整は内外面ともにヘラナデである。11は口縁部から頸部までの破片。頸部に簾状文が巡る。口縁部は端部を欠くが、斜位のヘラナデ調整である。内面調整は横位のヘラナデである。12～15は胴部に羽状文が描かれた破片。12のみ縦位、その他は横位に描かれている。12は頸部に同一工具による簾状文が巡る。14は羽状文下の無文部に斜位のヘラミガキが施されている。内面調整は12～14が斜位のヘラナデ、15はハケメである。16は胴部に斜格子文が描かれており、頸部は同一工具による簾状文が巡る。内面調整は斜位のヘラナデである。17は複数の波状文が巡る胴上部片。内面調整は横位のヘラナデである。18は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。内面調整は横位のヘラナデである。

4は高坏の脚部。短くハの字に開く。調整は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。

19は磨石。一面のみ使用しており、光沢が著しい。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階と思われる。

#### 第7号住居跡（第26図）

第2次調査での検出であり、58・59-147～149グリッドに位置する。東壁中央で14号土坑を切っており、西側は調査区外にある。

本住居跡は拡張が行われている。規模は東西が不明、南北は拡張前が4.95mであるが、拡張後は7.48mを測り、大型の部類に入る。平面プランはいずれも隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向はN-2°-Eを指し、東西南北にはほぼ軸が合う。確認面からの深さは0.65m前後と深く、床面はやや凹凸がみられた。覆土は29層（1～29層）と多く、中央付近では下層から焼土や炭化物層が確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央からやや北寄りに位置する。西側は調査区外にあるため長軸は不明であるが、短軸は0.48mを測り、楕円形を呈すると思われる。床面からの深さは0.07mと浅く、覆土は焼土のみ（35層）であった。

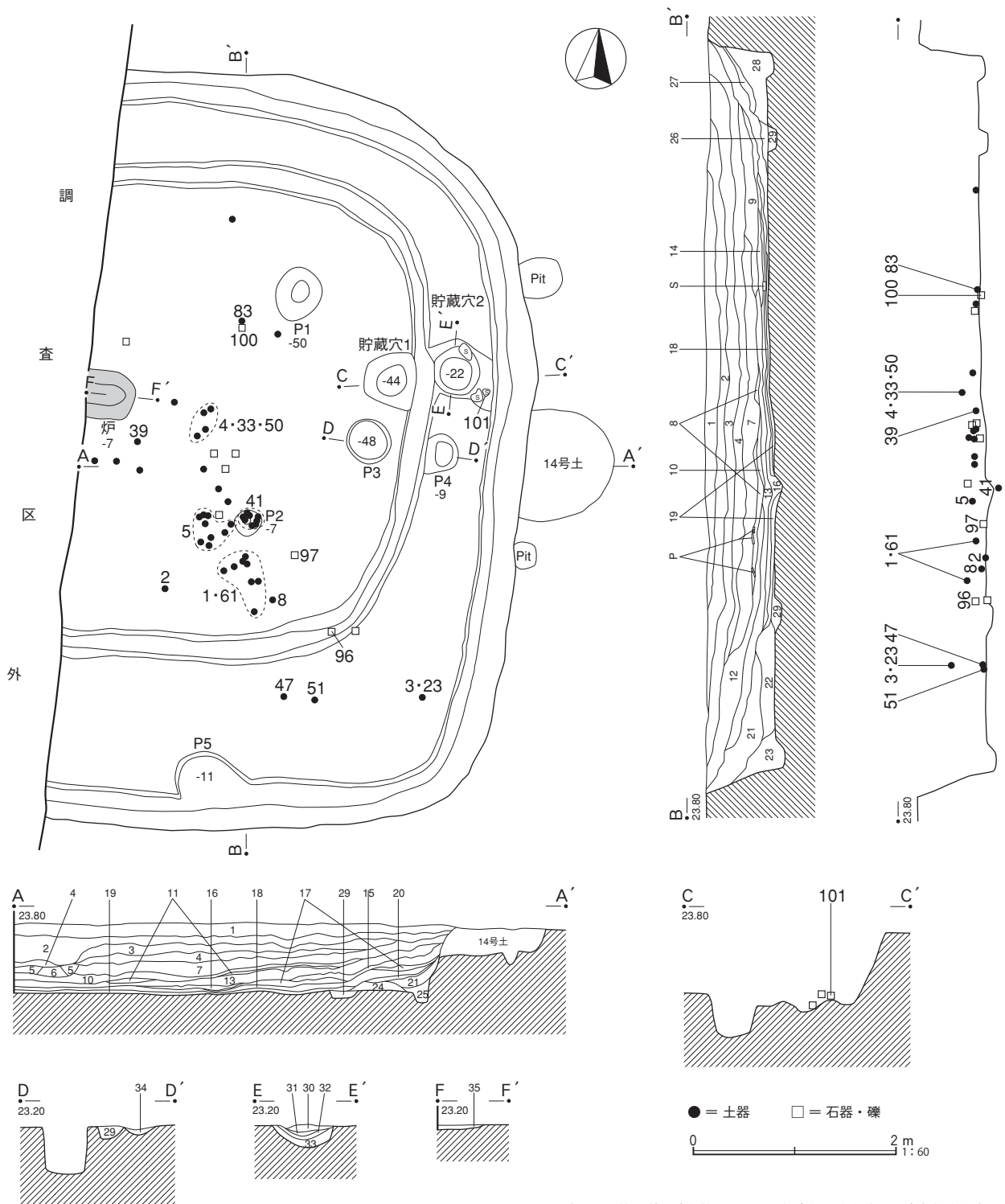
ピットは6基検出された。P1・2はその位置から主柱穴と思われるが、P2は0.07mと浅い。P3・4は出入口に関連し、P3が拡張前、P4が拡張後に伴うものと思われる。

壁溝は拡張前後にかかわらず、検出した範囲内を全周する。幅は拡張前が0.3m、後が0.4m前後であり、床面からの深さは拡張前が0.08m、後が0.1m前後を測る。

貯蔵穴は2つ検出された。位置はいずれも東壁沿い中央から北寄りに位置し、壁溝と連結する。貯蔵穴1は拡張前のものであり、径0.5m前後の角張った不整形形状を呈する。床面からの深さは0.44mを測る。覆土は図示できなかったが、炭化物を多く含んでいた。貯蔵穴2は拡張後のものであり、径0.57m前後の不整形楕円形状を呈する。床面からの深さは0.22mを測る。覆土は4層（30～33層）確認され、焼土や炭化物を多く含んでいた。

出土遺物（第22～25図）は、弥生土器壺（1・7～9・16～45）、無頸壺（2）、広口壺（46）、甕（3～6・10～14・47～92）、高坏（93・94）、鉢（15・95）、打製石斧（96～98）、刃器（99）、磨石（100～102）がある。遺物量が多く、床面直上の遺物は主に中央付近に集中し、比較的残存状態の良いものが検出された。破片は覆土からの検出が多い。

1・7～9・16～45は壺。1は胴上部から底部までの部位。胴部はややいびつな球形を呈し、底径が大きい。文様は胴上部から中段下まで平行沈線と山形状の沈線が複数巡る。調整は外面がヘラミガキ、内面はハケメである。7～9は胴下部から底部までの部位。壺としたが、甕の可能性もある。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。7は底面に木葉痕がみられた。16～22は口縁部から頸部までの破片。16～20は口縁部に縄文が施文されており、17は端部まで、20は端部のみ施文されている。16・17・19はLR、18・20はRL単節縄文である。16は縄文下が無文で縦位のヘラミガキ調整である。17は縄文下に半円形の刺突列が巡り、以下は斜位のヘラミガキ調整である無文部を挟んで、18は5条の波状沈線下にそれぞれ鋸歯文が描かれている。19は3本一単位の櫛歯状工具による波状文2条と半円形の刺突列がやや間隔を空けて巡る。20は口縁部から頸部にかけて間隔を空けた細い平行沈線が巡る。無文部は横位のヘラミガキ調整である。内面調整は16が横・斜位、17・18・20は横位、19は斜位のヘラミガキである。



第7号住居跡

土層説明 (AA' BB' DD' EE' FF')

- 1 青黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色土、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 4 灰白色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量含む。
- 5 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、焼土粒、炭化物、マンガン粒多量含む。
- 6 焼土ブロック

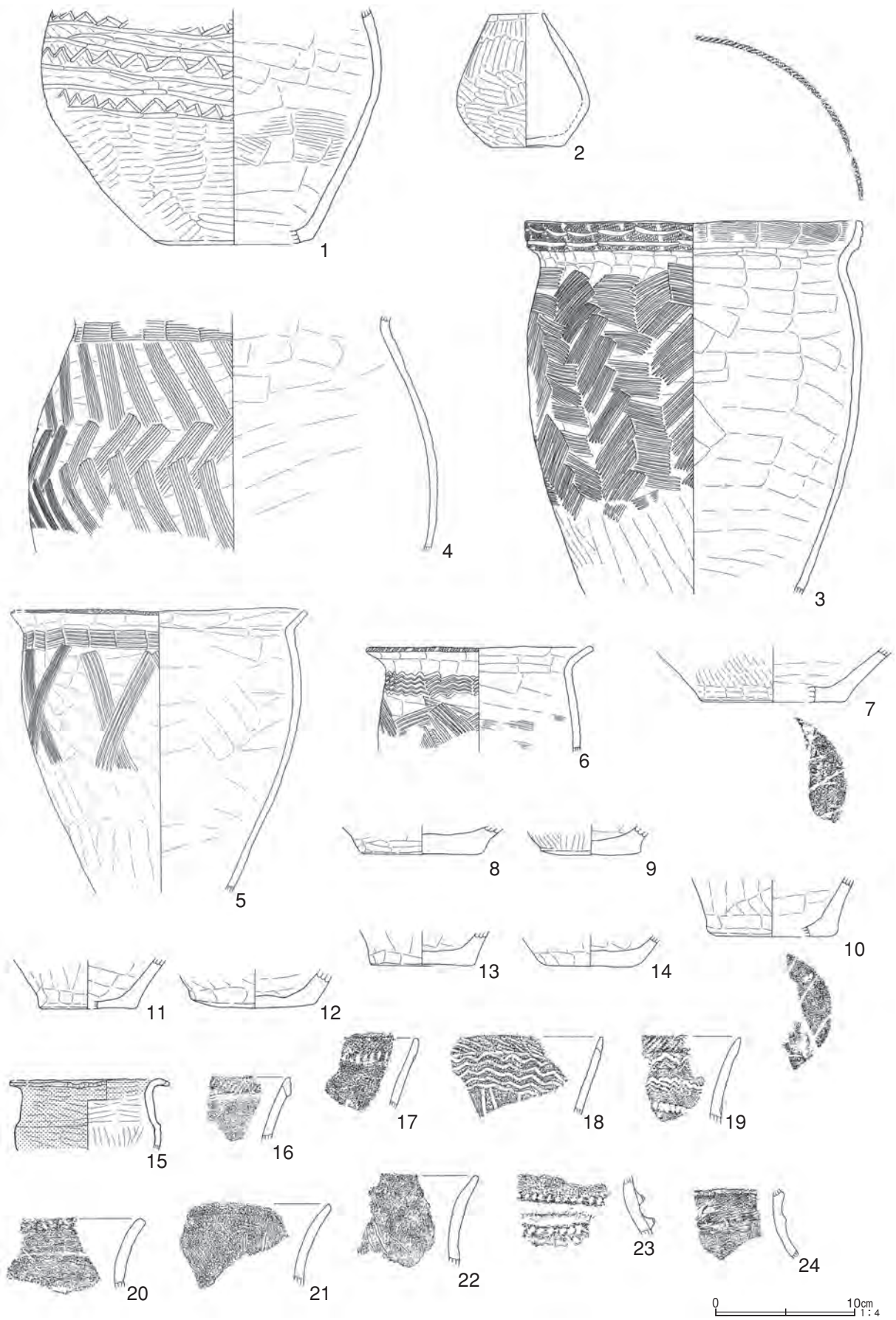
- 7 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 8 炭化物層：焼土粒多量含む。
- 9 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。7層より明るい。
- 10 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物少量含む。
- 11 炭化物層：灰色土少量含む。
- 12 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。3・7層より明るい。
- 13 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量、酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。

第21図 第7号住居跡

- |  |  |
|--|--|
| 14 焼土層：炭化物多量含む。                          | 24 炭化物層：焼土粒多量含む。                         |
| 15 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒少量含む。       | 25 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。21層より明るい。 |
| 16 炭化物層：焼土粒多量含む。                         | 26 灰色土：粘土質。焼土、炭化物多量含む。                   |
| 17 炭化物層：焼土粒、灰白色粒少量含む。                    | 27 炭化物層：酸化鉄、灰白色粒少量含む。                    |
| 18 灰白色土：粘土質。灰白色粒多量、酸化鉄、炭化物少量含む。          | 28 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。          |
| 19 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物少量含む。                  | 29 青灰色粘土：粘土質。酸化鉄、炭化物少量含む。埋戻土。            |
| 20 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。          | 30 炭化物層：焼土多量含む。                          |
| 21 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。20層より暗い。  | 31 焼土層                                   |
| 22 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。21層より明るい。 | 32 炭化物層：中層に焼土が帯状に堆積。                     |
| 23 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。22層より明るい。 | 33 灰色粘土：炭化物多量、酸化鉄少量含む。                   |
|  | 34 炭化物層：焼土粒少量含む。                         |
|  | 35 焼土層                                   |

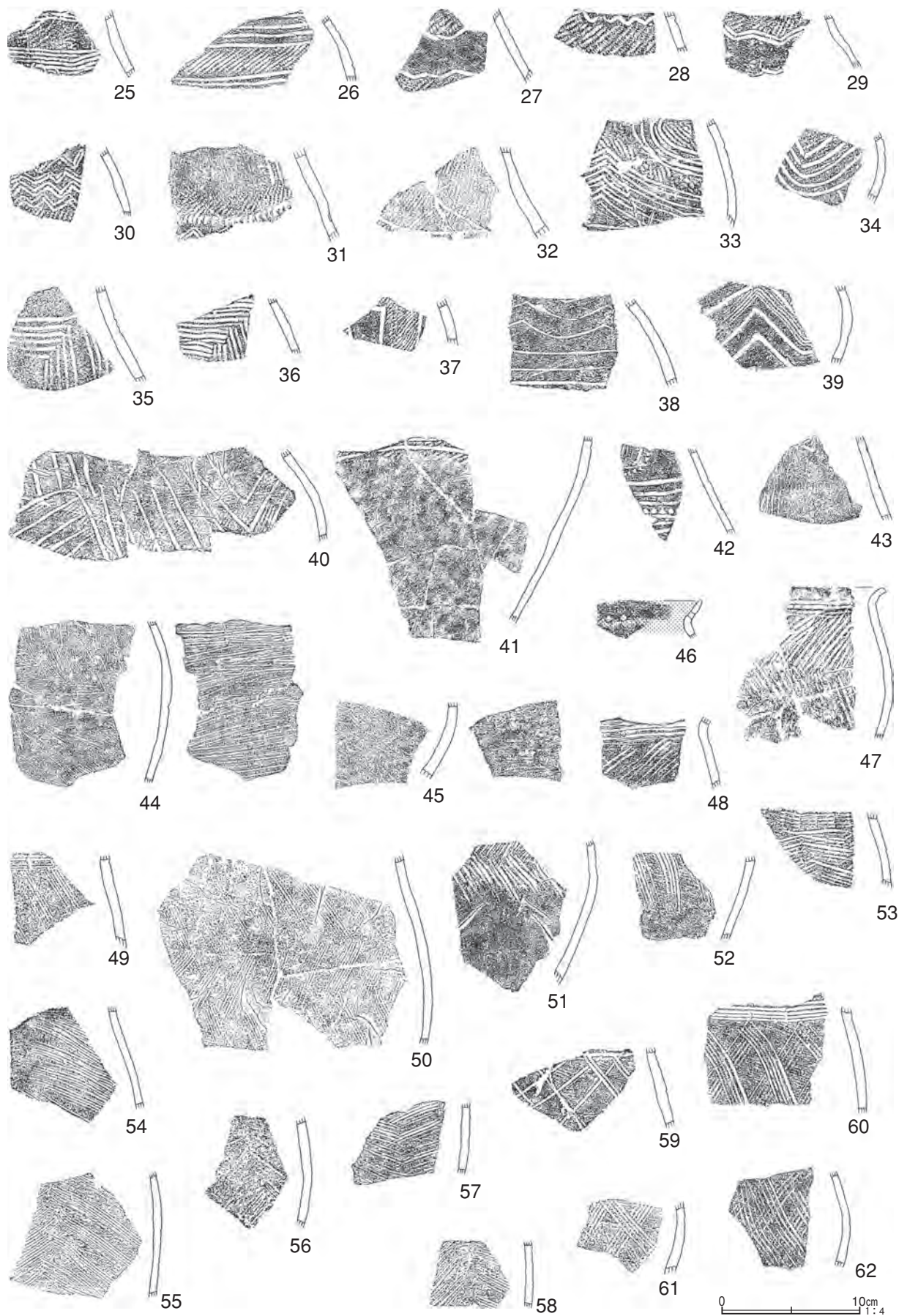
21・22は無文で内外面ともにヘラミガキ調整が主体となるが、21は頸部以下が横・斜位のヘラナデ調整である。外面のヘラミガキは、21の口縁部が横位、頸部が斜位、22は縦・斜位、内面は21が横位、22の口縁部は横位に施されている。23・24は2条の突帯が巡る肩部片。23は突帯上に刻み、24は突帯間にLR単節縄文が施文されている。ともに突帯の上下は無文で横位のヘラミガキ調整である。内面調整はともに横位のヘラナデである。25・26は複数の平行沈線間にLR単節縄文が施文された破片。25は3本一単位の櫛歯状工具で描かれている。内面調整は25が横位、26が横・斜位のヘラナデである。27～30は波状沈線とLR単節縄文が施文された破片。27・28は1条の沈線、29・30は2本一単位の櫛歯状工具で描かれている。27の無文部は斜位のハケメ、29は横位のヘラミガキが施されている。内面調整は27・28・30が横位、29が横・斜位のヘラナデである。31・32は肩部から胴上部までの破片。31は段を持つ。縦位のヘラミガキが施された無文部に複数の沈線が垂下し、段の上にLR単節縄文が施文され、下は半円形の刺突列が巡る。以下は2本一単位の櫛歯状工具で鋸歯文が描かれている。32はほぼ全面にLR単節縄文が施文されており、下に平行沈線が巡る。31・32の内面調整は31が横・斜位、32が横位のヘラナデである。33・34はフラスコ文が描かれた破片。33は下に弧線文が描かれており、間に無節Rが充填されている。34は地文にLR単節縄文が施文されている。34・35の内面調整はともに横位のヘラナデである。35～37は重四角文が描かれた胴上部片。35は上にLR単節縄文が施文されている。36は3本一単位の櫛歯状工具で描かれている。37は沈線間に無節Lが充填されている。35～37の内面調整は35が横・斜位、36・37が横位のヘラナデである。38・39は弧線文が描かれた破片。38は弧線文下に平行沈線が巡る。沈線が細い。外面無文部は横・斜位のヘラミガキ、内面は斜位のヘラナデ調整である。39はやや太めの沈線3条が弧線状に巡り、上位の沈線間に5本一単位の櫛歯状工具でさらに弧線状の文様が充填されている。38・39の内面調整は38が斜位、39が横位のヘラナデである。40は重三角文と複合鋸歯文が合体した胴上部片。LR単節縄文地にやや太い沈線でやや粗雑に描かれている。内面調整は横位のヘラナデである。41は胴部中段から下部までの破片。中段はLR単節縄文地に平行沈線が巡り、以下は無文で縦・斜位のヘラミガキが施されている。内面調整は横位のヘラナデである。42・43は肩部から胴上部にかけての破片。42は肩部に短冊状の文様が描かれており、区画内は細い沈線が充填され、区画外に半円形の刺突列が伴う。以下は複数の平行沈線と円形の刺突列が巡る。43は分かりづらいが、垂下する単位不明の櫛歯状工具による直線文脇に円形の刺突列が刻まれている。42・43の内面調整はともに横位のヘラナデである。44・45は無文で内外面ともにハケメ調整の破片である。



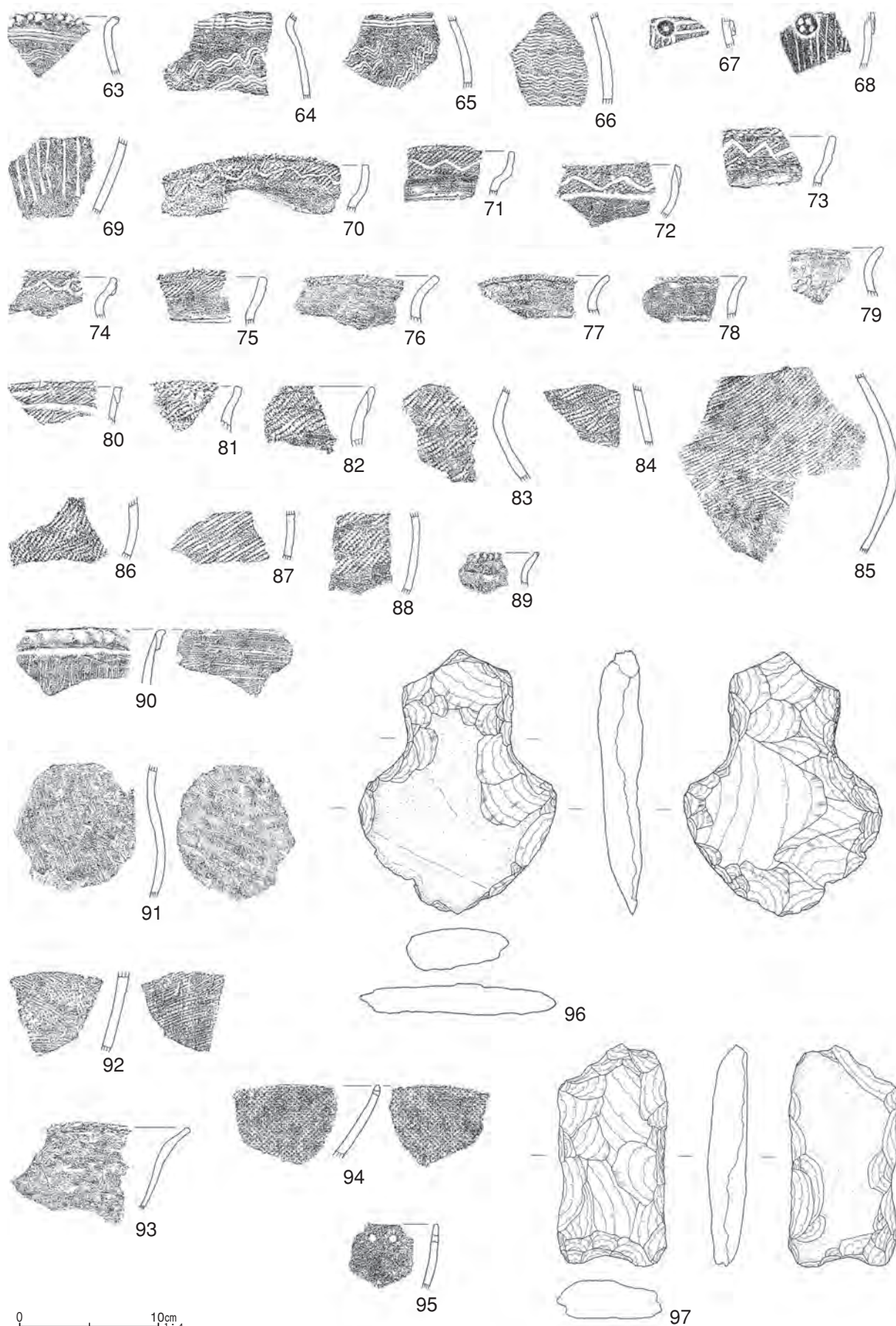


第22图 第7号住居跡出土遺物(1)





第 23 图 第 7 号住居跡出土遺物 (2)



第 24 图 第 7 号住居跡出土遺物 (3)

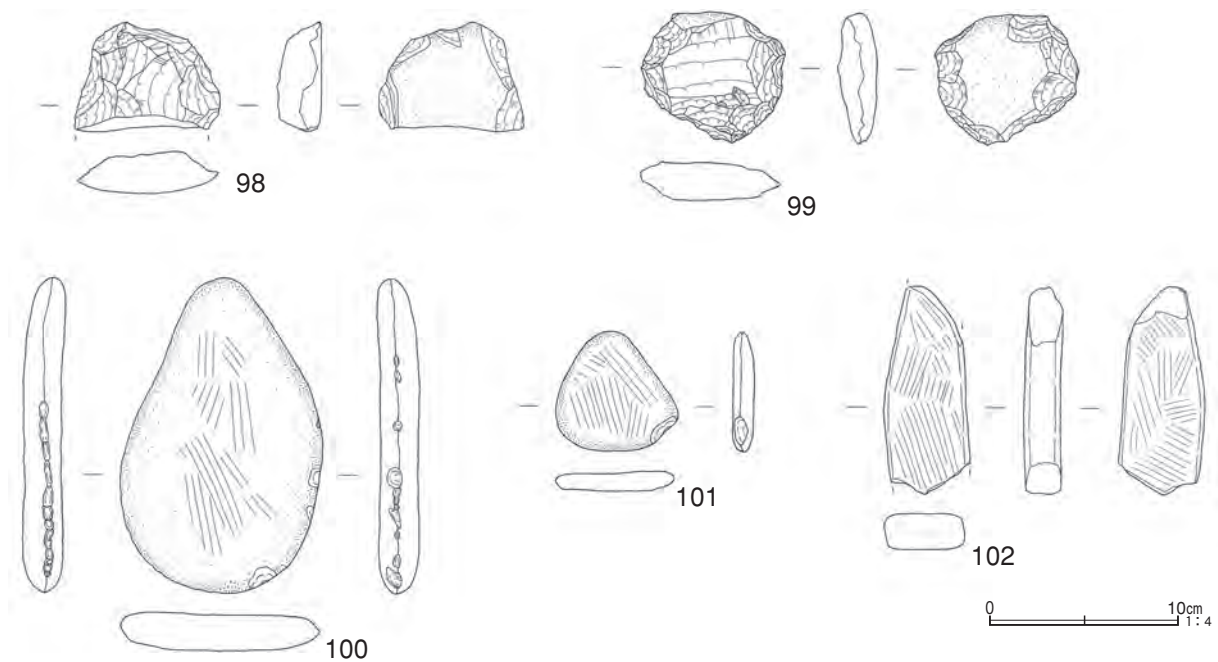


2は小型の無頸壺。無花果状を呈し、最大径を胴部中段より下に持つ。無文で外面調整はヘラミガキ、内面は計測不可能であったが、口縁部付近のみヘラミガキで以下はヘラナデ調整である。

46は広口壺の口縁部から頸部までの破片。内外面ともに横位のヘラミガキと赤彩が施されている。口縁部と頸部の境に2個一対の孔が設けられている。

3～6・10～14・47～92は甕。3～6は櫛歯状工具で主文様が描かれており、比較的残存状態が良好である。3は口縁部が受け口状を呈し、短い頸部が直立する。胴部は上位が小さく膨らむ。口径と胴上部の径はほぼ同じであるが、最大径を前者に持つ。底部付近を欠く。文様は端部も含め口縁部にL R単節縄文が施文され、弧線状の沈線が2条巡るが、下位の沈線は平行に近い。胴部以下は縦位の羽状文が密に描かれている。櫛歯の単位は6本である。外面無文部及び内面の頸部以下はヘラナデ、口縁部内面はハケメ調整である。4は頸部から胴部中段までの部位。文様は頸部に簾状文が巡り、胴部は横位の羽状文が描かれている。櫛歯の単位は8本と多い。外面無文部及び内面の調整はヘラナデである。5は短い口縁部が逆ハの字に開き、頸部はほぼ直立する。胴部は上位が小さく膨らむ。最大径を口径に持つ。底部を欠く。文様は口縁端部にL R単節縄文が施文され、頸部は簾状文、胴部は斜格子文が描かれている。櫛歯の単位は5本である。外面無文部及び内面の調整はヘラナデである。6は口縁部から胴部中段までの部位。やや小振りで口縁部が大きく開く。頸部はほぼ直立し、胴部はほとんど膨らまない。文様は口縁端部にL R単節縄文が施文され、頸部に波状文、胴部は縦位の羽状文が描かれている。櫛歯の単位は5本である。外面無文部及び内面の調整はヘラナデが主体となるが、胴部内面はハケメもみられた。10～14は胴下部から底部までの部位。すべて内外面ともにヘラナデ調整である。10は底面に木葉痕がみられた。

47～66は櫛歯状工具で文様が施文された破片。櫛歯の単位は4～5本が多い。47～58は胴部に羽状文が描かれた破片。47～52は横位、53～58は縦位に描かれている。47・48は頸部に同一工具による直線文、49・53は簾状文が巡る。47の口縁部外面は横位のヘラナデ調整である。51・52は羽状文下が無文で51は縦位のヘラミガキ、52は斜位のヘラナデ調整である。47～58の内面調整は、50～52が横・斜位、53・54が斜位、その他は横位のヘラナデである。59～62は胴部に斜格子文が描かれた破片。59・60は頸部に同一工具による簾状文が巡り、胴部は斜格子文下に斜位のハケメ調整が残る。59～62の内面調整は、59・62が横位、60が横・斜位、61が斜位のヘラナデである。63～66は胴部に波状文が描かれた破片。64・65は粗雑であるが、66は密に施文されている。63は口縁端部に刻みを持ち、63～65は頸部に同一工具による直線文ないし簾状文が巡る。63～66の内面調整は、65は上位が横位、下位が斜位、その他は横位のヘラナデである。67～69は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。67・68はボタン状貼付文が付く。67は地文にL R単節縄文が施文され、68は斜位のハケメ調整が一部残る。内面調整は、67が横位のヘラミガキ、68・69はヘラナデである。68は斜位、69は横位に施されている。70～88は縄文が施文された破片。70～82は口縁部から頸部までの破片。70～75は受け口状を呈する。72以外は端部も含め口縁部にL R単節縄文が施文され、75以外は口縁部に波状ないし山形状の沈線が巡る。頸部はすべて無文で71が横位のハケメである以外は、すべて横位のヘラナデ調整である。72は口縁部と頸部の境に輪積痕が残る。74は波状沈線上にボタン状貼付文が付く。75は無文部下に平行沈線が巡る。70～75の内面調整はすべて横位のヘラナデである。76～78は口縁端部に縄文が施文されており、76・77がL R、78がR L単節縄文である。口縁部は無文ですべて内外面ともに横位のヘラナデ調整である。78は頸部に輪積痕が



第25図 第7号住居跡出土遺物(4)

残る。79は口縁部が無文で胴上部にL R単節縄文が施文されている。内面調整は横位のヘラナデである。80～82は端部も含め肥厚した口縁部から頸部にかけて全面L R単節縄文が施文されている。80～82の内面調整は、80が横位のハケメ、81は横位のヘラミガキ、82は横位のヘラナデである。83～88はL R単節縄文の施文された破片。85は縄文以下の無文部が縦位のヘラミガキ、88は横位のヘラナデ調整である。83～88の内面調整は、84・88が斜位、その他は横位のヘラナデである。83は内面に輪積痕が残る。89は端部に刻みを持つ口縁部から頸部までの破片。端部以外は無文で内外面ともに横位のヘラナデ調整である。90～92は無文でハケメ調整の破片。90は肥厚した口縁部に指頭圧痕がみられた。91は頸部から胴部中段まで、92は胴下部の破片である。

93・94は高坏。口縁部から坏部までの破片。93は口縁端部にL R単節縄文が施文され、以下は内外面ともにヘラミガキ調整であり、外面は横位、内面は口縁部が横位、坏部は斜位に施されている。口縁部が大きく外反する器形から高坏としたが、異なる可能性もある。94は外面が横位、内面が斜位のヘラミガキ調整であり、赤彩が施されている。口縁部に2個一対の孔が設けられている。

15・95は鉢。15は口縁部が大きく外反し、端部に2個一対に突起が付く。頸部はほぼ直立し、胴部との境に段を持つ。内外面ともにヘラミガキ調整であり、外面及び口縁部内面に赤彩が施されている。器形的には甕に見えるが、小振りでヘラミガキや赤彩が施されていることから鉢とした。95は口縁部から体部までの破片。内外面ともにヘラナデ調整であり、口縁部に2個一対の孔が設けられている。

96～98は打製石斧。96は分銅型、97は短冊型を呈する。97は刃部が磨り減って窪んでいる。98は基部のみの検出である。99は刃器。完形。100～102は磨石。100・101は一面のみ使用しており、敲打器を兼ねる。102は二面使用しており、両端を欠く。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第8表 第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(16.8)	(11.2)	ABCHIN	灰褐色	B	胴～底 70%	内外面所々磨耗。
2	弥生土器 無頸壺	3.9	9.55	5.3	ABEIK	灰黄色	B	完形	外面所々磨耗。
3	弥生土器 甕	24.2	(26.8)	—	ABCHIKN	黒褐色	B	口～胴 40%	
4	弥生土器 甕	—	(16.85)	—	AHKN	黒褐色	B	頸～胴 30%	
5	弥生土器 甕	21.7	(20.7)	—	ABCIK	黒褐色	B	口～胴 60%	内外面磨耗顕著。
6	弥生土器 甕	(16.2)	(7.6)	—	ABEHK	黒褐色	B	口～胴 25%	内外面所々磨耗。
7	弥生土器 壺	—	(3.9)	(10.4)	ABHIK	灰黄色	B	胴～底 25%	底面木葉痕有。
8	弥生土器 壺	—	(2.05)	8.7	ABDHIKN	褐灰色	B	底部 100%	
9	弥生土器 壺	—	(2.2)	7.0	ABCDHIK	暗灰色	B	底部 100%	
10	弥生土器 甕	—	(4.3)	(8.9)	ABEIKM	灰白色	B	胴～底 35%	底面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
11	弥生土器 甕	—	(3.6)	7.0	ABDEGHN	にぶい橙色	B	底部 70%	内外面磨耗顕著。
12	弥生土器 甕	—	(2.8)	9.0	ABDIKM	淡黄色	B	底部 70%	内外面磨耗顕著。
13	弥生土器 甕	—	(2.5)	7.4	ABIKN	褐灰色	B	底部 50%	
14	弥生土器 甕	—	(2.2)	(6.4)	ABIKN	黒褐色	B	底部 50%	
15	弥生土器 鉢	(11.2)	(5.05)	—	ABCIK	赤褐色	B	口～胴 20%	2個一対突起有。口縁部内面・外面赤彩。
16	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	褐灰色	B	口～頸部片	外面やや磨耗。
17	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIK	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	黄褐色	B	口～頸部片	
19	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	外面やや磨耗。
20	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	暗灰黄色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
21	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDHIK	灰黄褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
22	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄色	B	口～頸部片	
23	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
24	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHJKMN	黒色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
25	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	浅黄色	B	肩部片	外面やや磨耗。
26	弥生土器 壺	—	—	—	ABGHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	
27	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内面やや磨耗。
28	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIKN	灰黄色	B	胴上部片	
29	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIJN	にぶい黄褐色	B	肩～胴上片	
30	弥生土器 壺	—	—	—	ABEGHKN	黄灰色	B	胴上部片	
31	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIKN	黄灰色	B	肩～胴上片	
32	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEIKN	橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
33	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
34	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
35	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	褐灰色	B	肩～胴上片	外面磨耗顕著。
36	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄色	B	胴上部片	
37	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴上部片	
38	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
39	弥生土器 壺	—	—	—	ABGIKN	黒褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
40	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	褐灰色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
41	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	胴中～下片	内面やや磨耗。
42	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHJKN	灰黄褐色	B	肩～胴上片	内面磨耗顕著。
43	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEHIK	にぶい黄褐色	B	肩～胴上片	内外面磨耗顕著。
44	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	にぶい黄褐色	B	胴上～中片	
45	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	浅黄色	B	胴下部片	内面磨耗顕著。
46	弥生土器 広口壺	—	—	—	ABCIKN	明赤褐色	B	口～頸部片	2個一対孔有。内外面赤彩、大半剥落。
47	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	灰褐色	B	口～胴中片	外面下位磨耗顕著。
48	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
49	弥生土器 甕	—	—	—	ABHN	褐灰色	B	頸～胴上片	
50	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIK	黄橙・黒褐色	B	頸～胴中片	内面やや磨耗。
51	弥生土器 甕	—	—	—	ADHI	褐灰色	B	胴中～下片	
52	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	黒褐色	B	胴中～下片	
53	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIN	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	
54	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	黒褐色	B	胴上部片	
55	弥生土器 甕	—	—	—	ABHKN	黒褐色	B	胴中段片	
56	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
57	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	黒色	B	胴中段片	
58	弥生土器 甕	—	—	—	ABHI	褐灰色	B	胴中段片	
59	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
60	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
61	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIK	黒色	B	胴中段片	
62	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	黒褐色	B	胴中段片	



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
63	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKN	灰白色	B	口～胴上片	内面磨耗顕著。
64	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKN	黒褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。
65	弥生土器 甕	—	—	—	ABHKKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
66	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKN	橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
67	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	胴上部片	
68	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIKN	暗褐色	B	胴中段片	内面やや磨耗。
69	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	内外面磨耗顕著。
70	弥生土器 甕	—	—	—	ABCEIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
71	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
72	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒色	B	口～頸部片	
73	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIN	褐灰色	B	口～頸部片	
74	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
75	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIKN	黒色	B	口～頸部片	
76	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
77	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	外面やや磨耗。
78	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	黒褐色	B	口～頸部片	頸部外面輪積痕有。
79	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
80	弥生土器 甕	—	—	—	AEHKKN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
81	弥生土器 甕	—	—	—	AEHI	黒褐色	B	口～頸部片	
82	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	口～頸部片	
83	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIJKN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	内面輪積痕有。
84	弥生土器 甕	—	—	—	AEGHIN	黒褐色	B	胴上部片	
85	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴上～下片	
86	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	黄褐色	B	胴中段片	
87	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	黒褐色	B	胴中段片	
88	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHI	灰黄褐色	B	胴中段片	
89	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
90	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	暗灰黄色	B	口～頸部片	
91	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	頸～胴中片	
92	弥生土器 甕	—	—	—	ACHIKN	黒色	B	胴下部片	
93	弥生土器高坏	—	—	—	ABCHIKN	灰黄褐色	B	口～坏部片	
94	弥生土器高坏	—	—	—	ABIJKN	赤褐色	B	口～坏部片	2個一対孔有。内外面赤彩。
95	弥生土器鉢	—	—	—	ABDEIK	褐灰色	B	口～体部片	2個一対孔有。
96	打製石斧	最大長19.1cm、最大幅14.0cm、最大厚3.15cm。	重量766.0g。完形。ホルンフェルス製。						
97	打製石斧	最大長15.9cm、最大幅7.7cm、最大厚2.7cm。	重量473.5g。完形。粘板岩製。						
98	打製石斧	最大長(5.9)cm、最大幅(7.1)cm、最大厚(2.3)cm。	重量(115.5)g。基部のみ残。粘板岩製。						
99	刃器	最大長6.9cm、最大幅7.8cm、最大厚2.2cm。	重量124.0g。完形。粘板岩製。						
100	磨石	最大長16.8cm、最大幅10.6cm、最大厚2.05cm。	重量491.5g。完形。砂岩製。一面使用。敲打器兼。						
101	磨石	最大長6.4cm、最大幅6.5cm、最大厚1.1cm。	重量51.5g。完形。砂岩製。一面使用。敲打器兼。						
102	磨石	最大長(11.1)cm、最大幅(4.4)cm、最大厚(1.95)cm。	重量(157.5)g。両端欠。砂岩製。二面使用。						

## 第8号住居跡（第26図）

第2次調査での検出であり、58-147・148グリッドに位置する。西壁付近のみの検出であり、大半は調査区外にある。西壁の中央から南寄りではピット状の掘り込みが見られたが、本住居跡に伴うものか不明である。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は4.5mを測り、平面プランは隅丸方形ないし長方形を呈すると思われる。主軸方向はN-3°-Eを指し、ほぼ東西南北に軸が合う。確認面からの深さは0.45m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は7層（7～13層）確認された。南側中層では炭化物層が広がっていた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

壁溝は検出できた範囲内を全周する。幅は0.25m、床面からの深さは0.1m前後を測る。

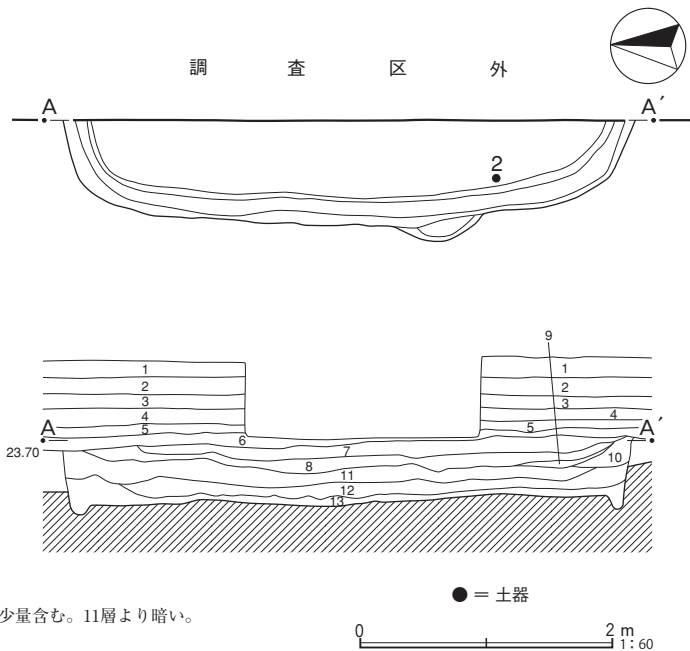
炉跡やピット、貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第27図）は、弥生土器壺（1・3～8）、広口壺（9）、甕（2・10～14）がある。2以外は覆土からの検出である。

第8号住居跡

土層説明 (AA')

- 1 耕作土
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、白色粒少量含む。
- 3 青黒色土：粘土質。酸化鉄、灰色土、マンガン粒多量、白色粒少量含む。
- 4 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 6 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。5層より暗い。
- 7 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。6層より明るい。
- 8 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。7層より暗い。
- 9 炭化物層
- 10 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。
- 11 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 12 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。11層より暗い。
- 13 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。



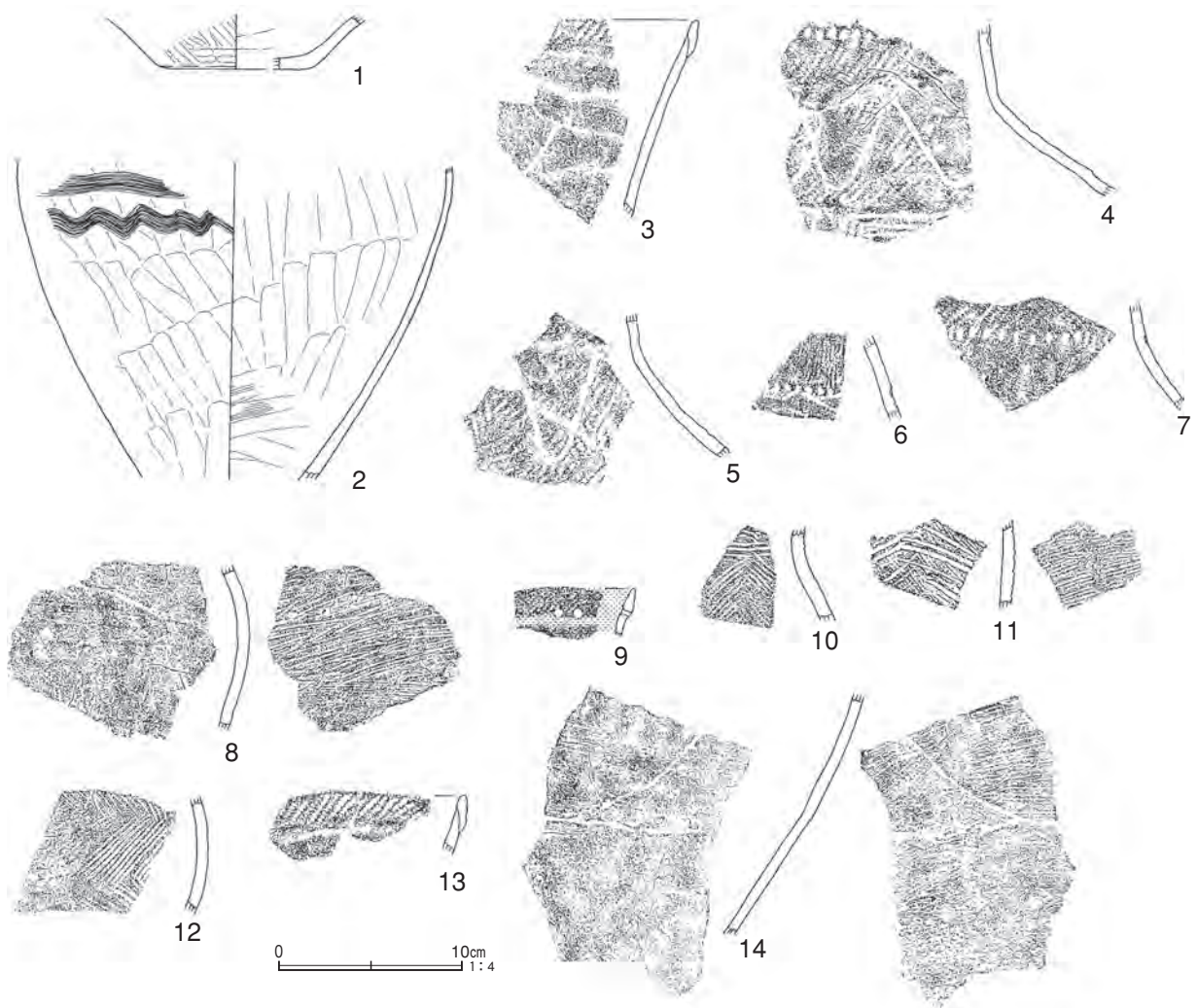
第26図 第8号住居跡

1・3～8は壺。1は底部。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。壺としたが、甕の可能性もある。3は口縁部から頸部までの破片。肥厚した口縁部にLR単節縄文が施文され、頸部は無文で縦・斜位のヘラミガキが施されている。内面調整は横位のヘラミガキである。4・5は頸部から肩部までの破片であり、同一個体。頸部は半円形の刺突列とLR単節縄文が施文され、肩部はやや丸みを帯びた鋸歯文が描かれ、下にLR単節縄文が粗雑に充填されている。鋸歯文下は重四角文が描かれている。内面調整はともに横位のヘラナデである。6・7は肩部から胴上部までの破片。LR単節縄文と半円形の刺突列間に弱い段を持つ。6の縄文は縄目が縦位に施文されている。刺突列下は6が波状沈線、7は無文で横・斜位のヘラミガキ調整である。内面調整は6が横・斜位、7が横位のヘラナデである。8は胴部中段の破片。内外面ともにハケメ調整である。

9は広口壺の口縁部から頸部までの破片。内外面ともに横位のヘラミガキと赤彩が施されている。口縁部と頸部の境に2個一対の孔が設けられている。

2・10～14は甕。2・10～12は櫛歯状工具で文様が施文されている。2は胴部中段から下部までの部位。胴部中段から底部に向かってすぼまる。文様は胴部中段に6本一単位の櫛歯状工具による直線文と波状文がやや間隔を空けて巡る。調整は内外面ともにヘラナデであるが、胴下部内面ではハケメもみられた。10～12は胴部に羽状文が描かれた破片。10・11は縦位、12は横位に描かれている。単位は10・12が4本、11は2本である。10は頸部に同一工具による波状文と直線文が巡る。10・11は羽状文下のハケメ調整が残る。内面調整は10・12が横・斜位のヘラナデ、11が斜位のハケメである。13は縄文が施文された口縁部から頸部までの破片。肥厚した口縁部にLR単節縄文が施文され、頸部の無文部と内面は横位のヘラナデが施されている。14は無文の胴下部片。調整は外面上位がハケメ、下位は斜位のヘラミガキであり、内面は横・斜位のハケメである。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。



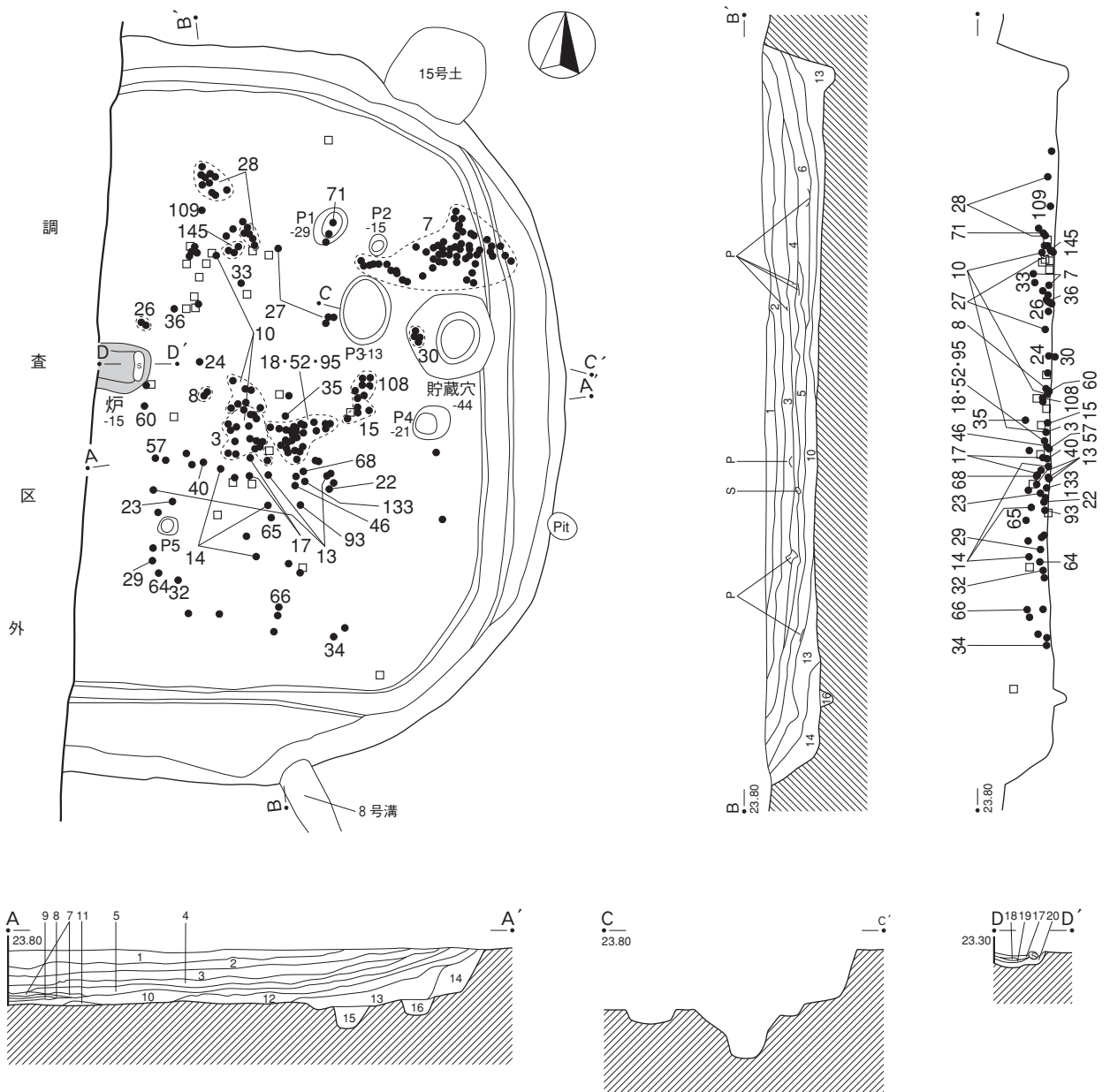
第27図 第8号住居跡出土遺物

第9表 第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(3.0)	(8.4)	ABDIK	浅黄色	B	底部 25%	内外面やや磨耗。
2	弥生土器 甕	—	(17.3)	—	ABHIKN	暗褐色	B	胴部 30%	
3	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
4	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄色	B	頸～肩部片	No5 と同一個体。内面磨耗顕著。
5	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	灰黄色	B	頸～肩部片	No4 と同一個体。
6	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKMN	灰黄色	B	肩～胴上片	内外面やや磨耗。
7	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	肩～胴上片	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	外面磨耗顕著。
9	弥生土器 広口壺	—	—	—	ABDHKN	浅黄色	B	口～頸部片	2個一対孔有。内外面赤彩。磨耗顕著。
10	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
11	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIN	褐灰色	B	胴中段片	
12	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	内面やや磨耗。
13	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHIK	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
14	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	内外面所々磨耗。

第9号住居跡 (第28図)

第2次調査での検出であり、58・59-149・150グリッドに位置する。北東隅で15号土坑に壁の上部を切られている。南側では8号溝跡と重複し、本住居跡の覆土断面に痕跡が認められなかったことから、本住居跡が新しいとも思われたが、新旧関係については不明と言わざるを得ない。また東壁中央付近で



第9号住居跡

土層説明 (AA' BB' DD')

- |                                      |                                      |
|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 青黑色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。      | 11 灰白色土：粘土質。炭化物多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。     |
| 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。       | 12 灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。 |
| 3 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量含む。        | 13 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。      |
| 4 灰白色土：粘土質。暗灰色土、酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。 | 14 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。     |
| 5 暗灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。 | 15 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。      |
| 6 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。  | 16 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒、炭化物少量含む。埋戻土。    |
| 7 灰色土：粘土質。灰白色土多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。      | 17 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量含む。        |
| 8 炭化物層                               | 18 炭化物層                              |
| 9 灰白色土：粘土質。炭化物多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。      | 19 焼土層                               |
| 10 黒色土：粘土質。炭化物、灰白色粒多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。 | 20 灰色土：粘土質。焼土粒多量、酸化鉄少量含む。            |

● = 土器 □ = 石器・礫 0 2m 1:60

第28図 第9号住居跡



は時期不明のピットと重複するが、これについても新旧関係は不明である。西側は調査区外にある。

本住居跡も7号住居跡と同じく拡張が行われているが、北壁を利用して東側と南側に拡張されている。規模は東西が不明であるが、南北は拡張前が5.97mを測り、拡張後は6.63mとやや大型になる。平面プランは拡張前が隅丸長方形であるが、拡張後は楕円形を呈すると思われる。主軸方向はN-2°-Wを指し、ほぼ東西南北に軸が合う。確認面からの深さは0.5m前後とやや深く、床面はほぼ平坦であった。覆土は16層(1~16層)と多く、中央付近では下層から炭化物層が確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央からやや北寄りに位置する。西側は調査区外にあるため長軸が不明であるが、短軸は0.46mを測り、楕円形を呈すると思われる。床面からの深さは0.15mを測る。覆土は4層(17~20層)確認された。東側に被熱した川原石が据えられていた。

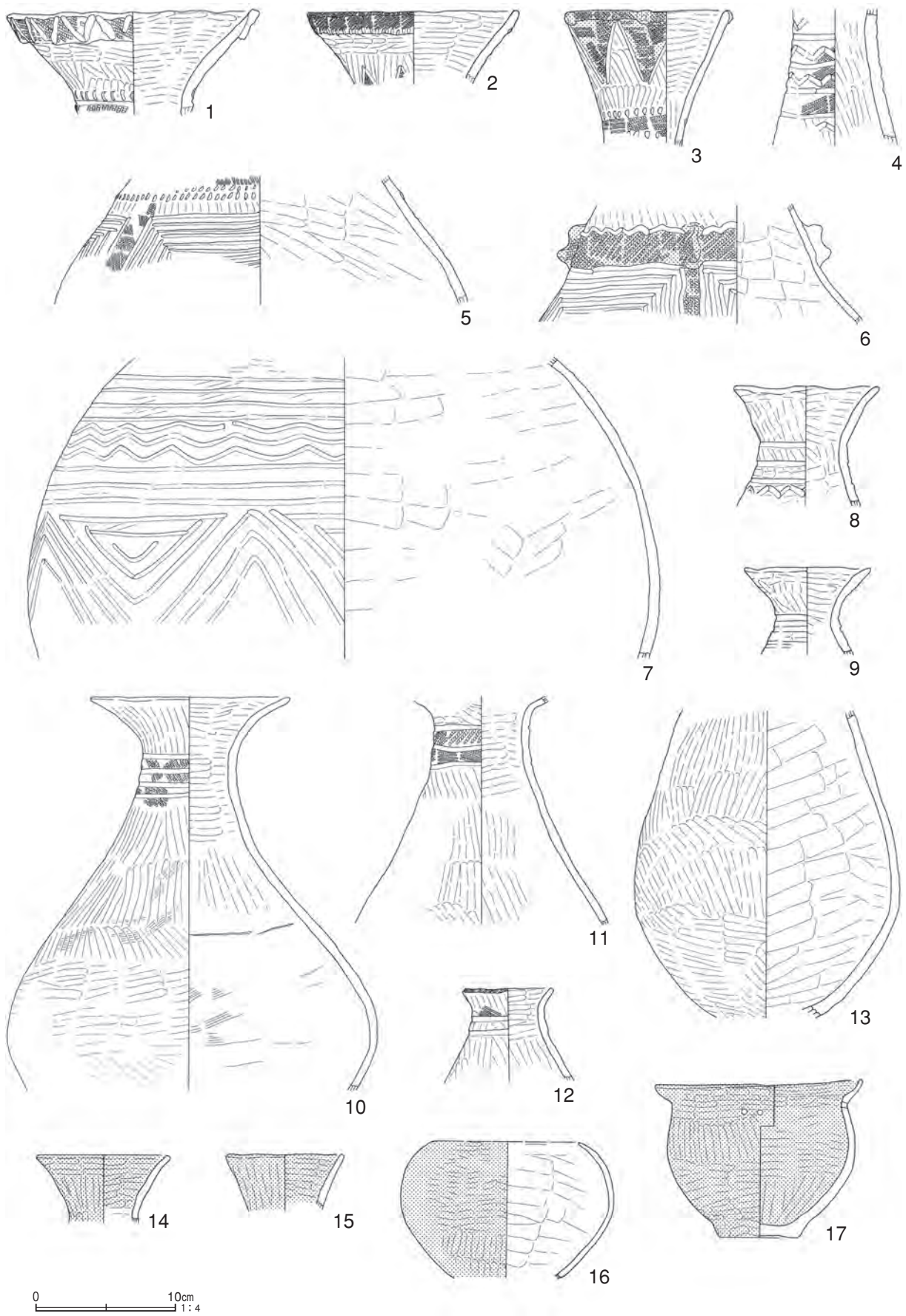
ピットは5基検出された。P1のみその位置から支柱穴、P4は出入口に関連するものと思われる。その他については、性格・用途不明である。

壁溝は拡張前のみ検出された範囲内を全周する。幅は拡張前の南側と北東隅付近が0.15m前後、その他は0.35m前後を測る。床面からの深さは拡張前が一部0.2mを測るが、0.1m前後が主体となる。

貯蔵穴は拡張前の東側壁溝に接して位置する。径0.8m前後の不整形を呈し、床面からの深さは0.44mを測る。覆土は図示できなかったが、炭化物を少量含んでいた。

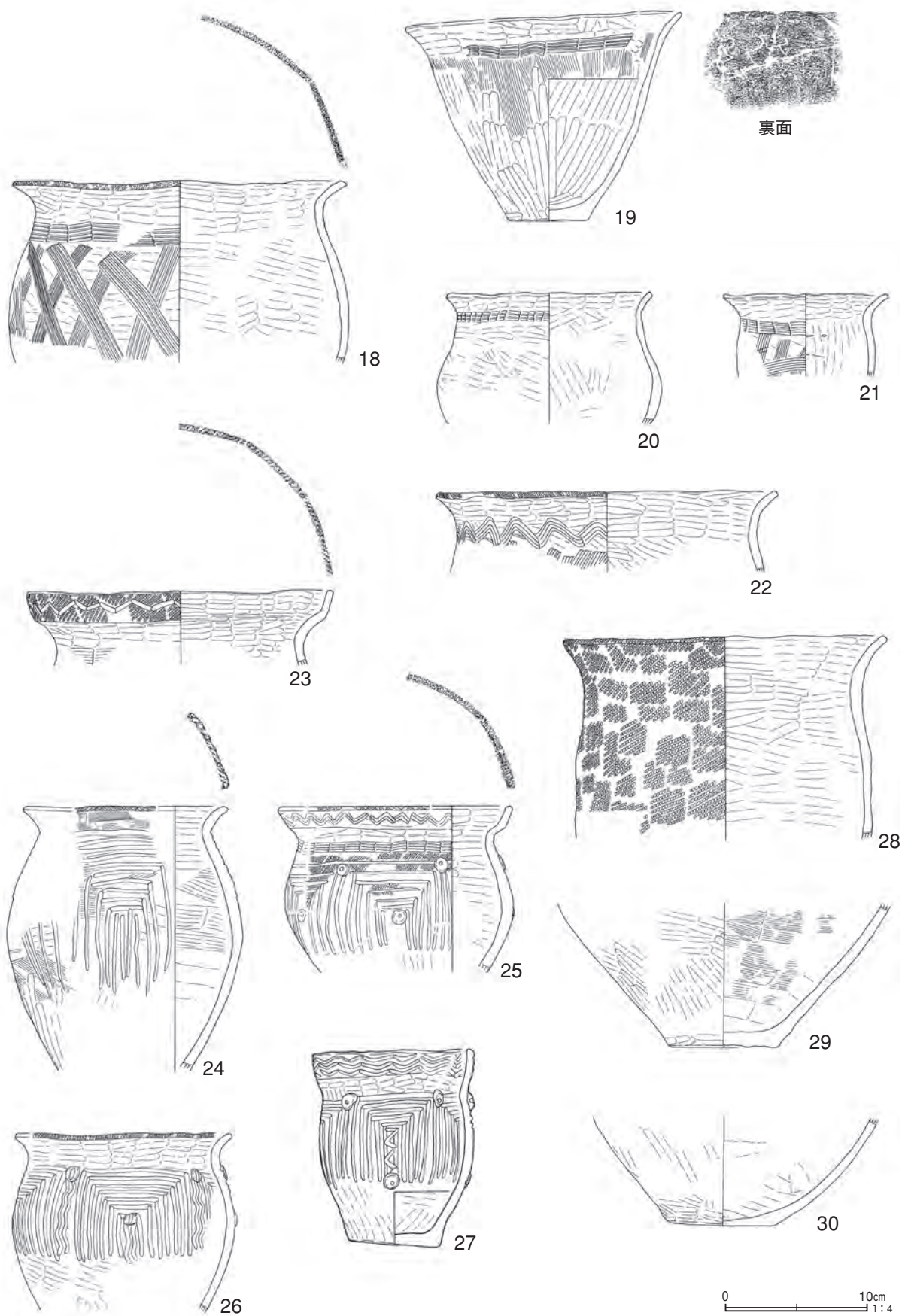
出土遺物(第29~35図)は、弥生土器壺(1~15・29~50・75~134)、無頸壺(16)、広口壺(17・51・135)、甕(18~28・52~66・136~199)、甌(67)、高坏(68~74・200・201)、打製石斧(202)、磨石(203~205)があり、大量の遺物が検出された。覆土からの出土が多いが、床面直上の遺物は拡張前段階の範囲内に限られ、炉跡や貯蔵穴の周囲から比較的残存状態の良いものが多く検出された。

1~15・29~50・75~134は壺。1~15は完形ではないが、比較的残存状態が良い。1~3は口縁部から頸部までの部位。1は肥厚した口縁部が逆ハの字に開き、頸部はほぼ直立する。文様は口縁部がRL単節縄文地に太い沈線で山形状の文様が描かれ、頸部は爪形状を呈する刺突列と平行沈線下にRL単節縄文が施文されている。口縁部以下は無文で内面とともにヘラミガキが施されている。2も口縁部が逆ハの字に開くが、端部がやや受け口状を呈する。文様は端部も含めLR単節縄文が施文された口縁部下に半円形の刺突列が巡る。以下は無文部を挟んで鋸歯文が描かれており、鋸歯文下にLR単節縄文が充填されている。頸部の無文部と内面はヘラミガキ調整である。3は口縁部から頸部まで開きが小さい。文様は口縁端部に突起が等間隔に6つ付き、突起下に頂点をそろえた鋸歯文が描かれている。鋸歯文上はRL単節縄文が充填され、突起も含め赤彩が施されている。鋸歯文下は無文部を挟んで半円形の刺突列がやや間隔を空けて2列巡り、間に縄目を横にしたRL単節縄文が施文されている。外面無文部と内面はヘラミガキ調整である。4は細長い頸部。平行沈線が等間隔に巡り、沈線間に一部を除いて山形状の沈線と無節Lが施文されている。内外面の調整はヘラミガキである。5・6は肩部から胴上部までの部位であり、境に段を持つ。5は段上にLR単節縄文、下に半円形の刺突列が2列巡る。以下は重四角文が描かれ、重四角文間はLR単節縄文が充填されている。調整は外面無文部がヘラミガキ、内面はヘラナデである。6は段上に波状沈線とLR単節縄文が施文され、縦長の突起が等間隔に4つ付く。段下は重四角文が描かれ、重四角文間はLR単節縄文が充填されている。段上の縄文と突起、段下の重四角文

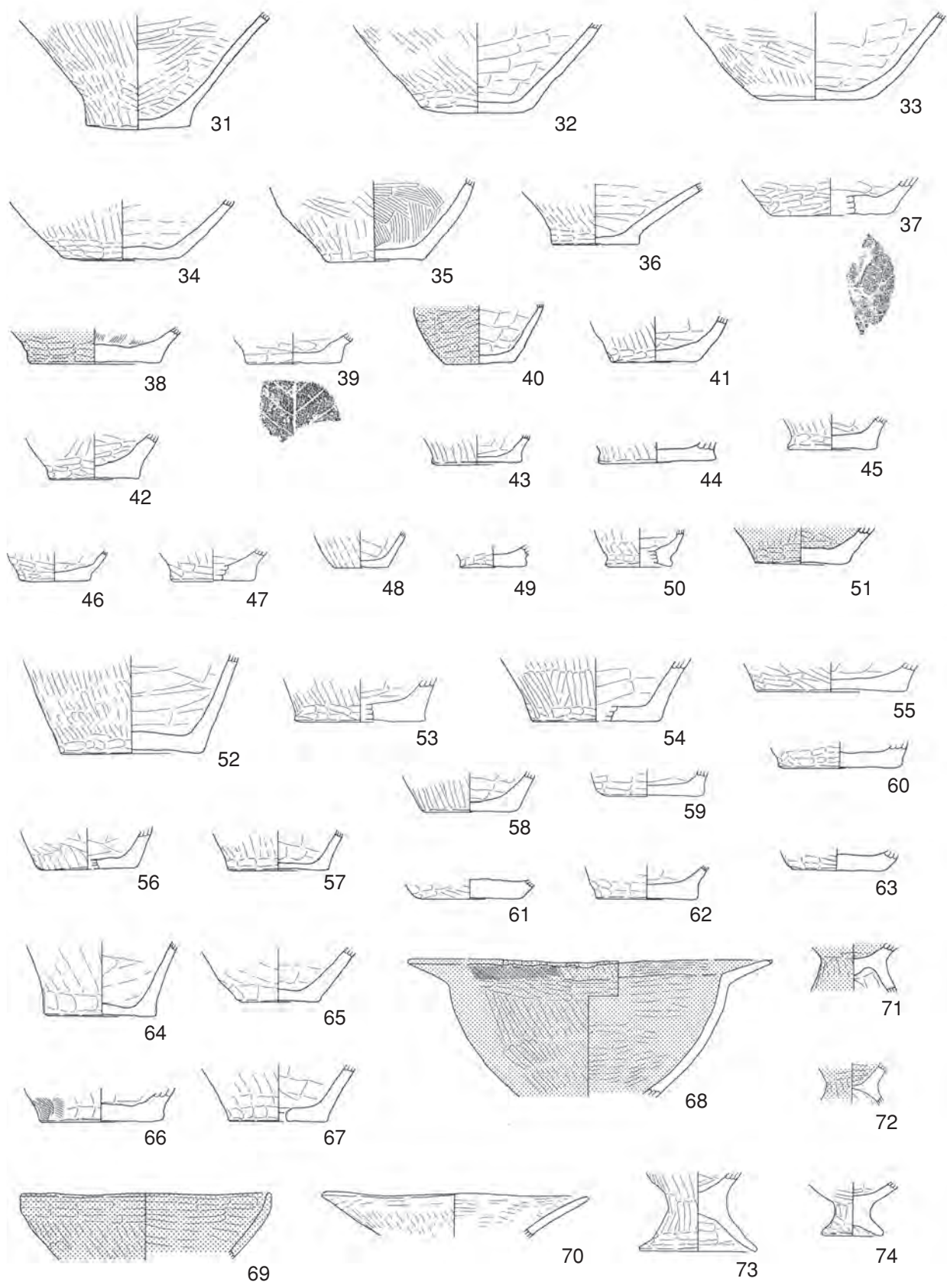


第 29 图 第 9 号住居跡出土遺物 (1)





第30图 第9号住居跡出土遺物(2)



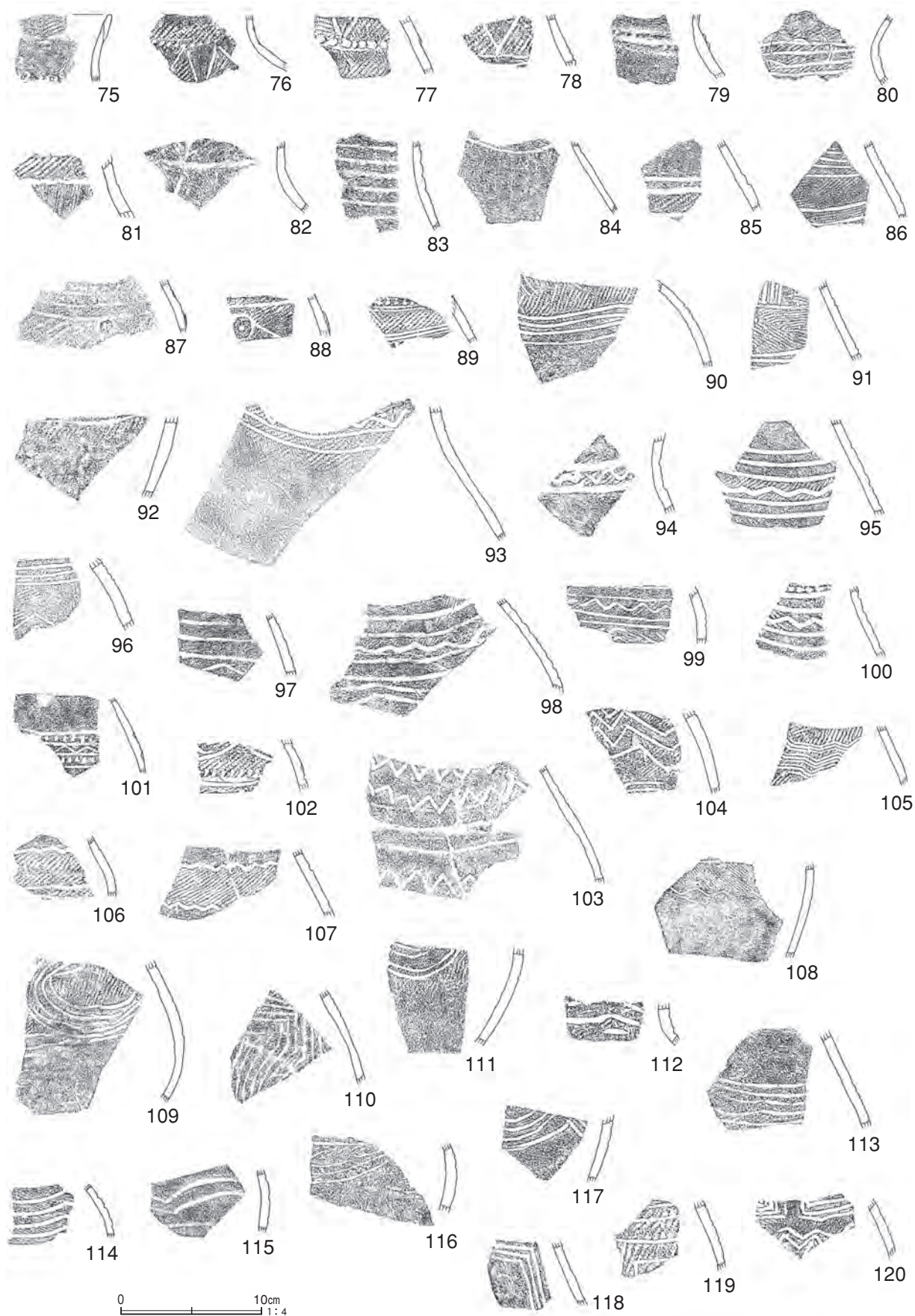
0 10cm 1:4

第 31 图 第 9 号住居跡出土遺物 (3)



間の縄文は赤彩が施されている。内面調整はヘラナデである。7は球形を呈する胴上部から中段下までの部位。文様がほぼ全面にみられ、上下に巡る3条の平行沈線間に3条の波状沈線が巡り、以下は重三角文が描かれている。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。8・9は口縁部から頸部までの部位。器形と文様が似ている。口縁部はやや外反し、頸部は上位がすぼまり、下位は肩部に向かって広がる。文様は頸部のみ描かれている。ともに平行沈線が等間隔に複数巡るが、8は平行沈線下に山形状の沈線、9は最下の沈線が2本一単位の櫛歯状工具による直線文で描かれている。外面無文部と内面の調整はヘラミガキである。10は口縁部から胴部中段下までの部位。残存状態が良好である。口縁部が大きく外反し、頸部はほぼ直立する。肩部以下は無花果状を呈し、最大径を胴部中段下に持つ。文様は頸部にのみ描かれ、4条の平行沈線間にR L単節縄文が充填されるが、最下沈線下にはみ出ている。外面無文部の調整はヘラミガキであるが、胴上部はヘラミガキ前のハケメが一部残る。内面調整は口縁部から肩部までがヘラミガキ、以下は磨耗が著しいため図示できなかったが、ハケメ調整である。胴上部内面に輪積痕が残る。11は頸部から胴上部までの部位。器形・文様・調整が10に似るが、文様は頸部に施文される平行沈線が3条、沈線間に施文される縄文は上がL R単節縄文、下が無節Rであり、やや異なる。12は口縁部から肩部までの部位。口縁部から頸部までが短く、口縁部は開きが小さい。頸部はほぼ直立し、以下緩やかに広がる。文様は口縁端部にR L単節縄文が施文され、頸部は平行沈線が2条巡る。沈線上に一部R L単節縄文が施文されている。外面無文部及び内面はヘラミガキ調整である。13は肩部から胴下部までの部位。特異な器形をしており、幅広の肩部から胴部中段まであまり膨らまず、胴下部は底部に向かって内湾する。無文で外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。14・15は口縁部から頸部までの部位で内外面ともにヘラミガキと赤彩が施されている。14は口縁部がやや外反し、15は逆ハの字に開く。29～50は胴下部から底部までの部位。壺としたが、甕の可能性もある。外面調整はすべてヘラミガキである。内面はヘラナデが主体となるが、29・35・38はハケメ、31はヘラミガキ調整である。37・39は底面に木葉痕がみられた。38・40は外面に赤彩が施されている。

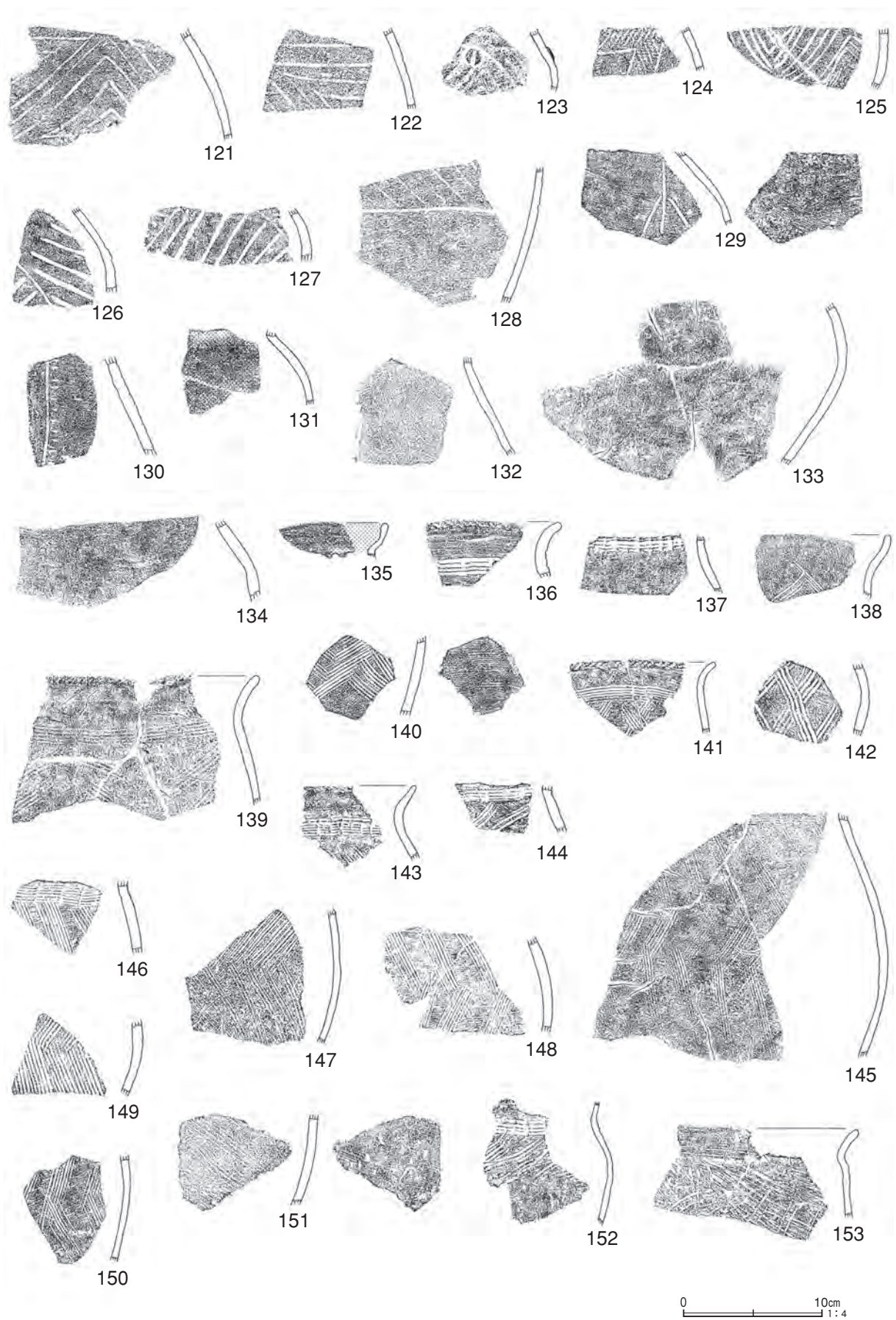
75は口縁部から頸部までの破片。肥厚した口縁部にL R単節縄文が施文され、以下は無文部を挟んで半円形の刺突列が巡る。外面無文部と内面はヘラミガキ調整であり、前者は縦位、後者は横位に施されている。76～78は鋸歯文が描かれた破片。すべて鋸歯文下にL R単節縄文が充填されている。76は上に半円形の刺突列が2列巡り、間に赤彩の施されたL R単節縄文が施文されている。無文部外面の調整は横位のヘラミガキである。77は下に段が設けられており、円形の刺突列が巡る。刺突列下はL R単節縄文が施文されている。78は下に平行沈線が巡る。76～78の内面調整は、76が横・斜位のヘラミガキ、77・78が横位のヘラナデである。76は内面に輪積痕が残る。79は2条の突帯が巡る肩部片。突帯上下は無文で横位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデ調整である。80～92は平行沈線ないし櫛歯状工具による直線文が巡る破片。80はL R単節縄文地に平行沈線が複数巡る。上位は無文で斜位のヘラミガキ調整である。81・82はL R単節縄文下に1条の沈線が巡る。以下は無文で81は斜位のヘラミガキが施されるが、全面にハケメが残る。82は横位のヘラミガキ調整である。83は等間隔に平行沈線が複数巡る。84は沈線下が無文で縦位のヘラミガキ調整である。85は横・斜位のヘラミガキが施された無文部下に平行沈線が複数巡り、間にL R単節縄文が充填されている。86はL R単節縄文地に間隔を空けて平行沈線が上下に巡る。87は分かりづらいが、等間隔に平行沈線が巡り、上2条の沈線間に半円形の刺突列、下にR L



第 32 图 第 9 号住居跡出土遺物 (4)



単節縄文が充填されている。以下は斜位の沈線が複数描かれ、ボタン状貼付文が付く。88はLR単節縄文地に沈線が1条巡る。ボタン状貼付文が付き、脇に斜位の沈線が走る。89は2本一単位の櫛歯状工具による直線文が上下に巡り、間にLR単節縄文が充填されている。上には半円形の刺突列が2列巡る。90はRL単節縄文下に平行沈線が4条巡る。以下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整である。91は垂下する複数の沈線下に間隔を空けて平行沈線が巡り、間にRL単節縄文が充填されている。92は沈線下にLR単節縄文が施文され、以下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整である。80～92の内面調整は81・91が斜位、82・83・86が横・斜位、その他は横位のヘラナデである。93～108は平行沈線と波状ないし山形状の沈線が描かれた破片。波状沈線が描かれた平行沈線間は縄文が施文される傾向にある。93はLR単節縄文地に波状沈線と平行沈線2条が巡る。以下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整である。94は沈線が太い。平行沈線間に波状沈線とLR単節縄文が施文されている。上下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整である。95はやや太い平行沈線が複数巡る。波状沈線が描かれた平行沈線間にLR単節縄文が施文されている。外面無文部は斜位のヘラミガキ調整である。96は複数の平行沈線と山形状の沈線間にRL単節縄文が施文されている。97は複数の平行沈線下に山形状の沈線が巡る。98・99は波状沈線が描かれた平行沈線間にLR単節縄文が施文されている。下位は97に似た山形状の沈線が巡る。100はRL単節縄文地に複数の平行沈線と波状沈線が巡り、上位に半円形の刺突列が刻まれている。101は無文部下に平行沈線が4条巡り、中央の沈線間に波状沈線、上下の沈線間に半円形の刺突列が施文されている。無文部は横位のヘラミガキ調整である。102は山形状の沈線下にLR単節縄文が施文され、段を挟んで下に半円形の刺突列と平行沈線が巡る。103は複数の平行沈線を挟んで上下、104は平行沈線上に山形状の沈線が複数巡る。103は磨耗して分かりづらいが、平行沈線間にRL単節縄文、104は地文にLR単節縄文が施文されている。105はLR単節縄文地に3本一単位の櫛歯状工具による波状文が複数巡る。106～108は間隔の広い平行沈線及び波状沈線間に縄文が施文されている。縄文は106・107がLR、108がRL単節縄文である。106は下にはみ出ている。106は上、107は上下、108は下が無文で106は横・斜位、107は横位、108は縦位のヘラミガキ調整である。93～108の内面調整は、102・106が斜位、95・96・99・101・107が横・斜位、その他は横位のヘラナデである。109～111はフラスコ文が描かれた破片。109はフラスコ文内外にLR単節縄文が充填され、下に平行沈線が巡る。以下は無文で横位のヘラナデ後、部分的にヘラミガキが施されている。111はフラスコ文外にLR単節縄文が施文され、以下は無文で斜位のヘラミガキ調整である。109～111の内面調整は、109・110が横位、111が斜位のヘラナデである。112～117は弧線文が描かれた破片。112は無節L地に描かれ、沈線が太い。下は横位の短沈線が描かれている。113は平行沈線間に2条描かれており、LR単節縄文も施文されている。沈線が細い。上位は無文で斜位のヘラミガキ調整である。114は複数の弧線文が描かれており、下にハケメ調整が残る。115は弧線文下に平行沈線が巡る。116は沈線が細い。3条の弧線文上に平行沈線が巡り、間に斜位の短沈線が充填されている。以下は無文で斜位のヘラミガキ調整である。117は弧線文下が無文で斜位のヘラミガキ調整である。112～117の内面調整は、112～115が横位、116が横・斜位、117が斜位のヘラナデである。118～120は重四角文が描かれた破片。118は区画内が無文である。119はLR単節縄文地に描かれている。120は上位に重四角文が描かれ、下は波状ないし山形状の沈線が巡る。118～120の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。121～125は重三角文が描かれた破片。121・122は沈線の間隔が広い。123は頂点にボタン状貼付文が付く。124は



第 33 图 第 9 号住居跡出土遺物 (5)

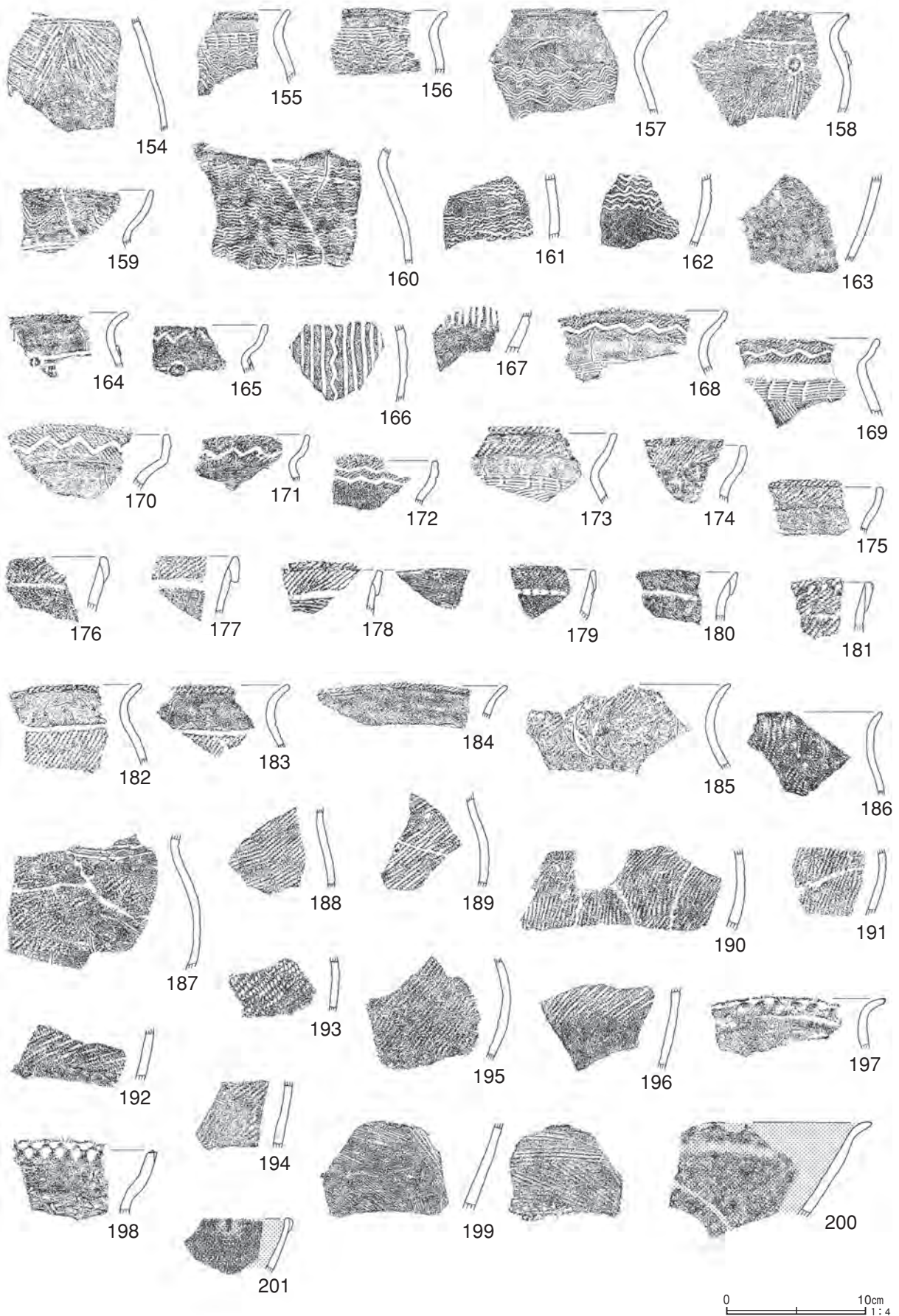


沈線間にRL単節縄文が充填されている。125は沈線の間隔が一定せず、粗雑に施文されている。121～125の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。126・127は複合鋸歯文が描かれた胴上部片で同一個体。沈線が太い。内面調整はともに横位のヘラナデである。128は胴部中段から下部までの破片。胴部中段に巡る平行沈線上に斜位の沈線が複数描かれており、下部は無文で横位のヘラミガキ調整である。内面調整は横・斜位のヘラナデである。内面に輪積痕が残る。129は鳥の足跡状の文様が描かれた胴上部片。無文部の調整は縦位のヘラミガキであるが、一部にハケメが残る。内面調整は斜位のハケメである。130は沈線が垂下する胴上部片。沈線脇は半円形の刺突列が伴う。無文部は横位のヘラミガキ調整である。内面調整は斜位のヘラナデである。131～134は無文の破片。131は横位のヘラミガキと赤彩、132は斜位のハケメ、133は横・斜位のハケメ調整後、胴上部が横・斜位、胴下部は所々に斜位のヘラミガキ、134は横位のハケメが施されている。131～134の内面調整は131が横・斜位、132・134が横位、133が斜位のヘラナデである。

16は残存状態が良くないため定かではないが、無頸壺とした。ややつまった球形を呈する。底部を欠く。無文でヘラミガキと赤彩が施されている。内面調整はヘラナデである。

17・51・135は広口壺。17は残存状態が良好である。最大径を持つ口縁部がやや受け口状を呈し、頸部がすぼまる。胴部は球形を呈するが、膨らみが小さい。51は底部、135は口縁部から頸部までの破片である。すべて内外面ともにヘラミガキと赤彩が施されている。135のヘラミガキは横位に施されている。17・135は頸部に孔が設けられており、17は2個一対で対角線上に2つ設けられている。

18～28・52～66・136～199は甕。18～28は残存状態が比較的良好である。口縁部から胴部中段までのものが多い。文様は櫛歯状工具のよる文様とコの字重ね文が多く、28のみ縄文である。18は口縁部が大きく開く。頸部はほぼ直立し、胴部が球形を呈する。口径と胴部中段の径はほぼ同じであるが、最大径は後者に持つ。文様は口縁端部にオオバコによる擬縄文、頸部は5本一単位の簾状文、胴部は同一工具による斜格子文が施文されている。内外面の調整はヘラミガキである。19は特異な器形の甕。頸部がやや括れるが、口縁部から底部まで逆ハの字状を呈する。文様は頸部にのみ描かれるが、対角線上に4本一単位の簾状文が7つと垂下する短い波状沈線が3条描かれているのみであり、両者間に文様は施文されていない。調整は内外面ともにヘラミガキが主体となるが、胴上部外面にハケメが残る。20は口縁部の開きが小さく、頸部から胴上部までほぼ直立し、胴部中段で膨らむ。最大径を胴部中段に持つ。文様は頸部に3本一単位の簾状文が巡るのみである。内外面の調整はヘラミガキである。21は小型で最大径を持つ口縁部がやや外反し、頸部から胴部中段まで直立に近い。文様は頸部に6本一単位の簾状文、胴部に同一工具によるやや崩れた斜格子文が描かれている。内外面の調整はヘラミガキである。胴部内面に輪積痕が残る。22は口縁部が緩やかに開く。頸部はほぼ直立し、胴上部は緩やかに膨らむ。文様は口縁端部にRL単節縄文、頸部に4本一単位の波状文、胴上部は同一工具による横位の羽状文が施文されている。内外面の調整はヘラミガキである。23は口縁部が受け口状を呈する。文様は端部も含め口縁部にLR単節縄文と山形状の沈線、頸部に単位不明の簾状文が施文されている。内外面の調整はヘラミガキである。24～27は胴部にコの字重ね文が描かれている。24は口縁部がやや外反する。頸部が括れ、胴部は長胴化しており、中段に最大径を持つ。器壁が厚い。文様は口縁端部に無節Lが施文される。外面の調整は頸部から胴部中段までがハケメ、胴下部がヘラミガキ、内面は口縁部から胴上部までがヘラ

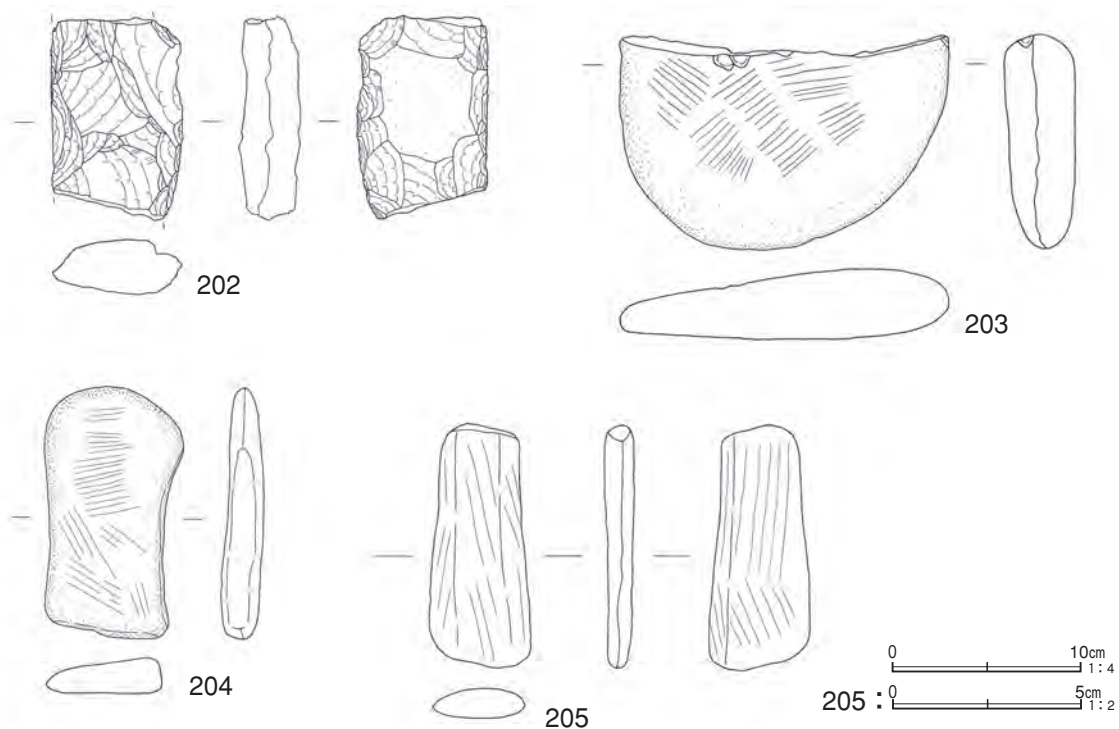


第 34 图 第 9 号住居跡出土遺物 (6)



ミガキ、以下はハケメとヘラナデである。25は口縁部が受け口状、頸部から胴部はややつまった球形を呈する。口径と胴部中段の径はほとんど変わらないが、最大径は前者に持つ。文様は口縁端部がカナムグラによる擬縄文、口縁部が2本一単位の波状文、頸部が4本一単位の簾状文が施文されている。胴部のコの字重ね文下は、口縁端部と同じカナムグラによる擬縄文が地文として施文され、ボタン状貼付文が付く。内外面の調整はヘラミガキである。26は口縁部がやや外反し、頸部がすぼまる。胴部は球形を呈するが、膨らみが小さい。口径と胴部中段の径はほとんど変わらないが、最大径は後者に持つ。文様は胴部のコの字重ね文以外では、口縁端部にL R単節縄文が施文されているのみである。コの字重ね文間及び中央には波状沈線が垂下し、上端にボタン状貼付文が付く。内面は図示できなかったが、外面無文部とともにヘラミガキ調整である。27は小型で口縁部がやや受け口状を呈する。頸部の括れが弱く、胴部もあまり膨らまない。最大径を口径に持つ。文様は口縁部に波状沈線が3条巡り、胴部のコの字重ね文はボタン状貼付文が付き、中央に波状沈線が垂下する。内外面の調整はヘラミガキである。28はL R単節縄文が全面に施文されている。口縁部が緩やかに開き、頸部以下はほぼ直立に近い。内面調整はヘラミガキである。52～66は胴下部から底部までの部位。52～63は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。甕としたが、壺の可能性もある。64～66は内外面ともにヘラナデが主体となるが、66は外面にハケメもみられた。

136～163は櫛歯状工具で文様が施文された破片。櫛歯の単位は4～5本が多い。136・137は口縁部から頸部までの破片で、頸部に簾状文が巡る。136は口縁端部にL R単節縄文が施文されている。口縁部は無文で横位のヘラナデ調整である。137は簾状文下が無文で横・斜位のヘラナデ調整である。136・137内面調整は、136が横位、137は頸部が横位、胴上部が斜位のヘラナデである。138～140は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。138は口縁部が無文で横位のヘラナデ調整である。139は口縁端部にL R単節縄文、頸部に同一工具による直線文が施文されている。無文部は口縁部が横位のヘラナデ、胴部が横・斜位のハケメ調整である。140は羽状文下に斜位のハケメ調整が残る。138～140の内面調整は、138が横位のヘラナデ、139は口縁部が横位のヘラナデ、頸部以下が斜位のハケメとヘラナデ、140は横位のハケメである。141・142は胴部に斜格子文が描かれた破片。141は口縁端部にL R単節縄文、頸部に同一工具による簾状文が施文されている。無文部は横位のヘラナデ調整が主体となるが、一部に斜位のハケメが残る。142は無文部が斜位のヘラナデ調整である。141・142の内面調整は、141が横位、142が横・斜位のヘラナデである。143～151は胴部に横位の羽状文が描かれた破片。143～146は頸部に同一工具による簾状文が巡り、143は口縁端部にL R単節縄文が施文されている。143の口縁部は無文で横位のヘラナデ、144は胴部に斜位、146は横位のハケメが残る。143～151の内面調整は、143・146・149が横位、145・148・150は横・斜位、144・147は斜位のヘラナデ、151は斜位のハケメである。146は頸部内面に輪積痕が残る。152～154は胴部に不規則な文様が描かれた破片。152は斜位に描かれているが、粗雑である。横位の羽状文を省略したものか。頸部には同一工具による簾状文が巡る。胴下部は無文で横位のヘラナデ調整である。153は斜格子文状を呈するが、極めて粗雑である。口縁部は無文で横位のハケメ調整である。154は縦位の羽状文状を呈するが、153と同じく極めて粗雑である。頸部は同一工具による直線文が巡る。152～154の内面調整は、152は頸部が横位、胴部が横・斜位、153は口縁部が横位、頸部以下が斜位、154は横・斜位のヘラナデである。155～163は波状文が描かれた破片。



第 35 図 第 9 号住居跡出土遺物 (7)

第 10 表 第 9 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	(18.0)	(7.5)	—	ABEHIKN	にぶい褐色	B	口~頸 25%	
2	弥生土器 壺	(15.2)	(5.2)	—	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	口~頸 20%	
3	弥生土器 壺	12.0	(9.65)	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口~頸 100%	突起 6 個有。外面縄文施文部赤彩、大半剥落。
4	弥生土器 壺	—	(9.7)	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	頸部 40%	内外面磨耗顕著。
5	弥生土器 壺	—	(9.1)	—	ABIKN	黒色	B	肩~胴 25%	内外面やや磨耗。
6	弥生土器 壺	—	(8.5)	—	ADHIK	灰黄褐色	B	肩~胴 90%	縄文施文部赤彩。突起 4 個有。
7	弥生土器 壺	—	(21.65)	—	ABDHKN	褐灰色	B	胴部 60%	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 壺	(10.4)	(8.5)	—	ABEHIJN	橙色	B	口~頸 70%	内外面磨耗顕著。
9	弥生土器 壺	(9.0)	(6.2)	—	ABDN	浅黄橙色	B	口~頸 30%	内外面磨耗顕著。
10	弥生土器 壺	14.3	(28.2)	—	ABEJKN	橙色	B	口~胴 70%	胴上部内面輪積痕有。内外面所々磨耗。
11	弥生土器 壺	—	(16.4)	—	ABGIJKN	灰黄褐色	B	頸~胴 30%	内外面所々磨耗。
12	弥生土器 壺	(6.5)	(6.7)	—	ABDEGN	にぶい橙色	B	口~肩 25%	
13	弥生土器 壺	—	(22.1)	—	ABDGIJKN	にぶい黄色	B	肩~胴 40%	外面やや磨耗。
14	弥生土器 壺	9.6	(4.9)	—	ABHIKN	赤色	B	口~頸 40%	内外面赤彩、大半剥落。
15	弥生土器 壺	(8.5)	(4.05)	—	ABHKN	にぶい黄橙色	B	口縁部 25%	内外面赤彩、大半剥落。
16	弥生土器無頸壺	(10.0)	(9.8)	—	ABEHIK	明赤褐色	B	口~胴 30%	外面赤彩、大半剥落。内外面磨耗顕著。
17	弥生土器広口壺	(14.8)	11.35	5.7	ABHKN	橙色	B	90%	2 個一対孔 2 箇所有。内外面赤彩、ほぼ剥落。
18	弥生土器 甕	(23.3)	(12.85)	—	ABDEHKN	にぶい黄褐色	B	口~胴 70%	内外面所々磨耗。
19	弥生土器 甕	19.4	14.7	5.7	ABGHKN	橙色	B	80%	内外面所々磨耗。
20	弥生土器 甕	(14.4)	(9.2)	—	ABHJKN	褐灰色	B	口~胴 40%	内外面磨耗顕著。
21	弥生土器 甕	(11.6)	(5.8)	—	ABCIK	浅黄橙色	B	口~胴 20%	胴上部内面輪積痕有。
22	弥生土器 甕	(24.0)	(5.7)	—	AGIKN	黒褐色	B	口~胴 35%	
23	弥生土器 甕	(21.4)	(5.3)	—	ABHIK	黒褐色	B	口~頸 40%	
24	弥生土器 甕	(14.4)	(18.65)	—	ABGH	褐灰色	B	口~胴 20%	内外面所々磨耗。
25	弥生土器 甕	(16.4)	(11.7)	—	ABDHKN	明赤褐色	B	口~胴 45%	内外面磨耗顕著。
26	弥生土器 甕	(15.2)	(12.6)	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	口~胴 30%	
27	弥生土器 甕	11.3	13.9	6.2	ABIKN	灰褐色	B	80%	内外面磨耗顕著。
28	弥生土器 甕	22.6	(14.4)	—	ABHIN	灰黄褐色	B	口~胴 80%	内外面所々磨耗。
29	弥生土器 壺	—	(10.15)	7.7	ABDEKN	にぶい黄橙色	B	胴~底 80%	内外面磨耗顕著。
30	弥生土器 壺	—	(7.7)	7.6	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴~底 70%	内外面磨耗顕著。
31	弥生土器 壺	—	(7.85)	7.0	ADIKN	黒褐色	B	胴~底 40%	
32	弥生土器 壺	—	(6.15)	(7.7)	ABDEHIKN	にぶい橙色	B	胴~底 20%	外面磨耗顕著。
33	弥生土器 壺	—	(5.9)	(8.4)	ABDEGHIJKMN	灰黄褐色	B	胴~底 45%	内外面磨耗顕著。



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
34	弥生土器 壺	—	(4.1)	(7.9)	ABDEHIMN	褐灰色	B	胴～底 45%	内外面磨耗顕著。
35	弥生土器 壺	—	(5.5)	6.8	ABDHIN	黒褐色	B	胴～底 75%	
36	弥生土器 壺	—	(4.2)	5.9	AHEIKN	橙色	B	胴～底 70%	内外面磨耗顕著。
37	弥生土器 壺	—	(2.5)	(8.3)	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	底部 30%	底面木葉痕有。外面磨耗顕著。
38	弥生土器 壺	—	(2.5)	9.0	ABIJKN	褐灰色	B	底部 95%	外面赤彩、大半剥落。
39	弥生土器 壺	—	(2.1)	(6.4)	ABDIKN	灰黄褐色	B	底部 25%	底面木葉痕有。
40	弥生土器 壺	—	(4.0)	4.9	ABHIK	明褐色	B	胴～底 100%	外面赤彩、大半剥落。
41	弥生土器 壺	—	(3.1)	5.9	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	底部 100%	
42	弥生土器 壺	—	(3.15)	6.1	ABHIKN	黒褐色	B	底部 100%	
43	弥生土器 壺	—	(2.0)	6.1	ABHIKN	黒褐色	B	底部 100%	
44	弥生土器 壺	—	(1.25)	8.0	ABHIKMN	灰黄褐色	B	底部 95%	内外面磨耗顕著。
45	弥生土器 壺	—	(2.35)	6.0	ABHIKN	にぶい赤褐色	B	底部 70%	外面やや磨耗。
46	弥生土器 壺	—	(2.1)	4.6	ABKN	淡黄色	B	底部 100%	
47	弥生土器 壺	—	(2.2)	(5.8)	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	底部 50%	内面やや磨耗。
48	弥生土器 壺	—	(2.5)	3.6	ABCHIKN	橙色	B	胴～底 100%	内外面やや磨耗。
49	弥生土器 壺	—	(1.5)	4.5	ABHKN	黒褐色	B	底部 100%	
50	弥生土器 壺	—	(2.55)	(4.6)	ABEIKN	灰黄褐色	B	胴～底 20%	
51	弥生土器 広口壺	—	(2.55)	6.3	ABDIKN	赤色	B	底部 90%	外面赤彩、やや剥落。
52	弥生土器 甕	—	(6.7)	9.7	ABDEIJN	にぶい橙色	B	胴～底 70%	外面やや磨耗。
53	弥生土器 甕	—	(2.95)	(8.9)	ABDIKN	灰褐色	B	底部 50%	
54	弥生土器 甕	—	(4.3)	(8.8)	ABHIN	黒褐色	B	胴～底 45%	
55	弥生土器 甕	—	(2.0)	(10.2)	ACDHIKN	にぶい黄橙色	B	底部 40%	
56	弥生土器 甕	—	(2.8)	(6.8)	ABDIKN	灰黄褐色	B	底部 35%	
57	弥生土器 甕	—	(2.7)	6.8	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	底部 100%	外面やや磨耗。
58	弥生土器 甕	—	(2.7)	6.6	ABHIKN	にぶい褐色	B	底部 100%	
59	弥生土器 甕	—	(1.8)	6.6	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	底部 60%	
60	弥生土器 甕	—	(1.8)	8.3	ABEHIKN	浅黄橙色	B	底部 100%	内外面やや磨耗。
61	弥生土器 甕	—	(1.4)	7.0	ABEHIK	灰黄褐色	B	底部 75%	
62	弥生土器 甕	—	(2.4)	6.9	ABDHIKN	にぶい橙色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
63	弥生土器 甕	—	(1.5)	6.6	ABIKN	暗灰黄色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
64	弥生土器 甕	—	(5.05)	7.3	ABEIN	にぶい橙色	B	胴～底 70%	内外面磨耗顕著。
65	弥生土器 甕	—	(3.7)	5.6	ABHIMN	にぶい黄橙色	B	胴～底 80%	内外面磨耗顕著。
66	弥生土器 甕	—	(2.3)	8.4	ABEHIKN	褐灰色	B	底部 90%	
67	弥生土器 甕	—	(3.9)	(6.6)	ABHIK	灰黄褐色	B	胴～底 45%	
68	弥生土器 高坏	(24.4)	(9.35)	—	ABEHN	赤褐色	B	口～坏 20%	突起有。内外面赤彩、内剥落。内外面一部磨耗。
69	弥生土器 高坏	(17.0)	(4.5)	—	ABHIK	赤褐色	B	口～坏 25%	内外面赤彩、大半剥落。磨耗顕著。
70	弥生土器 高坏	18.1	(2.95)	—	ABEKN	赤褐色	B	口～坏 55%	内外面磨耗顕著。
71	弥生土器 高坏	—	(3.25)	—	ABHIKMN	赤色	B	接合部 90%	坏部内面・外面赤彩、ほぼ剥落。
72	弥生土器 高坏	—	(2.9)	—	ABDIKN	赤色	B	接合部 80%	坏部内面・外面赤彩。
73	弥生土器 高坏	—	(5.4)	8.0	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	接～脚 90%	
74	弥生土器 高坏	—	(3.65)	(4.2)	ABHIK	灰黄色	B	接～脚 70%	内外面やや磨耗。
75	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIJK	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
76	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	黄褐色	B	頸～肩部片	肩部内面輪積痕有。
77	弥生土器 壺	—	—	—	ABHI	にぶい黄橙色	B	肩～胴上片	内面やや磨耗。
78	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	肩部片	
79	弥生土器 壺	—	—	—	ABDKN	淡黄色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
80	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIKN	黒褐色	B	頸～肩部片	
81	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
82	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄色	B	頸～肩部片	内外面磨耗顕著。
83	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい橙色	B	頸～肩部片	内外面磨耗顕著。
84	弥生土器 壺	—	—	—	AEHN	にぶい橙色	B	肩～胴上片	
85	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	肩～胴上片	内面やや磨耗。
86	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIN	黒褐色	B	肩～胴上片	内面やや磨耗。
87	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHN	浅黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
88	弥生土器 壺	—	—	—	ABEGHIN	灰色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
89	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEHN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
90	弥生土器 壺	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
91	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIN	灰黄褐色	B	肩～胴上片	
92	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	暗灰黄色	B	胴中～下片	内外面やや磨耗。
93	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	にぶい黄橙色	B	肩～胴上片	内面磨耗顕著。
94	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIN	にぶい黄色	B	頸～肩部片	
95	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	にぶい黄橙色	B	肩～胴上片	
96	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
97	弥生土器 壺	—	—	—	ADIKN	黒色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
98	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
99	弥生土器 壺	—	—	—	ACHK	褐灰色	B	胴上部片	
100	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHI	灰黄色	B	肩～胴上片	外面やや磨耗。
101	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
102	弥生土器 壺	—	—	—	ABIJK	黒色	B	胴上部片	
103	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	浅黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
104	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄色	B	胴上部片	
105	弥生土器 壺	—	—	—	ACHIKN	褐色	B	胴上部片	
106	弥生土器 壺	—	—	—	BCHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内面やや磨耗。
107	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIKN	灰黄色	B	胴上部片	
108	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	胴中～下片	内面やや磨耗。
109	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
110	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
111	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	胴中～下片	内面磨耗顕著。
112	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	暗灰黄色	B	頸～肩部片	
113	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIN	にぶい黄橙色	B	肩～胴上片	内外面やや磨耗。
114	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	暗灰黄色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
115	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKM	褐灰色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
116	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
117	弥生土器 壺	—	—	—	ACHIK	灰黄褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
118	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	暗灰黄色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
119	弥生土器 壺	—	—	—	AIN	黒褐色	B	胴上部片	
120	弥生土器 壺	—	—	—	ACHIKN	暗オリーブ褐色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
121	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
122	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	灰白色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
123	弥生土器 壺	—	—	—	ABHN	明赤褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
124	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKMN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
125	弥生土器 壺	—	—	—	AGHIK	黒色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
126	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	No.127 と同一個体。内面磨耗顕著。
127	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	No.126 と同一個体。内面磨耗顕著。
128	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHJK	にぶい黄橙色	B	胴中～下片	胴下部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
129	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIK	暗灰黄色	B	胴上部片	
130	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
131	弥生土器 壺	—	—	—	ABHK	赤色	B	胴上部片	外面赤彩。
132	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	にぶい黄褐色	B	肩～胴上片	外面やや磨耗。
133	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGHIN	灰黄色	B	胴中～下片	内外面やや磨耗。
134	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
135	弥生土器 広口壺	—	—	—	ABK	赤褐色	B	口～頸部片	2 個一対孔有。内外面赤彩、大半剥落。
136	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
137	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	褐灰色	B	頸～胴上片	
138	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
139	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIN	にぶい橙色	B	口～胴上片	外面やや磨耗。
140	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒色	B	胴下部片	
141	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHI	黒褐色	B	口～胴上片	
142	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	外面やや磨耗。
143	弥生土器 甕	—	—	—	AHKN	にぶい黄褐色	B	口～胴上片	
144	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒色	B	頸～胴上片	
145	弥生土器 甕	—	—	—	ACIKN	暗オリーブ褐色	B	頸～胴中片	内面磨耗顕著。
146	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	オリーブ黒色	B	頸～胴上片	頸部内面輪積痕有。
147	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
148	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	黒褐色	B	胴上部片	
149	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	
150	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
151	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIN	褐色	B	胴中段片	
152	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIK	黒褐色	B	頸～胴中片	
153	弥生土器 甕	—	—	—	ABHKN	黒褐色	B	口～胴中片	
154	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	褐灰色	B	頸～胴上片	
155	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIN	灰黄褐色	B	口～胴上片	
156	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄褐色	B	口～胴上片	
157	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口～胴上片	
158	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	口～胴中片	胴上部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
159	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
160	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHKN	明赤褐色	B	頸～胴中片	内外面磨耗顕著。
161	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHJKN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	
162	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKN	灰黄褐色	B	胴中～下片	
163	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	にぶい褐色	B	胴中～下片	外面磨耗顕著。
164	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	
165	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKMN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
166	弥生土器 甕	—	—	—	AGHIN	褐灰色	B	胴中段片	内面輪積痕有。
167	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKMN	にぶい褐色	B	胴下部片	
168	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHKN	黒褐色	B	口～頸部片	
169	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	灰黄褐色	B	口～胴上片	
170	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIN	橙色	B	口～頸部片	
171	弥生土器 甕	—	—	—	ADGHKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
172	弥生土器 甕	—	—	—	AHI	黒色	B	口～頸部片	
173	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
174	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHK	にぶい橙色	B	口～頸部片	
175	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
176	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	にぶい黄色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
177	弥生土器 甕	—	—	—	ADEHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	
178	弥生土器 甕	—	—	—	AHK	黒褐色	B	口～頸部片	
179	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHJKMN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
180	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
181	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
182	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	内外面やや磨耗。
183	弥生土器 甕	—	—	—	ABCEHIK	灰黄褐色	B	口～胴上片	内面やや磨耗。
184	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHK	にぶい橙色	B	口縁部片	
185	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIK	浅黄橙色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
186	弥生土器 甕	—	—	—	AGHIN	黒褐色	B	口～胴上片	
187	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	黒褐色	B	頸～胴中片	内外面やや磨耗。
188	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
189	弥生土器 甕	—	—	—	ABHN	褐灰色	B	頸～胴中片	内面磨耗顕著。
190	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
191	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	褐灰色	B	胴中段片	
192	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
193	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKMN	黒褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
194	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	褐灰色	B	胴中段片	
195	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
196	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIKN	黒褐色	B	胴中～下片	
197	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
198	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIJKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	外面やや磨耗。
199	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	黒褐色	B	胴下部片	
200	弥生土器高坏	—	—	—	ABHK	赤褐色	B	口～坏部片	内外面赤彩。
201	弥生土器高坏	—	—	—	ABHIM	赤褐色	B	口縁部片	突起有。内外面赤彩、大半剥落。
202	打製石斧	最大長(10.7)cm、最大幅(6.9)cm、最大厚(3.2)cm。重量(333.0)g。中段付近のみ残。粘板岩製。							
203	磨石	最大長(11.3)cm、最大幅(17.3)cm、最大厚(3.7)cm。重量(1,040)g。半分欠?閃緑岩製。一面使用。							
204	磨石	最大長13.35cm、最大幅7.3cm、最大厚2.05cm。重量235.0g。完形。砂岩製。一面使用。							
205	磨石	最大長6.5cm、最大幅2.65cm、最大厚0.75cm。重量13.9g。完形。砂岩製。二面使用。							

159のみ口縁部、その他は胴部に巡る。155・156・158は頸部に同一工具による簾状文、159は直線文が巡る。155・156は口縁端部にLR単節縄文が施文され、158は刻みを持つ。158は簾状文と波状文の境にボタン状貼付文が付き、下に同一工具による直線文が垂下する。155～159の口縁部はすべて横位のヘラナデ、162・163の波状文下は、162が横位、163が斜位のヘラナデ調整である。158は胴上部内面に輪積痕が残る。155～163の内面調整は、156・158・159・160・163が横位、155が横・斜位、161・162が斜位、157は口縁部が横位、頸部以下が斜位のヘラナデである。164～167は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。164・165はボタン状貼付文が付き、164は口縁部が無文で横位のヘラナデ調整である。165は口縁部に波状沈線が巡り、頸部は無文で横位のヘラナデ調整である。166は波状沈線も垂下し、所々に斜位のハケメ調整が残る。167は胴下部が無文で横位のヘラナデ調整である。164～167の内面調整は、164～166が横位、167が



横・斜位のヘラナデである。166は内面に輪積痕が残る。168～196は縄文が施文された破片。168～186は口縁部から胴上部までの破片。170・172～175・178・179は端部を含む口縁部、181は端部を含む口縁部以下、182～184は口縁端部のみ、185は口縁部、186は口縁部以下に縄文が施文されている。168・169・171～179・181～186はLR、170はRL単節縄文、180は分かりづらいが、無節Rである。168～175は口縁部が受け口状を呈し、176～181は肥厚している。168～172は縄文地に波状沈線が巡り、172は2条巡る。179は縄文下に半円形の刺突列が巡る。168～180は縄文以下が無文で、すべて横位のヘラナデ調整である。168・169・173は頸部に櫛歯状工具による簾状文が巡り、169・173は胴部に羽状文が描かれている。181は口縁端部に刻みを持つ。182・183は口縁部から頸部まで無文で横位のヘラナデ調整である。頸部と胴上部の境に平行沈線が巡り、以下LR単節縄文が施文されている。185は頸部が無文で斜位のヘラナデ調整である。187～189は頸部から胴部中段まで、190～195は胴部中段、196は胴下部の破片である。すべてLR単節縄文が施文されている。187は頸部に簾状文が巡る。168～196の内面調整は、181・196が斜位、187・188・190・192・194が横・斜位、その他は横位のヘラナデであり、178のみ横位のハケメである。197・198は口縁部から頸部までの破片。口縁端部に指頭圧痕が施されており、以下は無文である。197は外面が横位のハケメ、内面は横位のヘラナデ調整である。198は内外面ともに横位のヘラナデ調整である。199は内外面ハケメ調整の胴下部片。

67は甑の底部。内外面ともにヘラナデ調整である。

68～74・200・201は高坏。内外面ともにヘラミガキ調整が主体となり、68・69・71・72・200・201は赤彩が施されている。68～70は口縁部から坏部までの部位。68は口縁部が大きく外に開き、坏部は内湾する。口縁端部に2個一対の突起が付く。口縁部外面はヘラミガキ前のハケメが残る箇所がみられた。69は口縁部がほぼ直立し、坏部はやや内湾する。70は口縁部がやや外反する。71～72は接合部、73・74は接合部から脚部までの部位。脚部はいずれも短く、内面調整はヘラナデである。200・201は口縁部から坏部までの破片。200は口縁部外面と内面が横位、坏部外面が斜位、201は内外面ともに横位のヘラミガキ調整である。201は口縁端部に突起が付く。

202は打製石斧。中段付近のみの検出であり、基部と刃部を欠く。その形態からおそらく短冊状を呈すると思われる。203～205は大きさが異なるが、すべて磨石。203・204は一面、205は二面使用している。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

#### 第10号住居跡（第36図）

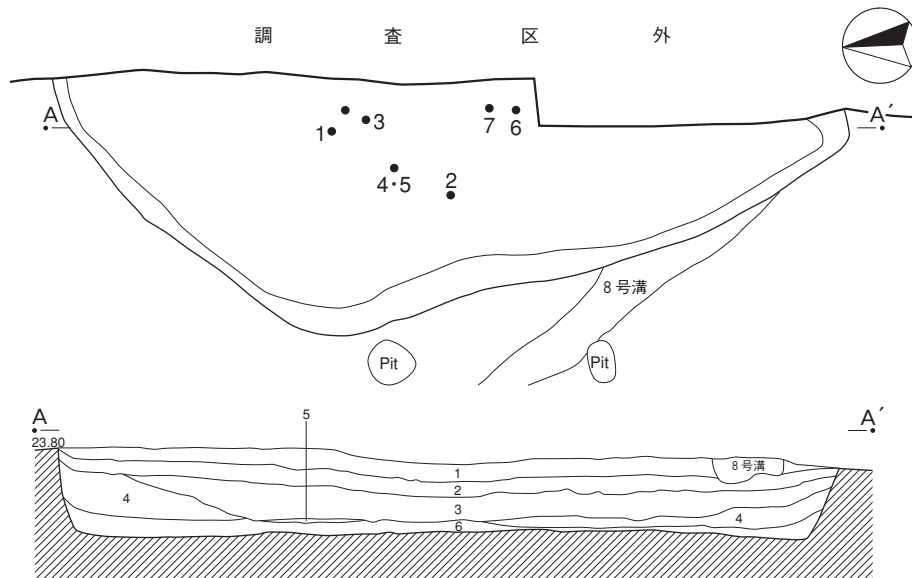
第2次調査での検出であり、58-150・151グリッドに位置する。西壁付近のみの検出であり、大半は調査区外にある。南西部では8号溝跡に切られている。

正確な規模及び主軸方向は不明であるが、検出できた西壁は4.7m程を測り、平面プランはややいびつな隅丸方形ないし長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.6m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は6層（1～6層）確認された。中央からやや北側の中層では炭化物層が確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡やピット、壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第37・38図）は、弥生土器壺（1～6・9～11・14～20）、甕（7・8・12・21～49）、高坏（13）、鉢（50）、敲打器（51）がある。床面直上の遺物は中央付近に集中し、残存状態の比較的良好なものが検出された。





第10号住居跡

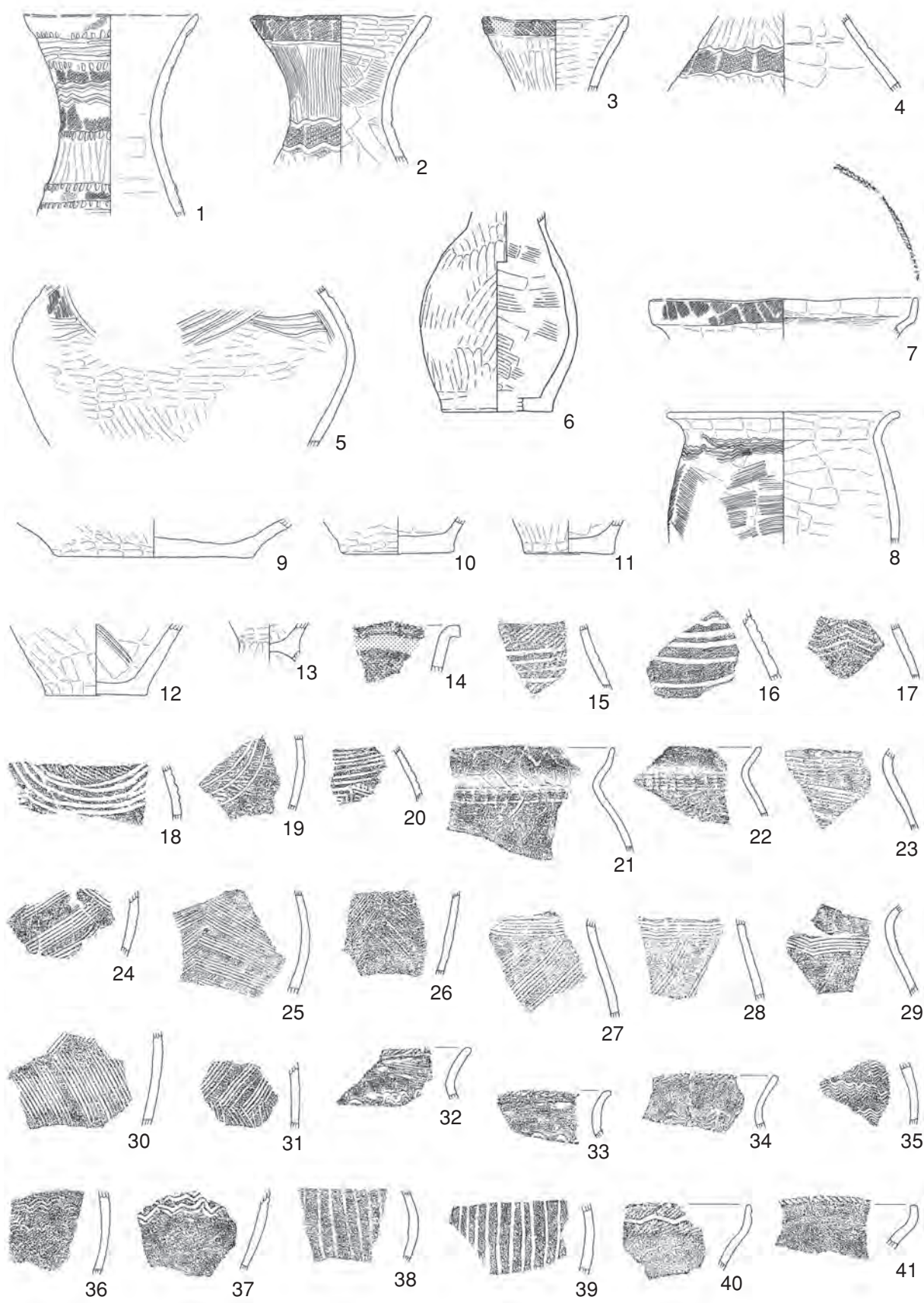
土層説明 (A A')

- |   |                                 |
|---|---------------------------------|
| 1 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。                     | 5 炭化物層                          |
| 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。                          | 6 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。 |
| 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。一部下層に炭化物が帯状に薄く堆積。2層より明るい。 |                                 |
| 4 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。                               |                                 |
- = 土器      0      2 m  
1:60

第36図 第10号住居跡

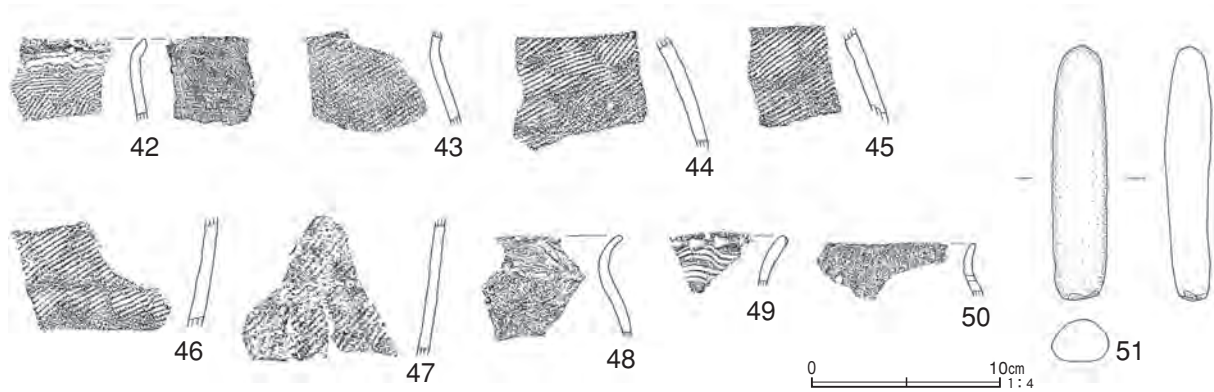
破片は覆土からの出土が多い。

1～6・9～11・14～20は壺。1～3は口縁部から頸部までの部位。口縁部はいずれも肥厚しており、逆ハの字に開く。1は頸部が長い。文様は頸部中段より下が無文である以外、密に施文されている。LR単節縄文が施文された口縁部下から頸部無文部上まで半円形の刺突列が3列巡り、上の刺突列間は間隔が狭く、平行沈線が3条巡る。下の刺突列間は間隔が広く、上下にLR単節縄文、間に2本一単位の櫛歯状工具による波状文が2条巡る。無文部下は段が設けられており、半円形の刺突列が2条巡る。刺突列間はLR単節縄文、下は平行沈線が施文されている。外面無文部はヘラミガキ、内面は口縁部から頸部中段まで磨耗が著しいため図示不可能であるが、下位はヘラナデ調整である。2は端部も含め口縁部にLR単節縄文、下に平行沈線が巡る。以下は頸部上位まで無文で縦位のハケメ調整が主体となるが、一部にヘラミガキが施されている。頸部下位は波状沈線が2条巡り、間にLR単節縄文が充填されるが、下は一部はみ出ている。内面調整は口縁部がヘラミガキ、以下はハケメとヘラナデである。3は口縁部に赤彩の施されたRL単節縄文が施文され、以下は無文で内面とともにヘラミガキ調整である。4は肩部から胴上部までの部位。文様は胴上部に波状沈線が2条巡り、間にLR単節縄文が充填されている。外面無文部はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。内面に輪積痕がみられた。5は胴上部から下部までの部位。残存状態が良くないが、フラスコ文と弧線文が描かれていると思われる。文様間はRL単節縄文が充填されている。文様下はヘラミガキ、内面は図示できなかったが、横・斜位のヘラナデ調整である。6は頸部から底部までの部位。頸部がほぼ直立し、胴部は膨らむ。底径が大きく、徳利状を呈する。全面無文で外面調整はヘラミガキ、内面はハケメとヘラナデである。9～11は底部。外面調整はヘラミガキ、



0 10cm  
1:4

第 37 图 第 10 号住居跡出土遺物 (1)



第38図 第10号住居跡出土遺物(2)

内面はヘラナデである。9は底径が大きい。壺としたが、甕の可能性もある。

14は大きく外反する口縁部片。無文で内外面ともに横位のヘラミガキと赤彩が施されている。新しい様相を呈するものであり、流れ込みの可能性もある。15～17は平行沈線と波状沈線が巡る破片。15はLR単節縄文地に平行沈線が複数巡る。16は太い沈線で上に波状、下に平行沈線が複数巡る。無文部の調整は横・斜位のヘラミガキである。17は分かりづらいが、複数の波状沈線下にLR単節縄文が施文されている。18・19はフラスコ文が描かれた破片。18はフラスコ文内外にRL単節縄文が充填されている。19は無節L地に細い沈線で描かれている。15～19の内面調整は、15・16・19が横・斜位、17・18が横位のヘラナデである。20は弥生時代中期中頃池上式の胴上部片。重四角文内に斜位の沈線と半円形の刺突列が施文されている。内面調整は横位のヘラナデである。流れ込み。

7・8・12・21～49は甕。7は口縁部から頸部までの部位。口縁部は受け口状を呈する。端部も含め口縁部はLR単節縄文が施文され、頸部は無文で口縁部内面とともにヘラナデが施されている。頸部内面はハケメ調整である。8は口縁部から胴部中段までの部位。口縁部がやや外反し、頸部から胴部中段にかけてやや膨らむ。口径と胴部中段の径は変わらないが、最大径は前者に持つ。文様は櫛歯状工具で頸部と胴部に描かれている。頸部は4本一単位の波状文が2条巡り、胴部は5本一単位で縦位の羽状文が描かれている。内外面の調整はともにヘラナデである。12は胴下部から底部までの部位。内外面ともにヘラナデ調整であるが、内面はハケメも一部みられた。

21～37は櫛歯状工具で文様が施文された破片。櫛歯の単位は5本前後が多い。21は口縁部から胴上部までの破片。受け口状を呈する口縁部に波状沈線が巡り、頸部は簾状文が巡る。外面無文部及び内面の調整は、横位のヘラナデである。22～31は羽状文が描かれた破片。22～26は縦位、27～31は横位に描かれている。22・23・28は頸部に同一工具による簾状文、27・29は直線文が巡るが、29は弧状を呈する。22・29は口縁部が無文で22が横位、29が斜位のヘラナデ調整である。28・29は胴部に横位のハケメ調整が残る。22～31の内面調整は、23・28・31が横・斜位、24・25が斜位、その他は横位のヘラナデである。32～37は波状文が描かれた破片。32～34は頸部、35～37は胴部に巡り、後者は複数巡る。32～34は口縁端部にLR単節縄文が施文され、口縁部は無文で32が横・斜位のハケメ、33・34が横位のヘラナデ調整である。35はやや間隔を空けて巡る。36・37は波状文以下が無文で36が横・斜位、37が斜位のヘラナデ調整である。32～37の内面調整は、33・34・36・37が横位、35・38が斜位のヘラナデ、32が横・斜位のハケメである。38・39は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。39は地文にLR単節縄文が施文されて



第11表 第10号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	(12.2)	(14.1)	—	ABCDIK	淡黄色	B	口～頸 40%	内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	(12.6)	(10.3)	—	BDIK	にぶい橙色	B	口～頸 30%	
3	弥生土器 壺	10.2	(5.2)	—	ABEIK	褐灰色	B	口～頸 70%	外面縄文施文部赤彩。内面やや磨耗。
4	弥生土器 壺	—	(5.5)	—	ABCHIKN	淡黄色	B	肩～胴 90%	内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
5	弥生土器 壺	—	(11.2)	—	ABHIJKN	暗灰色	B	胴部 40%	
6	弥生土器 壺	—	(14.0)	(7.9)	ABEHIKN	灰黄・黒褐色	B	頸～底 60%	外面やや磨耗。
7	弥生土器 甕	(18.6)	(2.8)	—	ABEIN	灰白色	B	口～頸 20%	
8	弥生土器 甕	(16.3)	(9.3)	—	ABDIN	黒褐色	B	口～胴 25%	外面所々磨耗。
9	弥生土器 壺	—	(2.75)	(13.8)	ABGIKMN	黒褐色	B	底部 45%	内面磨耗顕著。
10	弥生土器 壺	—	(2.6)	7.8	ABHIKN	暗灰色	B	底部 100%	外面磨耗顕著。
11	弥生土器 壺	—	(2.4)	6.3	ABGHIK	褐灰色	B	底部 100%	外面磨耗顕著。
12	弥生土器 甕	—	(5.1)	7.1	ABIK	にぶい黄橙色	B	胴～底 50%	外面磨耗顕著。
13	弥生土器 高坏	—	(2.7)	—	ABHK	にぶい橙色	B	接合部 80%	内外面磨耗顕著。
14	弥生土器 壺	—	—	—	ADHIKN	赤色	B	口～頸部片	外面赤彩、大半剥落。内外面磨耗顕著。
15	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIK	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
16	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい褐色	B	胴上部片	
17	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIKN	にぶい黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 壺	—	—	—	ABHKN	にぶい黄色	B	胴上部片	
19	弥生土器 壺	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
20	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
21	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKMN	黒褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
22	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
23	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	
24	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIK	黒褐色	B	胴中段片	
25	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴中段片	
26	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい赤褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
27	弥生土器 甕	—	—	—	AEGHIK	黒褐色	B	頸～胴上片	
28	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	
29	弥生土器 甕	—	—	—	ABCKN	灰黄色	B	頸～胴上片	
30	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIN	にぶい橙色	B	胴中段片	
31	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIKN	黒褐色	B	胴中段片	
32	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIK	黒褐色	B	口～頸部片	
33	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIMN	褐灰色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
34	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHMN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
35	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	灰黄褐色	B	胴上部片	
36	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIN	黒褐色	B	胴中～下片	
37	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	褐灰色	B	胴中～下片	
38	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
39	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	
40	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIN	橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
41	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIKN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
42	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口～胴上片	
43	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	褐灰色	B	頸～胴上片	
44	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
45	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
46	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIK	黒褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
47	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
48	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIK	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
49	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	褐灰色	B	口縁部片	
50	弥生土器 鉢	—	—	—	ABCEIKM	浅黄橙色	B	口縁部片	孔有。内外面磨耗顕著。
51	敲打器	最大長 13.4 cm、最大幅 2.9 cm、最大厚 2.4 cm。重量 145.0g。完形。砂岩製。片端使用。							

いる。内面調整はともに横位のヘラナデである。40～47はLR単節縄文が施文された破片。40・41は受け口状を呈する口縁部から頸部までの破片。縄文は40が口縁部、41は口縁端部のみに施文されており、40は波状沈線が巡る。無文部は40・41ともに横位のヘラナデ調整である。42は口縁部から胴上部までの破片。短い口縁部下に太い波状沈線が巡り、下にLR単節縄文が施文されている。43は頸部から胴上部まで、44・45は胴上部、46・47は胴部中段の破片。40～47の内面調整は、40・41・43～45が横位、46は斜位、47は横・斜位のヘラナデであるが、47はハケメも一部みられた。42は口縁部から頸部までが横位のヘ

ラナデ、以下は横位のハケメである。48は無文の口縁部から胴上部までの破片。内外面ともにヘラナデ調整であり、口縁部外面及び内面は横位、頸部以下は斜位に施されている。49は弥生時代中期中頃の池上式に相当する口縁部片。端部に刻みを持ち、口縁部に2本一単位の櫛歯状工具による波状文が複数巡る。内面調整は横位のヘラナデである。流れ込み。

13は高坏の接合部。外面及び坏部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ調整である。

50は鉢の口縁部片。孔が設けられている。内外面ともに横位のヘラナデ調整である。調整等から鉢としたが、無頸壺の可能性もある。

51は敲打器。片端のみ使用している。完形。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階と思われる。

#### 第11号住居跡（第39図）

第2次調査での検出であり、56・57-153グリッドに位置する。南西隅で19号土坑に切られている。北側では南北に走る13号溝跡と重複し、本住居跡の覆土断面に痕跡が認められなかったことから、本住居跡が新しいとも思われたが、新旧関係については不明と言わざるを得ない。北東隅では時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。南西隅付近は調査区外にある。

長軸4.76m、短軸4.16mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-22°-Wを指す。確認面からの深さは0.3m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は7層（1～7層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央からやや北寄りに位置する。長軸0.51m、短軸0.33mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.07mと浅い。覆土は3層（8～10層）確認された。南側に被熱した川原石が据えられていた。

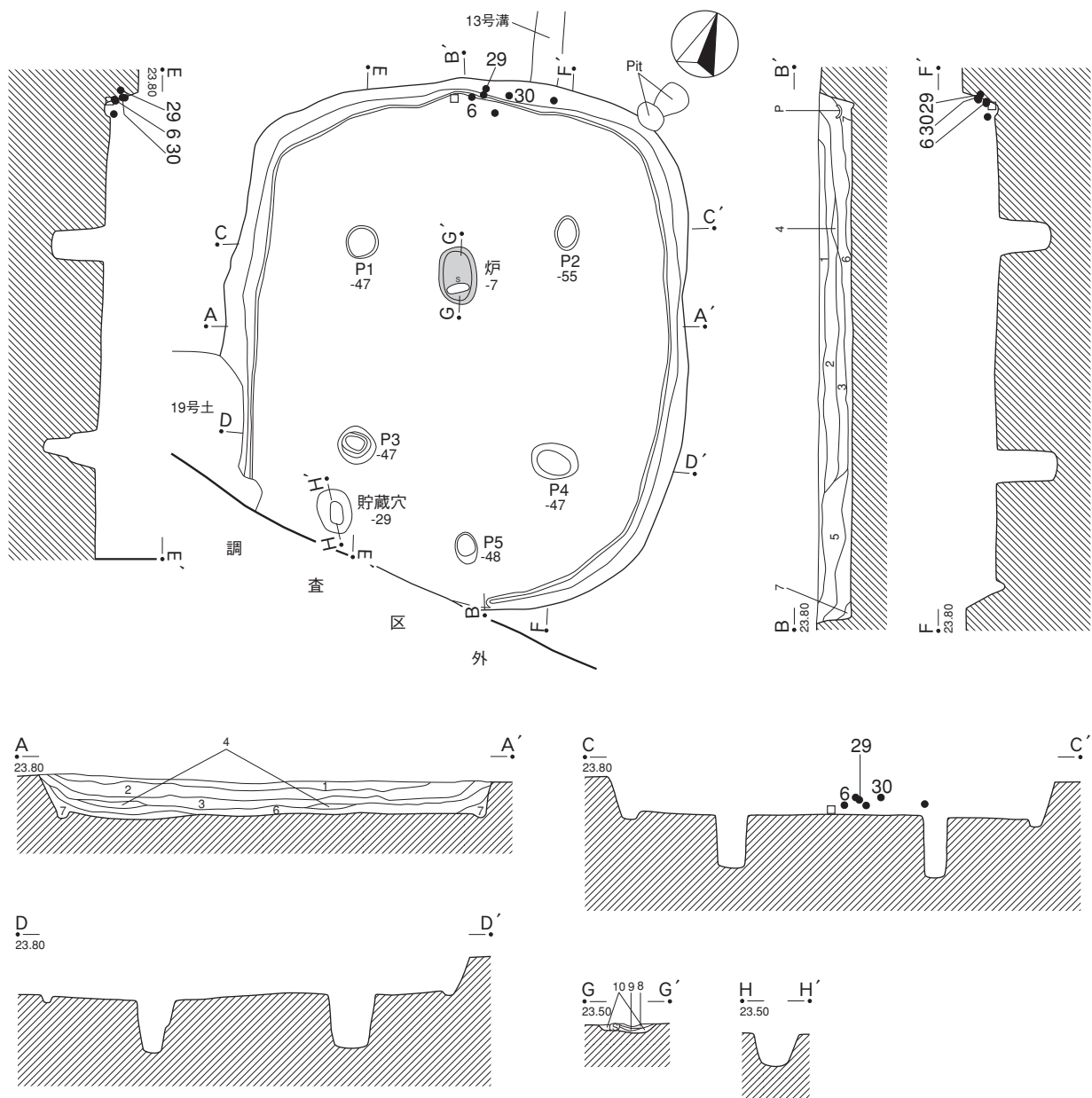
ピットは5基検出された。P1～4は主柱穴、P5は出入口に関連するものと思われる。覆土は図示しなかったが、いずれも柱痕跡は認められなかった。

壁溝はP5前のみ切れるが、その他は全周する。幅は0.25m、床面からの深さは0.05m前後を測る。

貯蔵穴は南西隅に位置する。長軸0.41m、短軸0.3mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.29mを測る。覆土は図示できなかったが、炭化物を少量含んでいた。

出土遺物（第40図）は、弥生土器壺（1・2・7～18）、甕（3・19～32）、甌（4）、高坏（5）、鉢（6）、砥石（33）がある。覆土からの出土が多く、床面直上の遺物は北壁中央付近に限られる。残存状態の良いものはなく、破片が多い。

1・2・7～18は壺。1・2は底部。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。1は底面に木葉痕がみられた。壺としたが、甕の可能性もある。7・8は突帯が巡る頸部から肩部までの破片。7は低い突帯が2条巡り、突帯上に刻みを持つ。突帯下は鋸歯文と思われる文様が描かれている。8は突帯上下に半円形の刺突列が巡る。内面調整はともに横位のヘラナデである。9～13は平行沈線や波状沈線が巡る肩部から胴上部までの破片。9は無節L下に平行沈線が複数巡る。10は半円形の刺突列下に波状沈線が複数巡る。11はLR単節縄文地に平行沈線が複数巡り、中段の沈線間に波状沈線が巡る。12は平行沈線間に波状沈線とLR単節縄文が施文されている。13は無文部下に波状沈線が巡り、下にLR単節縄文が施文されている。無文部は横・斜位のヘラミガキ調整である。9～13の内面調整は、9～11が横位、13が横・斜位のヘラナデ、12が横・斜位のハケメである。14はフラスコ文、15は重四角文が描かれた



第11号住居跡

土層説明 (A A' B B' G G')

- |                                    |                                |
|------------------------------------|--------------------------------|
| 1 オリーブ黒色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。  | 6 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、灰白色粘土少量含む。   |
| 2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粘土少量含む。 | 7 灰 白 色 土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰色土少量含む。 |
| 3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰白色粘土、マンガン粒多量含む。   |                                |
| 4 灰白色粘土：酸化鉄少量含む。                   |                                |
| 5 灰 白 色 土：粘土質。酸化鉄、灰色土多量含む。         |                                |
- = 土器    □ = 石器・礫

0 2m  
1:60

第39図 第11号住居跡

胴上部片。14はフラスコ文内外にR L単節縄文が充填されている。15は重四角文上に半円形の刺突列が巡り、刺突列上は無節Lが施文されている。内面調整は14が横・斜位、15が横位のヘラナデである。16・17は弧線文が描かれた胴部中段から下部までの破片。16は沈線間にL R単節縄文が充填されている。無文部の調整は縦・斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。17は弧線文下が無文で内面とともに斜位のハケメ調整である。18は弥生時代中期中頃池上式の胴上部片。重四角文内に半円形の





第40図 第11号住居跡出土遺物

刺突列が充填されている。内面調整は横位のヘラナデである。流れ込み。

3・19～32は甕。3は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。19～21は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は4～5本である。19は頸部に簾状文が巡る。20・21は胴部に羽状文の描かれており、20は縦位、21は横位に描かれている。21は横位のハケメ調整が残る。19～21の内面調整は19・20が横位、21が斜位のヘラナデである。22～24は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。23は地文にLR単節繩

第12表 第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(2.3)	(8.2)	ABDEIKMN	にぶい黄橙色	B	底部 40%	底面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	—	(2.7)	(6.6)	AHIKN	黒色	B	底部 30%	
3	弥生土器 甕	—	(2.35)	7.4	ABCEIN	橙色	B	底部 60%	内面磨耗顕著。
4	弥生土器 甌	—	(3.95)	3.5	ABCDIKN	橙色	B	胴～底 80%	
5	弥生土器高坏	—	(2.75)	—	ABDHJK	にぶい橙色	B	接合部 70%	内外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著調整不明。
6	弥生土器 鉢	(12.7)	6.4	5.6	AEGIKN	黒色	B	65%	2個一対孔有。内面やや磨耗。
7	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIN	にぶい黄橙色	B	頸～肩部片	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄褐色	B	頸部片	内外面磨耗顕著。
9	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	暗オリーブ褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
10	弥生土器 壺	—	—	—	ABGHIN	橙色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
11	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDHIKN	にぶい褐色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
12	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	褐灰色	B	胴上部片	
13	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
14	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	浅黄色	B	胴上部片	内面やや磨耗。
15	弥生土器 壺	—	—	—	ABGHIN	黒褐色	B	胴上部片	
16	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	外面やや磨耗。
17	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	胴下部片	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIJKN	褐灰色	B	胴上部片	
19	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIK	にぶい黄橙色	B	頸部片	内外面やや磨耗。
20	弥生土器 甕	—	—	—	ADHI	褐灰色	B	胴中段片	
21	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒色	B	胴中段片	
22	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	暗灰黄色	B	胴中段片	外面やや磨耗。
23	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	A	胴中段片	
24	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKN	にぶい褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
25	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	灰黄色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
26	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHJN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
27	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHI	黒褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
28	弥生土器 甕	—	—	—	ABEGIJKN	浅黄橙色	B	口～頸部片	
29	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIN	にぶい橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
30	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	口～胴上片	
31	弥生土器 甕	—	—	—	ABHJKN	黒色	B	口～頸部片	
32	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHKN	黒褐色	B	口～頸部片	
33	砥石	最大長 20.45 cm、最大幅 24.3 cm、最大厚 7.3 cm。重量 6,200g。完形?片岩製。一面使用。							

文が施文され、波状沈線も垂下する。24は沈線が細い。内面調整は22・23が斜位、24が横位のヘラナデである。25～27は縄文が施文された破片。25は口縁部にR L単節縄文が施文され、頸部は無文で横位のヘラナデ調整である。26・27はともにL R単節縄文が施文されている。内面調整はすべて横位のヘラナデである。28～32は口縁部から胴上部までの破片であり、28は無文、29は口縁端部に刻み、30～32は口縁端部に指頭圧痕が施されている。30～32は宮ノ台式。28は内外面ともに横位のヘラナデ調整である。29～32は口縁端部以外無文である。無文部の調整は、29の口縁部が横位、頸部が斜位のヘラナデ、30は口縁部が横位のヘラナデ、頸部から胴上部までが縦位、その下は横・斜位のハケメ、31・32は斜位のハケメである。29～32の内面調整は29が横位、30・31が横・斜位のヘラナデ、32が斜位のハケメである。

4は小型の甌。胴下部から底部までの部位。底部の器壁が厚い。外面調整はヘラナデ、内面はヘラナデとハケメである。

5は高坏の接合部。磨耗が著しく、調整は図示できなかつた。脚部内面以外は赤彩が施されている。

6は鉢。口縁部の開きが小さく、体部が内湾する。内外面ともにヘラミガキと赤彩が施されている。口縁部は2個一対の孔が対角線上に2つ設けられている。

33は大型の砥石。一面のみ使用しており、平滑である。片岩製。完形か。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

## 第12号住居跡(第41・42図)

第2次調査での検出であり、55・56-152・153グリッドに位置する。北壁中央付近で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。南東隅付近は調査区外にある。

南北は不明であるが、東西は5.71mを測り、平面プランは隅丸方形を呈すると思われる。主軸方向はN-24°-Eを指す。確認面からの深さは0.45m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は10層(1~10層)確認された。床面中央付近では最下に炭化物層が確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央からやや北寄りに位置する。径0.45m前後の円形を呈し、床面からの深さは0.09mを測る。覆土は3層(19~21層)確認され、焼土や炭化物を含んでいた。

ピットは6基検出された。P1~4はその位置から主柱穴と思われる。覆土はすべて図示できなかったが、いずれからも柱痕跡は認められなかった。

壁溝は全周する。幅は0.4m前後が主体となり、床面からの深さは0.05~0.17mと幅がみられた。

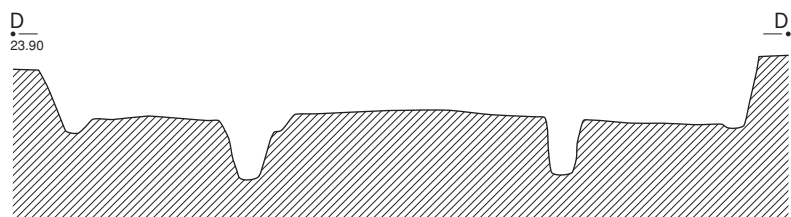
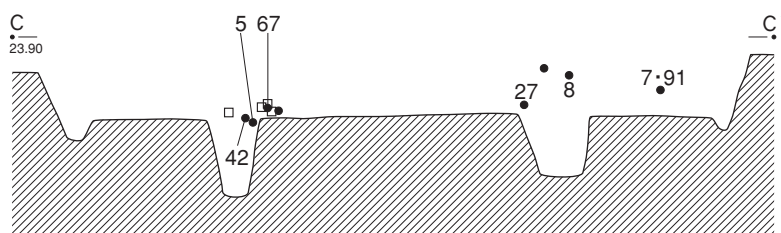
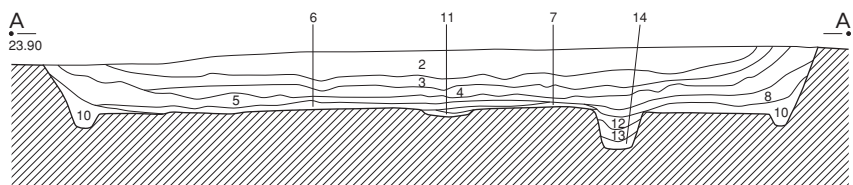
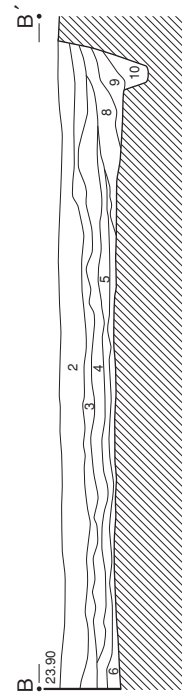
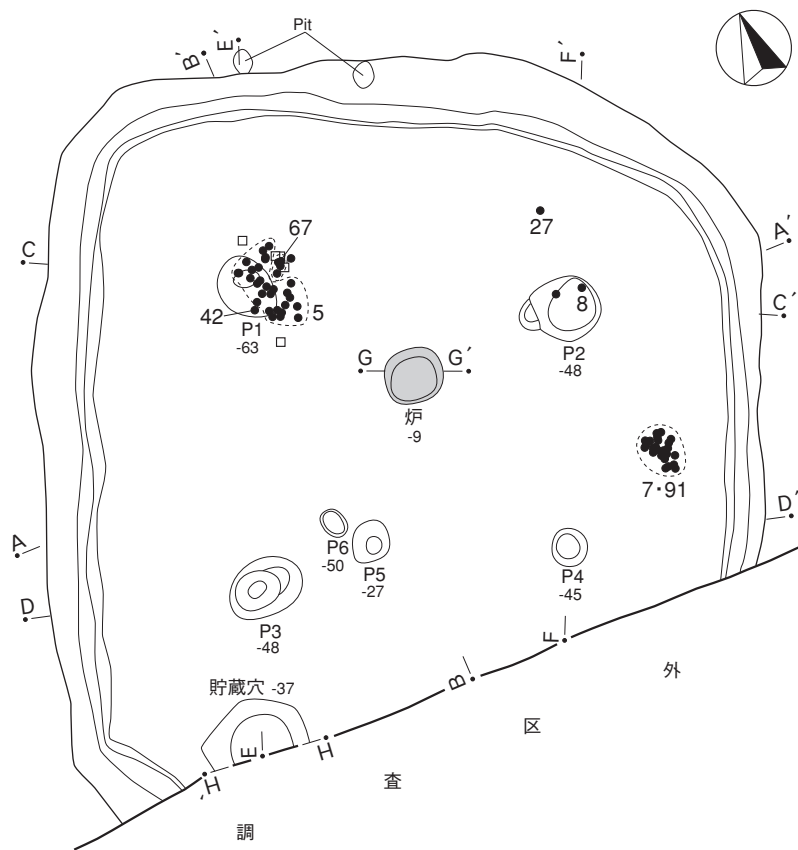
貯蔵穴は南西隅に位置する。南側が調査区外にあるため正確な数値は不明であるが、径0.8m前後の不整形円形を呈すると思われる。床面からの深さは0.37mを測る。覆土は4層(15~18層)確認された。

出土遺物(第43~46図)は、弥生土器壺(1~5・9~15・28~63)、甕(6~8・16~22・64~115)、高坏(23~25)、鉢(26・27・116・117)、打製石斧(118~121)、磨製石斧(122)、磨石(123)がある。覆土からの出土が多く、床面直上の遺物はP1上、東壁中央手前に限られ、残存状態の良好なものが検出された。

1~5・9~15・28~63は壺。1は口縁部から頸部までの部位。口縁部はやや受け口状を呈する。文様は口縁部にRL単節縄文と山形状の沈線が施文され、頸部は無文であるが、一部に楕円形状を呈する突起が付く。頸部無文部及び内面の調整はヘラミガキである。2は頸部から胴上部までの部位。頸部はほぼ直立し、胴上部が膨らむ。文様は頸部にのみみられ、2条の平行沈線間にLR単節縄文が施文され、下位の平行沈線を挟んで2本一単位の櫛歯状工具による波状文が巡る。外面無文部の調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。3・4は口縁部から頸部までの部位。無文で内外面ともにヘラミガキ調整が主体となる。3は口縁部がやや受け口状を呈し、頸部はすぼまる。頸部内面下位はヘラナデ調整である。4は口縁部が外反し、頸部はほぼ直立する。5は口縁部から頸部を欠くが、比較的残存状態が良好である。肩部から緩やかに下り、つまった胴部の中段が大きく膨らむ。文様は肩部から胴部中段まで5本一単位の櫛歯状工具による直線文が複数垂下し、両脇に小さい円形刺突列が伴う。胴部中段は同一工具による直線文が横位に複数巡り、上に円形刺突列が伴う。外面無文部の調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。9~15は底部。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデが主体となるが、13のみ内外面ともにヘラミガキである。9は底面に木葉痕がみられた。壺としたが、甕の可能性もある。

28は鋸歯文が描かれた肩部片。分かりづらいが、鋸歯文下にRL単節縄文が充填されている。鋸歯文上の無文部は横・斜位のヘラミガキ調整である。内面調整は横位のヘラナデである。29~39は肩部から胴上部までの破片。29~35は平行沈線及び波状沈線、36~39は櫛歯状工具で直線文及び波状文が描かれている。29は2条の平行沈線下が無文であるが、磨耗が著しく調整不明である。30・31は平行沈線の上下にRL単節縄文が施文されている。32は肩部と胴上部の境に段を持ち、段上は波状沈線と赤彩の施されたLR単節縄文が施文され、下は半円形の刺突列と複数の平行沈線が巡る。波状沈線上は

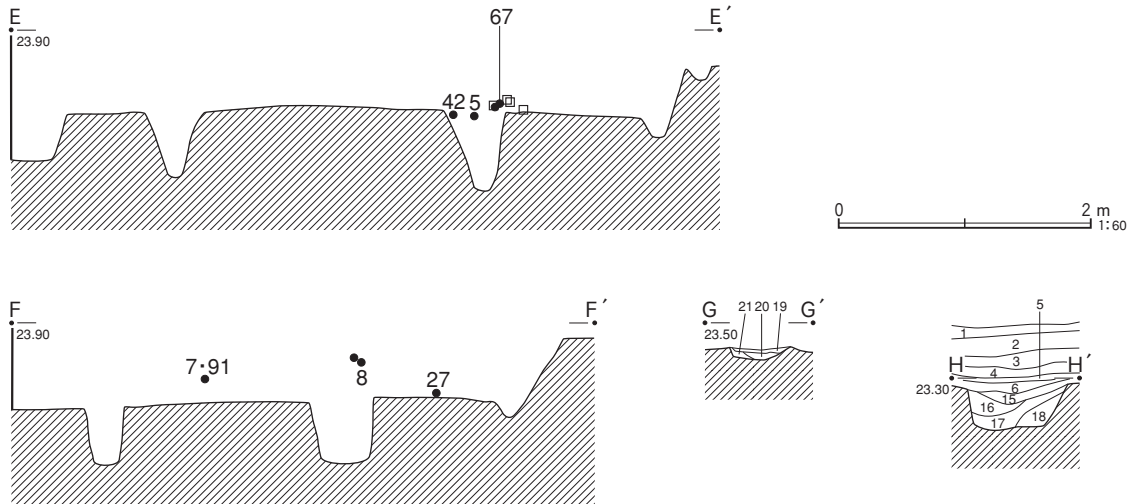




● = 土器 □ = 石器・礫



第41図 第12号住居跡 (1)



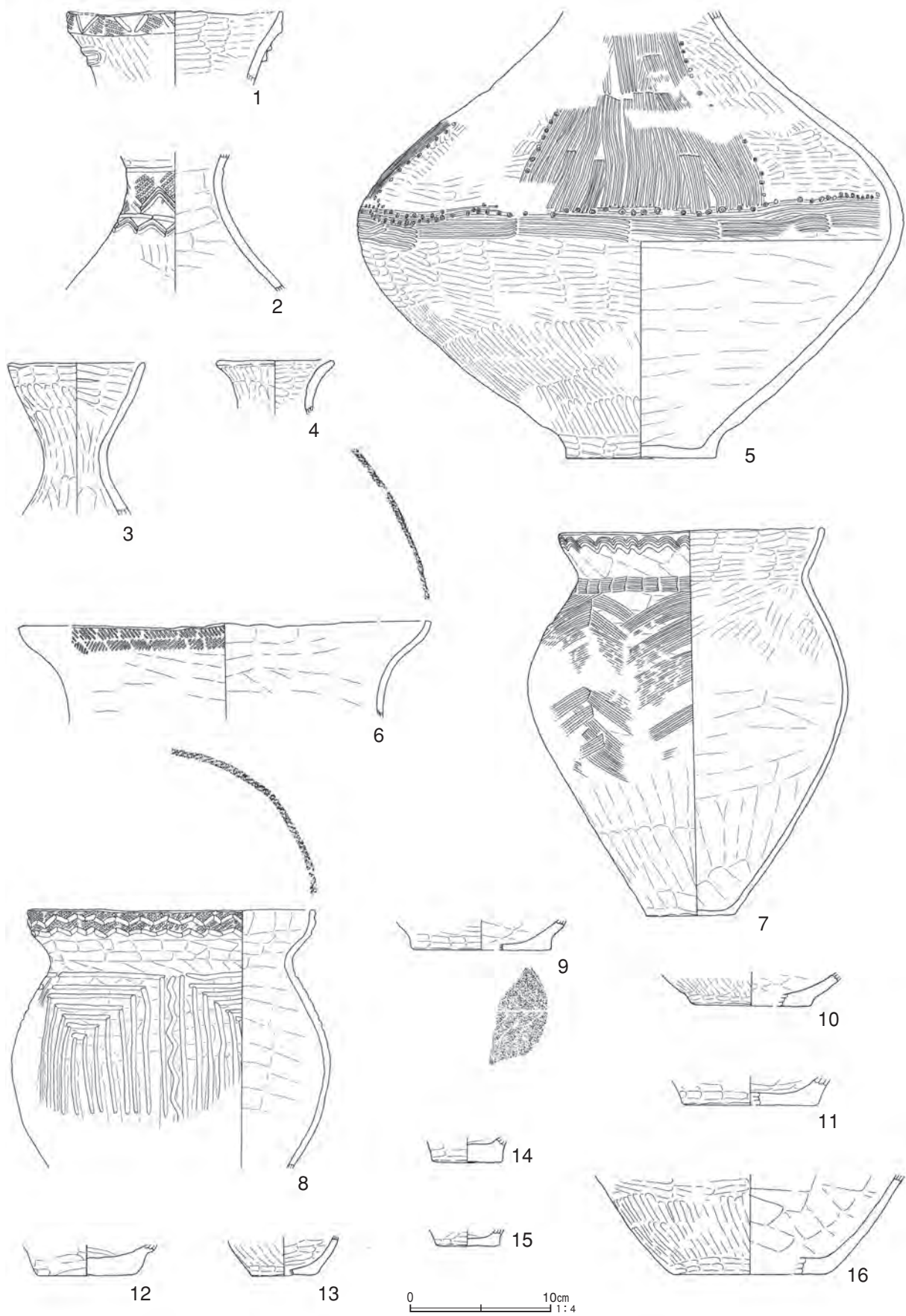
第12号住居跡

土層説明 (AA' BB' GG' HH')

- |  |                                    |
|--|------------------------------------|
| 1 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、白色粒少量含む。       | 11 焼土層                             |
| 2 青黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。          | 12 灰色粘土：酸化鉄、炭化物、灰白色粘土少量含む。         |
| 3 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。          | 13 オリーブ灰色粘土：酸化鉄、炭化物、灰白色粘土少量含む。     |
| 4 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。2層より明るい。  | 14 オリーブ灰色粘土：酸化鉄、灰色粘土少量含む。13層より明るい。 |
| 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒・ブロック少量含む。 | 15 青灰色土：粘土質。灰白色粘土多量、酸化鉄、炭化物少量含む。   |
| 6 灰色土：粘土質。灰白色粒多量、酸化鉄、炭化物少量含む。            | 16 暗青灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒少量含む。     |
| 7 炭化物層                                   | 17 青灰色土：粘土質。灰白色粘土多量、酸化鉄、炭化物少量含む。   |
| 8 灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒・ブロック少量含む。       | 18 灰白色粘土：暗青灰色粘土、酸化鉄少量含む。           |
| 9 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック多量、炭化物少量含む。       | 19 炭化物層                            |
| 10 灰白色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰色土少量含む。             | 20 焼土層                             |
|  | 21 灰色粘土：焼土、炭化物少量含む。                |

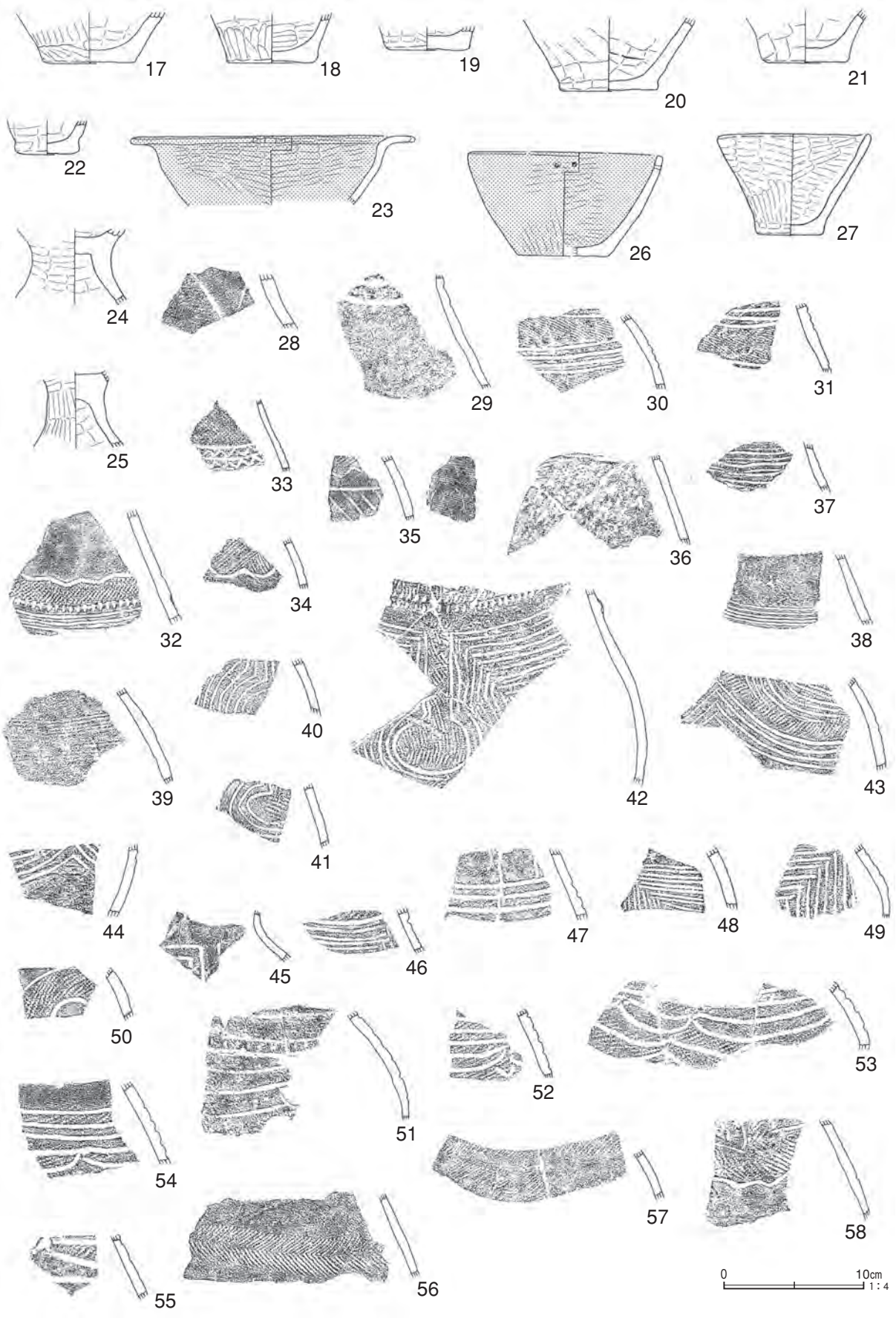
第42図 第12号住居跡 (2)

無文で縦位のヘラミガキ調整である。33は無文部下に平行沈線と波状沈線が交互に巡る。無文部は斜位のヘラミガキと赤彩が施されている。34は波状沈線上に櫛歯状工具で羽状文様が描かれている。下は無文で斜位のヘラミガキ調整である。35は地文にLR単節縄文が施文されており、波状沈線と平行沈線が巡る。平行沈線下は斜位の沈線が等間隔に描かれている。36は分かりづらいが、平行沈線下に波状沈線が巡る。以下は無文で縦位のヘラミガキ調整である。37は単位不明の直線文と波状文が巡る。38は横・斜位のヘラミガキが施された無文部下に6本一単位の櫛歯状工具による直線文が巡る。39は無文部間に5本一単位の櫛歯状工具による直線文と簾状文が巡る。無文部の調整は横・斜位のヘラミガキである。29～39の内面調整は、29・30・33・34・36～38が横位、31・32・39は横・斜位のヘラナデ、35は横・斜位のハケメである。40～43は胴部にフラスコ文が描かれた破片。フラスコ文内外に41・42はRL、43はLR単節縄文が充填されている。42は上に段を持ち、段上にRL単節縄文、下に半円形の刺突列が巡る。43は下に弧線文が描かれている。40～43の内面調整は40・42・43が斜位、41が横・斜位のヘラナデである。44は弧線文が描かれた胴部中段から下部までの破片。弧線文上はフラスコ文が描かれていると思われる。下は無文で横・斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデ調整である。45～49は重四角文が描かれた破片。45は分かりづらいが、頸部に鋸歯文が描かれている。46は上にLR単節縄文が施文されている。48は2本一単位の櫛歯状工具で描かれている。45～49の内面調整は、45の頸部が横位のヘラナデ、肩部は斜位のハケメ、その他は横位のヘラナデである。50は渦巻文が描かれた胴上部片。

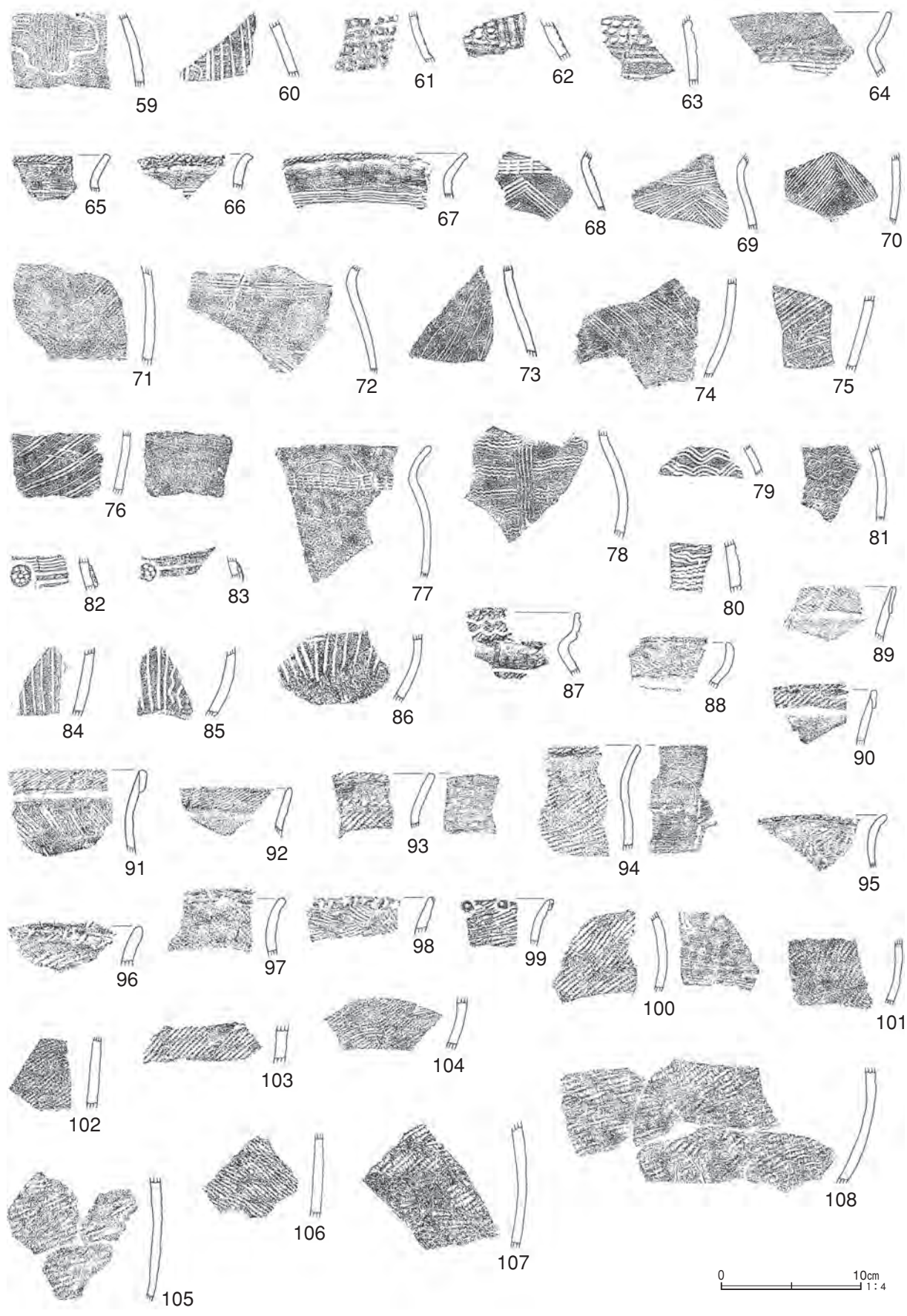


第43图 第12号住居跡出土遺物 (1)





第44图 第12号住居跡出土遺物 (2)



第45图 第12号住居跡出土遺物 (3)

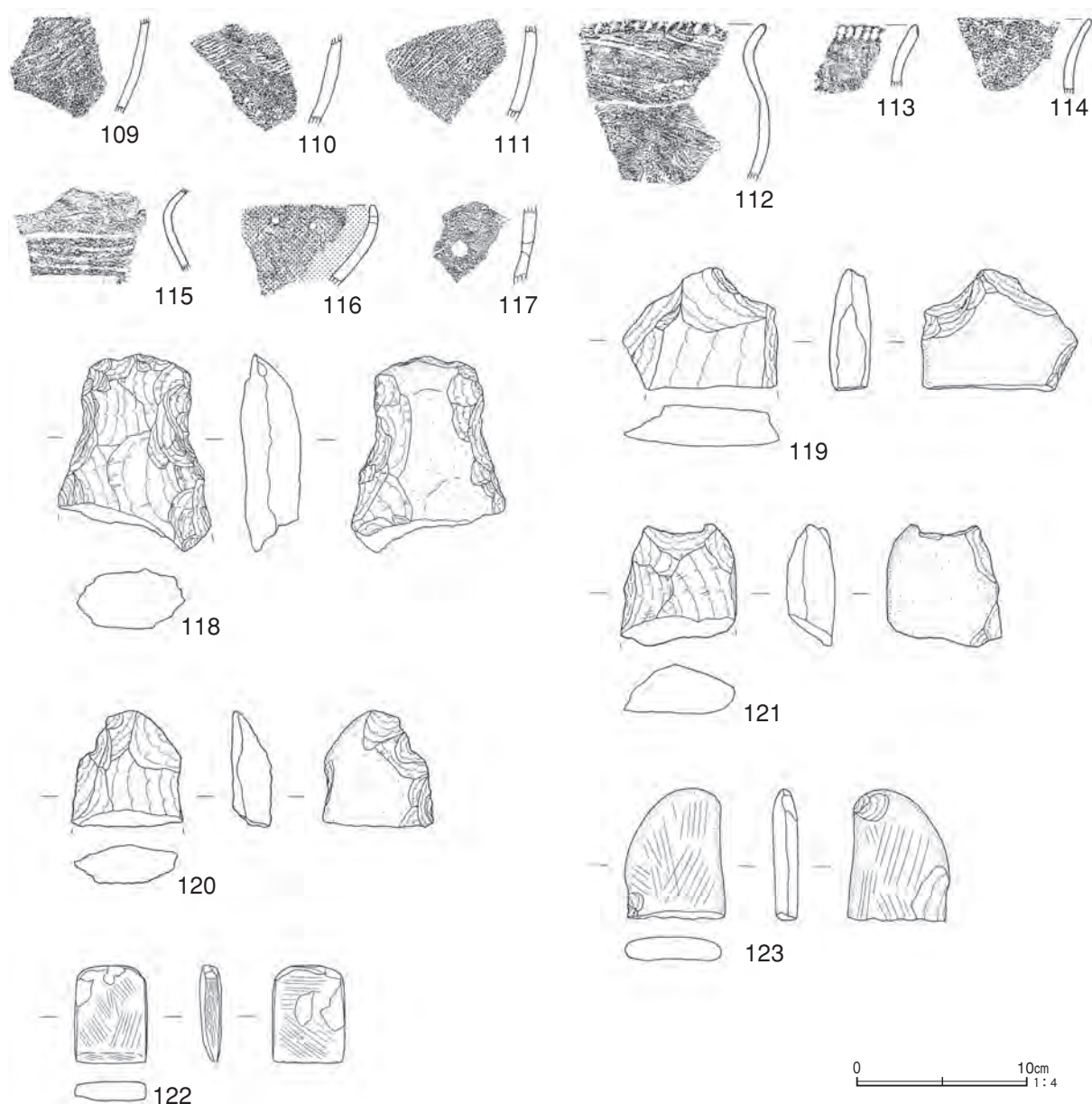


沈線間に赤彩の施されたLR単節縄文が充填されている。外面無文部の調整は横・斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。51～55は平行沈線下に弧線状を呈する文様が描かれた胴上部片。51の外面調整は横・斜位のヘラミガキである。52～54は沈線が太い。地文にLR単節縄文が施文されているが、まばらである。52・53は同一個体。52は弧線状の文様下にV字状の短沈線が描かれている。54は平行沈線上が無文で横位のヘラミガキ調整である。55は平行沈線と斜位の沈線間にのみLR単節縄文が充填されている。無文部の調整は横位のヘラミガキである。51～55の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。56・57は縄文の施文された胴上部片。56は無文部下にLR及びRL単節縄文で羽状文が施文されている。無文部の調整は横・斜位のヘラミガキである。57はLR単節縄文が施文されている。内面調整は56が横・斜位、57が横位のヘラナデである。58は逆T字状、59は十字状を呈する懸垂文が描かれた胴上部片。区画内に58はRL単節縄文、59は櫛歯状工具による直線文が充填されている。内面調整は58が横位、59が横・斜位のヘラナデである。58は内面に輪積痕が残る。60は複数の沈線が垂下する胴上部片。1条のみ波状沈線も垂下する。内面調整は横・斜位のヘラナデである。61～63は弥生時代中期中頃池上式の破片。61は複数の平行沈線間に半円形の刺突列が巡る。62・63は重四角文内に半円形の刺突列が充填されている。内面調整はすべて横位のヘラナデである。流れ込み。

6～8・16～22・64～115は甕。6は口縁部から頸部までの部位。口縁部は受け口状を呈し、頸部はほぼ直立する。文様は端部を含む口縁部にのみ施文されており、口縁端部がLR単節縄文、口縁部はRL及びLR単節縄文で羽状文が施文されている。頸部は無文で内外面とともにヘラナデ調整である。7・8は残存状態が良好である。7は口縁部がやや受け口状を呈し、頸部から胴上部までが膨らみ、以下底部まで直線的に下る。最大径は胴上部に持つ。文様は口縁部に5本一単位の櫛歯状工具による波状文が巡り、頸部は8本一単位の簾状文、胴部は頸部と同一の工具で縦位の羽状文が描かれている。外面調整はヘラナデ、内面は口縁部から胴上部までがヘラミガキ、以下はヘラナデである。8は口縁部から胴下部までの部位。口縁部が受け口状を呈し、頸部はすぼまる。胴部は膨らみ、球形を呈する。最大径を胴部中段に持つ。文様は端部も含め口縁部にLR単節縄文が施文され、山形状の沈線が2条巡る。胴部はコの字重ね文が描かれており、間に波状沈線が垂下する。内外面の調整はともにヘラナデである。16～22は胴下部から底部までの部位。16～19は外面調整がヘラミガキ、内面はヘラナデが主体となるが、18のみヘラミガキである。甕としたが、壺の可能性もある。17は外面に輪積痕が残る。20～22は内外面ともにヘラナデ調整である。

64～81は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は5本前後が多い。64～67は頸部に簾状文ないし直線文が巡る。65～67は口縁端部にLR単節縄文が施文されている。口縁部はすべて無文で64・66は横位のヘラナデ、65・67は横位のハケメ調整である。68～71は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。68は頸部に同一工具による簾状文、69はやや弧状を呈する直線文が巡る。72～76は胴部に横位の羽状文が描かれた破片。72・73は頸部に同一工具による簾状文が巡る。76は斜位のハケメ調整が残る。77～81は胴部に波状文が複数描かれた破片。77は頸部に同一工具による簾状文が巡る。口縁部は無文で横位のヘラナデ調整である。78は同一工具による直線文が垂下する。64～81の内面調整は、64～66・71・72・75・78・79が横位、70・73・77・80が斜位、74・81が横・斜位のヘラナデ、67は横位、76は斜位のハケメ、68は頸部が横位、胴上部が斜位のハケメ、69は頸部が横位、胴上部が斜位のヘラナデである。82～86





第46図 第12号住居跡出土遺物（4）

は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。82・83はボタン状貼付文が付く。85は波状沈線も垂下する。86は胴下部が無文で縦・斜位のへらなで調整である。内面調整はすべて横位のへらなでであるが、84・86は斜位のハケメも一部みられた。87～111は縄文が施文された破片。87～99は口縁部から胴上部までの破片。87・88は受け口状を呈する。端部も含め口縁部に87はLR、88はRL単節縄文が施文され、87は口縁部に波状沈線が2条巡る。ともに頸部は無文で横位のへらなで調整である。87は胴上部に平行沈線が巡り、下にLR単節縄文が施文されている。89～92は肥厚した口縁部に89はRL、90～92はLR単節縄文が施文されている。89・90・92は頸部が無文で横位のへらなでが施されているが、91は櫛歯状工具による短い直線文が斜位に描かれている。93・94は口縁端部と頸部以下にLR単節縄文が施文されている。口縁部はともに無文で横位のへらなで調整である。95～99は全面に縄文が施文されている。95・96はLR、97はRL単節縄文、98は無節R、99は無節Lである。98は口縁端部に刻みが施され、99はボタン状貼付文が付く。100～108は胴部中段の破片。100～105はLR、106はRL単節縄文、

第13表 第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	(15.0)	(5.2)	—	ABCHIKN	橙色	B	口～頸 25%	内外面所々磨耗。
2	弥生土器 壺	—	(9.65)	—	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	頸～胴 30%	内外面磨耗顕著。
3	弥生土器 壺	9.7	(10.8)	—	ABDHK	にぶい褐色	B	口～頸 80%	内外面磨耗顕著。
4	弥生土器 壺	(8.4)	(3.9)	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	口～頸 40%	内外面やや磨耗。
5	弥生土器 壺	—	(31.8)	(10.6)	ABEIK	にぶい黄橙色	B	肩～底 70%	外面やや磨耗、内面磨耗顕著。
6	弥生土器 甕	(29.2)	(6.9)	—	ABDEHIJ	にぶい橙色	B	口～頸 20%	内外面磨耗顕著。
7	弥生土器 甕	18.9	27.35	(6.4)	ABDEH	黒褐色	B	80%	内外面所々磨耗。
8	弥生土器 甕	(20.3)	(18.35)	—	ABCDEHIKN	暗赤灰色	B	口～胴 70%	内外面所々磨耗。
9	弥生土器 壺	—	(2.15)	(9.8)	ABCHIKN	灰黄褐色	B	底部 30%	底面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
10	弥生土器 壺	—	(2.45)	(8.6)	ABDHJKN	にぶい黄橙色	B	底部 40%	内外面磨耗顕著。
11	弥生土器 壺	—	(2.05)	(9.6)	ABDEIKN	浅黄橙色	B	底部 45%	外面やや磨耗。
12	弥生土器 壺	—	(2.15)	7.0	ABDEHIKN	にぶい黄橙色	B	底部 100%	外面所々剥離。
13	弥生土器 壺	—	(2.7)	(4.7)	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	底部 40%	内外面やや磨耗。
14	弥生土器 壺	—	(1.75)	5.0	ABDHIKMN	灰黄褐色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
15	弥生土器 壺	—	(1.2)	4.5	ABEHJKN	浅黄橙色	B	底部 100%	
16	弥生土器 甕	—	(7.1)	(11.0)	ABDHKN	黒褐色	B	胴～底 25%	内外面所々磨耗。
17	弥生土器 甕	—	(3.6)	6.5	ABHIKM	灰黄褐色	B	底部 80%	外面輪積痕有。
18	弥生土器 甕	—	(3.5)	6.4	ABDHIKN	にぶい橙色	B	底部 100%	
19	弥生土器 甕	—	(1.6)	6.0	ABDEIKN	橙色	B	底部 70%	
20	弥生土器 甕	—	(5.2)	7.0	ABDEHIKN	灰褐色	B	底部 80%	内外面やや磨耗。
21	弥生土器 甕	—	(3.8)	6.2	ABCDIN	橙色	B	底部 100%	
22	弥生土器 甕	—	(2.45)	(4.6)	ADGIKN	橙色	B	底部 45%	
23	弥生土器高坏	(19.9)	(4.9)	—	ABHKN	赤色	A	口～坏 25%	2個一對突起有。
24	弥生土器高坏	—	(5.3)	—	ABDEKN	橙色	B	接合部 100%	内外面磨耗顕著。
25	弥生土器高坏	—	(5.45)	—	ABDIKN	褐灰色	B	接～脚 50%	
26	弥生土器 鉢	(13.8)	7.4	(6.4)	ABIJK	赤褐色	B	20%	2個一對孔有。内外面赤彩、ほぼ剥落。
27	弥生土器 鉢	11.0	7.35	4.6	ABDEIKN	浅黄橙色	B	完形	内外面やや磨耗。
28	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	褐灰色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
29	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKMN	灰黄色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
30	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIJKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
31	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGHKN	灰黄褐色	B	肩～胴上片	
32	弥生土器 壺	—	—	—	ABGHIJKN	灰黄褐色	B	肩～胴上片	
33	弥生土器 壺	—	—	—	ABEH	にぶい黄橙色	B	肩～胴上片	内外面磨耗顕著。
34	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIJN	黒褐色	B	胴上部片	
35	弥生土器 壺	—	—	—	AGHIK	黒色	B	胴上部片	
36	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIKN	灰黄色	B	肩～胴上片	内外面磨耗顕著。
37	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	黒色	B	肩部片	
38	弥生土器 壺	—	—	—	ABCGIJN	橙色	B	肩部片	
39	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIK	浅黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
40	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	オリーブ黒色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
41	弥生土器 壺	—	—	—	AHIKN	黒色	B	胴上部片	
42	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴上～中片	
43	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
44	弥生土器 壺	—	—	—	ADHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
45	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	灰褐色	B	頸～肩部片	
46	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIKN	褐灰色	B	肩～胴上片	内面磨耗顕著。
47	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGIH	灰褐色	B	肩部片	
48	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	浅黄橙色	B	胴上部片	
49	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	褐灰色	B	胴上部片	
50	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIJK	にぶい橙色	B	胴上部片	
51	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHKN	にぶい橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
52	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDEHIKN	黒褐色	B	胴上部片	
53	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
54	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	黄灰色	B	胴上部片	
55	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴上部片	
56	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGIK	灰黄褐色	B	胴上部片	
57	弥生土器 壺	—	—	—	ABEGHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
58	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	浅黄橙色	B	胴上部片	内面輪積痕有。
59	弥生土器 壺	—	—	—	ABEGIKN	灰白色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
60	弥生土器 壺	—	—	—	ABDN	にぶい橙色	B	胴上部片	
61	弥生土器 壺	—	—	—	ABCGHKMN	橙色	B	頸～肩部片	内外面磨耗顕著。
62	弥生土器 壺	—	—	—	AHIKN	黄褐色	B	肩部片	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
63	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
64	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	褐灰色	B	口～頸部片	
65	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒色	B	口～頸部片	
66	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
67	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒色	B	口～頸部片	
68	弥生土器 甕	—	—	—	AGHIK	黒褐色	B	頸～胴上片	
69	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	褐灰色	B	頸～胴上片	
70	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒色	B	胴中段片	
71	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKMN	にぶい褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
72	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIK	明赤褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。
73	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEGHIK	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	
74	弥生土器 甕	—	—	—	ABEGIKN	黒褐色	B	胴中～下片	
75	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中～下片	
76	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIN	黒褐色	B	胴中段片	
77	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	口～胴中片	内外面磨耗顕著。
78	弥生土器 甕	—	—	—	AGHIKN	黒色	B	頸～胴中片	
79	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
80	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
81	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIK	灰黄褐色	B	胴中段片	
82	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIK	明赤褐色	B	胴上部片	
83	弥生土器 甕	—	—	—	BCDHN	橙色	B	胴上部片	
84	弥生土器 甕	—	—	—	ABEGHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中～下片	
85	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIK	黒褐色	B	胴中～下片	
86	弥生土器 甕	—	—	—	ACHIKN	灰黄褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
87	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	口～胴上片	内面磨耗顕著。
88	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	にぶい赤褐色	B	口～頸部片	
89	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
90	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	灰白色	B	口～頸部片	
91	弥生土器 甕	—	—	—	ABEGHIKN	黒褐色	B	口～胴上片	
92	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIKMN	黒色	B	口～頸部片	
93	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
94	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIKN	にぶい黄褐色	B	口～胴中片	
95	弥生土器 甕	—	—	—	ACHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	
96	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKM	黒色	B	口縁部片	
97	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	外面やや磨耗。
98	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	口縁部片	
99	弥生土器 甕	—	—	—	AHIN	黒色	B	口～頸部片	
100	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰褐色	B	胴中段片	
101	弥生土器 甕	—	—	—	AHKN	灰黄褐色	B	胴中段片	
102	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	灰色	B	胴中段片	
103	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	
104	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
105	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
106	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	外面やや磨耗。
107	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
108	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHKN	黒褐色	B	胴中段片	内面輪積痕有。
109	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHKN	黒色	B	胴中～下片	
110	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	黒色	B	胴中～下片	内面磨耗顕著。
111	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中～下片	
112	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	黒褐色	B	口～胴中片	
113	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
114	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	灰褐色	B	口～頸部片	
115	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHKMN	灰黄褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
116	弥生土器 鉢	—	—	—	ABCHIK	赤色	A	口～体部片	2個一対孔有。内外面赤彩、大半剥落。
117	弥生土器 鉢	—	—	—	ABHIKN	暗灰黄色	B	体部片	焼成後穿孔有。
118	打製石斧	最大長(11.6)cm、最大幅(8.7)cm、最大厚(3.4)cm。重量(367.5)g。基部のみ残。粘板岩製。							
119	打製石斧	最大長(7.0)cm、最大幅(9.0)cm、最大厚(2.4)cm。重量(193.5)g。基部のみ残。ホルンフェルス製。							
120	打製石斧	最大長(6.8)cm、最大幅(6.5)cm、最大厚(2.3)cm。重量(115.0)g。基部のみ残。ホルンフェルス製。							
121	打製石斧	最大長(7.0)cm、最大幅(6.55)cm、最大厚(2.8)cm。重量(165.0)g。基部のみ残。ホルンフェルス製。							
122	磨製石斧	最大長5.75cm、最大幅4.25cm、最大厚1.25cm。重量(59.5)g。所々欠。緑色岩製。							
123	磨石	最大長(7.65)cm、最大幅(5.8)cm、最大厚(1.4)cm。重量(81.5)g。半分欠。砂岩製。二面使用。							



107・108は附加条一種L R×Lが施文されている。109～111は胴部中段から下部までの破片。すべてL R単節縄文である。縄文下は無文で109は横・斜位、110・111は斜位のヘラナデ調整である。87～111の内面調整は、87～92・95～99・101・102・104・106・110が横位、103・111が斜位、105・107～109が横・斜位のヘラナデ、93・94は横・斜位、100は横位のハケメである。108は内面に輪積痕が残る。112・113は口縁端部に刻みを持つ破片。口縁端部以下は無文である。112は外面調整が斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデであるが、一部にハケメもみられた。113は外面が縦位に近い斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデ調整である。114は無文の口縁部から頸部までの破片。外面調整は斜位、内面は横位のヘラナデである。115は弥生時代中期中頃池上式の破片。口縁部は無文で横位のヘラナデ調整、頸部以下は平行沈線が複数巡る。内面調整は横位のヘラナデである。流れ込み。

23～25は高坏。外面及び坏部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ調整である。23は口縁部から坏部までの部位。口縁部がほぼ平らに大きく開き、坏部は内湾する。口縁端部には2個一対の突起が付く。内外面ともに赤彩が施されている。24・25は接合部から脚部上位までの部位。赤彩は施されていない。

26・27・116・117は鉢。26は口縁部から体部が内湾する。内外面ともにヘラミガキと赤彩が施されている。口縁部に2個一対の孔が設けられている。27は口縁部から体部がほぼ直線的に開く。内外面ともにヘラミガキ調整である。完形。116は口縁部から体部までの破片。内外面ともにヘラミガキと赤彩が施されているが、ヘラミガキは口縁部外面と内面が横位、体部外面は斜位に施されている。口縁部に2個一対の孔が設けられている。117は焼成後穿孔のある体部片。調整は外面が横・斜位、内面は斜位のヘラナデである。鉢としたが、甕の胴下部片の可能性が高い。

118～121は打製石斧。すべて基部のみの検出である。122は小型で扁平片刃の磨製石斧。ほぼ完形に近い。刃こぼれが一部みられた。123は磨石。二面使用している。半分を欠く。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

### 第13号住居跡（第47図）

第2次調査での検出であり、53・54-152・153グリッドに位置する。南側のみの検出であり、大半は調査区外にある。西側では15号溝跡に壁を一部切られている。

正確な規模及び主軸方向は不明であるが、検出できた南壁は4.35m程を測り、平面プランは隅丸方形ないし長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.6mと深く、床面はやや凹凸がみられた。覆土は14層（6～19層）確認された。下層に炭化物層が薄く堆積していた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピットは10基検出された。P1・2はその位置から支柱穴と思われる。P4～10は壁際に位置することから出入口に関連するものであろうか。

壁溝は検出できた範囲内を全周する。幅は0.5m、床面からの深さは0.1m前後を測る。

炉跡や貯蔵穴は確認されなかった。

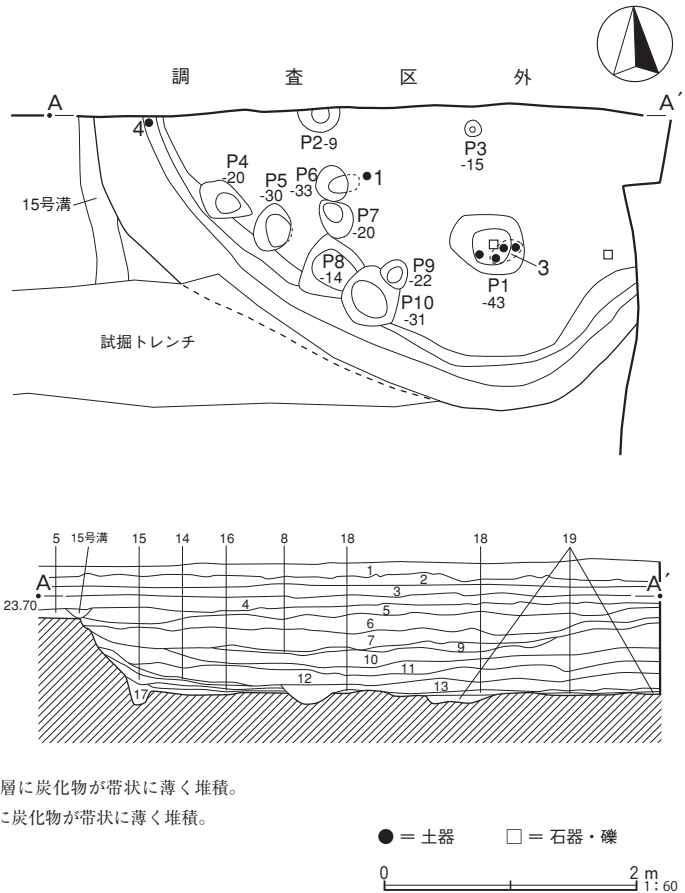
出土遺物（第48・49図）は、弥生土器壺（1～4・8～44）、甕（5・45～64）、高坏（6・7・65）、磨石（66・67）がある。比較的残存状態の良いものは床面直上及びピットから、破片は覆土から検出された。

1～4・8～44は壺。1は口縁部から胴上部までの部位。口縁部は逆ハの字に開き、頸部はほぼ直立する。胴部は中段に向かって大きく膨らむ。文様は胴部にのみみられ、全面にオオバコによる擬縄文が施文さ

第13号住居跡

土層説明 (AA')

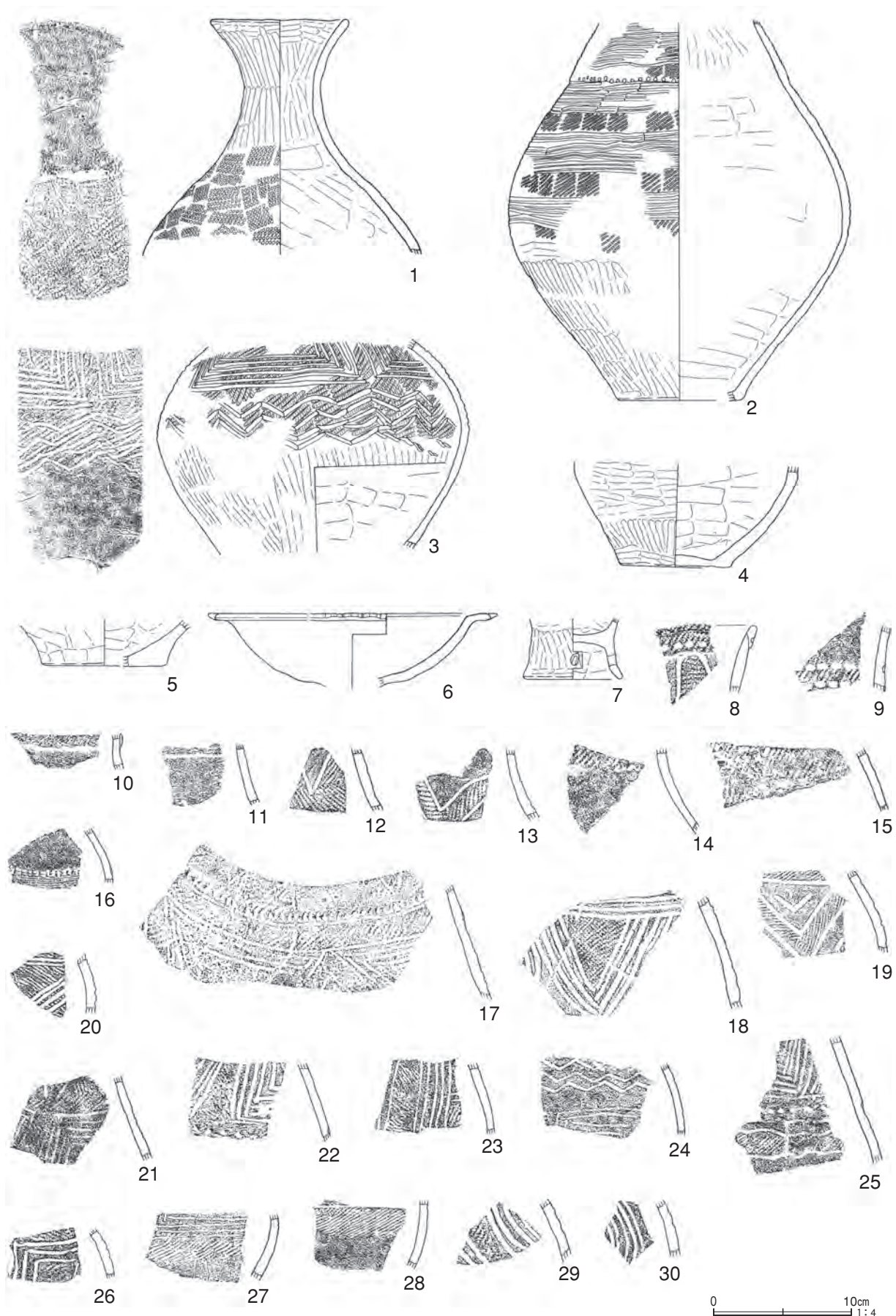
- 1 耕作土
- 2 灰オリブ色土
- 3 褐灰色土：しまりなし。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、白色粒少量含む。
- 6 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 7 灰白色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。
- 8 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒多量、炭化物少量含む。
- 9 灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰白色粒少量含む。
- 10 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒多量、炭化物少量含む。9層より明るい。
- 11 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒多量、炭化物少量含む。10層より明るい。
- 12 灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒少量含む。11層より暗い。
- 13 灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒少量含む。12層より暗い。
- 14 暗灰色土：粘土質。酸化鉄多量、焼土粒、炭化物少量含む。
- 15 灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 16 灰白色土：シルト質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。上層に炭化物が帯状に薄く堆積。
- 17 オリブ灰色土：シルト質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。上層に炭化物が帯状に薄く堆積。
- 18 炭化物層
- 19 オリブ灰色土：シルト質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。



第47図 第13号住居跡

れている。口縁部から頸部までは無文で内面も含めヘラミガキ、肩部以下の内面はヘラナデが施されている。2は肩部から底部までの部位。肩部と胴上部の境に段を持ち、胴部は球形を呈する。文様は肩部から胴部中段まで2本一単位の櫛歯状工具による複数の直線文とLR単節縄文が交互に施文されており、段下に半円形の刺突列が巡る。胴下部外面と肩部内面はヘラミガキ、胴上部以下の内面はヘラナデ調整である。3は胴上部から下部までの部位。ややつまった球形を呈する。文様は無節L地に重四角文と一部波状を呈する山形状の沈線が4～5条巡る。胴下部外面の調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。4は胴下部から底部までの部位。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。

8は口縁部から頸部までの破片。端部も含め肥厚した口縁部にLR単節縄文が施文され、下に四角形状を呈する刺突列が巡る。以下は楕円形状の文様が垂下し、区画内にLR単節縄文が充填されている。縄文施文部は赤彩が施されている。内面調整は横位のヘラミガキである。9～11は頸部から肩部までの破片。9は斜位のヘラミガキ調整による無文部下に四角形状を呈する刺突列が2列巡る。刺突列間はLR単節縄文が施文されるが、一部上にはみ出ている。10はLR単節縄文が施文された突帯が巡る。下は無文で横位のヘラミガキ調整である。11は平行沈線下が無文で横・斜位のヘラミガキ調整である。内面調整は9が斜位、10・11が横・斜位のヘラナデである。11は内面に輪積痕が残る。12～14は肩部片。12は鋸歯文下にRL、13は2条の波状沈線間にLR単節縄文が充填されている。12・13の無文部は12が横・斜位、13が縦・斜位のヘラミガキ調整である。14はLR単節縄文下が無文で横・斜位のヘラミガキ調整である。12～14の内面調整は12・14が横位、13は上位が横位、下位が縦位のヘラナデである。15・16は胴上部片。

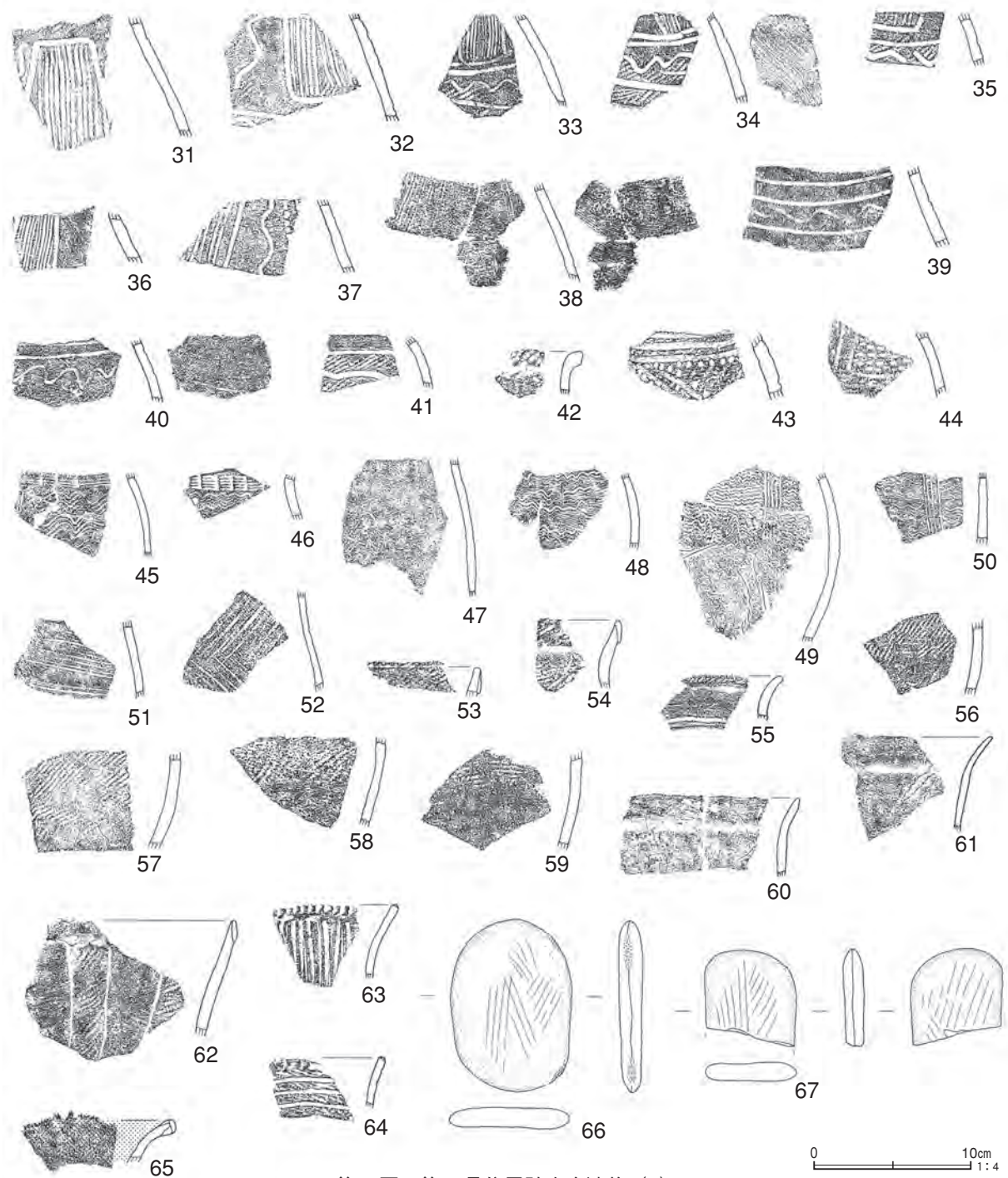


第48图 第13号住居跡出土遺物 (1)



15は全面にLR単節縄文が施文されている。内面調整は横位のヘラナデである。16は刺突列と単位不明の櫛歯状工具による直線文が巡る。刺突は2個一対で縦位に刻まれている。外面無文部の調整は縦・斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。17～20は重三角文が描かれた破片。17は肩部と胴上部境に段を持ち、段上に鋸歯文、下に半円形の刺突列と平行沈線が巡り、沈線間はLR単節縄文が充填されている。18は沈線が太く、区画内は赤彩の施されたLR単節縄文が施文されている。19は沈線間にLR単節縄文が充填され、中央にV字状の文様が描かれている。20は無節R地に描かれている。17～20の内面調整は、17・18が横・斜位、19・20が横位のヘラナデである。21～27は重四角文が描かれた破片。21は上に鋸歯文が描かれ、鋸歯文下にLR単節縄文が充填されている。22・23は間に縄文が施文されており、22はRL単節縄文、23は無節Rである。22は下に半円形の刺突列が巡る。24は上に山形状の沈線が複数巡る。25は重四角文下に段を持ち、段下に半円形の刺突列と波状沈線が2条巡り、波状沈線間にLR単節縄文が充填されている。26は重四角文上にRL、区画内にLR単節縄文が施文されている。27は下にLR単節縄文が施文され、以下は無文で斜位のヘラミガキ調整である。21～27の内面調整は21・23・27が横・斜位、22・24～26が横位のヘラナデである。28は胴部中段から下部までの破片。平行沈線下にLR単節縄文が施文されている。以下は無文で横位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデ調整である。29・30はフラスコ文が描かれた胴上部片。29は下に弧線文が巡り、間にRL単節縄文が充填されている。内面調整は29が横位、30が横・斜位のヘラナデである。31～37は短冊状を呈する文様が描かれた胴上部片。区画内に櫛歯状工具による直線文が充填されている。31・32・37は同一個体。短冊文様脇は波状沈線と半円形の刺突列が垂下し、下は平行沈線と波状沈線が巡る。無文部の調整は斜位のヘラミガキであるが、部分的に斜位のハケメが残る。33～35は短冊文様下に平行沈線と波状沈線が巡り、LR単節縄文が施文されている。33は2条の平行沈線間に縄文と波状沈線が施文されている。34は平行沈線間に波状沈線が巡り、縄文は波状沈線下に平行沈線を跨いで施文されている。35は平行沈線下に波状沈線と縄文が施文されているが、波状沈線は途切れている。31～37の内面調整は31・32が横・斜位、33・35～37が横位のヘラナデ、34が斜位のハケメである。38は単位不明の櫛歯状工具による直線文が垂下する胴上部片。外面無文部と内面の調整は、ともに横・斜位のハケメである。39～41は平行沈線と波状沈線が描かれた破片。39は平行沈線間に波状沈線が巡る。外面無文部の調整は横・斜位のヘラミガキであるが、一部に斜位のハケメが残る。40は平行沈線下に波状沈線が巡り、下にLR単節縄文が施文されている。41は無文部下に平行沈線が巡り、下に附加条一種Lと波状沈線が施文されている。無文部の調整は横位のヘラミガキである。39～41の内面調整は39が横・斜位、41が横位のヘラナデ、40が横・斜位のハケメである。42～44は弥生時代中期中頃池上式の破片。42は口縁部片。肥厚した口縁端部にLR単節縄文が施文されており、以下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整である。43は重三角文、44は重四角文が描かれている。区画内はともに半円形の刺突列が充填されるが、43は区画に沿って、44は列状に施文されている。43は中央にLR単節縄文も施文されている。内面調整は42が横位のヘラミガキ、43が横・斜位、44が斜位のヘラナデである。流れ込み。

5・45～64は甕。5は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。45～52は櫛歯状工具により文様が描かれた破片。櫛歯の単位は4～5本が多い。45～50は胴部に波状文が複数巡る。45～47は頸部に同一工具による簾状文が巡る。48は波状文下に横・斜位のハケメ調整が所々残る。49・50は同一工具による直線文が垂下する。49の胴下部は横・斜位のヘラナデ調整である。51・52は羽状文が描かれた胴上部片。51



第49図 第13号住居跡出土遺物 (2)

は縦位、52は横位に描かれている。45～52の内面調整は、45・50が横・斜位、46～48・51・52が横位、49は胴上部から中段までが横位、以下は斜位のヘラナデである。53～59は縄文が施文された破片。53～55は口縁部から頸部までの破片。53は端部も含め肥厚した口縁部、54は肥厚した口縁部と無文部を挟んだ頸部下位、55は口縁端部のみにLR単節縄文が施文されている。55は口縁部が無文で横位のヘラナデが施されており、頸部に平行沈線が巡る。56～59は胴部中段から下部までの破片。56～58はLR単節縄文、59のみ無節Rが施文されている。胴部の無文部は56・57が横位、58・59は横・斜位のヘラナデ調整である。60・61は無文で口縁部から頸部までの破片。内外面は60が横・斜位、61は横位の

第14表 第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	10.0	(17.1)	—	ABDEGHIN	にぶい橙色	B	口~胴 70%	
2	弥生土器 壺	—	(27.65)	(9.2)	ABCIKN	にぶい黄橙色	B	肩~底 65%	内面磨耗顕著、外面所々磨耗。P5・8・10出土。
3	弥生土器 壺	—	(15.1)	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	胴部 30%	内面磨耗顕著、外面やや磨耗。
4	弥生土器 壺	—	(7.5)	8.1	ABCDEHIKN	にぶい橙色	B	胴~底 60%	
5	弥生土器 甕	—	(2.4)	9.0	ABDIKN	灰黄褐色	B	底部 50%	外面磨耗顕著。
6	弥生土器高坏	(20.0)	(5.4)	—	ABDIKN	黄灰色	B	口~坏 20%	3個一對突起有。内外面赤彩、磨耗顕著。
7	弥生土器高坏	—	(4.45)	(7.2)	AEHIN	灰黄褐色	B	接~脚 70%	孔有。
8	弥生土器 壺	—	—	—	ABEGHIKN	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	外面縄文施文部赤彩。
9	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	灰黄色	B	頸部片	外面上位磨耗顕著。
10	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい橙色	B	頸部片	
11	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIK	にぶい黄褐色	B	頸~肩部片	内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
12	弥生土器 壺	—	—	—	ABGHIJK	にぶい黄褐色	A	肩部片	
13	弥生土器 壺	—	—	—	ADEGHIKN	褐灰色	B	肩部片	
14	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい橙色	B	肩部片	外面やや磨耗。
15	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIK	にぶい橙色	B	胴上部片	
16	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴上部片	
17	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄灰色	B	肩~胴上片	外面やや磨耗。
18	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	
19	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGHKN	灰黄色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
20	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	赤褐色	B	胴上部片	
21	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
22	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
23	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIJKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
24	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
25	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIKN	浅黄橙色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
26	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGHKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
27	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中~下片	
28	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIJKN	暗灰黄色	B	胴中~下片	
29	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDGIK	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
30	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
31	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIJKN	灰黄色	B	胴上部片	No.32・37と同一個体。
32	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIJKN	にぶい黄色	B	胴上部片	No.31・37と同一個体。
33	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	黒褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
34	弥生土器 壺	—	—	—	ABEGHKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
35	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHKN	灰白色	B	胴上部片	
36	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEGIJN	にぶい黄褐色	A	胴上部片	
37	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIKN	浅黄褐色	B	胴上部片	No.31・32と同一個体。
38	弥生土器 壺	—	—	—	ABGIMN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
39	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	灰白色	B	肩部片	外面やや磨耗。
40	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDHIN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内面やや磨耗。
41	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHI	灰白色	B	胴上部片	
42	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIN	淡黄色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
43	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
44	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDEHIN	にぶい橙色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
45	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIK	灰黄褐色	B	頸~胴上片	内面磨耗顕著。
46	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIM	黒褐色	B	頸~胴上片	
47	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	暗オリーブ褐色	B	頸~胴中片	外面磨耗顕著。
48	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIJ	暗灰黄色	B	胴上部片	
49	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIJ	にぶい橙色	B	胴上~下片	内外面磨耗顕著。
50	弥生土器 甕	—	—	—	AGHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
51	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIK	黒褐色	B	胴上部片	
52	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
53	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	黄灰色	B	口縁部片	内外面やや磨耗。
54	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIJKN	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	内外面やや磨耗。
55	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKM	黒色	B	口~頸部片	内面磨耗顕著。
56	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	黒褐色	B	胴中~下片	
57	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴中~下片	
58	弥生土器 甕	—	—	—	AEHIN	橙色	B	胴中~下片	内外面磨耗顕著。
59	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIK	にぶい褐色	B	胴中~下片	
60	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEGIKN	浅黄色	B	口~頸部片	
61	弥生土器 甕	—	—	—	ABGIKN	灰黄褐色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
62	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHKN	灰黄色	B	口~頸部片	



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
63	弥生土器 甕	—	—	—	AGHIN	黒褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
64	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIKN	灰黄褐色	B	口縁部片	
65	弥生土器高坏	—	—	—	ABCHIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	内外面赤彩、大半剥落。磨耗顕著。
66	磨石	最大長11.2cm、最大幅7.9cm、最大厚1.55cm。重量180.5g。完形。砂岩製。一面使用。敲打器兼。							
67	磨石	最大長(6.3)cm、最大幅(5.95)cm、最大厚(1.3)cm。重量(64.0)g。半分欠。砂岩製。二面使用。							

ヘラナデ調整である。62～64は弥生時代中期中頃池上式の破片。62は肥厚した口縁部下から頸部まで2条の沈線が懸垂文状に垂下し、間にLR単節縄文が充填されている。口縁部は磨耗が著しいため調整・文様が不明であるが、以下の無文部は横・斜位のヘラミガキ調整である。63は口縁端部に刻みを持ち、以下は単位不明の櫛歯状工具による沈線が垂下する。64も口縁端部に刻みを持ち、口縁部は無節R地に平行沈線が複数巡る。内面調整は62が横・斜位、63・64が横位のヘラナデである。

6・7・65は高坏。6は口縁部から坏部までの部位。口縁部がほぼ平らに大きく開き、坏部は内湾する。口縁端部には3個一対の突起が付く。磨耗が著しいため、調整や赤彩が施されているかは不明である。7は接合部から脚部までの部位。脚部の開きが小さく、ほぼ直立に近い。調整は外面及び坏部内面がヘラミガキ、脚部内面はヘラナデである。脚部には孔が対角線上に2つ設けられている。65は口縁部片。端部に中央部が窪んだ突起が付き、2個一対の突起状を呈する。内外面ともに横位のヘラミガキと赤彩が施されている。

66・67は磨石。66は一面、67は二面使用しており、66は敲打器を兼ねる。66は完形、67は半分欠く。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

#### 第14号住居跡(第50図)

第2次調査での検出であり、53・54-153グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられず、南側が調査区外にある。

本住居跡はやや軸が異なるが、北西方向に拡張が行われていた。正確な規模及び主軸方向は不明であるが、長軸は拡張前が4.7m、拡張後が5.7m、短軸は4.6m程を測る。平面プランは拡張前が隅丸方形ないし長方形、拡張後はややいびつな隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは拡張前と後で異なり、拡張前は0.5m、後が0.35m前後を測り、拡張前の方が深く掘り込まれていた。床面はいずれもほぼ平坦であった。覆土は9層(1～9層)確認された。このうち9層は拡張に伴う埋土である。それ以外はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

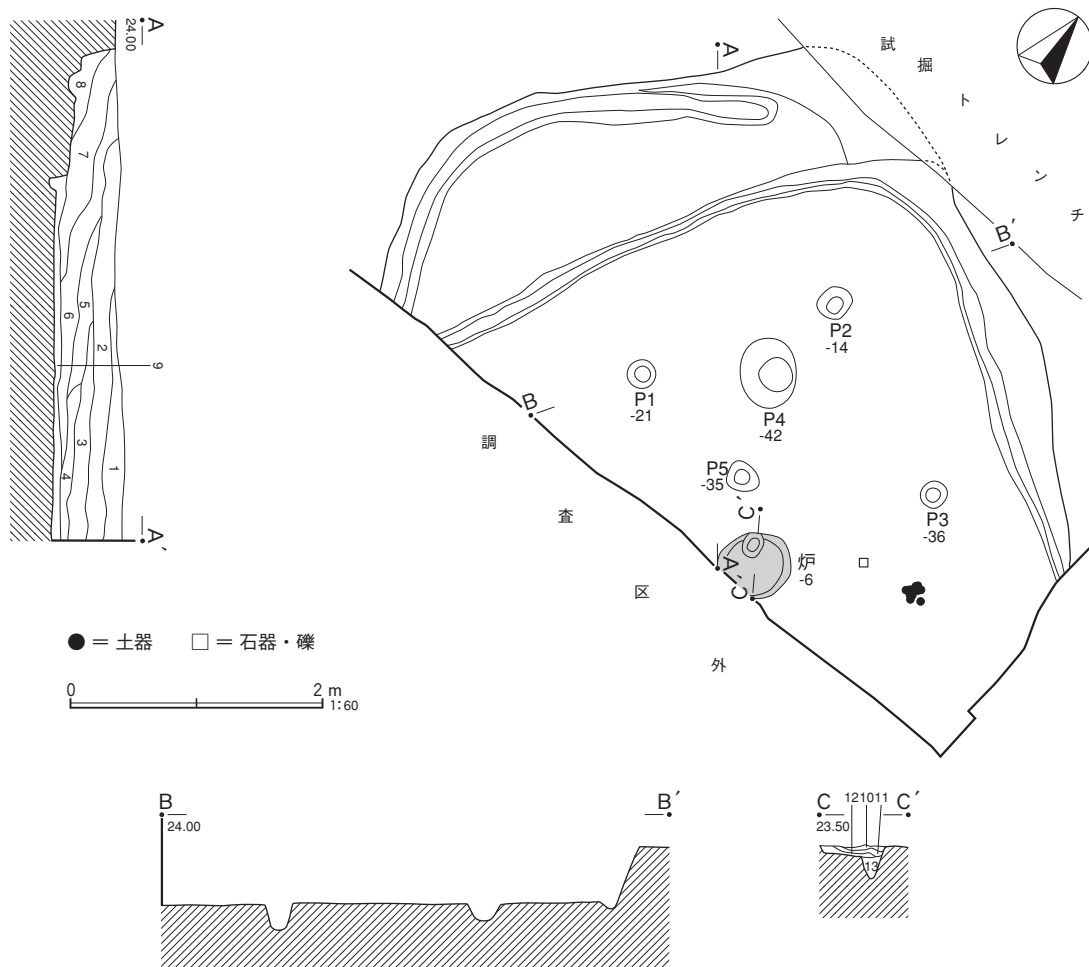
炉跡は床面ほぼ中央に位置すると思われる。南側立ち上がりが調査区外にあるが、径0.55m前後の楕円形を呈すると思われる。床面からの深さは0.06mと浅いが、北側は深さ0.27mのピット状を呈していた。覆土は4層(10～13層)確認された。

ピットは5基検出された。P1～3はその位置から支柱穴と思われ、P4も拡張に伴う柱穴であろうか。

壁溝は拡張後の北東隅が切れるが、その他は全周する。幅は拡張前が0.4m前後、拡張後が0.25m前後が主体となる。床面からの深さは拡張前が0.05m、拡張後が0.07m程である。

貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物(第51図)は、弥生土器壺(1・2・8～16)、甕(3～6・17～35)、高坏(7・36)、搔器(37)、磨石(38)、砥石(39)がある。残存状態の良好なものはなく、破片が多い。すべて覆土からの検出であり、床面直上の遺物に図示可能なものはみられない。



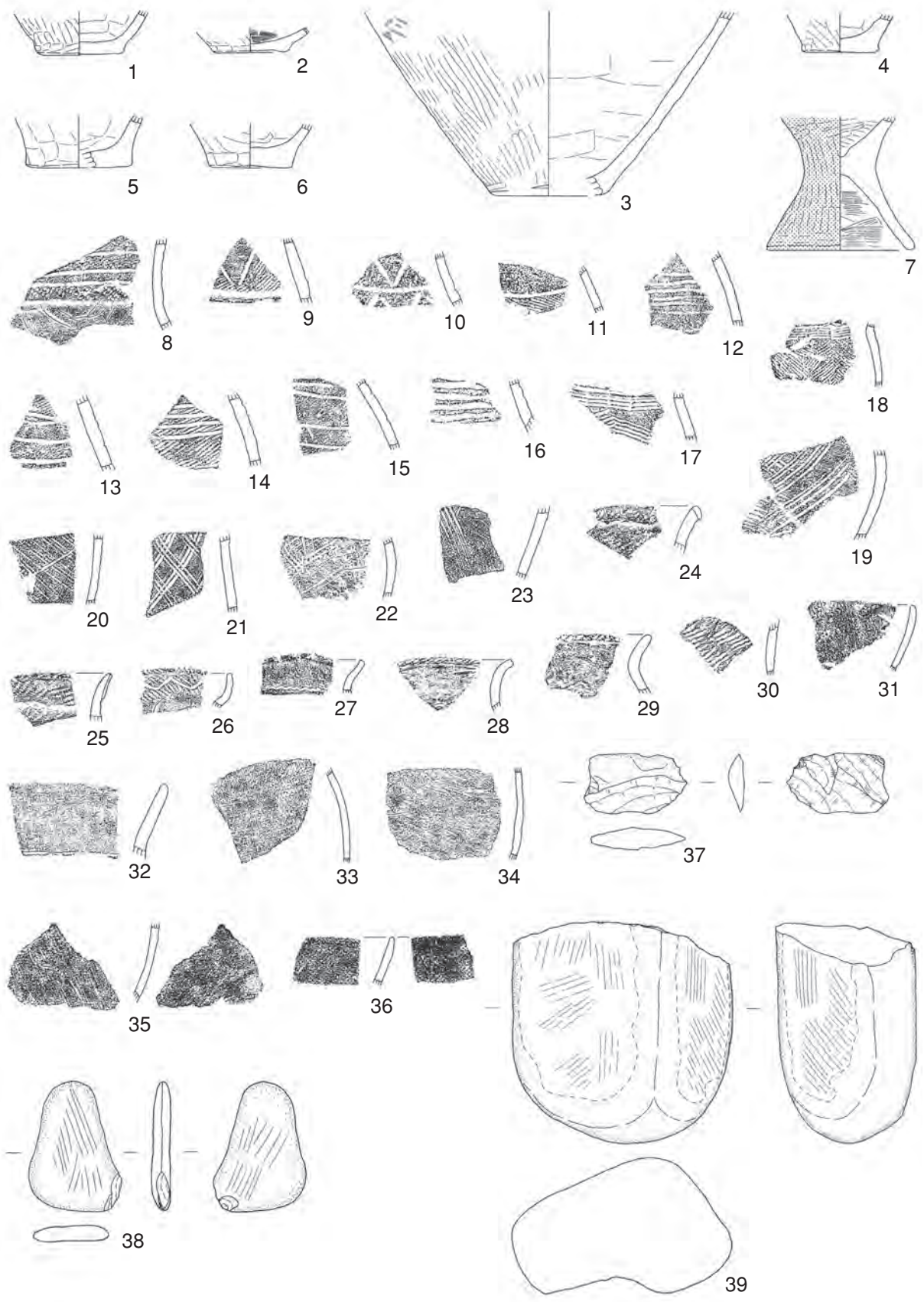
第14号住居跡

土層説明 (A-A' C-C')

- |   |                                  |
|---|----------------------------------|
| 1 青黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。         | 7 灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。  |
| 2 青黒色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。1層よりやや明るい。 | 8 灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。7層より暗い。 |
| 3 灰白色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。          | 9 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色土多量含む。埋戻土。      |
| 4 灰色土：シルト質。灰白色土多量、酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。    | 10 灰色粘土：焼土、炭化物多量含む。              |
| 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色土、マンガン粒少量含む。       | 11 焼土層                           |
| 6 灰白色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、灰白色土、マンガン粒少量含む。     | 12 灰色粘土：焼土、炭化物少量含む。10層より明るい。     |
|   | 13 灰色粘土：炭化物少量含む。12層より暗い。         |

第50図 第14号住居跡

1・2・8～16は壺。1・2は底部。調整は外面がヘラミガキ、内面は1がヘラナデ、2がハケメである。8は頸部片。平行沈線が4条巡り、上下の沈線間にRL単節縄文が充填されている。平行沈線上下は無文で横位のヘラミガキ調整である。内面調整は横・斜位のヘラナデである。9・10は鋸歯文が描かれた肩部片。9は下にLR単節縄文が充填されており、以下に平行沈線が巡る。10は平行沈線の上下に描かれている。9・10の内面調整は9が横・斜位、10が横位のヘラナデである。11～15は平行沈線が巡る胴上部片。11は上位が無文で横位のヘラミガキ調整、平行沈線下はRL単節縄文が施文されている。12は6条の平行沈線上下にRL単節縄文が施文されている。13は複数の平行沈線間にLR単節縄文が交互に充填されている。14は地文にLR単節縄文が施文され、上位に平行沈線が複数巡る。15は平行沈線間が一定していない。無文部の調整は横位のヘラミガキである。11～15の内面調整は、11・14が横・斜位、12が斜位、



0 10cm 1:4

第51图 第14号住居跡出土遺物



第15表 第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(3.05)	6.0	ABHIKN	にぶい褐色	B	底部 100%	
2	弥生土器 壺	—	(1.7)	5.1	ADHIKN	にぶい黄橙色	B	底部 60%	内外面やや磨耗。
3	弥生土器 甕	—	(13.1)	(8.2)	ABDIKN	にぶい赤褐色	B	胴～底 20%	外面所々磨耗、内面磨耗顕著。
4	弥生土器 甕	—	(2.6)	(5.4)	AHIKN	黒褐色	B	底部 50%	内外面やや磨耗。
5	弥生土器 甕	—	(3.65)	(7.5)	ABEHIKMN	にぶい黄褐色	B	底部 40%	内外面磨耗顕著。
6	弥生土器 甕	—	(3.1)	5.8	AHIKN	明赤褐色	B	底部 100%	
7	弥生土器高坏	—	(9.25)	10.4	ABDEIKN	にぶい黄橙色	B	接～脚 90%	外面赤彩、大半剥落。
8	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	黄灰色	B	頸部片	
9	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
10	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	灰黄色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
11	弥生土器 壺	—	—	—	ABEGHIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
12	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
13	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIJKM	灰白色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
14	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEGHIKN	黒褐色	B	胴上部片	
15	弥生土器 壺	—	—	—	ABCGIJKN	オリーブ黒色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
16	弥生土器 壺	—	—	—	ABGHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
17	弥生土器 甕	—	—	—	AGHIKN	黒色	B	頸～胴上片	
18	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	にぶい褐色	B	頸～胴上片	
19	弥生土器 甕	—	—	—	ADIKN	灰褐色	B	胴中段片	
20	弥生土器 甕	—	—	—	ABEGHIN	灰黄褐色	B	胴中段片	
21	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKMN	黒褐色	B	胴上部片	
22	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHIKN	にぶい赤褐色	B	胴中段片	
23	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	褐灰色	B	胴下部片	
24	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	
25	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKM	黒褐色	B	口～頸部片	
26	弥生土器 甕	—	—	—	AGHIK	黒色	A	口～頸部片	
27	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒色	B	口～頸部片	
28	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	
29	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
30	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	にぶい黄褐色	B	頸部片	
31	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
32	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	
33	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	胴上部片	No.34・35 と同一個体。
34	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHIK	オリーブ黒色	B	胴中段片	No.33・35 と同一個体。
35	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	褐灰色	B	胴下部片	No.33・34 と同一個体。
36	弥生土器高坏	—	—	—	ABEHI	赤色	B	口縁部片	内外面赤彩、大半剥落。
37	搔器	最大長4.2cm、最大幅6.75cm、最大厚1.55cm。重量34.5g。完形。砂岩製。							
38	磨石	最大長9.15cm、最大幅6.5cm、最大厚1.35cm。重量79.5g。完形。砂岩製。二面使用。敲打器兼。							
39	砥石	最大長(16.6)cm、最大幅(15.35)cm、最大厚(9.65)cm。重量(3,200)g。半分欠。砂岩製。二面使用。							

13・15が横位のヘラナデである。16も平行沈線が複数巡る胴上部片であるが、沈線の幅が太い。内面調整は横・斜位のヘラナデである。弥生時代中期中頃池上式に相当し、流れ込みと思われる。

3～6・17～35は甕。3～6は胴下部から底部までの部位。3は胴下部上位に櫛歯ないしハケメで羽状文が描かれている。下位の調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。4は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。甕としたが、壺の可能性もある。5・6は内外面ともにヘラナデ調整である。17～19は櫛歯状工具で文様が施文された破片。櫛歯の単位は4～5本が多い。17～20は胴部に羽状文が描かれた破片。17～19は縦位、20のみ横位に描かれている。17・18は頸部に同一工具による簾状文が巡る。17～20の内面調整は17が斜位のハケメ、18・20が横位、19が斜位のヘラナデである。21～23は胴部に斜格子文が描かれた破片。22は粗雑に描かれている。21～23の内面調整は21・23が横位、22が横・斜位のヘラナデである。24～30は縄文が施文された破片。24～29は口縁部から頸部までの破片。26のみ受け口状を呈する。縄文は24・25が肥厚した口縁部以下、26は端部も含む口縁部、27～29は口縁端部のみ施文されている。24・25・28・29はLR、26はRL単節縄文、27は無節Lである。26は頸部が

無文で横位のヘラナデ調整である。27～29は口縁部が無文で横位のヘラナデが施されており、頸部に27は波状沈線、28は単位不明の波状文、29はLR単節縄文が施文されている。30は頸部片。全面に無節Lが施文されている。24～30の内面調整はすべて横位のヘラナデである。31・32は口縁部が無文の破片。調整は31が内外面ともに横・斜位、32は口縁部上位の外側と内面が横位、口縁部下位以下が横・斜位のヘラナデである。頸部は31が平行沈線、32が単位不明の櫛歯状工具による簾状文ないし直線文が巡る。33～35は無文の胴上部から下部までの破片であり、同一個体。外面調整はすべて横・斜位のハケメであるが、内面は33・34が横・斜位のヘラナデ、35は斜位のハケメである。

7・36は高坏。7は接合部から脚部までの部位。器高が高く、脚部はハの字に開く。外面及び坏部内面はヘラミガキ、脚部内面はハケメ調整である。外面は赤彩が施されている。36は口縁部片。内外面ともに横位のヘラミガキと赤彩が施されている。

37は搔器と思われる石器、38は磨石、39は砥石である。38は敲打器を兼ねる。39は二面使用している。37・38は完形、39は半分を欠く。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

## 2 溝 跡

### 第1号溝跡（第52図）

第1次調査での検出であり、58・59-140グリッドに位置する。東側で1号住居跡と重複し、1号住居跡の覆土断面に本溝跡の痕跡が認められなかったことから本溝跡が切られているとも思われたが、新旧関係については不明と言わざるを得ない。

東西方向にやや蛇行して走る。西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは3.28m、幅は0.3m前後を測る。確認面からの深さは0.15m程であり、断面形は船底状を呈する。覆土は2層（3・4層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は無く、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

### 第2号溝跡（第52図）

第1次調査での検出であり、59-140・141グリッドに位置する。調査区外で北側を走る1号溝跡、南側で5号溝跡と重複すると思われるが、新旧関係等は不明である。

南北方向に弧を描きながら走り、両端以降は調査区外に延びる。検出された長さは5.14m、幅は0.25m前後を測る。確認面からの深さは0.12m程であり、断面形は船底状を呈する。覆土は青灰色土（1層）のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物は、弥生土器甕（第55図2-1）のみである。1は口縁部から頸部までの破片。内外面ともに横位のヘラナデ調整であり、口縁部に波状沈線が巡る。

遺物は本溝跡に伴うものか不明である。よって、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

### 第3号溝跡（第52図）

第1次調査での検出であり、58・59-141グリッドに位置する。58・59グリッド境で立ち上がりの一部を1号火葬跡、東端では7号土坑に切られている。また所々で時期不明のピット、西側では4・5号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。ただし、4・5号溝跡とは同時期に存在していた可能性が高い。

59-141 グリッドでは南西から北東方向へ走るが、58-141 グリッドからは南東方向に走り、調査区外に延びる。検出された長さは6.89m、幅は西側が0.3m前後、東側が0.5～0.83mで幅広い。確認面からの深さは0.2m程であり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は西側では粘土質の灰白色土（2層）、東側では4層（1～4層）確認された。東側がレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第55図）は、弥生土器壺（3-1・2）、甕（3-3）、鉢（3-4）がある。1は肩部片。磨耗が著しいため定かではないが、段上に鋸歯文が描かれ、下に波状沈線が2条巡る。2は胴部中段の破片。弧線文下が無文で横・斜位のハケメ調整である。1・2の内面調整はともに横位のヘラナデである。3は口縁部から頸部までの破片。口縁端部にLR単節縄文が施文され、以下は内面とともに横位のヘラナデ調整である。4は口縁部から体部までの破片。内外面ともに横位のヘラミガキと赤彩が施されている。口縁部には1つのみ孔が設けられている。

遺物は本溝跡に伴うものか不明である。よって、本溝跡の時期は重複する遺構との新旧関係から7号土坑以前としか言えない。

#### 第4号溝跡（第52図）

第1次調査での検出であり、58・59-141・142グリッドに位置する。北側で3号溝跡、南側で5号溝跡に接続しており、同時期に存在していた可能性が高い。所々で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

南東から北西方向に蛇行しながら走る。検出された長さは3.13mと短く、幅は北側が0.15～0.27m、南側が0.55m前後を測り、北から南に幅広となる。確認面からの深さは0.15m前後であり、断面形は幅狭の北側が船底状、幅広の南側が逆台形状を呈する。覆土は粘土質の灰白色土（2層）のみであり、5・6号溝跡と同じであった。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第55図）は、弥生土器壺（4-1・2）、甕（4-3）、高坏（4-4）がある。1・2は壺の肩部片。1は磨耗が著しいため定かではないが、上位に無節LかLR単節縄文が施文され、下に2条の平行沈線と間に波状沈線が巡る。2はLR単節縄文地に平行沈線が複数巡り、一部の平行沈線間のみ波状沈線が巡る。1・2の内面調整は1が横位、2が横・斜位のヘラナデである。3は甕の頸部から胴上部までの破片。頸部に単位不明の櫛歯状工具による簾状文が巡り、胴上部は同一工具で波状文が描かれている。内面調整は横位のヘラナデである。4は高坏の口縁部片。内側が肥厚する。内外面ともに横位のヘラミガキと赤彩が施されている。

遺物は本溝跡に伴うものか不明である。よって、本溝跡の時期は重複する遺構との新旧関係から3・5号溝跡と同じく7号土坑以前としか言えない。

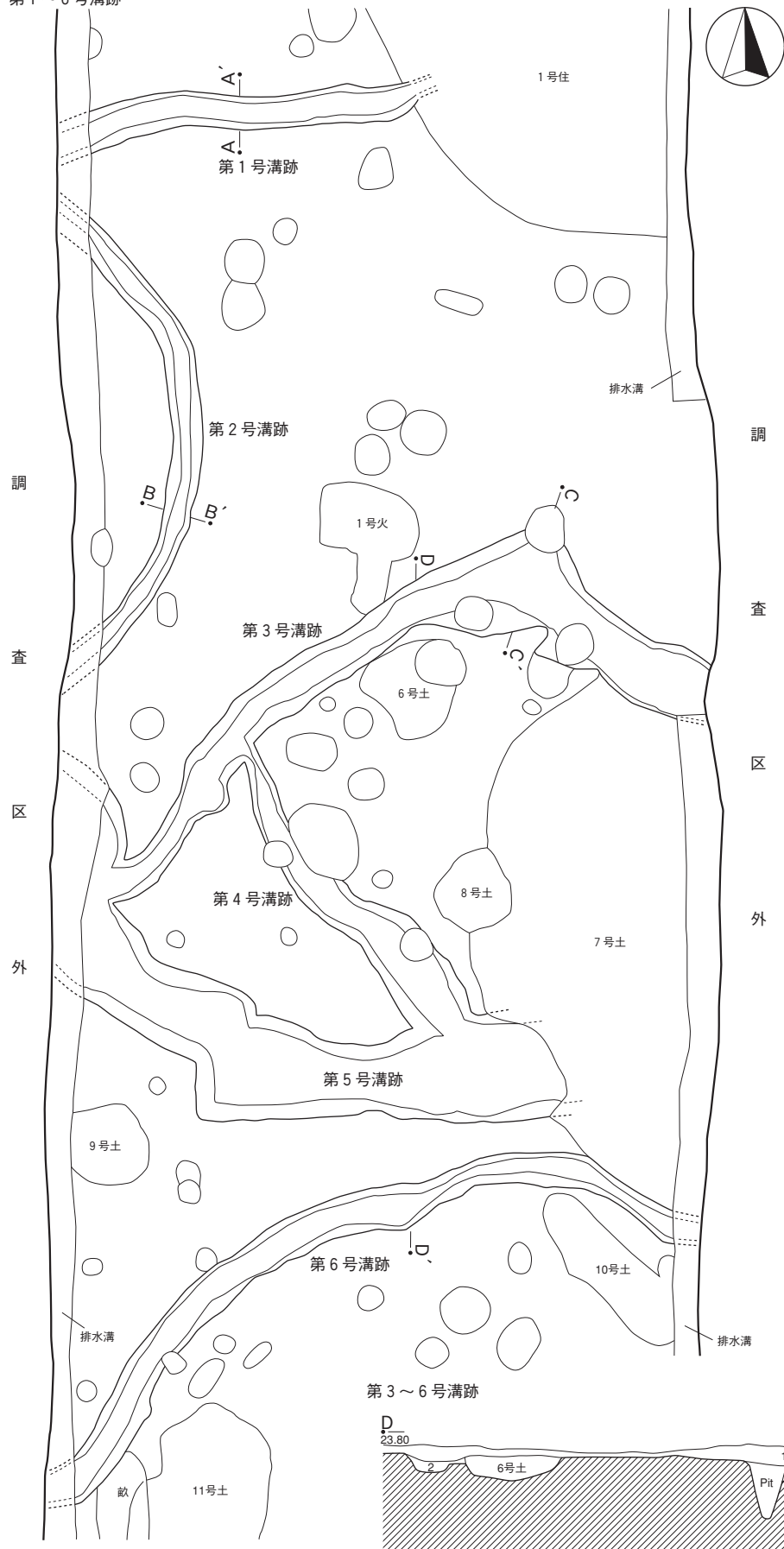
#### 第5号溝跡（第52図）

第1次調査での検出であり、58・59-141・142グリッドに位置する。西端では3号溝跡、中央付近では4号溝跡と接続しており、同時期に存在していた可能性が高い。東側では7号土坑に切られている。また西側調査区外では北側を走る2号溝跡と重複すると思われるが、新旧関係等は不明である。

58・59グリッド境付近ではほぼ東西方向に走るが、以西は北西方向に走り、調査区外に延びる。検出された長さは6.05m、幅は0.75m前後が主体となる。確認面からの深さは0.1m前後であり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は粘土質の灰白色土（2層）のみであり、4・6号溝跡と同じであった。自然堆



第1～6号溝跡



第1号溝跡

土層説明 (A A')

- 1 青黒色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 3 灰白色土：シルト質。酸化鉄、灰色シルト、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 4 灰白色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、灰色粘土、マンガン粒少量含む。3層より暗い。

第2号溝跡

土層説明 (B B')

- 1 青灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。

第3号溝跡

土層説明 (C C')

- 1 青灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 灰白色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒、青灰色土(1層)多量含む。
- 3 灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色土(2層)少量含む。
- 4 灰白色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。

第3～6号溝跡

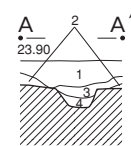
土層説明 (D D')

- 1 青灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

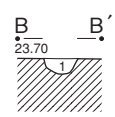
調  
査  
区  
外



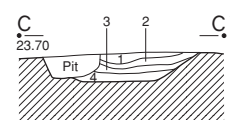
第1号溝跡



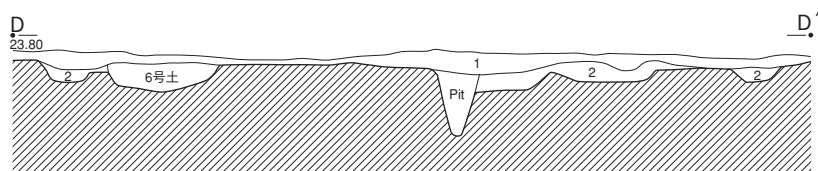
第2号溝跡



第3号溝跡



第3～6号溝跡



第52図 第1～6号溝跡

積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第55図）は、弥生土器壺（5-1）、甕（5-2）がある。1は壺の頸部から肩部までの破片。頸部と肩部に半円形の刺突列が巡り、間は無文で横位のヘラミガキ調整、下はRL単節縄文が施文されている。2は甕の胴部中段の破片。7本一単位の櫛歯状工具で横位の羽状文が描かれている、1・2の内面調整はともに横位のヘラナデである。

遺物は本溝跡に伴うものか不明である。よって、本溝跡の時期は重複する遺構との新旧関係から4・5号溝跡と同じく7号土坑以前としか言えない。

#### 第6号溝跡（第52図）

第1次調査での検出であり、58・59-142・143グリッドに位置する。所々で時期不明のピットと重複し、東端では7号土坑と接しているが、新旧関係は不明である。また南西端では直接的な切り合い関係はないが、本溝跡上に近世段階と思われる水田跡が位置する。

南西から北東方向へ蛇行して走り、両端以降は調査区外に延びる。検出された長さは7.39m、幅は0.35m、確認面からの深さは0.12m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は粘土質の灰白色土（2層）のみであり、4・5号溝跡と同じであった。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器壺（6-1）のみである。1は胴上部片。無節L下に円形の刺突列と平行沈線が巡る。内面調整は横・斜位のヘラナデである。

遺物は本溝跡に伴うものか不明である。よって、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

#### 第7号溝跡（第53図）

第2次調査での検出であり、59-145グリッドに位置する。西側で4号住居跡、東側で2号住居跡と重複し、いずれの住居跡からも土層断面に本溝跡の痕跡が認められなかったことから両住居跡に切られていると思われたが、新旧関係については不明と言わざるを得ない。

ほぼ東西方向に走るが、検出された長さは0.57mと非常に短い。幅は0.35m前後を測る。確認面からの深さは0.09m程と浅く、断面形は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、粘土質の灰色土のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が無く、重複する2・4号住居跡との新旧関係も定かでないことから、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

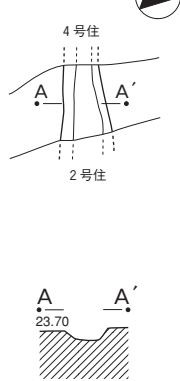
#### 第8号溝跡（第53図）

第2次調査での検出であり、58・59-150・151グリッドに位置する。北西部で9号住居跡と重複し、9号住居跡の土層断面では本溝跡の痕跡が認められなかったことから本溝跡が切られていると思われたが、新旧関係については不明と言わざるを得ない。南東部では10号住居跡を切っている。

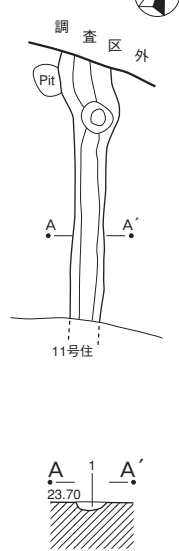
南東から北西方向に走り、南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは5.49m、幅は北西部が0.25m前後、南東部が最大0.68mを測り、北西から南東へ幅広となる。確認面からの深さは0.15m前後であり、断面形は幅狭の北西部が逆台形状、幅広の南東部が船底状を呈する。覆土は粘土質の灰色土のみ（1層）である。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は無いが、重複する10号住居跡との新旧関係から、本溝跡の時期は弥生時代中期後半以降としか言えない。

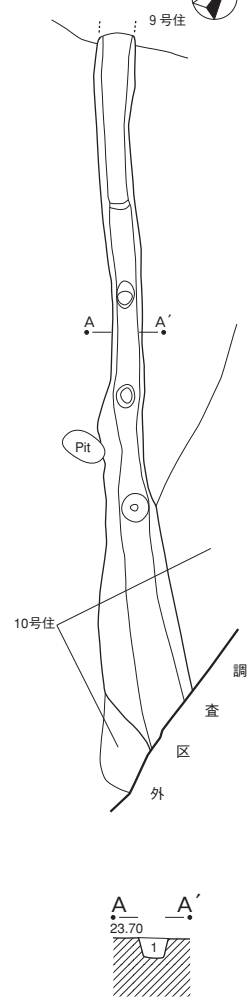
第7号溝跡



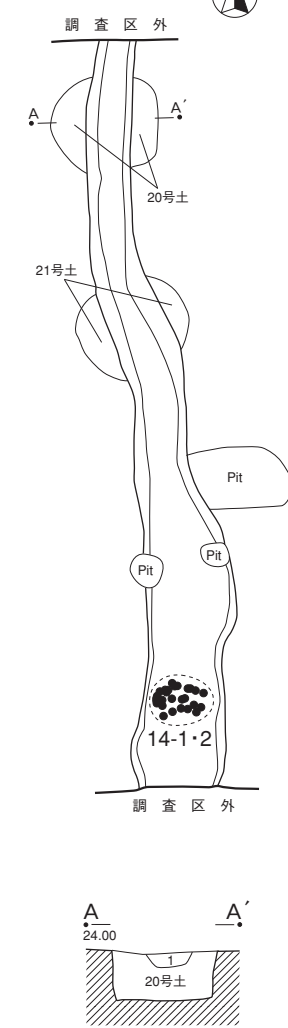
第13号溝跡



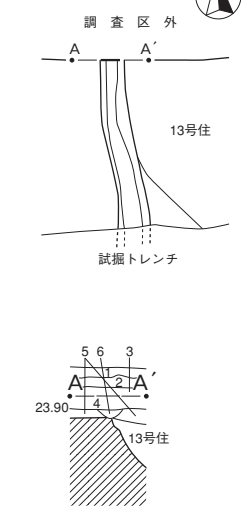
第8号溝跡



第14号溝跡



第15号溝跡



第8号溝跡

土層説明 (A A')

1 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粘土、マンガン粒多量含む。

第13号溝跡

土層説明 (A A')

1 灰色土：シルト質。酸化鉄、灰白色粘土、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

第14号溝跡

土層説明 (A A')

1 暗青灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粘土少量含む。

第15号溝跡

土層説明 (A A')

- 1 耕作土
- 2 灰オリーブ色土
- 3 褐灰色土：しまりなし。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、白色粒少量含む。
- 6 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒極多量、炭化物少量含む。

● = 土器



第53図 第7・8・13～15号溝跡

第9号溝跡 (第54図)

第2次調査での検出であり、58・59-153グリッドに位置する。ほぼ全面において谷状落込跡を切っており、南西部では併走する10号溝跡に接続する。10号溝跡とは同時期に存在していた可能性が高い。南西から北東方向に走り、58-153グリッドで途切れる。検出された長さは4.8m、幅は0.25m前後を測る。



確認面からの深さは0.15m前後であり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は2層（1・2層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第55図）は、弥生土器壺（9-1・2）、甕（9-3・4）がある。1は壺の肩部片。分かりづらいが、RL単節縄文地に平行沈線が複数巡る。2は壺の胴上部片。無節L地に重四角文が描かれている。1・2の内面調整は1が横位、2が横・斜位のヘラナデである。3は甕の胴部中段の破片。3本一単位の櫛歯状工具で縦位の羽状文が描かれている。内面調整は横位のヘラナデである。4は甕の口縁部から頸部までの破片。端部に刻みを持つ。内外面ともに横位のヘラナデ調整である。

遺物は重複する谷状落込跡からの流れ込みである可能性が高い。よって、本溝跡の時期は弥生時代中期後半以降と思われるが、詳細については不明と言わざるを得ない。

#### 第10号溝跡（第54図）

第2次調査での検出であり、58・59-152～154グリッドに位置する。ほぼ全面において谷状落込跡、58-153グリッドでは11・12号溝跡、南西部では18号土坑を切っている。南西部では同時期と思われる9号溝跡が本溝跡に接続している。

9号溝跡と同じく南西から北東方向に走り、両端以降は調査区外に延びる。検出された長さは10.67m、幅は0.8m前後を測る。確認面からの深さは0.25m前後であり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は2層（6・7層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

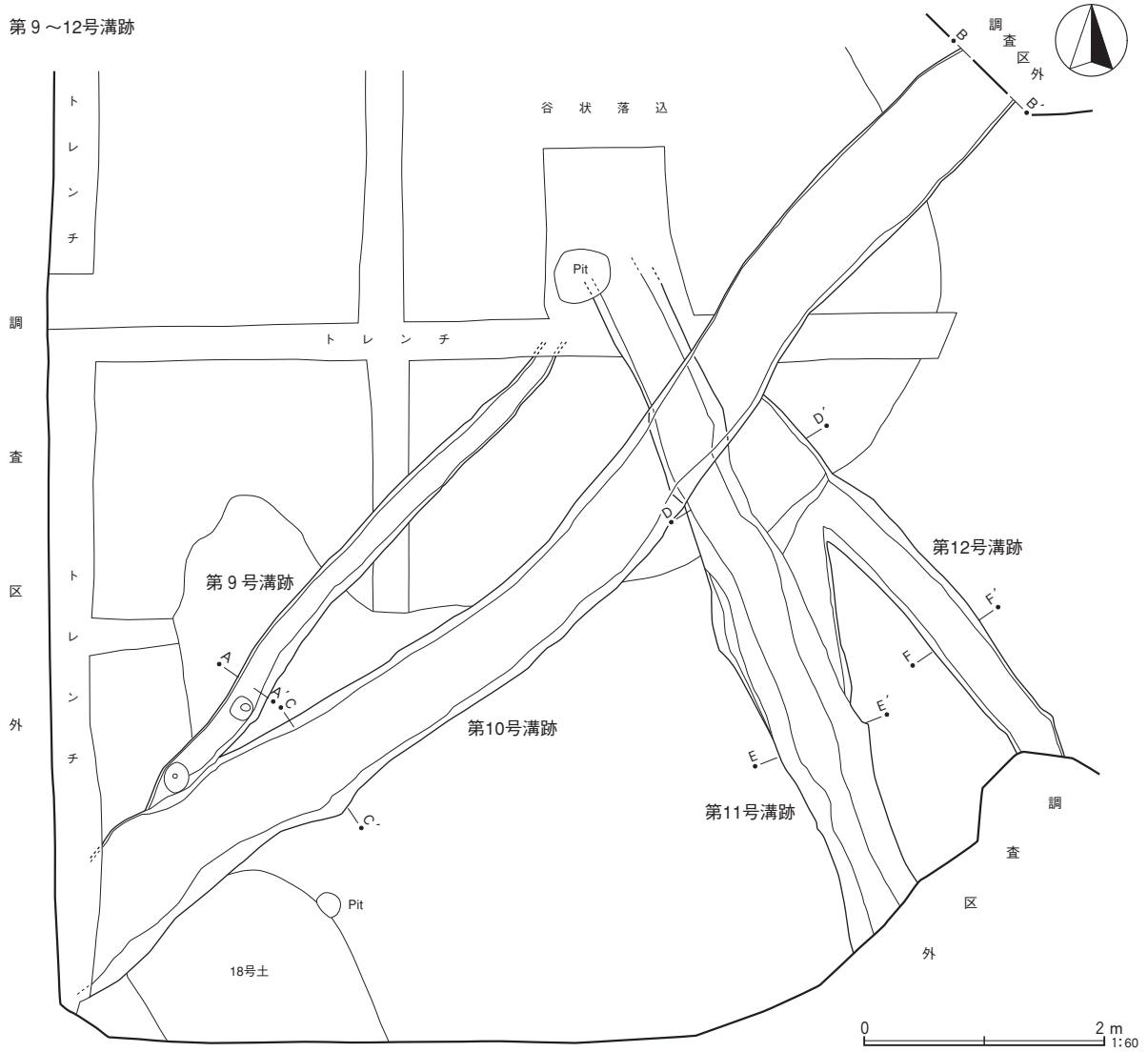
出土遺物（第55図）は、弥生土器壺（10-1・4・5）、甕（10-2・3・6～15）がある。

1は壺の底部。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。4・5は鋸歯文が描かれた壺の肩部片。4は2条の平行沈線下に描かれており、平行沈線間も含めLR単節縄文が施文されている。鋸歯文下は無文で斜位のヘラミガキ調整である。5は鋸歯文下にRL単節縄文が充填されている。4・5の内面調整は4が横・斜位、5が横位のヘラナデである。

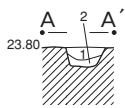
2・3は甕の底部。内外面ともにヘラナデ調整である。6～9は櫛歯状工具による文様が描かれた破片。櫛歯の単位は4本が多い。6・7は口縁部から胴上部までの破片。6は頸部に同一工具による簾状文が巡る。口縁端部はLR単節縄文が施文され、口縁部は無文で横位のヘラナデ調整である。7は頸部に波状文が巡り、胴部に縦位の羽状文が描かれている。口縁部は無文で横位のヘラナデ、頸部から胴部までは斜位のハケメ調整が残る。8・9は胴部中段の破片で縦位の羽状文が描かれている。6～9の内面調整は6・9が横位、7が横・斜位、8が斜位のヘラナデである。10～14は縄文及び擬縄文が施文された破片。10・11は口縁部から頸部までの破片。口縁端部に10はカナムグラによる擬縄文、11はRL単節縄文が施文されており、10は内面上位にも施文されている。ともに口縁部は無文で10は横位のヘラナデ、11は斜位のハケメ調整である。10は頸部に櫛歯状を呈する沈線が巡るが、詳細は不明である。12～14は胴部中段の破片。12はRL単節縄文、13はカナムグラによる擬縄文、14は無節Rが施文されている。10～14の内面調整は10の擬縄文下と12・14が横位、11が横・斜位のヘラナデ、13が横位のハケメである。15は口縁部片。外面に2本一単位の櫛歯状工具による波状文が複数巡る。内面は横位のヘラナデ調整である。弥生時代中期中頃池上式に相当する。

遺物は重複する谷状落込跡からの流れ込みである可能性が高い。よって、本溝跡の時期は弥生時代中期後半以降と思われるが、詳細については不明と言わざるを得ない。

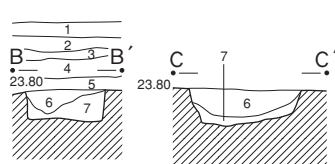
第9～12号溝跡



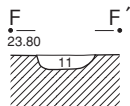
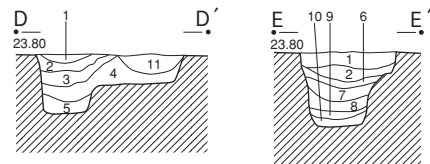
第9号溝跡



第10号溝跡



第11・12号溝跡



第9号溝跡

土層説明 (A A')

- 1 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 灰白色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

第10号溝跡

土層説明 (B B' C C')

- 1 耕作土
- 2 灰オリーブ色土
- 3 褐灰色土：しまりなし。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。4層より暗い。
- 6 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粘土少量含む。
- 7 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粘土、マンガン粒多量含む。

第11・12号溝跡

土層説明 (D D' E E' F F')

- 1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粘土、マンガン粒少量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粘土、マンガン粒多量含む。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒少量、炭化物、灰白色粘土少量含む。3層より暗い。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粘土、マンガン粒多量含む。4層より明るい。
- 6 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粘土、マンガン粒少量含む。
- 7 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粘土、マンガン粒少量含む。
- 8 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。7層より明るい。
- 9 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粘土、マンガン粒少量含む。5層より暗い。
- 10 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒少量含む。
- 11 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粘土少量含む。

第54図 第9～12号溝跡

### 第11号溝跡（第54図）

第2次調査での検出であり、58-152～154グリッドに位置する。北西部では谷状落込跡及び10・12号溝跡と重複するが、本溝跡は谷状落込跡が一部埋まった段階で掘り込まれており、10・12号溝跡に切られている。また、北西端にはピットがあるが、本溝跡が途切れているため、新旧関係は不明である。

南東から北西方向に走り、南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは5.74m、幅は0.6m前後が主体となるが、12号溝跡との接続箇所付近は1.1m程と幅広く、東側がテラス状となる。確認面からの深さは北西部が0.45m、南東部が0.58m前後を測り、断面形はテラス部分を除くと逆台形状を呈する。覆土は10層（1～10層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第55図）は、弥生土器壺（11-1～4）、甕（11-5）、剥片（11-6）がある。1は壺の底部。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。甕の可能性もある。2は壺の頸部から肩部までの破片。頸部にLR単節縄文の施文された突帯が巡り、下は無文で縦位のヘラミガキ調整である。3・4は壺の胴上部片。3は段が設けられている。段上は2本一単位の櫛歯状工具による波状文下にLR単節縄文が施文され、段下は円形の刺突列と平行沈線が巡る。4は渦巻文が描かれており、無節Rが充填されている。5は甕の胴部中段の破片。外面にカナムグラによる擬縄文が施文されている。2～5の内面調整は、2は頸部が横位、肩部が斜位、3・4は横位、5は横・斜位のヘラナデである。6は剥片。完形。

遺物は重複する谷状落込跡からの流れ込みである可能性が高い。よって、本溝跡の時期は弥生時代中期後半以降と思われるが、詳細については不明と言わざるを得ない。

### 第12号溝跡（第54図）

第2次調査での検出であり、57・58-153グリッドに位置する。北西部で10号溝跡に切られており、同箇所でも谷状落込跡、ほぼ同方向を走る11号溝跡を切っている。

南東から北西方向に走り、南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは3.71m、幅は0.4m前後を測る。確認面からの深さは0.13m前後であり、断面形は船底状を呈する。覆土は粘土質の灰色土（11層）のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第55図）は、弥生土器壺（12-1・2）、甕（12-3）がある。1は壺の底部。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。甕の可能性もある。2は壺の肩部片。外面はLR単節縄文が施文されている。3は甕の口縁部から胴上部までの破片。磨耗が著しいため定かではないが、頸部に単位不明の櫛歯状工具による波状文が巡る。口縁部は無文で横位のヘラナデ調整、胴上部は不明である。2・3の内面調整はともに横位のヘラナデである。

遺物は重複する谷状落込跡からの流れ込みである可能性が高い。よって、本溝跡の時期は弥生時代中期後半以降と思われるが、詳細については不明と言わざるを得ない。

### 第13号溝跡（第53図）

第2次調査での検出であり、57-152・153グリッドに位置する。南側で11号住居跡と重複し、11号住居跡の土層断面では本溝跡の痕跡が認められなかったことから本溝跡が切られていると思われたが、新旧関係については不明と言わざるを得ない。調査区境付近では時期不明のピットとも重複するが、これについても新旧関係は不明である。なお、本溝跡内からピット状の掘り込みが検出されたが、伴わないものと思われる。



第2号溝跡



2-1

第3号溝跡



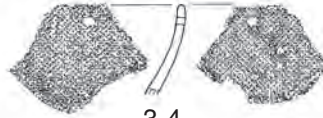
3-1



3-2



3-3



3-4

第4号溝跡



4-1



4-2



4-3



4-4

第5号溝跡



5-1



5-2

第6号溝跡



6-1



9-1



9-2



9-3

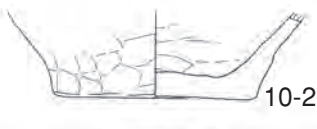


9-4

第10号溝跡



10-1



10-2



10-3



10-4



10-5



10-6



10-7



10-8



10-9



10-10



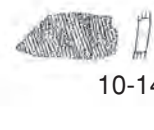
10-11



10-12

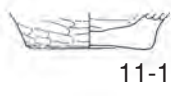


10-13



10-14

第11号溝跡



11-1



11-2



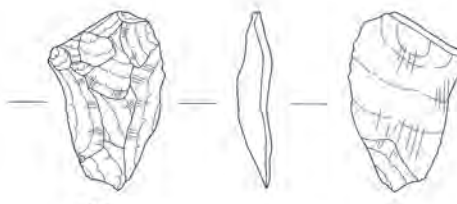
11-3



11-4



11-5



11-6

第12号溝跡



12-1



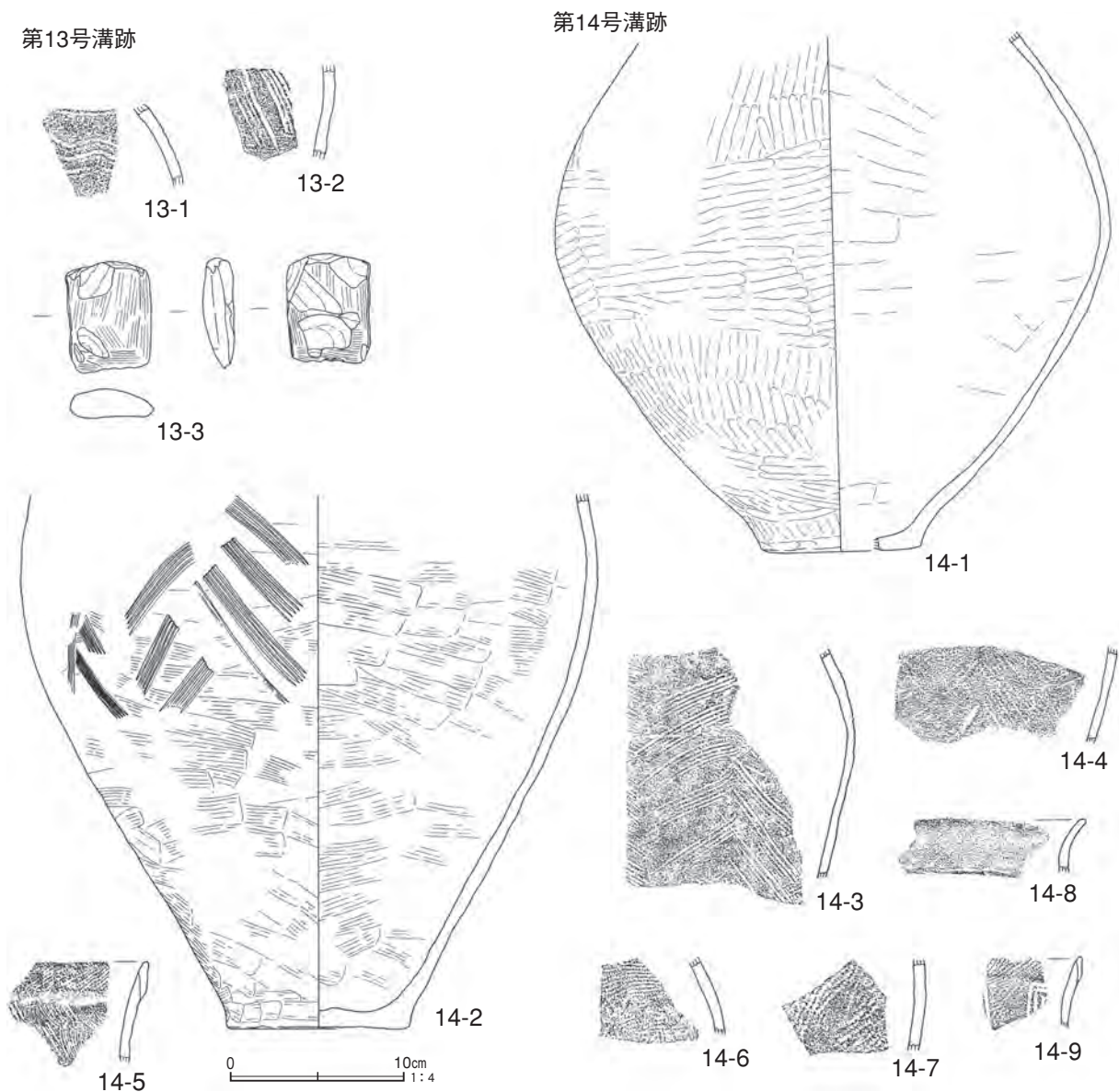
12-2



12-3



第55図 溝跡出土遺物 (1)



第56図 溝跡出土遺物(2)

ほぼ南北方向に走り、北側は調査区外に延びる。検出された長さは2.08mと短く、幅は0.3m前後を測る。確認面からの深さは0.05m程と浅く、断面形は船底状を呈する。覆土はシルト質の灰色土(1層)のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物(第56図)は、弥生土器壺(13-1)、甕(13-2)、磨製石斧(13-3)がある。1は壺の胴上部片。平行沈線下に3条の波状沈線が巡る。2は甕の胴部中段の破片。4本一単位の櫛歯状工具による横位の羽状文が描かれている。1・2の内面調整は1が横位、2が横・斜位のヘラナデである。3は小型で扁平片刃の磨製石斧。刃こぼれがみられた。完形。

遺物は本溝跡に伴わない可能性が高い。よって、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

#### 第14号溝跡(第53図)

第2次調査での検出であり、55-152・153グリッドに位置する。北側で20号土坑、中央付近で21号土坑を切っており、時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。また南側では大型の土器

第16表 溝跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
2-1	第2号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
3-1	第3号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	浅黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
3-2	第3号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	灰白色	B	胴中段片	
3-3	第3号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	外面一部磨耗。
3-4	第3号溝跡	弥生土器 鉢	—	—	—	ABCHIKN	浅黄橙色	B	口～体部片	孔有。内外面赤彩、ほぼ剥落。
4-1	第4号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIKMN	にぶい橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
4-2	第4号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	AHI	黒褐色	B	肩部片	
4-3	第4号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	外面磨耗顕著。
4-4	第4号溝跡	弥生土器高坏	—	—	—	ABCEHIN	淡橙色	B	口縁部片	内外面赤彩、ほぼ剥落。
5-1	第5号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHK	にぶい橙色	B	頸～肩部片	
5-2	第5号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	灰黄褐色	B	胴中段片	外面やや磨耗。
6-1	第6号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄色	B	胴上部片	
9-1	第9号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
9-2	第9号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
9-3	第9号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	AGH	褐灰色	B	胴中段片	
9-4	第9号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHK	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
10-1	第10号溝跡	弥生土器 壺	—	(4.35)	6.3	ABCIKN	褐灰色	B	底部90%	内外面やや磨耗。
10-2	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	(4.6)	10.8	ABDEIK	褐灰色	B	底部100%	内面磨耗顕著。
10-3	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	(2.05)	(10.2)	ABEIKN	暗灰・にぶい橙	B	底部40%	内外面やや磨耗。
10-4	第10号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	橙色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
10-5	第10号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ADHIKN	灰黄褐色	B	肩部片	
10-6	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	口～頸部片	
10-7	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABIJKN	黒褐色	B	口～胴上片	内面磨耗顕著。
10-8	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	
10-9	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKMN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
10-10	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
10-11	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	外面磨耗顕著。
10-12	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKMN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
10-13	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	AEHKN	黒褐色	B	胴中段片	
10-14	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	AEHIK	黒褐色	B	胴中段片	
10-15	第10号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	明黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
11-1	第11号溝跡	弥生土器 壺	—	(1.9)	6.6	ABDIKMN	黒褐色	B	底部100%	
11-2	第11号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	頸～肩部片	内外面磨耗顕著。
11-3	第11号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
11-4	第11号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
11-5	第11号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	AIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	
11-6	第11号溝跡	剥片	最大長4.3cm、最大幅3.1cm、最大厚0.9cm。重量10.3g。完形。頁岩製。							
12-1	第12号溝跡	弥生土器 壺	—	(2.8)	(8.7)	ABDIKN	褐灰色	B	底部30%	内外面やや磨耗。
12-2	第12号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
12-3	第12号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKMN	黒褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
13-1	第13号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKMN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
13-2	第13号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	黒褐色	B	胴中段片	
13-3	第13号溝跡	磨製石斧	最大長6.35cm、最大幅4.8cm、最大厚1.7cm。重量81.5g。完形。緑色岩製。							
14-1	第14号溝跡	弥生土器 壺	—	(29.6)	(9.0)	ABDEHIN	赤褐色	B	胴～底60%	内面剥離、外面磨耗顕著。
14-2	第14号溝跡	弥生土器 甕	—	(30.65)	10.4	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴～底70%	内外面磨耗顕著。
14-3	第14号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上～下片	
14-4	第14号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKMN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
14-5	第14号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKMN	にぶい橙色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
14-6	第14号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
14-7	第14号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
14-8	第14号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIKN	明赤褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
14-9	第14号溝跡	弥生土器筒形	—	—	—	ABEHIK	黒褐色	B	口縁部片	

が2個体重なって出土したが、これらは土器棺墓であった可能性が高い。降雨により土層が崩れてしまったため新旧関係は把握できなかったが、おそらく本溝跡埋没後に掘り込まれたと思われる。

ほぼ南北方向にやや蛇行して走り、両端以降は調査区外に延びる。検出された長さは6m、幅は北側が0.35m、南側が0.7m前後を測り、北から南に幅広となる。確認面からの深さは0.1m程であり、断面形は船底状を呈する。覆土は粘土質の暗青灰色土（1層）のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しか



は不明である。

出土遺物（第56図）は、弥生土器壺（14-1）、甕（14-2～8）、筒形土器（14-9）がある。1・2は土器棺墓に使用されたと思われる土器。出土状況から1が棺身、2が棺蓋と思われる。1は口縁部から肩部までを欠く大型の壺。胴部は球形を呈する。外面は無文でヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。2は口縁部から胴上部までを欠く大型の甕。胴部の膨らみが小さい。外面は5本一単位の櫛歯状工具による縦位の羽状文が粗雑に描かれている。内外面の調整はともにハケメである。3・4は櫛歯状工具で縦位の羽状文が描かれた甕の破片。櫛歯の単位は3が5本、4が6本である。5～7は縄文が施文された甕の破片。5は口縁部から頸部までの破片。肥厚した口縁部にL R単節縄文が施文され、以下は6本一単位の櫛歯状工具が斜位に描かれている。6・7は甕の胴上部片と胴下部片。ともにL R単節縄文が施文されている。3～7の内面調整は3・4・5・7が横位、6が横・斜位のヘラナデである。8は口縁部が無文の甕の破片。内外面ともに横位のヘラナデ調整であり、頸部外面は平行沈線が巡る。9は筒形土器の肥厚した口縁部片。L R単節縄文地に重四角文が描かれている。内面調整は横位のヘラナデである。

本溝跡の時期は、土器棺墓であった可能性のある土器や重複する遺構との新旧関係から弥生時代中期後半以前としか言えない。

#### 第15号溝跡（第53図）

第2次調査での検出であり、54-152・153グリッドに位置する。13号住居跡を切っており、南側は試掘トレンチにより欠くが、14号住居跡では確認されなかったことからトレンチ内で終息すると思われる。

ほぼ南北方向に走り、北側は調査区外に延びる。検出された長さは1.34mと短く、幅は0.2m前後を測る。確認面からの深さは0.06mと浅く、断面形は船底状を呈する。覆土は粘土質の灰色土（6層）のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は無いが、本溝跡の時期は、重複する14住居跡との新旧関係から弥生時代中期後半以降としか言えない。

## 3 土 坑

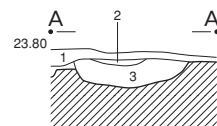
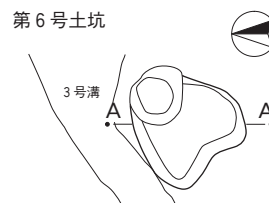
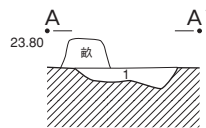
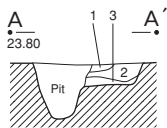
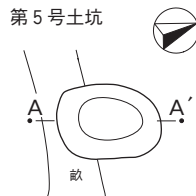
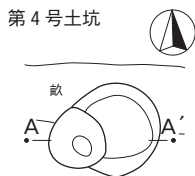
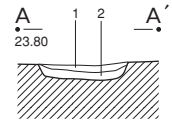
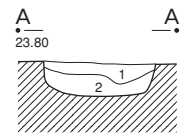
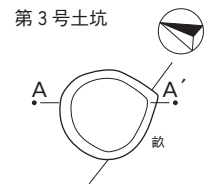
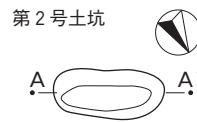
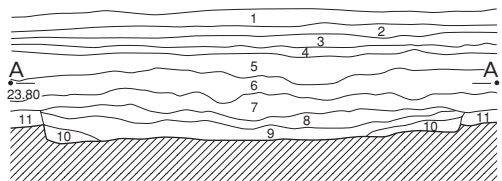
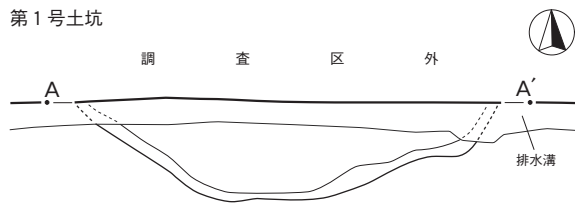
#### 第1号土坑（第57図）

第1次調査での検出であり、58・59-138グリッドに位置する。南側立ち上がり付近のみの検出であり、大半は調査区外にある。また直接的な切り合い関係はないが、本土坑上には近世段階と思われる水田跡が位置する。

正確な規模は不明であるが、検出できた東西は3.35m、南北は0.82mを測る。平面プランは楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.24mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられた。覆土は3層（8～10層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第61図）は、弥生土器壺（1-1・2）のみである。1は口縁部片。L R単節縄文地に山形状の沈線が巡り、以下は無文で斜位のヘラミガキ調整である。2は肩部から胴上部までの破片。重四角文が描かれており、沈線内にR L単節縄文が充填されている。1・2の内面調整は1が横・斜位のヘラミガキ、2が縦・斜位のヘラナデである。

本土坑の時期は、弥生時代中期後半と思われる。



第3号土坑 0 2 m 1:60

土層説明 (AA')

- 1 青灰色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。
- 2 灰色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。

第4号土坑

土層説明 (AA')

- 1 炭化物層：酸化鉄多量含む。
- 2 灰黄褐色土：シルト質。酸化鉄、焼土粒、淡黄色粘土、炭化物少量含む。
- 3 淡黄色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒少量含む。

第5号土坑

土層説明 (AA')

- 1 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。

第6号土坑

土層説明 (AA')

- 1 青灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 炭化物層：焼土多量含む。
- 2 灰白色粘土

第57図 第1～6号土坑

### 第2号土坑 (第57図)

第1次調査での検出であり、58-139グリッドに位置する。直接的な切り合い関係はないが、本土坑上には近世段階と思われる水田跡が位置する。

長軸0.88m、短軸0.39mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.26mを測る。立ち上がりは鋭角であり、

底面はほぼ平坦であった。覆土は2層（1・2層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第61図）は、弥生土器壺（2-1）、甕（2-2）のみである。1は壺の胴部中段の破片。無文で外面調整は横位のハケメ、内面は横位のヘラナデである。2は甕の胴部中段の破片。4本一単位の櫛歯状工具による縦位の羽状文が描かれている。内面調整は横位のヘラナデである。

本土坑の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

#### 第3号土坑（第57図）

第1次調査での検出であり、58・59-139グリッドに位置する。直接的な切り合い関係はないが、本土坑上には近世段階と思われる水田跡が位置する。

径0.7m前後の不整円形を呈する。確認面からの深さは0.1mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は2層（1・2層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は無いが、本土坑の時期は弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

#### 第4号土坑（第57図）

第1次調査での検出であり、59-139グリッドに位置する。西側を時期不明のピットに切られている。また、直接的な切り合い関係はないが、本土坑上には近世段階と思われる水田跡が位置する。

径0.7m前後の円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.15mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は3層（1～3層）確認された。最上層に炭化物層が認められたが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器甕（第61図4-1）のみである。1は口縁部から頸部までの破片。端部も含め口縁部はLR単節縄文が施文され、波状沈線が巡る。頸部は無文で内面とともに横位のヘラナデが施されている。

本土坑の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

#### 第5号土坑（第57図）

第1次調査での検出であり、59-139グリッドに位置する。直接的な切り合い関係はないが、本土坑上には近世段階と思われる水田跡が位置する。

長軸0.81m、短軸0.58mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.16mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面は凹凸がみられた。覆土は粘土質の灰色土（1層）のみであった。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物は、弥生土器壺（第61図5-1）のみである。1は肩部片。分かりづらいが、平行沈線が複数巡る。内面調整は横位のヘラナデである。

本土坑の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

#### 第6号土坑（第57図）

第1次調査での検出であり、58-141グリッドに位置する。東側では時期不明のピットと重複し、北側では3号溝跡が走るが、新旧関係は不明である。

径0.85m前後のいびつな不整円形を呈する。確認面からの深さは0.23mを測る。立ち上がりは緩やか



であり、底面はやや播り鉢状を呈する。覆土は2層(2・3層)確認された。最上層に炭化物層があり、下層には粘土層が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物(第61図)は、弥生土器壺(6-1)、甕(6-2)のみである。1は壺の胴上部片。複数の平行沈線間にLR単節縄文が施文されている。2は甕の胴部中段の破片。単位不明の櫛歯状工具による横位の羽状文が描かれている。1・2の内面調整はともに斜位のヘラナデである。

本土坑の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

#### 第7号土坑(第58図)

第1次調査での検出であり、58-141・142グリッドに位置する。北側で3号溝跡、西側で5号溝跡、8号土坑を切っている。南側には6号溝跡が接して走るが、新旧関係は不明である。西側約半分の検出であり、東側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は5.15m、東西は2.32mを測り、平面プランは楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.48mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は7層(1～7層)確認された。北側の中層では炭化物層が認められたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物(第61図)は、弥生土器甕(7-2・3)、甌(7-1)がある。2は頸部から胴上部までの破片。頸部に5本一単位の櫛歯状工具による簾状文が巡り、胴部に同一工具による縦位の羽状文が描かれている。3は口縁部から頸部までの破片。口縁端部に刻みを持ち、口縁部は無文で横位のヘラナデ調整である。頸部は地文にカナムグラによる擬縄文が施文され、平行沈線が複数巡る。2・3の内面調整はともに横位のヘラナデである。1は甌の胴下部から底部までの部位。内外面ともにヘラナデ調整である。北西部の底面から検出された。

本土坑の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

#### 第8号土坑(第58図)

第1次調査での検出であり、58-141・142グリッドに位置する。東側を7号土坑に切られている。

正確な規模は不明であるが、おそらく径0.8m前後の不整円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.18mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はやや播り鉢状を呈する。覆土は2層(1・2層)確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は無いが、本土坑の時期は重複する7号土坑との関係から弥生時代中期後半以前としか言えない。

#### 第9号土坑(第58図)

第1次調査での検出であり、59-142グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

径0.75m前後の不整円形を呈する。確認面からの深さは0.14mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土はシルト質の灰色土(1層)のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

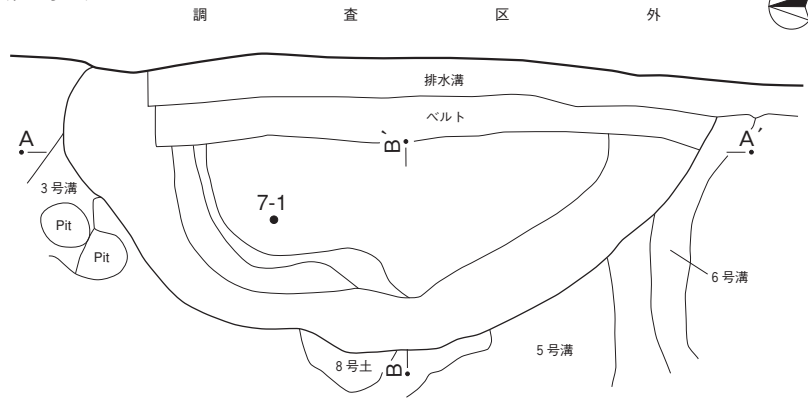
遺物は無いが、本土坑の時期は弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

#### 第10号土坑(第58図)

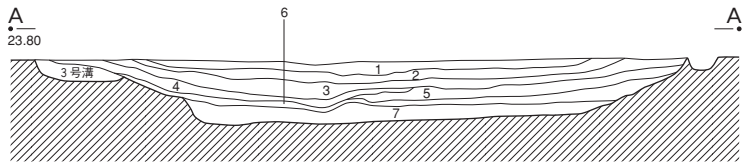
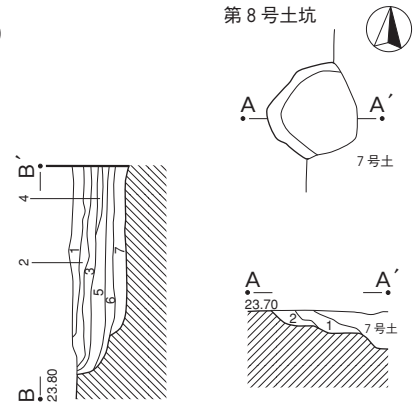
第1次調査検出であり、58-142グリッドに位置する。中央付近を時期不明のピットに切られている。

長軸1.71m、短軸0.48mのいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは0.14mを測る。立ち上がり

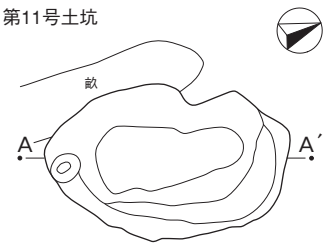
第7号土坑



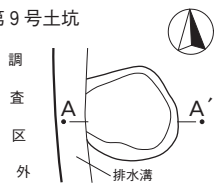
第8号土坑



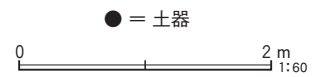
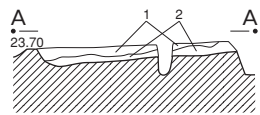
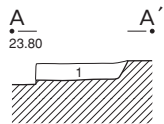
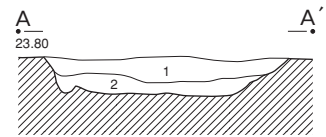
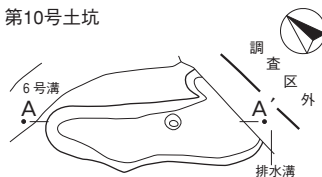
第11号土坑



第9号土坑



第10号土坑



第7号土坑

土層説明 (AA' BB')

- 1 青黒色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒少量含む。
- 2 暗灰色土：シルト質。酸化鉄、灰白色粒少量含む。
- 3 灰色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。
- 4 炭化物層
- 5 灰色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。3層より暗い。
- 6 灰色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。5層より暗い。
- 7 灰白色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒少量含む。

第8号土坑

土層説明 (AA')

- 1 灰色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、灰白色粘土、マンガン粒少量含む。
- 2 灰白色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰色粘土少量含む。

第9号土坑

土層説明 (AA')

- 1 青灰色粘土：シルト質。酸化鉄、炭化物、灰白色粘土、マンガン粒少量含む。

第10号土坑

土層説明 (AA')

- 1 青灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 灰白色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

第11号土坑

土層説明 (AA')

- 1 青灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

第58図 第7～11号土坑

は鋭角であり、底面は東から西にやや傾く。覆土は2層（1・2層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物は、弥生土器甕（第61図10-1）のみである。1は口縁部から頸部までの破片。頸部に単位不明の櫛歯状工具で簾状文が巡る。口縁部外面は無文で内面とともに横位のヘラナデが施されている。

本土坑の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

#### 第11号土坑（第58図）

第1次調査での検出であり、59-142・143グリッドに位置する。直接的な切り合い関係はないが、本土坑上には近世段階と思われる水田跡が位置する。

長軸1.89m、短軸1.22mのいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは0.28mを測り、北東部にはテラス状の段が設けられていた。立ち上がりは緩やかであり、底面は南から北にやや傾く。底面南側ではピット状の掘り込みがみられた。覆土は2層（1・2層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第61図）は、弥生土器壺（11-4）、甕（11-1～3・5）がある。4は壺の肩部から胴上部までの破片。重四角文下に段を持ち、段下に半円形の刺突列と複数の平行沈線が巡る。内面調整は横位のヘラナデである。1は甕の口縁部から胴部中段までの部位。口縁部が逆ハの字に開き、頸部はすぼまる。胴部は膨らみが小さい。最大径を口径に持つ。口縁部は無文で内面とともにヘラナデが施されている。胴部はコの字重ね文が描かれている。2は甕の頸部から胴部中段までの部位。胴部の膨らみが小さい。頸部は5本一単位の櫛歯状工具による簾状文が巡り、胴部は同一工具による縦位の羽状文が描かれている。内面調整はヘラナデである。3は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。5は甕の胴部中段から下部までの破片。コの字重ね文下が無文で横・斜位のヘラナデ調整である。内面調整は横位のヘラナデである。

本土坑の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

#### 第12号土坑（第59図）

第2次調査での検出であり、58・59-146・147グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。

長軸1.5m、短軸0.94mのいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは0.18mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられた。覆土は2層（1・2層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第61図）は、弥生土器甕（12-1・2）のみである。1は口縁部片。外面にLR単節縄文が施文されている。2はボタン状貼付文が付く胴上部片。コの字重ね文が描かれていると思われる。1・2の内面調整はともに横位のヘラナデである。

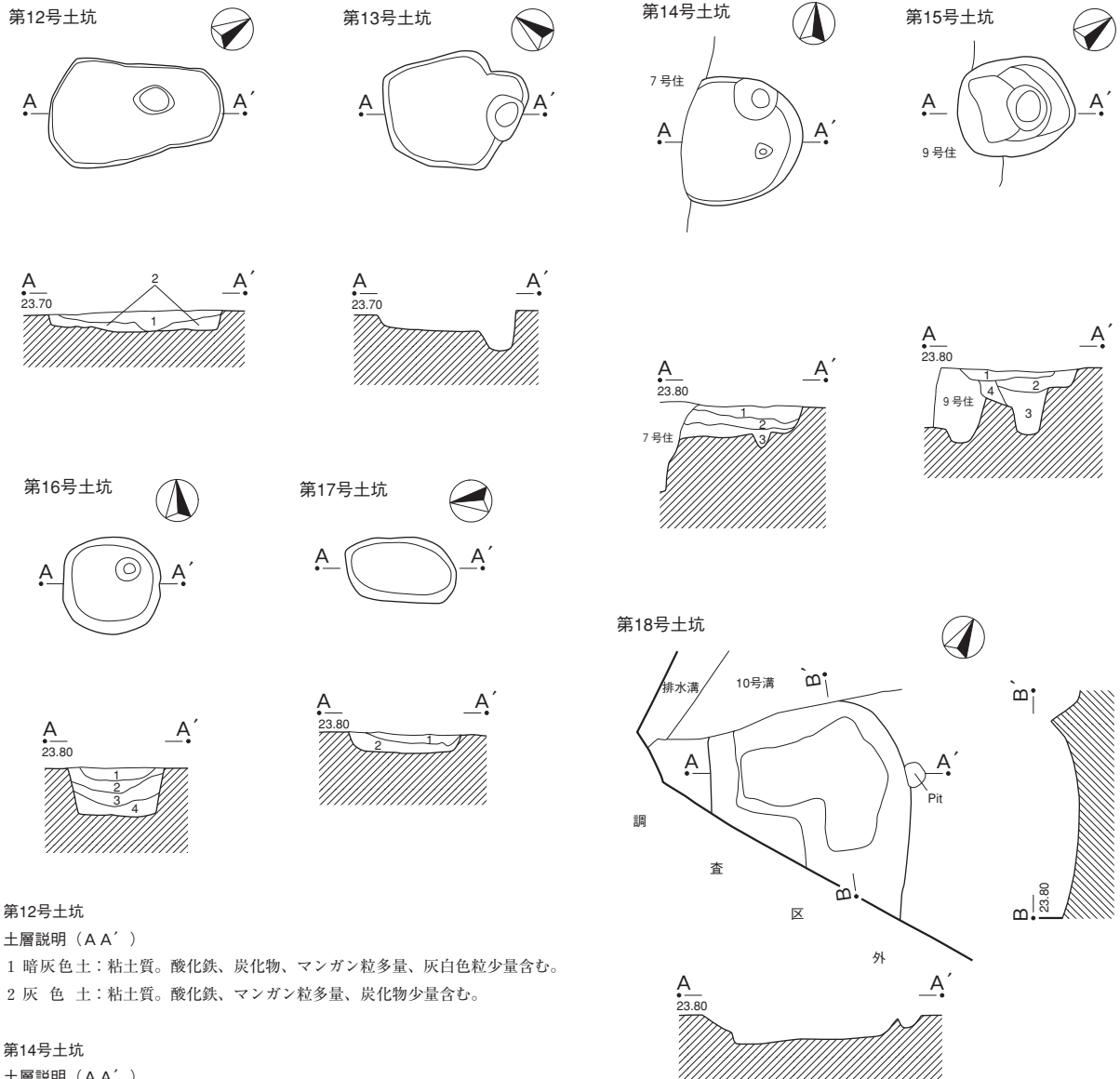
本土坑の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

#### 第13号土坑（第59図）

第2次調査での検出であり、58-147グリッドに位置する。南側で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

長軸1.23m、短軸1mのいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは0.15mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、粘土質の灰色土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。





第12号土坑

土層説明 (A A')

- 1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

第14号土坑

土層説明 (A A')

- 1 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。  
1層より明るい。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。2層より明るい。

第15号土坑

土層説明 (A A')

- 1 オリーブ黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色土、マンガン粒多量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 4 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。

第16号土坑

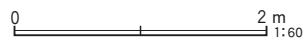
土層説明 (A A')

- 1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粘土少量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。2層より暗い。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。3層より明るい。

第17号土坑

土層説明 (A A')

- 1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。



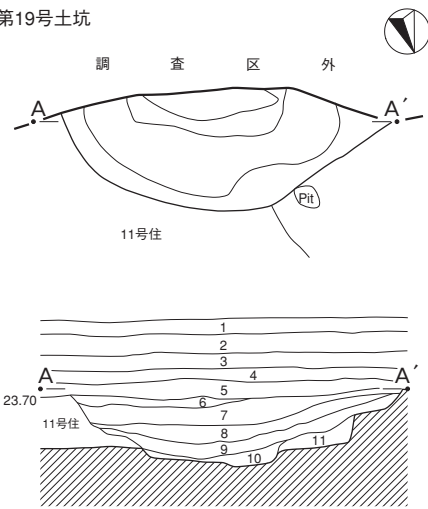
第59図 第12～18号土坑

遺物は無いが、本土坑の時期は弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

第14号土坑 (第59図)

第2次調査での検出であり、58-148グリッドに位置する。西側を7号住居跡に切られている。

第19号土坑

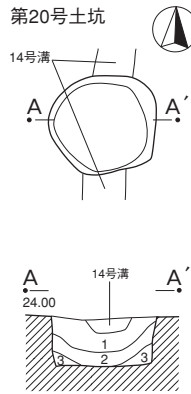


第19号土坑

土層説明 (A A')

- 1 耕作土
- 2 灰オリーブ色土
- 3 褐灰色土：しまりなし。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。4層より暗い。
- 6 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。5層より明るい。
- 7 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。

第20号土坑

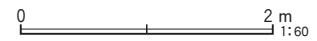


- 8 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 9 青灰色粘土：酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 10 暗青灰色土：灰白色粘土多量、酸化鉄少量含む。
- 11 灰色粘土：酸化鉄多量、灰白色粘土少量含む。

第20号土坑

土層説明 (A A')

- 1 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粘土少量含む。
- 2 青黒色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粘土、マンガン粒少量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粘土、マンガン粒多量含む。



第60図 第19～21号土坑

規模は東西が不明、南北は1.1mを測り、平面プランは楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.26mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であったが、ピット状の掘り込みが2箇所確認された。覆土は3層(1～3層)確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物(第61図)は、弥生土器壺(14-1)、広口壺(14-2)のみである。1は壺の胴上部片。LR単節縄文地に重四角文が描かれている。内面調整は、横位のヘラナデである。2は広口壺の口縁部から胴上部までの破片。内外面ともに横位のヘラミガキと赤彩が施されている。

本土坑の時期は、重複する7号住居跡との新旧関係から7号住居跡以前の弥生時代中期後半としておきたい。

#### 第15号土坑(第59図)

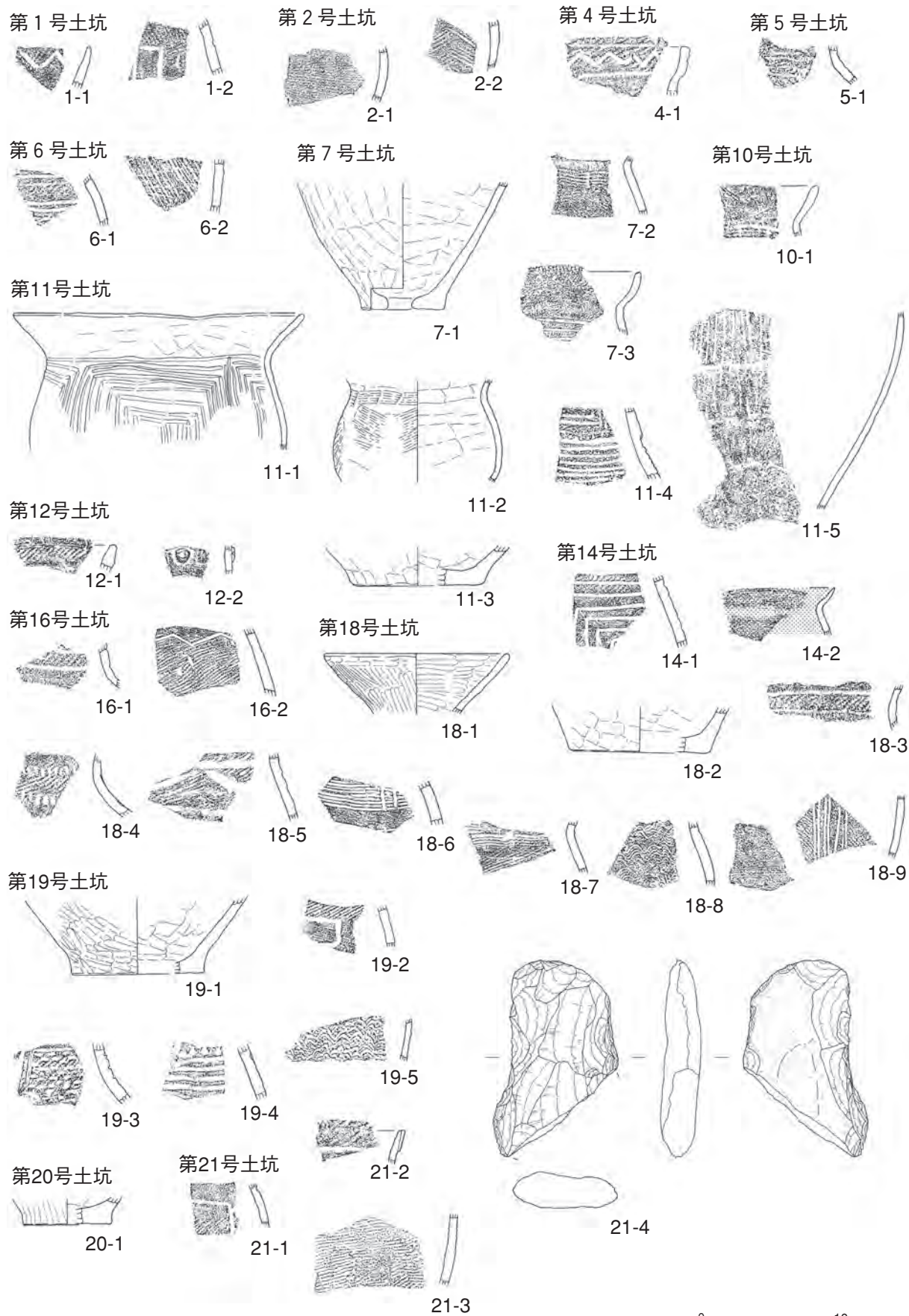
第2次調査での検出であり、59-149グリッドに位置する。南側で9号住居跡を切っている。

長軸0.96m、短軸0.83mの楕円形を呈する。立ち上がりは南側以外、鋭角であり、底面はピット状の掘り込みとなっている。確認面からの深さは、最も深いピット状掘り込みで0.54mを測る。覆土は4層(1～4層)確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が無いが、重複する9号住居跡との新旧関係から、本土坑の時期は9号住居跡以降の弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

#### 第16号土坑(第59図)

第2次調査での検出であり、58-149グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。



第61图 土坑出土遗物



第17表 土坑出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1-1	第1号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	
1-2	第1号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABHN	褐灰色	B	肩～胴上片	
2-1	第2号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIKN	浅黄橙色	B	胴中段片	
2-2	第2号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHI	にぶい黄褐色	B	胴中段片	
4-1	第4号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKMN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
5-1	第5号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
6-1	第6号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
6-2	第6号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHI	にぶい橙色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
7-1	第7号土坑	弥生土器 甕	—	(9.1)	5.9	ABDEHIN	橙色	B	胴～底 70%	内外面磨耗顕著。
7-2	第7号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABEGHKN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
7-3	第7号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	口～頸部片	外面上位磨耗顕著。
10-1	第10号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHK	褐灰色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
11-1	第11号土坑	弥生土器 甕	(20.8)	(9.8)	—	ABEHIKM	灰褐色	B	口～胴 30%	内外面磨耗顕著。
11-2	第11号土坑	弥生土器 甕	—	(7.4)	—	ABDIN	にぶい橙色	B	頸～胴 70%	内外面磨耗顕著。
11-3	第11号土坑	弥生土器 甕	—	(2.8)	(9.4)	ABCIKN	淡黄色	B	底部 45%	内外面磨耗顕著。
11-4	第11号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	肩～胴上片	内外面やや磨耗。
11-5	第11号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABCEHIKN	にぶい褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
12-1	第12号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKM	灰褐色	B	口縁部片	
12-2	第12号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIK	灰褐色	B	胴上部片	
14-1	第14号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴上部片	
14-2	第14号土坑	弥生土器 広口壺	—	—	—	ABDIK	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	内外面赤彩、大半剥落。
16-1	第16号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ACDIKN	にぶい褐色	B	頸～肩部片	内外面やや磨耗。
16-2	第16号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ADHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
18-1	第18号土坑	弥生土器 壺	(13.3)	(4.35)	—	ABHIK	黒褐色	B	口～頸 40%	
18-2	第18号土坑	弥生土器 甕	—	(3.3)	(9.8)	ABCDHIKM	淡黄色	B	底部 30%	内外面磨耗顕著。
18-3	第18号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKMN	黒褐色	B	頸部片	外面磨耗顕著。
18-4	第18号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIK	浅黄色	B	頸～肩部片	
18-5	第18号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKMN	にぶい黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
18-6	第18号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	浅黄橙色	B	胴上部片	
18-7	第18号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	
18-8	第18号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	黒褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
18-9	第18号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
19-1	第19号土坑	弥生土器 壺	—	(5.45)	(9.5)	ABIKN	暗灰黄色	B	胴～底 25%	内面やや磨耗。
19-2	第19号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
19-3	第19号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	肩部片	
19-4	第19号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
19-5	第19号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴中段片	
20-1	第20号土坑	弥生土器 壺	—	(1.9)	(3.3)	ABHIK	灰黄褐色	B	底部 45%	
21-1	第21号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	明黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
21-2	第21号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKN	灰白色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
21-3	第21号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	
21-4	第21号土坑	打製石斧	最大長(14.15)cm、最大幅(7.6)cm、最大厚(2.1)cm。重量(342.0)g。刃部欠。粘板岩製。							

径0.8m程の円形を呈する。確認面からの深さは0.41mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であったが、北東部ではピット状の掘り込みがみられた。覆土は4層（1～4層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第61図）は、弥生土器壺（16-1・2）のみである。1は頸部から肩部までの破片。2条の平行沈線間にLR単節縄文が施文されており、以下は無文で横位のヘラミガキ調整である。2は胴上部片。山形状の沈線下に細かいLR単節縄文が施文されている。内面調整はともに横位のヘラナデである。

本土坑の時期は、弥生時代中期末と思われる。

#### 第17号土坑（第59図）

第2次調査での検出であり、58・59-151グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸0.93m、短軸0.55mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.15mを測る。立ち上がりは鋭角であり、

底面はほぼ平坦であった。覆土は2層（1・2層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は無いが、本土坑の時期は弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

#### 第18号土坑（第59図）

第2次調査での検出であり、59-153・154グリッドに位置する。北側を10号溝跡に切られており、南側は調査区外にある。東側では時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は1.68m、南北は1.9mを測り、楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.25mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面は東側がやや掘り鉢状を呈し、西側はやや西に傾く。覆土は図示できなかったが、粘土質の灰色土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第61図）は、弥生土器壺（18-1・3～6）、甕（18-2・7～9）がある。1は壺の口縁部から頸部までの部位。口縁部が大きく開く。無文で内外面ともにヘラミガキ調整である。3は壺の頸部片。2条の平行沈線間にL R単節縄文が施文されている。4は頸部から肩部までの破片。半円形の刺突列間にL R単節縄文が施文されている。5・6は胴上部片。5は弥生時代中期中頃、6は弥生時代後期初頭に相当する。流れ込みである。5は地文にL R単節縄文が施文され、太い平行沈線間に弧状の沈線が描かれている。6は4本一単位の櫛歯状工具による直線文が複数巡り、縦位に2条の沈線が垂下する。下は無文で横位のヘラミガキ調整である。3～6の内面調整は3・6が横位、5は横・斜位のヘラナデ、4は頸部が横位のヘラミガキ、肩部が横位のヘラナデである。2は甕の底部。内外面ともにヘラナデ調整である。7・8は櫛歯状工具により文様が描かれた甕の破片。櫛歯の単位はともに4本である。7は頸部から胴上部までの破片。頸部に直線文、胴部に同一工具で縦位の羽状文が描かれている。8は波状文が複数巡る。9はコの字重ね文が描かれた甕の胴部中段の破片。地文にR L単節縄文が施文されている。7～9の内面調整は7が横位、9が斜位のヘラナデ、8は横位のハケメである。

本土坑の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

#### 第19号土坑（第60図）

第2次調査での検出であり、57-153グリッドに位置する。東側で11号住居跡を切っており、南側は調査区外にある。また北西部で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は2.59m、南北は0.97mを測り、円形ないし楕円形を呈すると思われる。立ち上がりは緩やかであり、中段付近にテラス状の段を持つ。確認面からの深さは最も深い所で0.52mを測る。覆土は6層（6～11層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第61図）は、弥生土器壺（19-1～4）、甕（19-5）がある。1は壺の胴下部から底部までの部位。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。2は壺の胴上部片。L R単節縄文下に太い沈線で四角形状の文様が描かれており、斜位のハケメ調整が残る。3は壺の肩部片。重四角文内に半円形の刺突列が充填されている。4は壺の胴上部片。半円形の刺突列下に太い平行沈線が複数巡る。3・4は弥生時代中期中頃池上式に相当する。5は甕の胴部中段の破片。3本一単位の櫛歯状工具による波状文が密に巡る。2～5の内面調整は2・3が横位、4・5が斜位のヘラナデである。

遺物の大半は11号住居跡からの流れ込みである可能性が高い。本土坑の時期は、11号住居跡との新旧関係から弥生時代中期末としておきたい。

#### 第20号土坑（第60図）

第2次調査での検出であり、55-152グリッドに位置する。ほぼ中央を南北に走る14号溝跡に切られている。

径0.8m程の不整形円形を呈する。確認面からの深さは0.37mを測る。立ち上がりはほぼ垂直であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は3層（1～3層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第61図）は、弥生土器壺（20-1）のみである。1は底部。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。甕の可能性もある。本土坑に伴うものか不明である。

本土坑の時期は、重複する14号溝跡との新旧関係から弥生時代中期後半以前としか言えない。

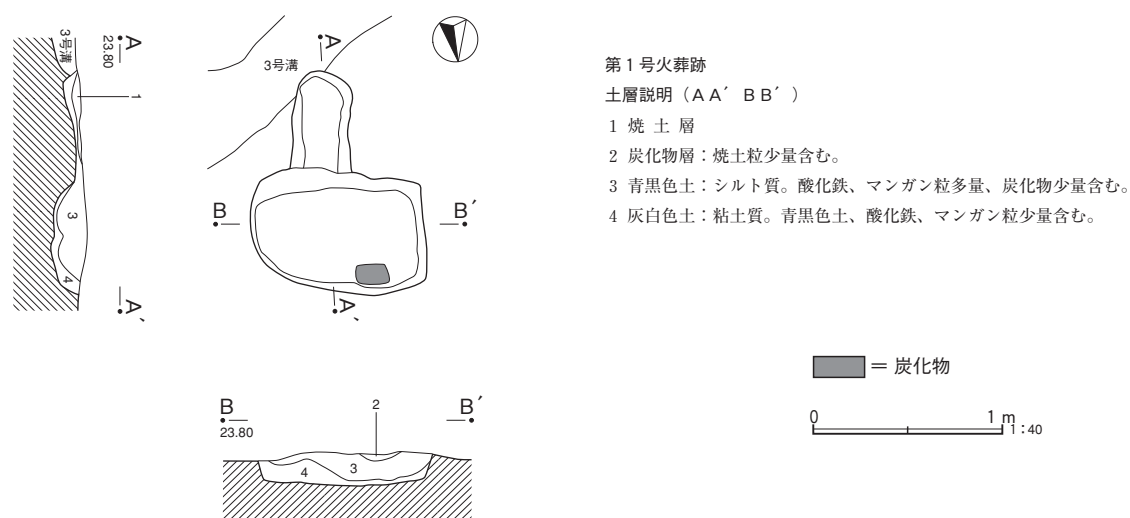
#### 第21号土坑（第60図）

第2次調査での検出であり、55-153グリッドに位置する。ほぼ中央を南北に走る14号溝跡に切られている。

径0.85m前後の不整形円形を呈する。確認面からの深さは0.33mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや播り鉢状を呈する。覆土は図示できなかったが、粘土質の灰色土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

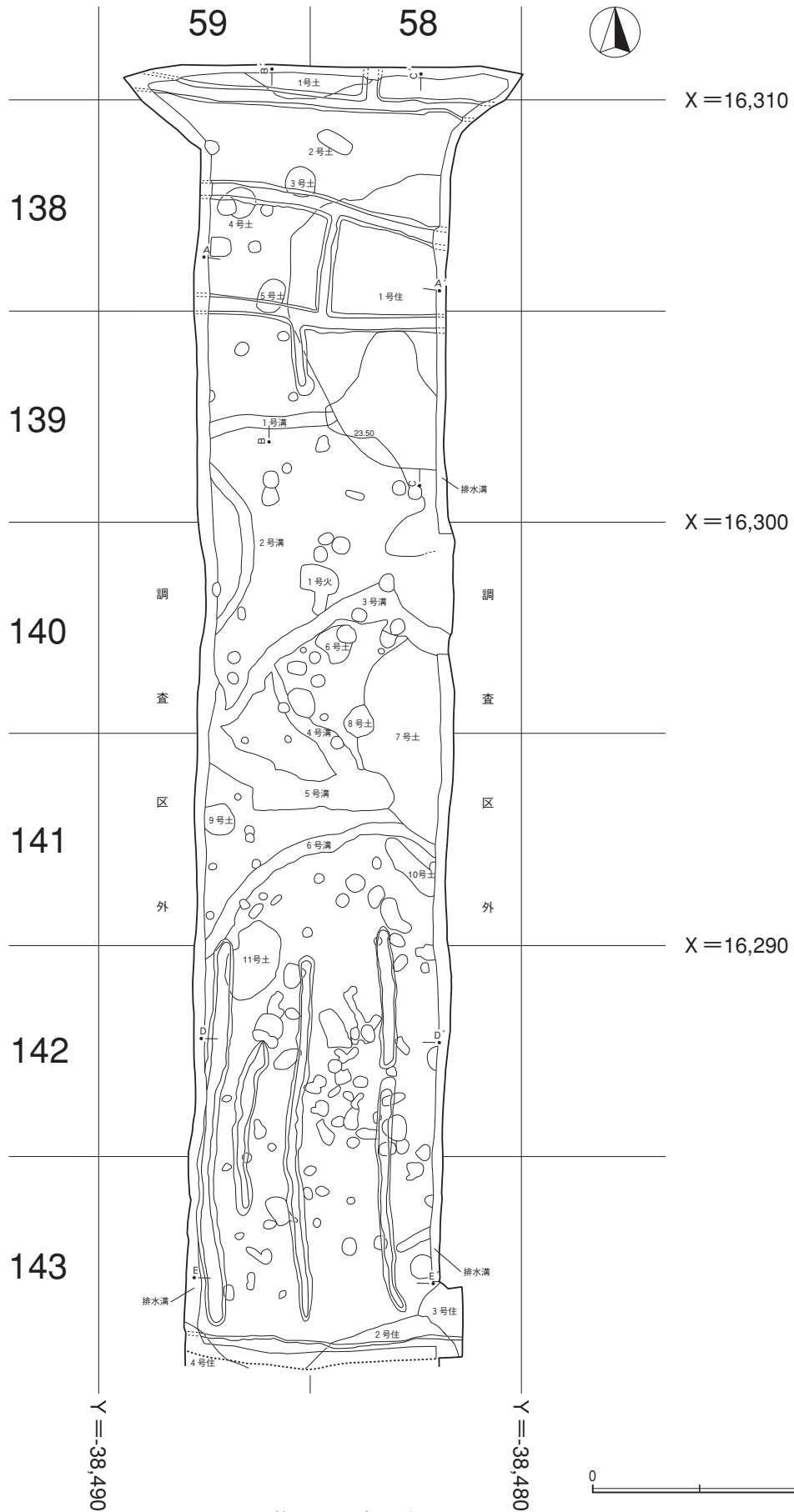
出土遺物（第61図）は、弥生土器壺（21-1）、甕（21-2・3）、打製石斧（21-4）がある。1は壺の胴上部片。四角形状を呈する文様内にL R単節縄文が充填されており、無文部は横位のヘラミガキ調整である。2は甕の口縁部片。端部も含め肥厚した口縁部にL R単節縄文が施文されており、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。3は甕の胴部中段の破片。外面にL R単節縄文が施文されている。1～3の内面調整はすべて横位のヘラナデである。4は打製石斧。刃部を欠く。

遺物は本土坑に伴うものか不明である。よって、本土坑の時期は、20号土坑と同じく重複する14号溝跡との新旧関係から弥生時代中期後半以前としか言えない。

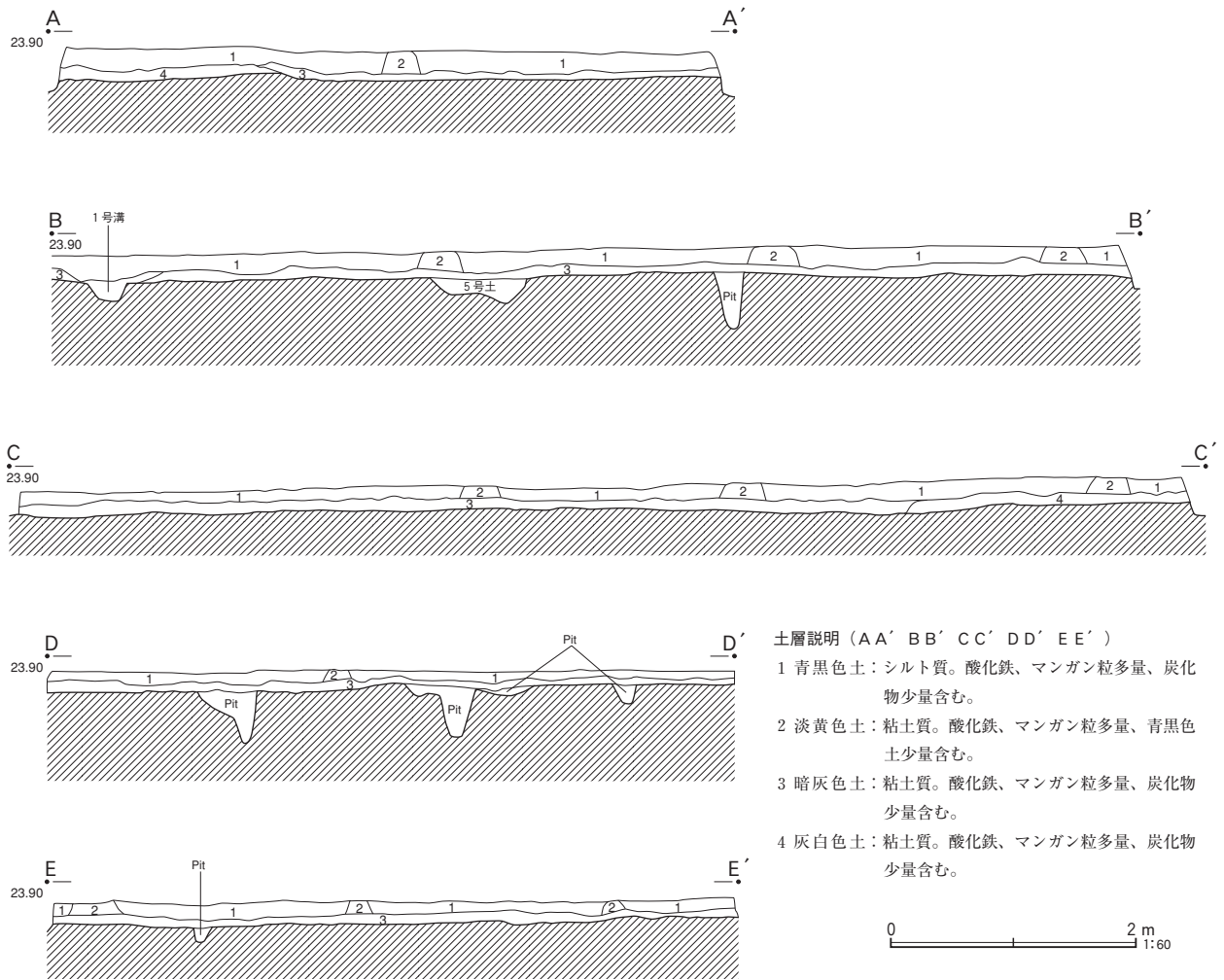


第62図 第1号火葬跡





第63図 水田跡平面図



第64図 水田跡断面図

## 4 火葬跡

### 第1号火葬跡 (第62図)

第1次調査での検出であり、58・59-141グリッドに位置する。南側で3号溝跡を切っている。

平面プランは凸形を呈する。燃焼部となる北側が東西方向に長い長方形の土坑状となり、燃焼部の南壁ほぼ中央から南に煙道状の突出部が付く。燃焼部の規模は長軸が1.37m、短軸は0.96m、突出部の長さは0.77m、幅は0.45m前後を測る。立ち上がりは燃焼部及び突出部ともにほぼ垂直である。確認面からの深さは燃焼部が0.25m、突出部は燃焼部との境付近が0.07mと浅く、先端部が0.13mで深くなる。覆土は4層(1~4層)確認された。燃焼部最上層及び北西部底面では炭化物がまとまって確認された。覆土からは骨片や棺座となる自然石は検出されなかった。

遺物は検出されなかったが、本火葬跡の時期は中世と思われる。

## 5 水田跡

### 水田跡 (第63・64図)

58・59-138~140・142~144グリッドに位置する。第1次調査のみの検出であり、第2次調査では確

認められなかったが、本来は広がっていたことが推測される。他の遺構との直接的な切り合い関係はないが、弥生時代及び中世の遺構上から遺物包含層を挟んで確認された。

水田跡は、標高 23.50m 前後を測るフラットな地形上にあり、畦畔は南北 2 箇所確認された。畦畔は粘土質の淡黄色土で構築されており、幅 0.2m、高さ 0.15m 前後を測る。北側では南北に区画された箇所がみられたが、南側は南北方向に走るもののみ確認された。南側東端の畦畔は 58-142 グリッドで一部途切れていたことから水口であろうか。水田跡は面的に確認できたわけではないため、平面プラン等については不明と言わざるを得ない。

遺物は無いが、本水田跡の時期は、他の遺構との新旧関係から近世段階と思われる。

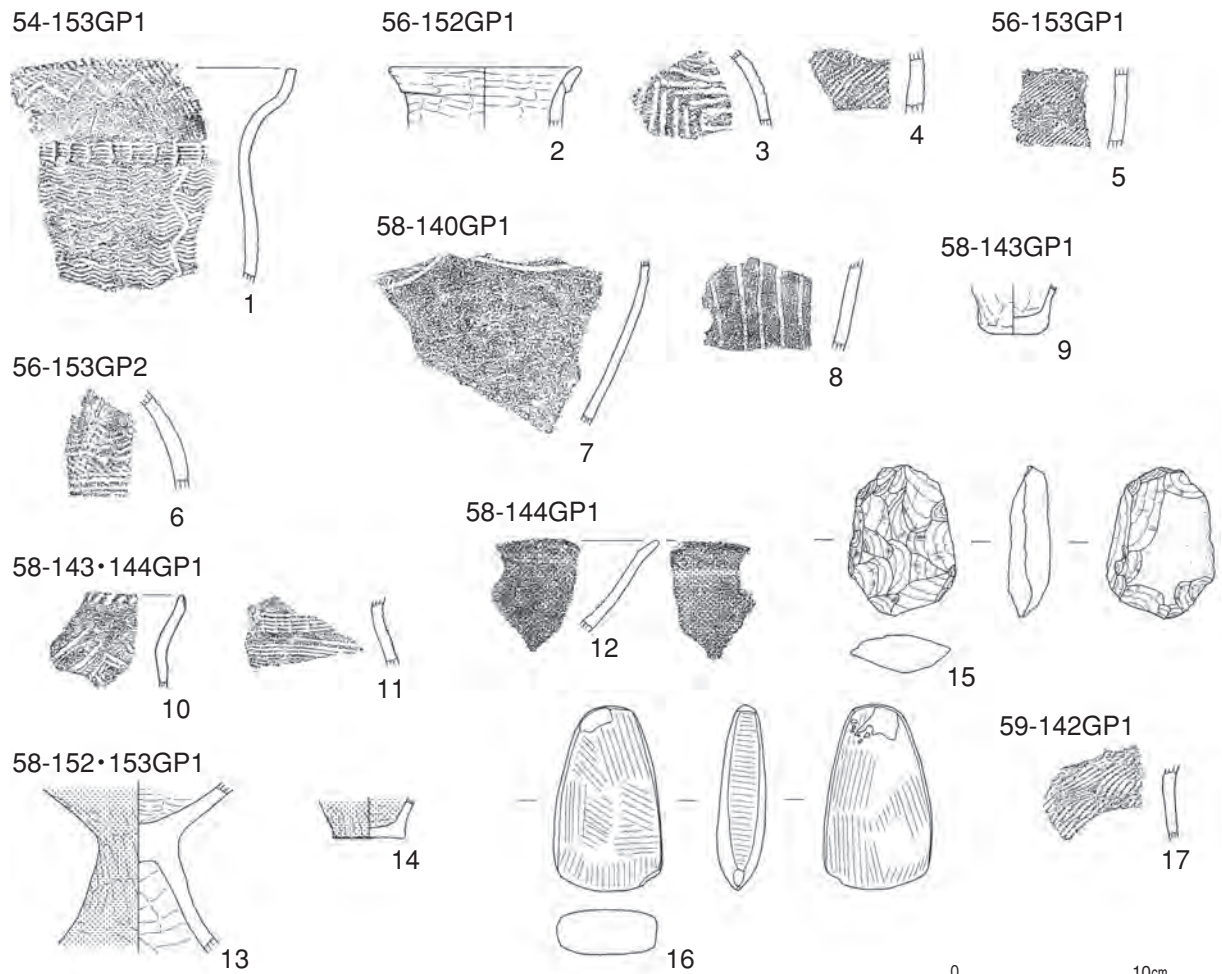
## 6 ピット

ピットは調査区ほぼ全面から検出されているが、第 1 次調査での検出が多く、特に 58・59-141 ~ 144 グリッドに集中する。所々で他の遺構と重複するものが多いが、新旧関係を把握することは困難であった。またそのほとんどが規則的に並ばないため、詳細については不明と言わざるを得ない。

出土遺物は弥生時代に限られ、土器は弥生時代中期後半に相当するものが主体となるが、流れ込みの可能性もあり、時期の特定は難しい。以下、出土遺物(第 65 図)について出土ピット及び番号順に述べるが、これらの遺物が出土したピットのみ全測図(第 4 図)にピット名を記載してある。

1 ~ 14・17 は弥生土器、15・16 は石器である。1 は 54-153G ピット 1 出土。甕の口縁部から胴部中段までの破片。受け口状を呈する口縁部に端部も含め、R L 単節縄文が施文され、山形状の沈線が巡る。以下は無文で斜位のハケメ調整、頸部は 5 本一単位の櫛歯状工具による簾状文が巡る。胴部は同一工具による波状文が複数巡り、1 条の太い波状沈線が垂下する。内面調整は口縁部と胴部が横位のヘラナデ、頸部は横位のハケメである。2 ~ 4 は 56-152G ピット 1 出土。2 は壺の口縁部から頸部までの部位。肥厚した口縁部の開きが小さく、頸部はほぼ直立する。無文で内外面ともにヘラミガキ調整である。3 は重四角文が描かれた壺の胴上部片、4 はカナムグラによる擬縄文が施文された甕の胴部中段の破片である。3・4 の内面調整はともに横位のヘラナデである。5 は 56-153G ピット 1 出土。甕の胴部中段の破片。外面は無節 L が施文されている。内面調整は横位のヘラナデである。6 は 56-153G ピット 2 出土の壺の胴上部片。横位のヘラミガキが施された無文部下に複数の波状沈線と平行沈線が巡り、間に R L 単節縄文が施文されている。内面調整は横位のヘラナデである。7・8 は 58-140G ピット 1 出土。7 は壺の胴部中段から下部までの破片。弧線文下が無文で斜位のヘラミガキが施されている。内面調整は横位のヘラナデである。8 は甕の胴部中段の破片。コの字重ね文が描かれており、所々に横・斜位のハケメ調整が残る。内面調整は横位のヘラナデである。9 は 58-143G ピット 1 出土。ミニチュア土器の底部。内外面ともにヘラナデ調整である。10・11 は 58-143・144G ピット 1 出土の甕の破片。10 は口縁部から頸部までの破片。口縁端部に刻みを持ち、2 本一単位の櫛歯状工具による縦位の羽状文が描かれている。弥生時代中期中頃池上式に相当する。11 は頸部から胴上部までの破片。頸部は 5 本一単位の櫛歯状工具による簾状文、胴部は同一工具による縦位の羽状文が描かれている。内面調整はともに横位のヘラナデである。12 は 58-144G ピット 1 出土。高坏の口縁部から坏部までの破片。内外面ともに横位のヘラミガキ調整であり、赤彩が施されている。13 ~ 16 は 58-152・153G ピット 1 出土。13 は高坏の接合部





第65図 ピット出土遺物

第18表 ピット出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	54-153GP1	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	口~胴中片	外面一部磨耗。
2	56-152GP1	弥生土器 壺	(10.2)	(3.15)	—	ABDGHJK	灰白色	B	口~頸 25%	内外面磨耗顕著。
3	56-152GP1	弥生土器 壺	—	—	—	ADHIK	黒色	B	胴上部片	
4	56-152GP1	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
5	56-153GP1	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	黒褐色	B	胴中段片	
6	56-153GP2	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIKN	灰白色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
7	58-140GP1	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKMN	灰黄褐色	B	胴中~下片	内外面磨耗顕著。
8	58-140GP1	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	黒色	B	胴中段片	
9	58-143GP1	弥生土器ミニチュア	—	(2.65)	2.6	ADIK	黒色	B	胴~底 90%	
10	58-143・144GP1	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口~頸部片	
11	58-143・144GP1	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	頸~胴上片	
12	58-144GP1	弥生土器高坏	—	—	—	ABDHIKN	明赤褐色	B	口~坏部片	内外面赤彩、大半剥落。
13	58-152・153GP1	弥生土器高坏	—	(9.1)	—	ABDHJK	淡黄色	B	接~脚 50%	外面赤彩、ほぼ剥落。
14	58-152・153GP1	弥生土器 鉢	—	(2.2)	3.8	ABIJ	にぶい橙色	B	底部 100%	内外面赤彩、ほぼ剥落。
15	58-152・153GP1	刃器	最大長8.0cm、最大幅5.7cm、最大厚2.15cm。重量101.3g。完形。粘板岩製。							
16	58-152・153GP1	磨製石斧	最大長9.8cm、最大幅5.7cm、最大厚2.5cm。重量232.5g。完形。石材不明。							
17	59-142GP1	弥生土器 甕	—	—	—	AHIMN	黒色	B	頸部片	

から脚部上位までの部位。外面及び坏部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ調整である。外面のみ赤彩が施されている。14は鉢の底部。内外面ともにヘラミガキと赤彩が施されている。15は刃器、16はやや小型の磨製石斧。ともに完形である。17は59-142Gピット1出土の甕の頸部片。外面にLR単節縄文が施文されている。内面は横位のヘラナデである。

## 7 谷状落込跡

### 谷状落込跡（第66図）

第2次調査での検出であり、58・59-151～154グリッドに位置する。58・59-152～154グリッドでは9～12号溝跡と重複し、9・10・12号溝跡には切られているが、11号溝跡は一部埋まった段階で掘り込まれていた。58-152・153グリッドではピットと重複するが、新旧関係は不明である。

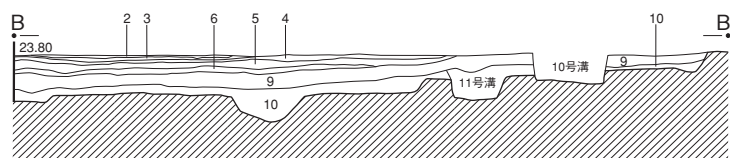
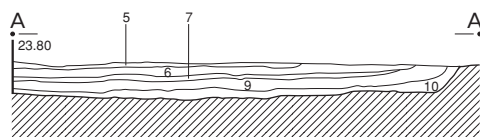
西側が調査区外にあるため、平面プランは不明であるが、不規則なラインで巡る。立ち上がりは北側のみ緩やかで、その他は鋭角であった。底面は一部ピット状の掘り込みが確認されたが、概ね平坦であった。確認面からの深さは概ね0.4m前後を測る。覆土は12層（1～12層）確認された。きれいなレンズ状堆積であったことから自然堆積と思われる。

平面プランに規則性がなく、人為的な掘り込みでないことから当初はトレンチ調査のみを行った。しかし、覆土に弥生時代の遺物を含み、中には比較的残存状態の良いものもみられたため、時間的な制約から詳細な平面図は作成できなかったが、全面の完掘を行い、遺物の採集を行った。

出土遺物（第67図）は、弥生土器壺（1～5・10～17）、甕（6・7・18～30）、高坏（8・9）、筒形土器（31）、敲打器（32）がある。10・11は弥生時代中期中頃、その他は中期後半以降に相当する。

1～5・10～17は壺。1・2は口縁部から肩部までの部位。1は口縁部が逆ハの字に開き、頸部から肩部は緩やかに広がる。文様は口縁端部にL R単節縄文、頸部は2条の平行沈線と波状沈線が交互に巡り、平行沈線間にL R単節縄文が施文されているが、一部平行沈線下にはみ出ている。外面無文部と口縁部内面の調整はヘラミガキ、頸部以下の内面はヘラナデである。2も口縁部が逆ハの字に開き、頸部はほぼ直立する。磨耗が著しいため、文様や調整等は不明である。3は胴部中段から底部までの部位。胴部中段に弧線文が巡り、下にL R単節縄文が施文されている。以下は無文でヘラミガキが施されている。内面調整はヘラナデである。4・5は底部。外面調整はともにヘラミガキ、内面はヘラナデである。4は外面に赤彩が施されている。10・11は胴上部片。10は重三角文内に3本一単位の櫛歯状工具による縦位の波状文と半円形の刺突が充填されている。11は重菱形文か重三角文が描かれており、区画内に半円形の刺突とL R単節縄文が充填されている。内面調整はともに横位のヘラナデである。12～14は肩部片。12は横・斜位のヘラミガキが施された無文部下に鋸歯文が描かれ、下にL R単節縄文が充填されている。以下は半円形の刺突列と波状沈線が巡る。13はL R単節縄文地に波状沈線と2条の平行沈線が巡る。以下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整である。14は平行沈線間に山形状の沈線が巡る。以下は無文で縦・斜位のヘラミガキ調整である。12～14の内面調整は12が横・斜位、13・14が横位のヘラナデである。15・16は重四角文、17は重三角文が描かれた胴上部片。15は区画内に半円形の刺突列と無節Lが充填されている。16は地文にL R単節縄文が施文されている。17は沈線間にL R単節縄文が充填されている。15～17の内面調整はすべて横位のヘラナデである。

6・7・18～30は甕。6・7は胴下部から底部までの部位。内外面ともにヘラナデ調整である。18～22は櫛歯状工具により文様が描かれた破片。櫛歯の単位は4～5本である。18～20は口縁部から胴上部までの破片。頸部に簾状文が巡る。口縁部及び胴部は無文であり、18は横位のヘラナデ、19は横位のハケメ、20は胴上部が斜位のハケメ、中段が横位のハケメ調整である。21は胴部に縦位の羽状文が描かれた頸部から胴上部までの破片。頸部は無文で横位のヘラナデ調整である。22は複数の波状文が描かれた胴



土層説明 (A A' B B' C C')

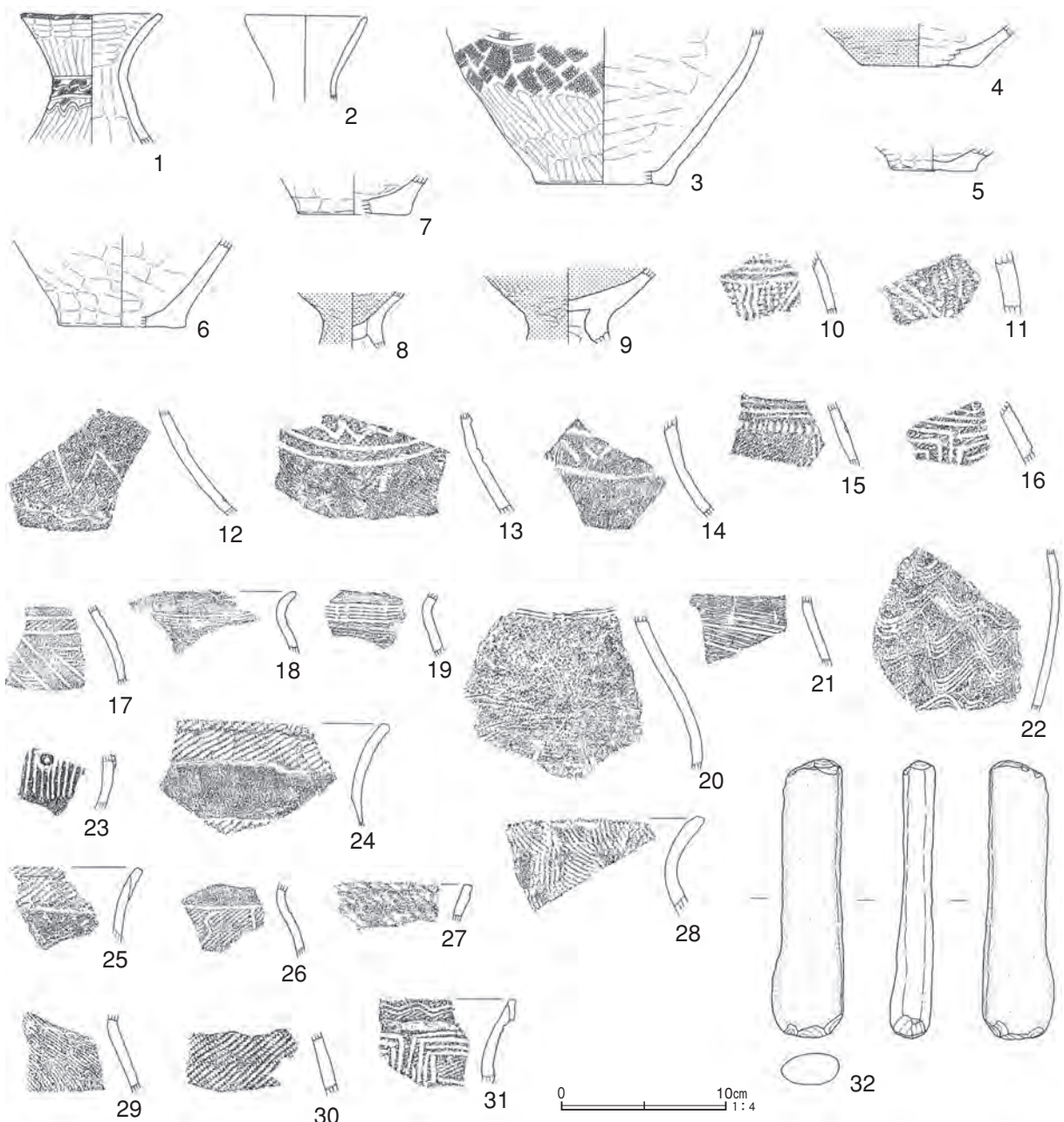
- 1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 2 炭化物層
- 3 灰白色粘土：酸化鉄多量含む。
- 4 暗灰色粘土：酸化鉄多量含む。
- 5 灰色粘土：酸化鉄多量含む。
- 6 灰白色粘土：酸化鉄多量含む。
- 7 黒色粘土：酸化鉄多量含む。
- 8 灰色粘土：酸化鉄、炭化物、灰白色粘土多量含む。
- 9 黒色粘土：酸化鉄多量含む。7層より明るい
- 10 灰色粘土：酸化鉄多量含む。
- 11 灰白色シルト：酸化鉄多量、炭化物、灰色粘土少量含む。
- 12 灰色粘土：酸化鉄多量、灰白色粒少量含む。

平面：0 2m  
1:100

断面：0 2m  
1:80

第66図 谷状落込跡





第67図 谷状落込跡出土遺物

上部から下部までの破片である。18～22の内面調整は、18は口縁部が横位、頸部以下は斜位、19・21・22は横位、20は横・斜位のヘラナデである。23はコの字重ね文が描かれた胴部中段の破片。ボタン状貼付文が付く。内面調整は縦・斜位のヘラナデである。24～30は縄文が施文された破片。24～26は口縁部から胴上部までの破片。文様構成が似ており、端部を含む口縁部と胴上部にL R単節縄文が施文されている。24は口縁部の縄文下に平行沈線が巡り、25は輪積痕が残る。26は胴上部の縄文上に平行沈線が巡り、沈線と波状沈線が間隔を空けて垂下する。いずれも頸部は無文で24は横位のヘラミガキ、25・26は横位のヘラナデが施されている。27～30は全面に縄文が施文された破片。27・28は口縁部から頸部まで、29は頸部から胴上部まで、30は胴上部の破片である。27・29は無節R、28・30はL R単節縄文である。27は口縁端部にも施文されている。24～30の内面調整は、24・28は口縁部が横位のヘラミガキ、

第19表 谷状落込跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	8.5	(7.9)	—	ABDGHJK	淡黄色	B	口～肩 80%	内面やや磨耗。
2	弥生土器 壺	(7.4)	(5.15)	—	AEHIN	にぶい黄橙色	B	口～頸 45%	内外面磨耗顕著。
3	弥生土器 壺	—	(9.5)	(8.2)	ABHIKN	黄灰色	B	胴～底 25%	内面磨耗顕著。
4	弥生土器 壺	—	(2.65)	(6.9)	ABDKN	赤褐色	B	底部 45%	外面赤彩、大半剥落。内外面磨耗顕著。
5	弥生土器 壺	—	(1.4)	5.2	ABDGJN	浅黄橙色	B	底部 90%	内外面磨耗顕著。
6	弥生土器 甕	—	(5.45)	(7.8)	ABEIKM	暗黄灰色	B	胴～底 45%	内外面磨耗顕著。
7	弥生土器 甕	—	(2.3)	(6.8)	ABIKN	褐灰色	B	底部 45%	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器高坏	—	(3.5)	—	ABDIKN	灰黄色	B	接合部 90%	坏部内面・外面赤彩、大半剥落。内外面磨耗顕著。
9	弥生土器高坏	—	(4.65)	—	ABHIM	赤褐色	B	接合部 70%	坏部内面・外面赤彩、やや剥落。内外面磨耗顕著。
10	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIJN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
11	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	オリーブ黒色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
12	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
13	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIN	灰黄色	B	肩部片	
14	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	暗黄灰色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
15	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
16	弥生土器 壺	—	—	—	ADIKN	黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
17	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
18	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGHJKMN	灰褐色	B	口～胴上片	
19	弥生土器 甕	—	—	—	AHIMN	黒褐色	B	頸～胴上片	
20	弥生土器 甕	—	—	—	ADEHIJKN	灰黄褐色	B	頸～胴中片	
21	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
22	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
23	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	赤褐色	B	胴中段片	
24	弥生土器 甕	—	—	—	AHIN	灰黄褐色	B	口～頸部片	
25	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHJN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
26	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKMN	黒褐色	B	頸～胴上片	
27	弥生土器 甕	—	—	—	AHIJMN	褐灰色	B	口縁部片	内外面やや磨耗。
28	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	口～頸部片	
29	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIKN	黒色	B	頸～胴上片	
30	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	黒褐色	B	胴上部片	
31	弥生土器筒形	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
32	敲打器	最大長 16.8 cm、最大幅 4.3 cm、最大厚 2.45 cm。重量 237.5g。完形。片岩製。両端使用。							

頸部は横位のヘラナデ、25～27・29・30は横位のヘラナデである。

8・9は高坏の接合部。9は坏部内面の磨耗が著しいため図示不可能であったが、8・9ともに外面と坏部内面にヘラミガキと赤彩が施されている。脚部内面はヘラナデ調整である。

31は筒形土器の口縁部片。肥厚した口縁部以下に無節Lが地文として施文され、口縁部は2本一単位の櫛歯状工具による波状文が巡り、以下に重四角文が描かれている。内面調整は横位のヘラナデである。

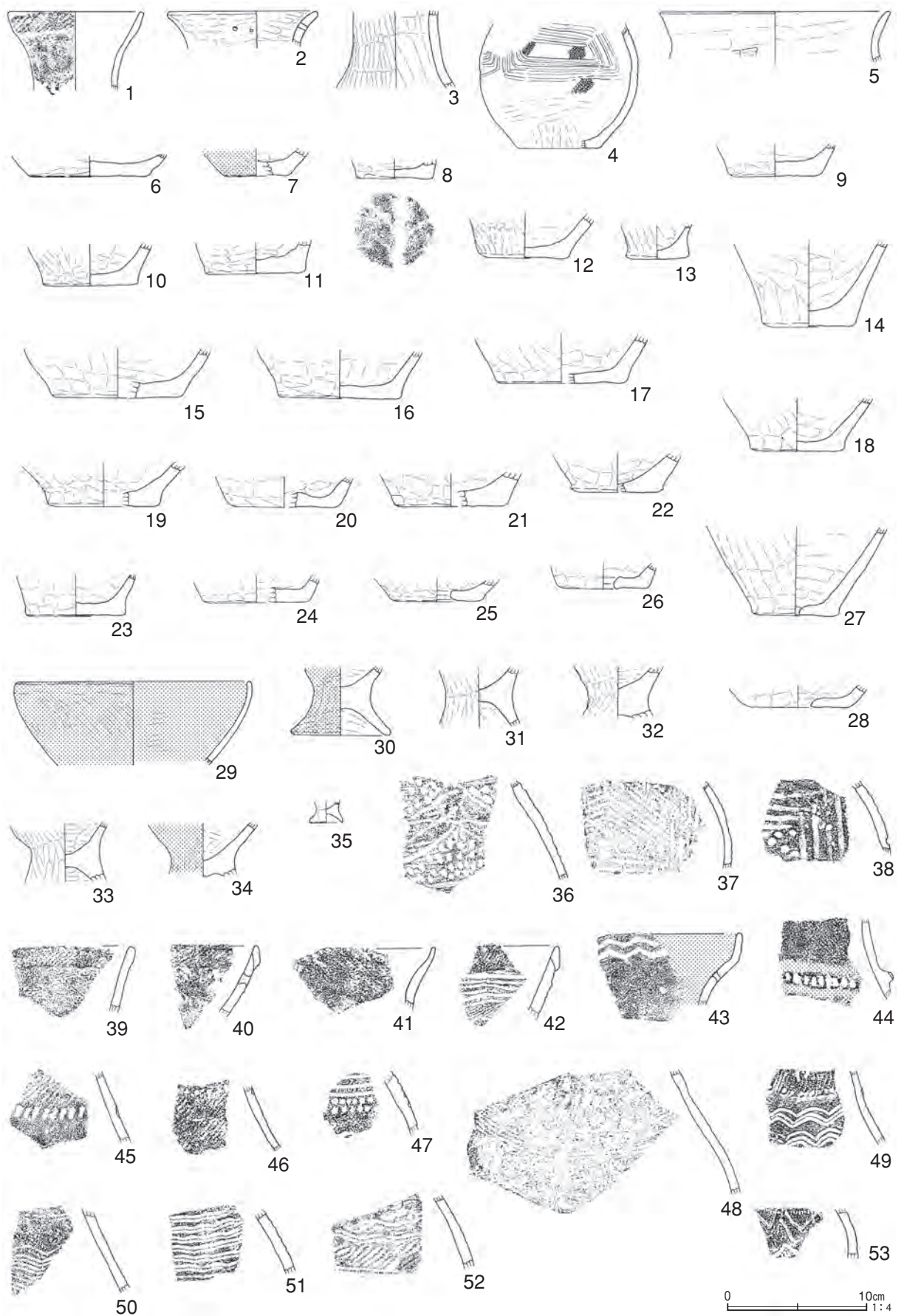
32は敲打器。両端に敲打痕がみられた。完形。片岩製。

谷状落込跡出土遺物は、図示不可能なものも含め、弥生時代に限られる。よって、その時期は弥生時代中期中頃から中期末としておきたい。

## 8 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、弥生時代の土器、勾玉、石器、古墳時代後期以降の須恵器、近世の陶器がある（第68～71図）。第1次調査での出土が多く、図示不可能なものも含め、そのほとんどは弥生時代の遺物である。土器は中期中頃、中期後半、後期初頭に分けられるが、ほとんどは中期後半に相当する。以下、時代・時期及び遺物ごとに順を追って述べる。

1～152は弥生時代の遺物。36～38・90は弥生時代中期中頃池上式。36～38は壺の胴上部片。36は重菱形文内に円形の刺突が充填されている。37・38は重四角文内に37は沈線による縦位の羽状文と半



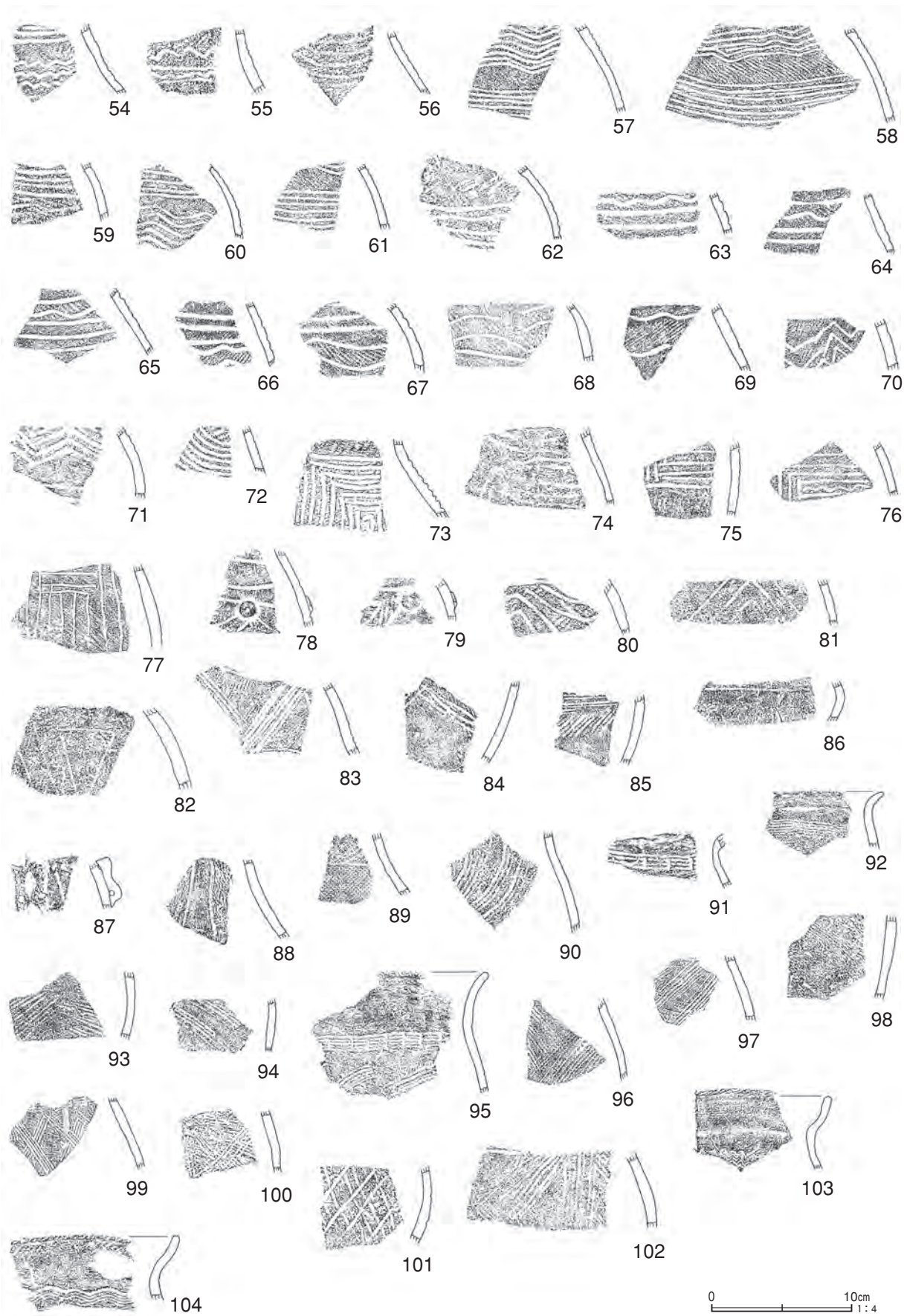
第68図 遺構外出土遺物 (1)



円形の刺突列、38は円形刺突が充填されている。36～38の内面調整はすべて横位のヘラナデである。90は甕の頸部から胴上部までの破片。5本一単位の櫛歯状工具で弧状の文様が描かれている。内面調整は横位のヘラナデである。

1～35・39～88・91～152は弥生時代中期後半の遺物。1～4・6・7・39～88は弥生土器壺。1は口縁部から頸部までの部位。口縁部はやや受け口状を呈し、頸部はほぼ直立する。口縁部にLR単節縄文が施文され、以下は無文であるが、磨耗が著しいため内面も含め、調整は不明である。2は外反する口縁部。内外面ともにヘラミガキ調整であり、2個一対の孔が設けられている。3はほぼ直立する頸部。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。内面に輪積痕が残る。4は胴上部から底部までの部位。胴部は球形を呈し、底径がやや大きい。文様は胴部に重四角文が描かれ、内外にLR単節縄文が施文されている。以下は無文でヘラミガキ調整である。内面は図示できなかつたが、横・斜位のヘラナデである。6・7は底部。器形及び調整から壺としたが、甕の可能性もある。また中期後半に含めたが、時期が前後するものがあるかもしれない。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。7は外面に赤彩が施されている。

39～43は口縁部から頸部までの破片。39・40・42は口縁部が肥厚しており、41・43は受け口状を呈する。口縁部は縄文が施文されており、41以外はLR単節縄文である。41は磨耗が著しいため、はっきりしないが、無節RかRL単節縄文が施文されている。43は縄文地に山形状の沈線が2条巡る。縄文下は42以外無文で39・41は横位、40は斜位のヘラミガキ調整であり、43は磨耗が著しいため不明である。40は縄文と無文部の境に焼成後穿孔、43は焼成前穿孔が1つみられた。42は口縁部の縄文下に複数の平行沈線と波状沈線が巡り、間にLR単節縄文が施文されている。39～43の内面調整は、39～41・43が横位、42が横・斜位のヘラミガキであり、43は赤彩が施されている。44は頸部から肩部までの破片。刻みを持つ突帯が1条巡る。上下は無文で縦位のヘラミガキと赤彩が施されている。内面調整は横・斜位のヘラナデである。45～47は刺突列が巡る破片。45はLR単節縄文下に巡る。刺突列下は無文で横位のヘラミガキ調整である。46は下にLR単節縄文が施文されている。47は複数の平行沈線下に2列巡る。以下は狭い無文部を挟んで波状沈線が巡る。無文部は横位のヘラミガキ調整である。45～47の内面調整は45が斜位、46・47は横位のヘラナデである。48～52は櫛歯状工具による直線文と波状文が巡る破片。櫛歯の単位は2本が多い。48は上位に設けられた段下に3本一単位の櫛歯状工具による刺突列が巡る。以下は直線文2条と波状文が間隔を空けて巡り、間にLR単節縄文が施文されている。49も段が設けられており、下に半円形の刺突列と波状文が巡る。段上は縄目を縦にしたLR単節縄文が施文されている。50は上位に直線文、下位に波状文が複数巡る。間は無文で横・斜位のヘラミガキ調整である。51は振れの弱い波状文が密に巡る。52は上位に複数の波状文、下位に直線文が巡り、間にLR単節縄文が施文されている。48～52の内面調整は、48が横・斜位、49・51・52は横位、50は斜位のヘラナデである。53～71は平行沈線や波状ないし山形状の沈線が巡る破片。53は無節L地に振れの大きい波状沈線が複数巡る。54は上位に複数の平行沈線、下位に波状沈線が巡り、間にLR単節縄文が施文されている。55はLR単節縄文地に描かれた波状沈線下に間隔の狭い2条の平行沈線が巡り、間に振れの小さい波状沈線が充填されている。以下は無文で横位のヘラミガキ調整である。56は平行沈線が等間隔に巡る。57・58は上位に波状沈線、下位に平行沈線が複数巡り、間は57がRL単節縄文、58は無節Rが施文されている。59・60は複数の平行沈線下に波状沈線が巡る。61は上位に波状沈線、下位に平行沈線が複数巡り、



第69図 遺構外出土遺物 (2)

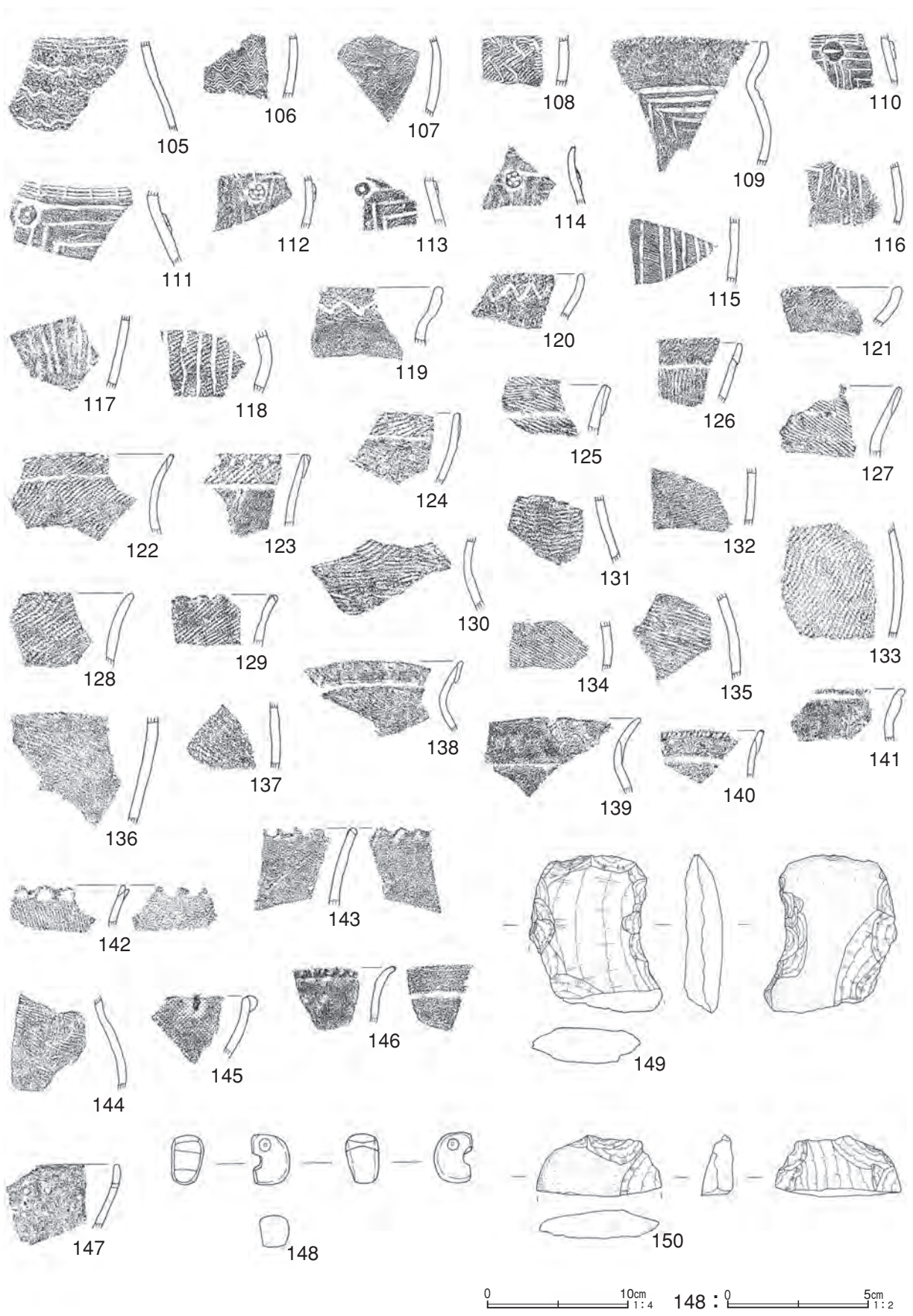


間にRL単節縄文が施文されている。62は地文に無節Lが施文され、下位に複数の平行沈線が巡る。63～68は沈線が太く、複数の平行沈線と波状沈線が巡る。波状沈線が描かれた平行沈線間に縄文が施文される傾向にあり、64・65はRL、66はLR単節縄文が施文されている。67・68は波状というより弧線状を呈する。67は弧線状の沈線間、68は地文にRL単節縄文が施文されている。69は波状沈線間にLR単節縄文が充填されている。上下は無文で斜位のヘラミガキ調整である。70・71は山形状の沈線が複数巡る。70は地文にLR単節縄文、71は横・斜位のヘラミガキが施された無文部を挟んで下に平行沈線が巡る。53～71の内面調整は、53～55・57～59・61～71が横位、56は横・斜位、60は斜位のヘラナデである。54は内面に輪積痕が残る。72はフラスコ文が描かれた胴上部片。区画内にLR単節縄文が充填されている。内面調整は横・斜位のヘラナデである。73～77は重四角文が描かれた破片。73は地文にLR単節縄文が施文されている。75は下が無文で横位のヘラミガキ調整である。76は区画内に横位の波状沈線が巡る。77は沈線が細い。下に斜位のハケメ調整が残る。73～77の内面調整はすべて横位のヘラナデである。78～83は重三角文が描かれた胴上部片。78・79は頂点にボタン状貼付文が付き、79は沈線間にLR単節縄文が充填されている。80はLR単節縄文地にやや弧状を呈する沈線で粗雑に描かれている。83は無節L地に2本一単位の櫛歯状工具による直線文3条で描かれている。鋸歯文の可能性もある。78～83の内面調整は、78～81・83が横位、82が横・斜位のヘラナデである。84～86は胴部中段から下部までの破片。84は弧線文が粗雑に描かれており、以下は無文で斜位のヘラミガキ調整である。85は4本一単位の櫛歯状工具による直線文下にLR単節縄文が施文されている。以下は無文で横位のヘラミガキ調整である。86は細い平行沈線が横位に巡り、以下は無文で横位のヘラミガキ調整である。84～86の内面調整は、84・85が横・斜位、86が横位のヘラナデである。87は縦長の突起が付く胴上部片。突起下位に孔が設けられている。脇は半円形の刺突列下に沈線が垂下する。内面調整は横位のヘラナデである。88は沈線が垂下する肩部から胴上部までの破片。沈線間は垂下する細い波状沈線が充填されている。外面無文部及び内面はヘラミガキ調整であるが、前者は縦位、後者は斜位に施されている。

5・8～24・91～144は甕。5は口縁部から頸部までの部位。口縁部の開きが小さく、頸部は直立に近い。文様は頸部に単位不明の簾状文が巡るのみである。外面無文部及び内面の調整はヘラナデである。8～24は胴下部から底部までの部位。8～13は外面調整がヘラミガキ、内面はヘラナデ、14～24は内外面ともにヘラナデ調整である。8の底面は木葉痕がみられた。8～13は器形及び調整から甕としたが、壺の可能性もある。また壺同様、中期後半に含めたが、時期が前後するものがあるかもしれない。

91～108は櫛歯状工具で文様が描かれた破片であるが、これらについては後期初頭に相当するものがあるかもしれない。櫛歯の単位は4～5本が多い。91は簾状文が巡る頸部片。上下は無文で横位のヘラナデ調整である。92～98は羽状文が描かれた破片。92～94は縦位、95～98は横位に描かれている。92は頸部以下に描かれている。口縁部は無文で横位のヘラナデ調整である。95は頸部に同一工具による簾状文が巡る。口縁部は端部にRL単節縄文が施文され、以下は無文で横位のヘラナデ調整である。92～98の内面調整はすべて横位のヘラナデである。99～101は胴部に斜格子文が描かれた破片。99は頸部に同一工具による簾状文が巡る。文様下に横・斜位のハケメが残る。100は頸部に同一工具による波状文が巡り、胴部は文様下に斜位のハケメが残る。101は櫛歯ではないが、斜格子文が描かれており、地文にLR単節縄文が施文されている。99～101の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。102は





第70図 遺構外出土遺物 (3)

矢印状に横位の羽状文状の文様が描かれており、間に同一工具による直線文が垂下する。内面調整は横位のヘラナデである。103～108は波状文が描かれた破片。103・104は頸部、105～108は胴部に巡る。103・104は口縁部が受け口状を呈し、端部にLR単節縄文が施文されている。以下は無文で横位のヘラナデ調整である。105は頸部に同一工具による直線文が巡る。106・107は密に施文されており、107は沈線が細い。108は地文にLR単節縄文が施文されており、波状文は粗雑に描かれている。103～108の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。109～118は胴部にコの字状重ね文が描かれた破片。109は口縁部が受け口状を呈し、端部にLR単節縄文が施文されている。以下は無文で横位のヘラナデ調整である。110～114はボタン状貼付文が付く。111は頸部に単位不明の簾状文が巡る。115は文様下に斜位のハケメが残る。116・118は地文にLR単節縄文が施文され、116は波状沈線も垂下する。109～118の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。119～137は縄文が施文された破片。119～129は口縁部から頸部までの破片。119～121・123・124は口縁部、125・126は端部を含む口縁部以下、122・127～129は口縁部以下に縄文が施文されている。119～123・126・128・129はLR単節縄文、124は無節L、125・127は無節Rである。126の口縁部下の縄文は縄目が縦になるように施文されている。119～121は口縁部が受け口状を呈し、122～127は肥厚している。119・120は縄文地に波状沈線が巡る。122・123・129は端部に刻みを持つ。119～121・123・124は縄文帯以下が無文ですべて横位のヘラナデ調整である。130・131は頸部から胴上部までの破片。130はLR単節縄文、131は無節Rが施文されている。132～137は胴上部から下部までの破片。132・133はLR、134～136はRL単節縄文、137はオオバコによる擬縄文が施文されている。136は縄文下が無文で斜位のヘラナデ調整である。119～137の内面調整は、119～130・132～135・137が横位、131・136が横・斜位のヘラナデである。138～143は口縁部から頸部までの破片。138～140は口縁部が肥厚している。138・139は無文。調整は138が内外面ともに横位、139は口縁部外面が横位、頸部が縦位、内面は横位のヘラナデである。140は口縁端部に刻みを持ち、141は口縁端部に沈線状の輪積痕が残る。ともに端部下は無文で内面とともに横位のヘラナデ調整である。142・143は口縁端部に指頭圧痕が施され、以下は142が斜位、143は横・斜位のハケメ調整である。142・143の内面調整は、142が横・斜位のハケメ、143は横位のハケメである。144は無文の頸部から胴部中段の破片。外面調整は斜位のハケメ、内面は斜位のヘラナデである。

25～28は甔の胴下部から底部までの部位。すべて内外面ともにヘラナデ調整である。

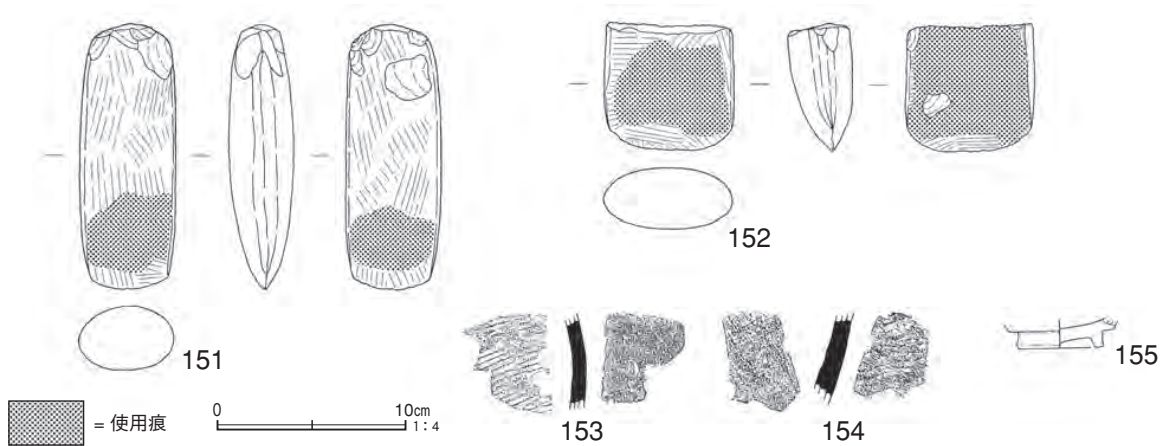
29～34・145は高坏。調整は外面及び坏部内面がヘラミガキ、脚部内面はヘラナデが施されるものが多く、29・30・34・145は赤彩が施されている。29は口縁部から坏部までの部位。口縁部はほぼ直立し、坏部は内湾する。30は接合部から脚部までの部位。脚部は短い。31～34は接合部。33は脚部内面もヘラミガキ調整である。145は口縁部片。端部に突起が付く。

35はミニチュア土器の底部付近。高坏の脚部状を呈する。内外面ともにヘラナデ調整である。

146・147は鉢。146は口縁部片。7号住居跡出土第22図15に器形・文様が似ている。口縁端部に刻みを持ち、内外面ともにヘラミガキ調整である。内面は輪積痕が残る。147は内外面ともに横位のヘラミガキ調整である。口縁部に2個一対の孔が設けられている。

148は翡翠製の勾玉。完形である。最大長1.75cmと小さく、やや角張った形状を呈する。59-139Gの水田跡下の遺物包含層から出土した。





第71図 遺構外出土遺物 (4)

149・150は打製石斧。149は刃部を欠く。150は基部のみの検出である。151・152は太形蛤刃の磨製石斧。151は完形。59-139Gの水田跡下の遺物包含層から出土した。出土位置は翡翠製勾玉に近い。152は刃部のみ検出である。ともに緑色岩製であり、刃部は刃こぼれが生じており、両面に使用痕も認められた。

89は唯一の弥生時代後期初頭の遺物。壺の肩部片である。上位に細い沈線で斜格子文が描かれており、以下は無文で斜位のヘラミガキと赤彩が施されている、内面調整は横位のヘラナデである。

153・154は古墳時代後期以降の須恵器甕。153は胴部中段、154は胴下部の破片である。153は外面がタタキ、内面はナデ調整であり、外面に自然釉が付着している。154は外面がタタキ後ナデ、内面はあて具痕が残る。

155は近世の陶器。天目茶碗の底部である。内面に鉄釉がかかる。

第20表 遺構外出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	58-59-143-144G	弥生土器 壺	(9.8)	(5.7)	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸 25%	内外面磨耗顕著。
2	第1次一括	弥生土器 壺	11.9	(2.7)	—	ACGHIJKN	褐灰色	B	口縁部 70%	内外面磨耗顕著。
3	59-140G	弥生土器 壺	—	(5.6)	—	ABDHIN	褐灰色	B	頸部 80%	内面輪積痕有。内面やや磨耗。
4	58-59-143-144G	弥生土器 壺	—	(9.05)	(6.2)	ABEHIKM	にぶい橙色	B	胴～底 30%	内外面磨耗顕著。
5	第2次一括	弥生土器 甕	(16.6)	(3.8)	—	ADIN	橙色	B	口～頸 25%	内外面磨耗顕著。
6	第1次一括	弥生土器 壺	—	(1.6)	8.6	ABDIJ	にぶい黄橙色	B	底部 80%	内外面磨耗顕著。
7	58-142G	弥生土器 壺	—	(2.0)	(4.8)	ABEH	にぶい褐色	B	底部 45%	外面磨耗顕著。
8	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	(1.45)	5.5	ABHIK	暗灰色	B	底部 100%	底面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
9	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	(2.3)	6.6	ABDHIMN	にぶい黄橙色	B	底部 90%	内外面磨耗顕著。
10	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	(3.1)	(6.9)	ABIKM	灰黄色	B	底部 45%	内外面磨耗顕著。
11	第1次一括	弥生土器 甕	—	(2.4)	7.2	ABDHKN	にぶい赤褐色	B	底部 75%	内外面磨耗顕著。
12	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	(3.25)	6.4	ABGHIJKMN	暗灰色	B	底部 80%	内外面やや磨耗。
13	59-140G	弥生土器 甕	—	(2.5)	4.6	ABHK	にぶい橙色	B	底部 90%	
14	第2次一括	弥生土器 甕	—	(6.35)	6.7	ABHIKMN	にぶい褐色	B	胴～底 80%	
15	第1次一括	弥生土器 甕	—	(3.6)	(9.4)	ADIM	浅黄橙色	B	底部 30%	内外面磨耗顕著。
16	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	(3.45)	8.8	ABDEHIKMN	にぶい黄橙色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
17	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	(3.6)	(9.3)	ABIKM	浅黄色	B	底部 45%	内外面磨耗顕著。
18	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	(3.9)	(6.6)	ABEIKN	灰黄色	B	底部 40%	内外面磨耗顕著。
19	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	(3.2)	(8.2)	ABDGMN	淡黄色	B	底部 40%	内外面磨耗顕著。
20	第1次一括	弥生土器 甕	—	(2.3)	(7.7)	ABDIKN	明褐灰色	B	底部 30%	内外面磨耗顕著。
21	第2次一括	弥生土器 甕	—	(2.5)	(8.1)	ABDIKN	褐灰色	B	底部 30%	内外面磨耗顕著。
22	第2次一括	弥生土器 甕	—	(2.85)	(6.7)	ABDGIKN	にぶい赤褐色	B	底部 40%	内外面磨耗顕著。
23	第2次一括	弥生土器 甕	—	(3.05)	7.1	ABDEGIN	淡黄色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
24	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	(2.0)	(7.6)	ABDEIKN	にぶい橙色	B	底部 40%	内外面磨耗顕著。
25	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	(1.7)	(6.5)	ABDHIKN	灰褐色	B	底部 30%	内外面やや磨耗。
26	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	(1.95)	(6.5)	ABDEIN	淡黄色	B	底部 30%	外面磨耗顕著。
27	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	(6.5)	(6.2)	ABEIKN	灰白色 暗灰色	B	胴～底 45%	内外面磨耗顕著。
28	第1次一括	弥生土器 甕	—	(1.7)	(7.4)	ADEIJKN	オリーブ黒色	B	底部 30%	内外面磨耗顕著。
29	58-59-143-144G	弥生土器高坏	(17.0)	(6.05)	—	ABDIN	にぶい橙色	B	口～坏 20%	内外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。
30	第2次一括	弥生土器高坏	—	(5.0)	7.3	ACIKN	橙色	B	接～脚 80%	内外面磨耗顕著。
31	58-140G	弥生土器高坏	—	(4.3)	—	ABCEIKM	褐灰色	B	接合部 70%	内外面磨耗顕著。



番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
32	58-59-143-144G	弥生土器高坏	—	(3.75)	—	ABHIKN	にぶい橙色	B	接合部 90%	内外面磨耗顕著。
33	58-142G	弥生土器高坏	—	(4.3)	—	ABIK	黒色	B	接合部 70%	
34	第2次一括	弥生土器高坏	—	(3.9)	—	ABEIKMN	にぶい黄橙色	B	坏~接 70%	内外面磨耗顕著。
35	58-59-139-140G	弥生土器ミニチュア	—	(1.6)	2.4	ABCCHIN	黄灰色	B	胴~底 80%	内外面磨耗顕著。
36	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABIJKN	赤褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
37	第2次一括	弥生土器壺	—	—	—	ABDEIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
38	第2次一括	弥生土器壺	—	—	—	ABDHIKMN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
39	59-142G	弥生土器壺	—	—	—	ABDIK	灰黄色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
40	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ACEHIKMN	黒褐色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
41	第2次一括	弥生土器壺	—	—	—	ABDEKM	浅黄橙色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
42	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABDGHKMN	灰黄褐色	B	口~頸部片	内外面やや磨耗。
43	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABCDEIKMN	橙色	B	口~頸部片	内面赤彩。頸部孔有。磨耗顕著。
44	58-59-139-140G	弥生土器壺	—	—	—	ABIJN	にぶい橙色	B	頸~肩部片	外面赤彩、大半剥落。
45	58-59-139-140G	弥生土器壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい橙色	B	肩部片	
46	第1次一括	弥生土器壺	—	—	—	ABEHKN	黄灰色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
47	59-141G	弥生土器壺	—	—	—	ABIKMN	褐灰色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
48	58-59-139-140G	弥生土器壺	—	—	—	ABDIN	灰黄色	B	肩~胴上片	外面磨耗顕著。
49	第2次一括	弥生土器壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい橙色	B	肩~胴上片	内面磨耗顕著。
50	58-59-139-140G	弥生土器壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	肩~胴上片	内外面磨耗顕著。
51	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABCDEIKN	灰白色	B	胴上部片	
52	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABDIKMN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
53	59-141G	弥生土器壺	—	—	—	ABK	灰白色	B	胴上部片	
54	58-140G	弥生土器壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
55	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
56	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABCDHIN	浅黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
57	58-59-139-140G	弥生土器壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
58	59-140G	弥生土器壺	—	—	—	ABGHKMN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
59	59-142G	弥生土器壺	—	—	—	ABHIKMN	黒褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
60	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABDEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
61	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
62	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
63	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABCDIJN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
64	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABDIKN	褐灰色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
65	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	AIKN	暗灰色	B	胴上部片	
66	第1次一括	弥生土器壺	—	—	—	ABCDHIKN	黒色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
67	第1次一括	弥生土器壺	—	—	—	ABEIKN	灰白色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
68	第1次一括	弥生土器壺	—	—	—	ABCDIK	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
69	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABDHIKMN	黒褐色	A	胴上部片	
70	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABCDHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
71	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABDHN	灰白色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
72	第1次一括	弥生土器壺	—	—	—	ABDHIKN	浅黄色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
73	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ADIKN	灰褐色	B	胴上部片	
74	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABCEHIKN	にぶい橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
75	58-59-139-140G	弥生土器壺	—	—	—	ABEIKMN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
76	第1次一括	弥生土器壺	—	—	—	ABDIK	黒褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
77	第2次一括	弥生土器壺	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
78	59-142G	弥生土器壺	—	—	—	ABCEIN	灰黄色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
79	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABDHIN	橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
80	58-59-139-140G	弥生土器壺	—	—	—	ABCDIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
81	58-59-139-140G	弥生土器壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
82	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABEIKN	灰黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
83	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABDEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
84	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABEHIKN	黄灰色	B	胴中~下片	外面やや磨耗。
85	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴中~下片	
86	第2次一括	弥生土器壺	—	—	—	ABEIN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
87	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	突起有。内面磨耗顕著。
88	58-59-143-144G	弥生土器壺	—	—	—	ABCCHIN	橙色	B	肩~胴上片	外面磨耗顕著。
89	58-59-139-140G	弥生土器壺	—	—	—	ABDHN	赤褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
90	第2次一括	弥生土器甕	—	—	—	ABDIKN	褐色	B	頸~胴上片	内外面磨耗顕著。
91	第1次一括	弥生土器甕	—	—	—	ABDIKN	黒褐色	B	頸部片	
92	58-59-143-144G	弥生土器甕	—	—	—	ABDEHIJKM	灰黄色	B	口~胴上片	外面磨耗顕著。
93	第2次一括	弥生土器甕	—	—	—	ABDIKN	黒褐色	B	胴中段片	
94	第1次一括	弥生土器甕	—	—	—	ABDGHIN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
95	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	口～胴上片	外面やや磨耗。
96	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKMN	黒褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
97	59-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHKN	褐灰色	B	胴上部片	
98	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	灰黄褐色	B	胴中～下片	
99	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABGHIK	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	
100	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIJKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
101	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIKN	浅黄色	B	胴中段片	
102	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
103	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	口～胴上片	外面一部磨耗。
104	59-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIKN	褐色	B	口～頸部片	外面所々磨耗。
105	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	AHKN	褐灰色	B	頸～胴上片	外面磨耗顕著。
106	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	黒褐色	B	胴中段片	
107	第2次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIK	黒褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
108	59-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKN	黒褐色	B	胴中段片	
109	第2次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	口～胴中片	内外面所々磨耗。
110	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHI	黒色	B	頸～胴上片	
111	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	黒褐色	B	頸～胴上片	
112	59-142G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKM	にぶい黄褐色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
113	59-142G	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKMN	黒褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
114	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	外面やや磨耗。
115	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴中段片	
116	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	暗褐色	B	胴上～中片	外面やや磨耗。
117	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	BEHIN	灰黄褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
118	第1次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	胴中段片	
119	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKMN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
120	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ACHIKN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
121	58-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDH	黒色	B	口縁部片	
122	第2次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内面やや磨耗。
123	第2次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
124	59-142G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
125	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIJMN	黒褐色	B	口縁部片	
126	第1次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABHKN	黄灰色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
127	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	口～頸部片	
128	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKM	黒色	B	口～頸部片	
129	第1次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	黒褐色	B	口縁部片	
130	59-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
131	第2次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIKN	橙色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
132	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIKMN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
133	第2次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIJN	褐灰色	B	胴中段片	
134	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒色	B	胴上部片	
135	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKMN	黒褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
136	58-59-143-144G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
137	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	にぶい褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
138	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKMN	暗褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
139	第2次一括	弥生土器 甕	—	—	—	AIKN	暗褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
140	第1次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	にぶい褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
141	第1次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIJKN	黒褐色	B	口～頸部片	口縁部輪積痕有。
142	第1次一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKN	灰褐色	B	口縁部片	
143	58-59-139-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKMN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
144	58-140G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒色	B	頸～胴上片	
145	59-140G	弥生土器高坏	—	—	—	ABDIKN	橙色	B	口縁部片	突起有。内外面赤彩、大半剥落。
146	第2次一括	弥生土器 鉢	—	—	—	ABIKN	灰色	B	口縁部片	
147	58-59-143-144G	弥生土器 鉢	—	—	—	ABDHIKN	にぶい橙色	B	口～体部片	2個一対孔有。内外面所々磨耗。
148	59-139G	勾玉	最大長1.75cm、最大幅1.3cm、最大厚1.15cm、孔径0.4cm。重量4.9g。完形。翡翠製。							
149	第2次一括	打製石斧	最大長(11.3)cm、最大幅(7.9)cm、最大厚(2.65)cm。重量(324.0)g。刃部欠。閃緑岩製。							
150	59-142G	打製石斧	最大長(4.35)cm、最大幅(8.9)cm、最大厚(2.2)cm。重量(91.4)g。基部のみ残。粘板岩製。							
151	59-139G	磨製石斧	最大長15.15cm、最大幅5.45cm、最大厚3.65cm。重量518.5g。完形。緑色岩製。刃部両面使用痕有。							
152	58-59-143-144G	磨製石斧	最大長(7.3)cm、最大幅(7.4)cm、最大厚(3.6)cm。重量(320.5)g。刃部のみ残。緑色岩製。刃部両面使用痕有。							
153	第1次一括	須恵器 甕	—	—	—	AB	灰白色	B	胴中段片	外面自然釉付着。
154	第1次一括	須恵器 甕	—	—	—	ABD	灰色	B	胴下部片	
155	59-141G	陶器天目茶碗	—	(1.65)	4.9	—	—	—	高台部70%	鉄釉。

## V 調査のまとめ

前中西遺跡は、遺跡の主体となる弥生時代を端緒として以後、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世まで長期間にわたる複合遺跡である。本遺跡における調査報告は今回で7回目となるが、これまでの報告では弥生時代以外の遺構・遺物も多数検出されていた。しかし、本報告地点は、遺構・遺物ともに弥生時代の検出数が突出しており、調査区ほぼ全面に住居跡が密に分布する状況が確認された。こうした例はこれまでに無く、本報告地点一帯が弥生時代集落の中心部であったことが考えられる。

本遺跡における弥生時代の集落と墓域については、これまでの報告でも述べてきたが、今回は本報告分も含めた遺跡全体の弥生時代の分布状況（第72図）を提示し、改めて現時点における様相について訂正も含めて簡単に述べてみたい。また、今回報告の住居跡14軒は、時期的には弥生時代中期後半から末までの段階に収まるが、出土土器や住居跡の主軸方向等から変遷を辿ることが可能である。従って、本報告分の集落の変遷についても簡単に述べ、まとめとしたい。

### 弥生時代の集落と墓域について

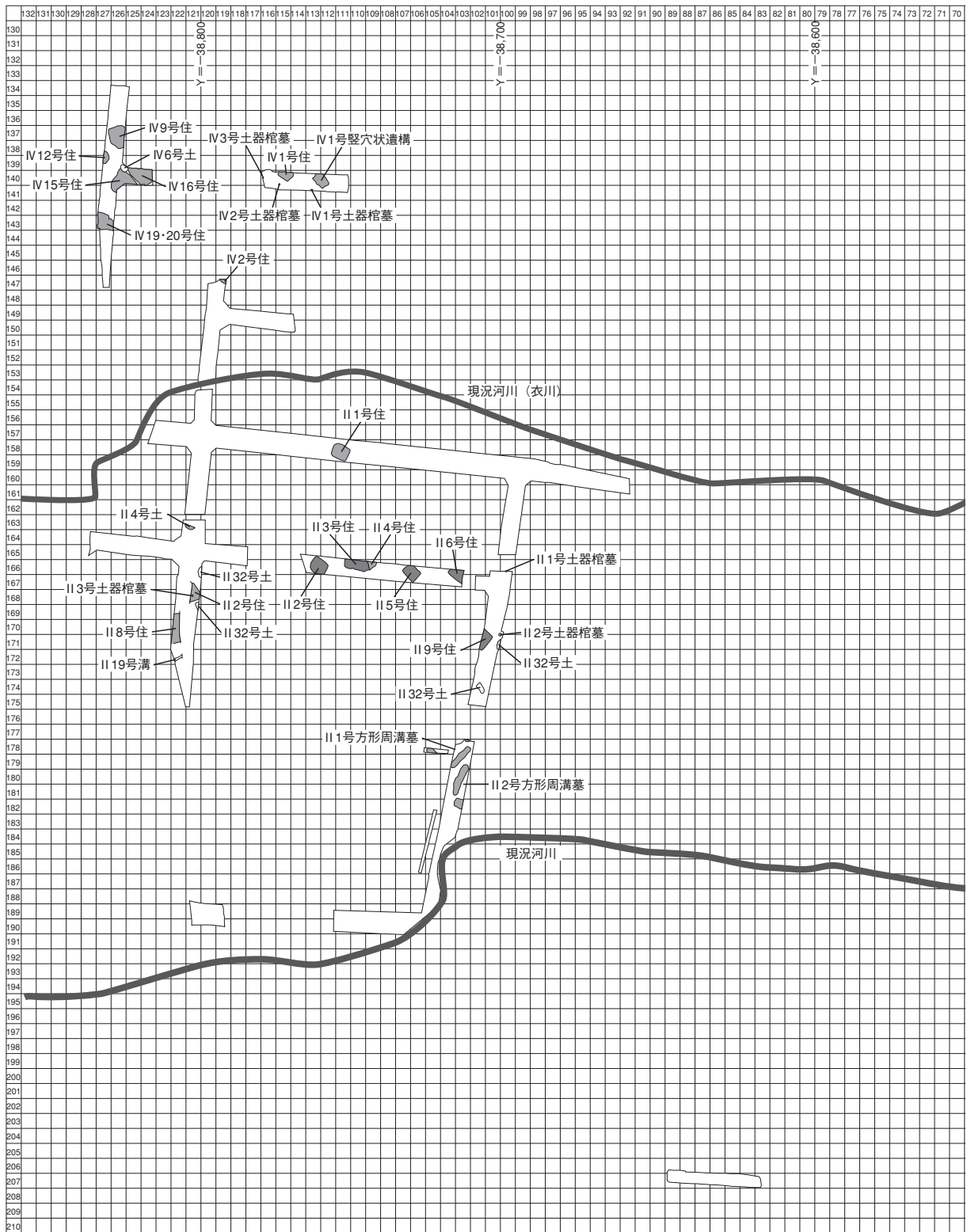
本遺跡における弥生時代の集落と墓域は、現在も流れる衣川を主な境界線として北側に集落、南側に方形周溝墓による墓域が広がっている（第72図）。本遺跡において河川は、集落と墓域の立地に大きく関与するため、図には現況河川を示したが、遺跡範囲東側で行われた調査では、旧河川跡が検出されており、現況河川と流路がほぼ一致することが判明している。以下、弥生時代の集落と墓域について河川を絡めて時期別に現時点の様相を述べる。

集落は中期中頃、中期後半、中期末～後期初頭の3つの段階に大別される。開始時期である中期中頃は、住居跡が2軒と非常に少なく、遺跡範囲東側の衣川を挟んだ南北に点在する。当段階の集落は、現時点では東側に広がる小規模なものであったと考えられるが、池上式に相当する土器片は、遺跡範囲西側でも検出されていることから未調査部分に遺構が存在する可能性もある。

中期後半は、前段階に比べて規模が大幅に増す。現時点における住居跡の検出数は30軒を数え、分布は遺跡範囲西側が衣川の南北、東側は衣川北側にほぼ限定され、概ね3つに大別される。いずれもある程度のまとまりを持ちつつ広がるが、特に本報告地点を含む東側では、冒頭でも述べたとおり、住居跡が密に分布する状況が確認されており、弥生時代集落の中心部と言える。また、衣川北側にある東西2つの住居跡群は、重複しているものや住居跡同士が非常に近接するもの等があることから時期差を持つことは明らかである。当段階の集落は衣川の北側が主体となり、遺跡範囲東側が中心となることは間違いなく、未調査部分も含め、さらに多くの住居跡が存在することが考えられる。なお、第72図の中期後半とした住居跡には、中期末との過渡的な様相を呈するものも含めてある。

中期末から後期初頭にかけての段階は、現時点における住居跡の検出数が7軒である。『前中西遺跡V』（熊谷市教育委員会2010）では11軒と報告してしまったが、本稿を述べるにあたり、再度精査をした結果、7軒であることが判明したため、ここで訂正させていただきたい。当段階は前段階に比べると減少傾向にあることは否めないが、中期末については前述のとおり、中期後半との過渡的な様相を呈するものがあることから検出数に若干の上乗せが可能とも言える。また住居跡の検出数は後述する当段階の方形周溝墓の数を下回るため、未調査部分に住居跡が存在することが考えられる。分布状況については、遺跡

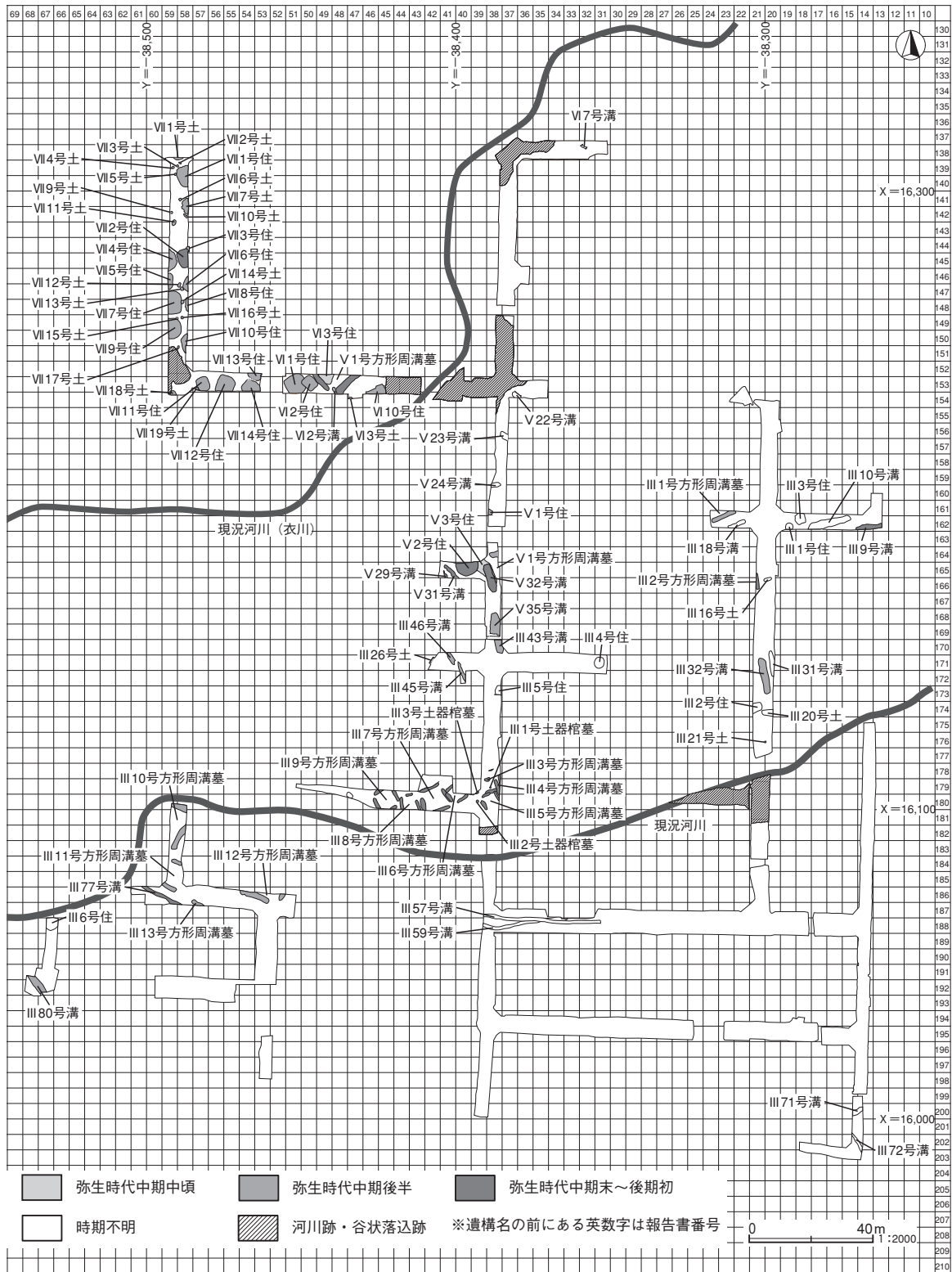




第72図 弥生時代遺構分布図

範囲東側では衣川の南側、西側では南北に広がっており、前段階とは異なる。

本遺跡の弥生時代集落は、中期中頃から後期初頭まで確認されているが、出土土器からみると中期後半は、市内上川上に所在する同時期の大規模集落である北島遺跡よりも若干新しい様相を呈するため、現時点では中期中頃と中期後半の間にやや空白期間があるように思われる。中期後半以降は、中期後半



と中期末から後期初頭までの2つの段階に大別されるが、集落は絶え間なく営まれており、規模は現時点では中期後半から後期初頭に向かって減少傾向にあると言える。なお、遺跡範囲南東部では、弥生時代の住居跡として報告された遺構があるが、時期の判別が困難であり、また規模・形態からみて住居跡かどうか疑問の残るものであることから本稿では省略した。

次に墓域について。墓は方形周溝墓の他に乳幼児葬である土器棺墓があるが、土器棺墓は集落内外で確認されていることから、本稿で述べる墓域とは方形周溝墓の分布域を意味する。時期は集落と異なり、中期後半と中期末から後期初頭までの2つに大別されるが、時期の判別が困難なものもある。また、調査区の都合から単独の溝跡として報告したものに方形周溝墓の可能性が高いものもあるため、検出数がさらに増える可能性が高い。本稿では可能性の高いものも含め、時期別にみていくこととする。

現時点における中期後半の方形周溝墓の検出数は、9基である。分布状況は、遺跡範囲西側の衣川南側、中央付近では南を流れる河川南側、東側では両河川に挟まれた箇所3つに分けられるが、西側と中央付近に所在するものは軸がほぼ合う。両者間は未調査であるが、間約170mには当該段階の方形周溝墓が広がっている可能性があり、1つのまとまりを形成しているのかもしれない。

中期末から後期初頭にかけての段階は、現在11基が検出されている。分布状況は遺跡範囲東側に限定され、1基のみ衣川の北側にあるが、大半は衣川と南側河川の間に分布する。

墓域は主に衣川南側に広がっており、方形周溝墓は時期別にまとまりを持ちながら分布するものの、遺跡範囲東側については時期の判別が難しいものもある。平面プランは、すべて四隅の切れるタイプであるが、規模は中期後半が中期末から後期初頭に比べると大きいことは確かである。

なお、土器棺墓についても触れておく。図に示していない『前中西遺跡VI』1号住居跡検出の土器棺墓と本報告14号溝跡のものを含めると、現時点での検出数は11基である。時期別による内訳は、中期後半が7基、中期末から後期初頭が4基である。土器棺墓は前述のとおり、集落内外で確認されているが、現時点では中期後半が集落、中期末から後期初頭が墓域から検出される傾向にある。

以上が現時点における弥生時代の集落と墓域の様相である。調査及び報告は今後も継続して行われることから、検出数が増加することは必至である。資料の増加とともに再度検討していきたい。

#### 本報告地点における集落の変遷について

本報告地点で検出された住居跡は14軒である。時期は弥生時代中期後半から末までに収まるが、重複する2・3号住居跡や住居跡同士が近接するものがあることから時期差を持つ。これらの住居跡の変遷を辿る上で最も指標となるのは、出土土器である。弥生時代中期後半から後期初頭にかけては、文様の主体が縄文から櫛歯状工具によるものへと移行する傾向にあり、壺は胴部中段まで施文されていた文様が、時期が下るにつれて頸部にほぼ集約される。甕は縄文を施文する甕の有無が1つの指標となり、時期が下るにつれて消失する。また櫛歯状工具による文様を持つ甕は、文様が粗雑化していく。こうした土器の様相を基準に各住居跡の主軸方向や平面プラン等を加味すると、本報告地点の集落は、以下の3つの時期に大別することが可能となる。なお、本報告では各住居跡出土土器は小片以外極力掲載したことから、縄文と櫛歯状工具による甕の比率は、有効と思われる。

弥生時代中期後半　　：3・5・7～9・11～14号住居跡

中期後半～末　　：1・4・6・10号住居跡

中期末　　：2号住居跡

弥生時代中期後半は、北島式に相当する土器が多数検出されている。壺は胴部中段まで文様が描かれ、肩部には北島式の特徴である刺突列の巡る段や鋸歯文が巡り、胴部の主文様は「平行線+波状文系列」(埼玉考古学会2003)や重四角文、重三角文等の他に、本遺跡では検出例の少なかったフラスコ文もみられる。



甕は縄文と櫛歯状工具によるものがみられ、後者の文様は丁寧に施文されるものが多い。住居跡の主軸方向及び平面プランは、近接する住居跡同士で似る。主軸方向は、ほぼ東西南北に合うもの、やや西に振れるものがあり、平面プランは隅丸長方形を呈するものが多いが、12号住居跡のみ他と異なる方位を向き、平面プランは隅丸方形を呈する。

遺物の少ない3号住居跡は、2号住居跡との新旧関係を重視して中期後半としたが、次段階に下る可能性もある。近接する5・7～9号住居跡及び11～14号住居跡は、当然時期差を持つことが考えられる。5・7～9号住居跡については、5号住居跡が甕に縄文と櫛歯状工具によるものがみられ、後者の文様が比較的丁寧に施文されていることから中期後半としたが、遺物が少なく、他との新旧関係を判別することが難しい。7・9号住居跡については、9号住居跡に北島式の典型とも言える壺（第29図3・5・6）や残存状態の良好な縄文施文の甕（第30図28）があり、櫛歯は7号住居跡に比べてやや丁寧に施文されていること等からみると、9号住居跡が7号住居跡よりも若干古い様相を呈するが、それ程差があるとは思えない。8号住居跡は遺物が少ないが、やや粗雑化した文様からみて7・9号住居跡より新しい様相を呈する。以上のことからみると、7～9号住居跡の新旧関係は、9号住居跡→7号住居跡→8号住居跡の順で捉えられる。

一方、11～14号住居跡は、出土土器の様相からほぼ同時期とも思われるが、近接することから当然時期差を持つと思われる。ただし、11～13号住居跡については、対比可能な遺物が少ないことから時期の判別が難しい。14号住居跡は縄文施文の甕が少ないこと、そして1点のみであるが、櫛歯状工具による斜格子文が粗雑化したもの（第51図22）があることを重視すると、他よりも新しい要素を持つ。従って、11～14号住居跡の新旧関係は、11～13号住居跡→14号住居跡の順で捉えておきたい。

7～9号住居跡と11～14号住居跡の対比については、前者で古い段階に位置付けられる7・9号住居跡に文様の粗雑化したもの（第23図40・第24図64・65、第33図125・153・第34図154等）が含まれることから、後者の古い段階とした11～13号住居跡に比べて新しい様相を呈すると思われる。ただし、頸部にのみ文様を持つ壺が12号住居跡にもみられることから時期差はそれ程無いように思われる。新しい段階に位置付けた8・14号住居跡については、対比が難しいが、ともに文様がやや粗雑化したものがみられることからほぼ同時期と捉えておきたい。

中期後半から末にかけての段階は、壺が北島式に相当するものの他にポスト北島式とも言える「平行線+波状文系列」が簡略化したもの（第15図2、第37図2・4等）が出現する。甕は縄文施文が櫛歯状工具によるものに比べて少数ないし皆無となり、櫛歯による施文は粗雑化が進む。住居跡の主軸方向はすべて西に振れ、平面プランは全形の分かるものがないが、隅丸長方形を呈すると思われる。当段階は、壺の北島式とポスト北島式の比率、縄文施文の甕の有無等から、さらに新旧に分けることが可能であり、古段階に1・10号住居跡、新段階に4・6号住居跡が相当する。

中期末は2号住居跡のみであるが、良好な資料がまとまって検出されており、秩父方面に分布する下ツ原式の系列で捉えられる壺（第10図5）もみられた。壺は文様が頸部にほぼ集約され、無文化が進む。甕は縄文施文のものが少なく、ほぼ櫛歯状工具によるもので占められ、文様が粗雑化する。主軸方向は前段階と同じく西に振れ、平面プランも隅丸長方形を呈する。

本報告地点の集落は3つの段階に大別されるが、出土土器の様相から集落は絶え間なく続くことが確認できる。壺に関して言えば、中期後半の壺は「平行線+波状文系列」の文様が多くみられ、以降も簡

略化しながら継続すること等が挙げられる。なお、本報告ではフラスコ文が描かれたものも検出されたが、これまでの調査成果同様、やはり本遺跡では文様の主体とはならないようである。また、本報告ではこれまでの調査では検出されていなかった甌が目立つ。本遺跡では石器等も含め、これまで稲作に結びつく遺物が検出されていなかったが、甌が多数検出されたことは、米を食していたことや稲作が行われていたことを物語る貴重な資料と言える。

以上、簡単に述べた。紙数に限りがあるため説明不足であることは否めないが、出土土器には中部地方の栗林式や南関東地方の宮ノ台式、またこれらの系列で捉えられるものが多数みられることから、広域編年を組むことが可能と思われる。今後は他型式との対比も含めながら本遺跡全体の変遷を捉えていくことが課題となる。

#### 引用・参考文献

- 熊谷市遺跡調査会 2001 『諏訪木遺跡』
- 熊谷市教育委員会 1979 『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』
- 1983 『めづか』
- 1999 『横間栗遺跡』
- 2001 『肥塚中島遺跡・出口上遺跡・出口下遺跡・肥塚古墳群 14・15・16号墳』
- 2002 『前中西遺跡Ⅱ』
- 2003 『前中西遺跡Ⅲ』
- 2004 『籠原裏遺跡』
- 2007 『諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第2号墳』
- 2008 『藤之宮遺跡』
- 2009 『前中西遺跡Ⅳ』
- 2010 『前中西遺跡Ⅴ』
- 2011 『前中西遺跡Ⅵ』
- 熊谷市前中西遺跡調査会 1999 『前中西遺跡』
- 埼玉県遺跡調査会 1971 『横塚山古墳』
- 埼玉県教育委員会 1984 『池守・池上』
- 1988 『埼玉の中世城館跡』
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 2002 『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集
- 2002 『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集
- 2003 『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集
- 2004 『北島Ⅷ／田谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集
- 2007 『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集
- 2008 『諏訪木遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第351集
- 埼玉考古学会 2003 『埼玉考古学会シンポジウム 北島式土器とその時代－弥生時代の新展開－』埼玉考古別冊7

# 写 真 图 版







調査区(第1次)全景(南から)



調査区(第2次)全景(東から)



図版2



調査区(第2次)全景(北から)



調査区(第2次)全景(南から)

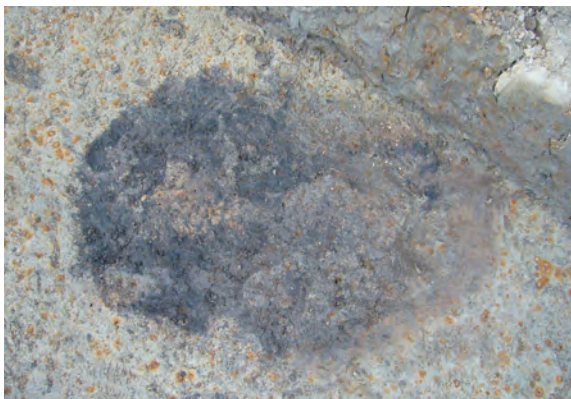




第1号住居跡



第2号住居跡(第2次調査)



第1号住居跡炉跡検出状況



第2号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡炉跡完掘状況



第2号住居跡炉跡1・2



第2・3号住居跡(第1次調査)



第2号住居跡土器出土状況(1)



図版4



第2号住居跡土器出土状況(2)



第4号住居跡



第2号住居跡土器出土状況(3)



第5号住居跡



第2号住居跡土器出土状況(4)



第6号住居跡



第2号住居跡土器出土状況(5)



第7号住居跡(南から)





第7号住居跡(東から)



第7号住居跡遺物出土状況(2)



第7号住居跡炉跡



第7号住居跡土器出土状況



第7号住居跡貯蔵穴2



第7号住居跡石器出土状況



第7号住居跡遺物出土状況(1)



第7号住居跡覆土堆積状況



図版6



第8号住居跡



第9号住居跡炉跡



第9号住居跡遺物出土状況(1)



第8号住居跡土器出土状況



第9号住居跡遺物出土状況(2)



第9号住居跡



第10号住居跡





第 11 号住居跡



第 12 号住居跡炉跡



第 11 号住居跡炉跡



第 12 号住居跡土器出土状況 (1)



第 11 号住居跡遺物出土状況



第 12 号住居跡土器出土状況 (2)



第 12 号住居跡



第 13 号住居跡



图版 8



第13号住居跡土器出土状况



第14号住居跡



第14号住居跡炉跡



第3~5号沟跡



第1号沟跡



第2号沟跡





第6号沟迹



第9·10号沟迹



第8号沟迹



第11·12号沟迹





第 14 号沟迹



第 2 号土坑



第 3 号土坑



第 14 号沟迹土器出土状况



第 4 号土坑



第 1 号土坑



第 5 号土坑





第6号土坑



第9号土坑



第7号土坑



第10号土坑



第7号土坑土器出土状况



第11号土坑



第8号土坑



第12号土坑



图版 12



第 13 号土坑



第 17 号土坑



第 14 号土坑



第 18 号土坑



第 15 号土坑



第 19 号土坑



第 16 号土坑



第 20 号土坑





第21号土坑



59-139G 石器出土状況



第1号火葬跡



59-139G 勾玉出土状況



水田跡(北側)



作業風景(1)



水田跡(南側)



作業風景(2)



图版 14



第2号住居跡 第10图1



第2号住居跡 第10图2



第2号住居跡 第10图3



第2号住居跡 第10图4



第2号住居跡 第10图5



第2号住居跡 第10图6



第2号住居跡 第11图9



第2号住居跡 第10图7



第2号住居跡 第10图8



第2号住居跡 第11图10



第2号住居跡 第11图11



第2号住居跡 第11图12



第4号住居跡 第15图1



第2号住居跡 第15图2





第4号住居跡 第15图3



第4号住居跡 第15图4



第4号住居跡 第15图6



第4号住居跡 第15图7



第6号住居跡 第20图1



第6号住居跡 第20图2



第6号住居跡 第20图3



第7号住居跡 第22图1



第7号住居跡 第22图2



第7号住居跡 第22图3



第7号住居跡 第22图4



第7号住居跡 第22图5



第7号住居跡 第22图6

图版 16



第7号住居跡 第22图15



第8号住居跡 第27图2



第7号住居跡 第29图1



第7号住居跡 第29图2



第7号住居跡 第29图3



第7号住居跡 第29图4



第7号住居跡 第29图5



第7号住居跡 第29图6



第7号住居跡 第29图7



第7号住居跡 第29图8



第7号住居跡 第29图10



第7号住居跡 第29图11



第7号住居跡 第29图13



第7号住居跡 第29图16





第9号住居跡 第29图17



第9号住居跡 第30图18



第9号住居跡 第30图19



第9号住居跡 第30图20



第9号住居跡 第30图22



第9号住居跡 第30图23



第9号住居跡 第30图24



第9号住居跡 第30图25



第9号住居跡 第30图26



第9号住居跡 第30图27



第9号住居跡 第30图28



第9号住居跡 第30图29



第9号住居跡 第30图30



第9号住居跡 第31图52



第9号住居跡 第31图70



图版 18



第9号住居跡 第31图73



第9号住居跡 第31图74



第10号住居跡 第37图1



第10号住居跡 第37图2



第10号住居跡 第37图3



第10号住居跡 第37图5



第10号住居跡 第37图6



第10号住居跡 第37图4



第10号住居跡 第37图8



第11号住居跡 第40图6



第12号住居跡 第43图1



第12号住居跡 第43图3



第12号住居跡 第43图5



第12号住居跡 第43图7



第12号住居跡 第43图8



第12号住居跡 第44图27



第13号住居跡 第48图1



第13号住居跡 第48图2



第13号住居跡 第48图3



第13号住居跡 第48图4



第13号住居跡 第48图7



第14号住居跡 第51图7



第14号溝跡 第56图14-1



第14号溝跡 第56图14-2



第7号土坑 第61图7-1



第11号土坑 第61图11-1



谷状落込跡 第67图1



遺構外 第68图3



遺構外 第68图2



遺構外 第68图35



图版 20



第1号住居跡 第6图8~23



第1号住居跡 第6图24~39



第1号住居跡 第6·7图40~55



第1号住居跡 第7图56~70



第2号住居跡 第11图31~47



第2号住居跡 第11·12图48~63



第3号住居跡 第13图2~25  
第5号住居跡 第18图2~5



第4号住居跡 第15图8~22





第4号住居跡 第15图23~36



第6号住居跡 第20图5~18



第7号住居跡 第22・23图16~35



第7号住居跡 第23图36~49



第7号住居跡 第23・24图50~66



第7号住居跡 第24图67~95



第8号住居跡 第27图3~14



第9号住居跡 第32图75~93

图版 22



第9号住居跡 第32图 94~113



第9号住居跡 第32・33图 114~132



第9号住居跡 第33图 133~149



第9号住居跡 第33・34图 150~164



第9号住居跡 第34图 165~184



第9号住居跡 第34图 185~201



第10号住居跡 第37图 14~32



第10号住居跡 第37・38图 33~50





第11号住居跡 第40图7~22



第11号住居跡 第40图23~32



第12号住居跡 第44图28~44



第12号住居跡 第44・45图45~63



第12号住居跡 第45图64~81



第12号住居跡 第45图82~102



第12号住居跡 第45・46图103~117



第13号住居跡 第48图8~27



图版 24



第13号住居跡 第48・49图28~47



第13号住居跡 第49图48~65



第14号住居跡 第51图8~22



第14号住居跡 第51图23~36



第2~6・9・10号溝跡出土遺物 第55图



第10~14号溝跡出土遺物 第55・56图



第1・2・4・6・7・11・12号土坑出土遺物 第61图



第14・16・18・19・21号土坑出土遺物 第61图



ピット出土遺物 第65図1・3~8・10~12・17



谷状落込跡 第67図10~31



遺構外 第68図36~53



遺構外 第69図54~74



遺構外 第69図75~92



遺構外 第69・70図93~114



遺構外 第70図115~130



遺構外 第70図131~147





第1号住居跡 第7图71~74



第1号住居跡 第7图75·76



第2号住居跡 第12图64~66



第4号住居跡 第16图37~42



第6号住居跡 第20图19  
第10号住居跡 第38图51



第7号住居跡 第24·25图96~102



第9号住居跡 第35图202~204



第11号住居跡 第40图33





第12号住居跡 第46図118~123



第14号住居跡 第51図37~39



第13号住居跡 第49図66・67



第1号住居跡 第7図77  
第9号住居跡 第35図205



第11号溝跡 第55図11-6  
第13号溝跡 第56図13-3



第21号土坑 第61図21-4



ピット出土遺物 第65図15・16



谷状落込跡 第69図32



遺構外 第70図148



遺構外 第70・71図149~152

報 告 書 抄 録

ふりがな	まえなかにしいせきなな							
書 名	前中西遺跡Ⅶ							
副 書 名	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡報告書Ⅷ							
巻 次	—							
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
編 集 者 名	松田 哲							
編 集 機 関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所 在 地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2012(平成24)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯 (° ' ")	東緯 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まえなかにしいせき 前中西遺跡	くまがやしかみの ばんち ほか 熊谷市上之2581番地4他	11202	092	36° 8' 46"	139° 24' 20"	20080604 ～ 20080731	184.0	区画整理 街路築造 工事
	くまがやしかみの ばんち ほか 熊谷市上之2573番地1他			36° 8' 44"	139° 24' 20"	20081125 ～ 20090130		
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
前中西遺跡	集落跡 祭祀 墓	弥生中期後半～末	住居跡 13軒 土坑 18基	弥生土器・石器		弥生時代中期後半から末にかけての住居跡が多数まとまって確認され、各住居跡から大量の遺物が出土した。		
		弥生時代中期	谷状落込跡 1箇所	弥生土器・石器				
		中世	火葬跡 1基					
		近世	水田跡 5条					
		時期不明	溝跡 15条 土坑 3基 ピット群	弥生土器・石器				

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第12集

## 前中西遺跡Ⅶ

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅶ—

平成24年3月16日

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／株式会社 ピーアイピー